
LAST TRIP

ソメイヨシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LAST TRIP

【Nコード】

N3125K

【作者名】

ソメイヨシノ

【あらすじ】

ラストトリップ、通称LT。

それはある国の武力の為に生み出されたドラッグ。

今や世界中に流出してしまったLTは、主人公も飲み続けていた。

LT関連で繋がる人物達により、主人公はLTを絶ち、人間らしさを取り戻していく。

だが、再び、LTを飲み始め、主人公は全てを失う覚悟で、大切なものを守ろうとするが、それが破滅へと繋がる事だと気付かなかつた。

1・任務

殆どない記憶の中、幾つか覚えている事がある。
幼い頃、自傷行為を続け、痛さで、自分の存在を確認していた。
刃物らしいもので腕などを傷つけると、赤い血が出てくる事にホツとした。

痛いと思える事に安堵して、眠りにつけた。

だが、それだけでは安心できない。

人間には本当に赤い血が流れてるのか、本当に痛いと思うのか、試さなければ、震えが止まらなくなった。
護送車の中、ガタンと大きく揺れる。
道が悪いのだろう、さつきから揺れが激しい。

トンネルに入り、窓の景色が真つ暗な闇になる。

闇に映る自分は、長さの決まってるないボサボサの蒼い髪と、その前髪が目隠し、チラチラと見え隠れする瞳はブルーに、爛々と光って見えて、まるでモンスター。

薄汚れた顔。

荒れた唇。

ヨレヨレの服とジーンズ。

手首には手錠。

裸足で汚れた足。

年齢は17歳になった。

まだ子供だと、リグドは笑った。

昨日の出来事。

ラストトリップ、通称LTを手で弾き、宙に飛ばすと、うまく口の中へ入れて、笑う。

リグドの口の中でLTが噛み砕かれる音がする。

「ほしいか？ シンバ」

LTほしさに這い蹲る俺の頭を踏みながら、軽快な口調で聞いて来

る。

リグドは、狭い部屋の中を見回し、クツクツクツと喉を慣らし、楽しそうに笑いながら、

「お前は前世紀の子供みたいだな、加減つてもものを知らない」と、血がべつたり付いた壁を見ながら言う。

狭い部屋には、俺が殺したであろう人間が数人、重なるように倒れている。

「シンバ、もうすぐここにセク隊が来る。オレが呼んだ」

俺は目を丸く見開き、リグドを見上げた。

セク隊とは、セキュリティーイクツクの略語で、この国の安全と秩序を守る為に、何事にも素早く対応できるという組織で、特殊訓練を受けた最強とも言われる部隊の事。

「そんな顔するな、お前を売った訳じゃない。寧ろ、これからだろ、オレ達は」

と、俺と目線を合わせるように、リグドは腰を低め、楽しそうな顔を絶やささない。

「お前はグールドールに入って、レンダー・バミッシュという男に接触する。そして、その男を殺して来るんだ、お前にとつたら簡単な任務だろ？」

俺の頭をグシャグシャにして撫で回しながら、

「大丈夫大丈夫、お前ならできるって」

まるで、逆上がりのできない子供に言い聞かすように言う。

小刻みに震えながら、首を左右に振る俺に、

「そんな震えながら哀れな顔するなよ、まるで捨てられた子犬だと、笑う。」

震えているのは、自分でもわかる。

恐怖とか、悲しみとか、そういう感情のせいではない、只、LTがきれて、勝手に震えるんだ。

哀れな顔をしていたかどうかは、自分ではわからないが、リグドがそう言っていたなら、俺は哀れな顔だったのだろう。

哀れな顔って、どんな顔だったんだろうと、窓に映る自分を見つめる。

トンネルを抜け、窓に景色が映り、俺は少し俯き、手首の錠に目をやる。

LTのきれた俺は逃げる事なんてできない。

セク隊にはない。

リグドから逃げる事なんて絶対にできない。

だから俺はリグドの言う通りにグールダールに行く。

そこは牢獄で、そこから抜け出した者は一人もいないと言われている。

でもリグドは言っていた。

俺ならできるって。

「キミ、どっかで会ってない？」

隣の奴が小声で話しかけてくる。

見ると、ダボダボの服装のせいか、やけに小柄に見えて、細い顎の線が綺麗な男だ。

帽子を被っていて、表情までわからないが、小声でもわかる少し高めの声が、まともじゃないと思わせる。

「ねえ、なんで捕まったの？」

何も答えない俺に更に質問。

「あのさあ、キミ、ちょっと悪そうだから聞くんだけど、グールダールって広いのかなあ？」

何度かグールダールに入っていると思われたようだ。

俺はフツと笑い、再び手首の錠に目を落とす。

「笑えるんだ！？へえ。暗い顔してるから絶対に笑わない奴かと思った」

そりゃ笑いたくもなる。

俺がグールダールに何度も行くようなハマばかりする間抜けな奴に見えるって事に。

大体、俺がグールダールに入ったら、二度と出て来れないだろう。

そんな安い犯罪を犯してるお前と一緒にしてんじゃねえよ。

「でも笑ったって事はグールダールは広いつて事？ それって常識？ だから笑ったの？」

知るかよ、グールダールなんかに興味ないんだ、俺は。

「ねえ、キミ、名前は？」

ふと、俺は指の先がしびれてくるのを感じた。

「いいじゃん、名前くらい教えてよ」

名前を教えたくないんじゃない。

手首から先が震えだしてきた事に、それどころじゃないんだ。

ヤバイ！

LTがきれそうだ。

ここで暴れたら、レンダー・バミツシュを殺せない。

そしたらリグドにLTをもらえない！

「どうかしたの？ 冷や汗が酷いよ？ 酔った？ 体調悪い？」

頼む、黙っててくれ……。

車の揺れに合わせ、大袈裟に体を揺らす。

タイミングを計り、態と前のめりに倒れ、ズボンの裾に仕込んであったLTをさりげなく取り出し、LTを手の中に入れる。

「おい、そこ！ ちゃんと座ってる！」

見張りのセク隊に怒鳴られるが、素直に座り直せば、その注意だけで済む。

後はこの手の中にあるLTを口に入れるだけ。

手錠をしているから、両手を動かす事になる。

目立った行動にならないように、さりげなく、慎重に動かなければLTの入った右手の人差し指で鼻を掻くふりをして、左手は口元を隠すように、そして右手の中指で手の平の中のLTを弾き、口の中へ入れる。何もなかったように、手を下ろし、再び、目線を手錠の嵌められた手首に落とす。

口は動かさず、LTを奥歯で噛み砕く。

誰も気付いてない。

気付いてない筈。

なのに、何故、突然、隣の奴は喋りかけて来なくなった？

まさか気付かれたのか？

「おい、そこ！ お前！」

突然、見張りのセク隊が立ち上がり、こちらに向かって吠え、書類を見ながら、

「ピース・ラバー？ 変な名前だな」

と、こちらに向かって来た。

「どうした？ 変な顔して？」

隣の奴の前に立ち、セク隊は不思議そうに尋ねる。

隣の奴は変な顔をしているって、どんな顔をしてるのだろうか、確認したいが、無闇に動けない。

ＬＴの事がバレるかもしれない。

隣の奴が言うかもしれない。

どうしたらいい！？

ここで暴れたら何もかも終わりだ。

さっきとは違う冷や汗が流れる。

「・・・・・・・・・・うっ」

「うっ？」

「・・・・・・・・・・き、気持ち悪い・・・・・・・・・・」

「は？ 車酔いか！？ ピース・ラバー？」

「なんか胸の辺りが気持ち悪い。吐きそう」

「ま、待て、吐くな！ 吐いたら、罪が余計に重くなるぞ！」

「そんなぁ・・・・・・・・・・」

「もうすぐ着く。我慢しろ」

その会話でホッとす。

只の車酔いか・・・・・・・・・・。

そして、もうすぐ着くのか・・・・・・・・・・。

レンダー・バミッシュという男は誰なんだろう。

グールダール配属のセク部隊にいるのか、それともグールダールの

牢獄にいるのか。

緑生い茂る森の中に聳える要塞、グールダール。

護送車から下りると、点呼して、灰色の空が背景に似合う建物の中に入って行く。

着替えを渡され、奥へと進む。

消毒シャワーを浴びさせられる為、殺菌ルームへと向かっているらしい。

途中、牢獄への通路の前、セク部隊同士、敬礼し合った後、合言葉らしい事も言い合っている。

通路の前に配置しているセク部隊だけでも20人程。

嚴重にも程がある。

セク部隊の一人がペットボトルで水を飲んでいるのを見て、自分も喉が渴き始めて来ている事に気づく。

舌先が痺れ出し、そろそろ指先にも震えが来るだろう。

LTの残りは僅か。

万が一、シャワーや着替えの時、残りのLTが見つければ最後。

次にもらえるのは、レンダー・バミッシュを殺し、ここを脱獄した時だ。

とつとつやる事やって、LTをもらわなければ。

そう思った瞬間、目の前を歩いていたピース・ラバーが突然、視界から消えた。

「!?!?」

いつの間に手錠も外したんだろう、小柄な癖にパワフルな攻撃と小柄だからこそ疾風のようなスピードで20人近くいるセク部隊を、あっという間に叩き潰した。

武道？ 拳法？ 少林？ 柔道？ 独自？

なんにせよ、コイツ、強いなんてもんじゃない。

俺と互角かもしれない。

コイツ……人間なのか……？

「レン!!!!!! どこにいるの!?!?」

そう叫び、ピース・ラバーは通路の奥へと駆けて行く。

俺も含め、ピース・ラバーと共に来た犯罪者達は取り残された気分
で、只、そこに立っているが、数人が、直ぐに我に返り、脱走する。
俺もこうしちゃられない。

ピース・ラバーを追うように通路を駆け抜ける。

途中で倒れているセク隊。

「なんて奴だ……一発で気絶させてやがる」

ダボダボの服を着ていたが、155くらいの身の丈に細い指と小さ
な手を見ると、服に隠れた体は小柄な等。

帽子を被っていて、よく見えなかったが、細い顎のラインと首は、
確実に細身をイメージさせた。

そんな体のどこに、こんなパワーがあるって言うんだ!?

見かけによらないなんてもんじゃない。

左右の壁は檻となり、囚人達が吠えているが、何を言っているのか、
よくわからない。

レンダー・バミツシュについて聞きたいが、素直に教えてくれそう
な面じゃない。

ウィツと鳴り響くサイレン。

早い所、レンダー・バミツシュを探さないと、セク隊が集まってく
る。

だがセク部隊の目はピース・ラバーに全て向けられるだろう。

グルグルでセク部隊をぶっ倒し、これだけ暴れたんだ、見つか
ったら、その場で射殺。

もしくは速攻、死刑台行きか。

ああ、ヤバイ、他人の事より、自分の事の方が先決だ。

手の振るえが止まらなくなってきた。

前から2つの足音。

ピース・ラバーと。

囚人服を着た体格のいい男。

左目が刃物で切った跡で潰れている。

グリーンの右目と金髪の短髪。

短髪なのは、ここでそうさせられたのだろう。

コイツ等にレンダー・バミツシュの事を聞いてみようか。

「あ！ ラストトリップ飲んでた奴！」

ピース・ラバーがそう言つて、足を止めた。

護送車の中で俺がラストトリップを飲んだのを、やっぱり見逃して
なかった！？

コイツ、何者なんだ！？

「LTを飲んでた？」

ピース・ラバーと一緒にいる男が尋ねた。

「うん、だからレンを助けるに面倒はごめんだなって思つて、見て
見ぬふりを決めようと思つただけど、やっぱ、なんかほっとけな
い」

ほっとけない？

俺の事をか？

今度は背後から複数の足音。

「やばっ！」

ピース・ラバーがそう呟くと同時に、

「大人しく手を上げる、ピース・ラバー！ レンダー・バミツシュ
！」

と、銃を構え、ズラリとセク部隊が並ぶ。

俺はセク部隊がレンダー・バミツシュと呼んだ男を見る。

コイツがレンダー・バミツシュ？

今更、余計に潰れた左目が気になる。

大きな特徴的なものが、ソレだから。

これは好都合なのか、不都合なのか、この状態で調度いい具合にし
Tが完璧にきれそつだ。

「おい、アイツ、LTがきれい寸前じゃないのか！？」

「そつかも」

ピース・ラバーとレンダー・バミツシュが耳打ちしている会話さえ、

しつかりと聞こえる。

LTがきれて、数十分、体の神経が研ぎ澄まされ、小さな物音ひとつ、いや、音のない小さな風の気配すら、感じ取れる。瞳はどんなスピードのものでもスローに見える。

小さな銃弾ですら、意図も簡単に避ける事もできる。

自分のパワーもスピードも自然界の法則を無視した桁外れの手を入れる。

「俺様がセク部隊を引き付ける。お前はアイツをなんとかしろ、LTが完全にきれる前に気絶させないと、厄介だぞ」

レンダーがそう言っているのが聞こえ、俺をなんとかできる奴がいる訳ないだろうと鼻で笑ってしまう。

「セク部隊を引き付けるって、レンひとりで!?!」

「なあに、アイツを片付けたら、応援頼むよ」

そう言うと、レンダーは手を上げて、大きな体を揺らし、こちらへ向かって歩いてくる。

「止まれ! 止まらないと撃つぞ!」

セク隊が吠える。

俺の真横をレンダーが通る瞬間、ドクンと心臓が鳴り、血液の流れが速くなり、LTがキレル寸前を感じる。

すぐ傍に狙いのレンダー・バミッシュがいる。

まだLTは完全にキレてはないが、今がチャンスだと、拳にチカラを溜めて、振り上げようとした瞬間、いつの間にか、俺の目の前にピース・ラバーが現れ、その拳をガツシリ握り締められた。

「キミの相手はレンじゃない」

ピースはそう言うと、薄いピンクの唇を微笑ませ、俺の腹部に思いっきり膝を入れた。

銃弾が聞こえる。

囚人達の笑い声や悲鳴、歌声も交じり合っている。

もう少しで完璧にLTがきれる。

まさか、その前に、この俺がやられる!?!

このひ弱そうな奴に!?

そうか、俺はトリップしてるんだ。

なのに、いつもとは違う意味で意識が朦朧としてきた。

これは現実　!?

俺は消え行く意識の中で、リグドに何て説明しようか言い訳を考えていた。

「任務完了!」

誰かがそう言った　。

2・再会

微かな光が目に入り、目を開けると、知らない場所にいた。ジヤラツと言う音で、首と手首と手足、それから胴体にまで大きな鎖で繋がれているのに気がつく。

「……………なんだよ、これ……………?」

言葉が口を吐いた途端、物凄い激痛が脳に走った。

「ぐはっ!」

余りの痛さにヨダレと胃液を吐き出す。

リグドが俺の失態に激怒した仕打ち!?

何も無い部屋。

小さな窓から光が漏れているだけの薄暗い部屋。

こんな鎖、引き千切ってやりたいが、LTがきれて数十分しか、凄まじいパワーは出せない。

あれから、どのくらい時間が経ったのだろうか。

自分の呼吸音でズキズキと頭が痛み、心臓が破裂しそうだ。

ポタリと床に落ちた汗の気配さえ、体の全てに響き渡り、気を失いそうになる。

ガチャつと音をたて、ドアが開く。

もうその音と、足音だけで、眩暈と嘔吐が止まらない。

「起きたな」

その声に、かろうじて、顔を上げると、レンダー・バミツシュが立っている。

「……………てめえ、何しやがる」

「喋るな喋るな。苦しいだろう? おっと、俺様の声も苦痛か?

その痛みと苦しみの中じゃあ、トリップもできんだろう」

「……………LTをよこせ」

「ねえよ、そんなもん」

「よこせえええええ!!!」

「おいおい、無理するなつて！ 耳と鼻から血が出てるぞ」

「うるせえ、リグドに会わせる」

「リグド？ リグド・カツツェルの事か？ お前、奴の飼い犬か？」

「うるせえ！ 余計な事言つてんじゃねえ！ リグドに会わせる、

LTよこせえ！」

「今、お前の血液を調べてるんだが」

「何勝手な事してんだあ！？」

「まあまあ、落ち着けて。知っているか？ ラストトリップ、LTは5段階のリミットがある。LTは飲むと直ぐに体が覚醒して、痛みも感じない状態で、ハッピーな気分になる。つまりトリップしてるから、世界が変わる。実際に変わってる訳じゃねえが、幻覚でも幻聴でもない。LTの怖さは、それが本物だって事だ。全てがスローに感じ、風にだってなれる。だが飲み続けると、気分がハッピー状態も通常になつてくる。つまり全ての感覚が覚醒してる状態が普通になり、ハッピーも薄れてくるが、LTをやめると、苦痛が来るのでやめなくなる。今のお前状態だな」

ヨダレを垂らし、不定期な呼吸と、汗と涙と血が混ざったものが頬や顎を伝い落ちていく。

今、どんな状態かなんて、理解できない。

「LTをキメてる時は最強だが、もつと最強になる瞬間はLTがキレて、数十分。LTほしさに無敵になる。だが、無敵状態になる前、LTがキレそうな時は体も痺れ出し、震えも出るし、無敵どころか最弱になる。お前はその瞬間にやられ、俺様達に捕まったんだな。しかも無敵状態は数十分だけだ。その後は何度も言うが、今のお前状態だ。LTなんていいもんじゃねえだろ？」

「.....LTをよこせ.....」

「それで、その数十分の無敵状態をリミットと言う」

「.....LTを.....」

「とりあえずLTは3日で体から抜ける。だが、その間、気絶はさせてもらえないのに、常に脳は覚醒し続け、感覚が異常に高ぶり、

何も覚えてない。

いや、何か考えようとするだけで、脳を抉られたような痛みが走る。何も考えないようにしても、体の全てが痛み出し、その痛みにも、何れも胃液を吐き出す。

痙攣を起こしては、体中に痺れが走り、血を吐いているのか、目や鼻から流れているのか、どこから血が出ているのかもわからず、只、只、床に血の海を作っていた。無限の苦しみで、気がつけば、頭痛が和らぎ、体中の痛みが消えそうになった時、ドアが開いた。

「生きてる？」

返事はできない。急に感覚がなくなって来て、死んでるような気がするから。

「生きてるみたいだね」

生きてるのか？

ふわりといい香りがして、生温い柔らかいものが頬に当たり、少し顔を上げると、女が目の前にいた。

「もう大丈夫だよ、体、綺麗にしようね？」

お湯で濡らしたタオルを俺の頬に当てて、優しい顔を向けてくる。

前髪は長めだが、シヨートの黒い艶やかな髪。

白い肌と大きな瞳は綺麗なアクア。

動きやすそうな格好のせい、それとも短パンのせい、ボーイッシュな雰囲気だが、直ぐに女だとわかる程、柔らかい物腰で、優しいオーラを放っている。

誰だろう？

知ってる女だろうか？

覚えていないだけか？

それとも、これはトリップして見えているもの？

「くっせー！　なんでこんなボロ雑巾みたいな男の世話しなきゃなんねえんだよ！」

他にも誰かいるようだ。

声からして男だ。

「人の事言えるの？ フリットがこうなった時に、誰がキミの糞尿を片付けてあげたんだっけ!?」

「糞はしてねえだろ!!!」

「そうだっけ？ してたんじゃなかったっけ？」

「し、してねえよ!!! LT以外、口にしてないんだぞ、糞や尿じゃなくて、まあ、失禁はあるとしても！ 糞はない！ 臭いのは吐いたゲロと血と尿だ！」

「そんな事より、フリットの服、貸してあげてよ、着替えさせななきゃ」

「なんでオイラが!?!」

「体格、同じくらいじゃん」

「オイラの服はなあ！ こんな男に着せる為にあるんじゃない!」

「彼が着た方が似合っちゃったりして？ それが悔しいんだ？」

「なんだと!?!」

「違うの？」

「待ってる、今、オイラの服、持って来てやんよ!!!」

男は部屋を出て行った。

俺は、ぼんやりと、その様子を目に映していた。

女は俺の体を拭きながら、俺の体につけられた鎖を外し、

「レベル2なんだって？ 凄じゃん」

と、話しかけてくる。

「LTほしい？」

そう聞かれ、俺は首を左右に振った。

今は欲しいと思わない。

只、眠りたい。

兎に角、休みたい。

でもその前に、ピース・ラバーという奴に会ってみたい。

俺がリグド以外で負けた相手だから。

「.....ピース.....」

「ん？ まだちゃんと喋れないよ、無理しないで？」

「ピース・ラバーに会いたい」

「……いいものあげるよ、手を出して？」

ちゃんと喋れなかったのだろうか、うまく発音できてなかったのだろうか、まだ舌が痺れているのだろうか、わからないが、女は全く関係のない事を言い出している。

「ほら、もう手錠は外れてるんだから動かせるよね？」

そう言われても、急には体を思うように動かせない。

まだ少し震えもある。

でも、ちゃんと手の平を上に向け、手を出せた。

女はグーにした手を、俺の手の平の上に置き、そして

「あげる」

と、俺の手の平に、コロんとピンクの飴玉を置いた。

一瞬、何かを感じた俺は、

「……どこかで会ってる？」

そう聞いた。今度は通じたのだろうか、

「それ、私が最初にキミに言った台詞」

と、クスクス笑った。

いや、やはり通じてないのか、最初に女が俺に言った台詞は確か？
生きてる??だ。

「キミ、どっかで会ってない？」

そう聞かれ、俺はハツとする。

それはピース・ラバーが最初に話しかけて来た台詞！

「平和と愛を願う戦士だから、私」

と、笑う女。

ピース・ラバーは、この女!?

ピース・ラバーは男じゃなかったのか!?

今の服装と違い、ダボダボの服装だった事と、男の犯罪者の牢獄へ行く為、男だけに乗せた護送車だった事で、全く見抜けなかった。
幾ら油断したとは言え、しかも弱ってる瞬間だったとは言え、俺は

女にやられたのか!?

「キミも私にどこかで会ってる気がしたんだ? 私もキミを見た時に思ったの。私達、どこかで会ってるのかもね。でも思い出せない。悔しいね、LTのせいで、思い出となる記憶は殆ど思い出せない。嫌な後遺症だよ」

俺の体を拭きながら、そう言っつて、笑顔を絶やさない。

だが、この女も、その笑顔の影で、LTをキメていた時があったんだと知る。

「あ、でもさ、お互い、嫌な奴だっつて思っつてたかもしれないよね? だったら、そんな記憶は消えちゃっつてオツケーだよな?」

明るく振る舞う女に、俺はどう反応していいのかわからず、只、体を黙っつて拭かれていた。

「立てる? もうすぐフリットが着替えを持って来てくれるから、そしたら、少し休んだらいいよ、部屋を用意してあるからフリットに案内させる。ここは私が片付けておくから」

「.....」

「ん? 水? まだダメだよ、キミが眠る部屋でレンが待ってるから、眠る時に、レンから点滴してもらっつて?」

「.....違う.....ここを片付けるのか?」

「そうだけど?」

「俺が片付けるよ。汚いから」

「そんな事、気にしなくていいから」

「ピースが気にしなくても、俺が気にする」

そう言っつたら、吹き出して笑われた。

「ごめん、ピースっつて呼ぶからさ。あれは偽名だよ、私はライン・ポートルー。キミは?」

「.....」

?シンバ?と、俺を呼ぶリグドの顔が浮かんだ。

リグドの左耳でピアスが揺れる。

闇の中で揺らめく炎のようなダークレッドの髪を、利き手の左手の

長い白い指でいじりながら、髪と同じダークレッドの瞳に俺を映し、不敵に笑うリグドの唇が動く。

「シンバ。お前はシンバ・ルーペリックだ？」

リグドがそう言っていた。

「名前、思い出せない？」

黙っている俺の顔を覗きこんで、ラインが聞くので、俺は首を振り、

「シンバ・ルーペリック」

そう答えた。

「シンバか、かっこいい名前じゃん、キミにピッタリだよ」

ニッコリ笑って、ラインは、多分、褒めてくれた。

いつだったか、前にも、この笑顔に会っている気がする。

3・契約

突然、ドアがバンツと開き、

「おい、服持って来てやったぞ！」

と、シンバに向かつて偉そうな態度で、服を投げつけてくる男。

「フリット、何怒ってんの？」

ラインがそう言って、男に話しかけているので、彼がフリットだと認識する。

「シンバ、コイツはフリット。フリット・デーグレイ。私と同じでLトリミットレベル1」

フリットはシンバの事が気に入らないのか、ムツとした顔で、シンバを睨む。

シンバも只、突っ立って、フリットを見ている。

もともと目つきが良くないせいか、

「何ガン飛ばしてんだ、テメェ！」

と、見ているだけで、フリットに吠えられるシンバ。

「ガンを飛ばしてんのはフリットの方だよ、あ、シンバ、私、後ろ向いてるから、服、着替えちゃって？ はい、タオルで体も拭いて自分で拭けるよね」

ラインに濡れたタオルを渡され、シンバは着ている服を脱いで体を拭き始める。

そして、服を着替える為、フリットの服を広げて見た。

ジャラジャラと鎖みたいなのがついた妙な服で、シンバは少し面倒そう。

簡単なシャツとズボンでいいのと言う顔で、チェーンを手に取り、首を傾げる。

「何やってんだよ、そりゃウオレットチェーンだ、ズボンの腰につけんだよ」

モタモタしているシンバに、フリットは苛立った声で言った。

シンバはアクセサリー類を見ながらリグドを思い浮かべていた。リグドはアクセサリーが好きで、首にも手首にも、ブーツにさえ、チェーンをつけていたからだ。

フリットもアクセサリーが好きみたいなので、シンバはリグドに似ているなあとフリットをチラツと見る。

「ああ！？ 何か文句あんのかよ、こりやあなあ、オイラの持つてる服の中でも結構お洒落度が高けえんだぞ！」

柔らかそうなブラウンの髪と優しい色のアンバーの瞳は、全然、攻撃的じゃないのに、十字架のネックレスと左耳の十字架のピアスが攻撃的に見えて、フリットの今の表情と合わせると、今にも殴ってきそう。

「だから何ガン飛ばしてんだよ！」

「……別に」

「ああ！？ 別につてなんだ、口の訊き方がなつてねえ！ ここでオイラのが先輩だぞ」

「いい加減にして、フリット！」

後ろを向いていたラインが、そう言つと、クルリと振り向き、

「シンバの何が気に入らないの！？ キミが先輩だつて言うのなら、私もフリットの先輩だよ、で、今迄、私はキミのその減らず口を注意した事が一度でもあった？ 口の訊き方なんてどうでもいいじゃん、大体シンバ、何も言つてないに等しいし。それに先輩だつて言うのなら、ある意味、シンバは私達より上なんだよ、Lトリミットレベル2なんだから」

と、フリットに詰め寄つた。そして更に振り向き、

「ね？ シンバ？」

と、シンバを見た瞬間、動きを止める。だが、直ぐに、ニッコリ笑顔で、

「似合うじゃん！ かつこいいよ、うん、やっぱね、素材は悪くないって思ってたんだ」

と、はしゃぎ出す。

「後は靴だね、靴も持って来てくれた？」

フリットを見て、ラインはそう聞いた。

「靴のサイズ知らねえし、オイラのサイズとピッタリとは限らねえだろうが！」

ラインのはしゃぎっぷりが物凄く気に入らないフリットは、ラインに対しても少し口調がきつくなる。

「それもそうだね。よし！じゃあ、シンバが休んでる間に私が買って来てあげるよ」

「なんだよソレ！？ コイツに靴をプレゼントするって言うのか！

？ ラインが！？」

「そうだけど？」

「冗談だろ、オイラにだってプレゼントしてくれた事なんてないのに！？」

「なんで私がフリットにプレゼントしなきゃいけない訳？」

「なんでコイツにはプレゼントするんだよ！？ オイラはダメで、コイツはいいのか！？」

「ああ、そうか、なんでフリットがそんなに苛立ってるのか、私、わかつちやった」

「何が！？」

「ヤキモチ？」

ラインはそう言うと、フリットの顔をジッと見て、クスッと笑う。「違う！……！！」

直ぐに否定するが、ラインは聞いていない。

「しょうがないなあ、そんなに私の事が好きだったとは」

「だから違うって……！！」

「しょうがないから、フリットにも何か買ってあげようか？」

フリットはガキをあしらうような扱いをされた事にカチンと来て、「いらねえよ！」

そう言うと、部屋から出て行ってしまった。

ラインはやれやれと溜息を吐きながら、

「本当に何怒ってんだかと、呟く。」

本当にヤキモチだったのだろうか、ラインは本当はそう思っていないようだ。

「あ、なんかごめんね、フリットご機嫌斜めみたいで。いつもはいい奴なんだけどさ。しょうがない奴だよねえ、本当に。あ、フリット行っちゃったし、私が部屋に案内するよ」

ラインはそう言うと、部屋から出て行くので、シンバも後を追う。

「凄いな、普通に歩けてるし、回復が早い。流石だよ」

ラインはニツコリ笑って、シンバを見ながら言う。

「……その笑顔、昔から変わってないな」

「昔から？ 私達、やっぱり昔に会った事が？ そんな記憶があるの？」

「……ない」

「ないのに、なんで？」

「わからない。勝手に口が喋った」

「なにそれ？ 変なの」

確かに変だとシンバも頷く。

壊れた窓が並び、壁を伝う植物が生い茂り、埃っぽい空気と薄暗い長いローカ。

ここは何らかの建物だったが、今は廃墟のようだ。

「あっちのドアがトイレとシャワーがある部屋。こっちのドアはキッチンがある部屋」

廃墟でも使えそうな部屋を使っていると言う事だろうか。

向こうが武器庫で、そっちが外に出る扉だと、歩きながら指差して案内するライン。

「シンバの部屋はここ」

と、錆びたドアの前に立ち、ラインはノックして入る。

その部屋は廃墟とは思えぬ程、綺麗にリフォームしてあって、ベッドも本棚もソファもテーブルもスタンドもある。

「レン、シンバを連れて来たよ」

ソファに座っているレンダーに、ラインがそう言つと、

「じゃあ、私、片付けもあるし、行くね」

と、行つてしまった。

部屋に取り残されたシンバは、レンダーを見て、レンダーもシンバを見る。

「気分はどうだ？」

そう聞かれ、首を傾げながら、

「悪くはない」

と、答えるシンバに、レンダーはそうかと頷いた。

「まあ、座れ」

レンダーがそう言うので、シンバはレンダーと向かい合わせになるよう、ソファに座る。

「聞きたい事はあるか？」

「ある」

「そうだろうな、じゃあ、まずはお前の質問からだ。答えられる事やわかる事は話そう」

「アンタ、何者？」

「俺様の名前はレンダー・バミツシュ。ある国の元軍人だ。その国では戦いのエキスパートとも言われる軍の中で特Aクラスの地位だった。今は只の何でも屋のオッサンだ」

「何でも屋？」

「ああ、軍人だった頃のコネもあるしな、ヤバイ仕事が多いが、簡単な探し物や掃除や老人、子供の世話まで、何でもやる」

「なんで軍人をやめた？」

「やめたんじゃない。もうその国がなくなつたんだよ」

「なくなつた？」

「LT中毒者が増えてな」

「・・・・・・・・」

「LTは元々、軍人の為のドラッグとして開発されたんだ。だがし

「Tは体に合わない」と、直ぐに血を吐いて死んでしまう毒物でもある。しかもLTは体の覚醒だけでなく、記憶障害を引き起こし、脳を崩壊する危険な薬だ。だが我が軍はLT使用を行い、自滅しただけでなく、LTを流出させてしまい、一般人にまで行き渡らせてしまった。あつという間に国は滅びたよ、LTという薬でな」

「しかもLTをキメて、お前のように無事でいられたとしても、その者の寿命は50年だ」

「50?」

「危険な薬なんかに手を出した代償は、それだけじゃねえ。最早、人間離れしたパワーアップは、化け物なんだよ」

「.....」

「ああ、そうだ、お前の血液検査な、結果が出てる。やっぱり、お前はLTリミットレベル2だ。レベル3になる為には、またLTを飲み続け、完璧にLTを体に染み込ませたら、再び3日間、LTを絶ち、限界を超える事だな。生きていられるとは限らないが」

「.....」

「俺様への質問は終わりか?」

「いや、聞きたい事は山程あつた筈。」

だが、何を聞いたらいいのか、わからなくなってきた、シンバは沈黙する。

「なら、今度は俺様が質問する番だ」

黙っているシンバに質問は終わったのだと思い、レンダーはそう言つて、

「名前は?」

問い始める。

「シンバ・ルーペリック」

「.....シンバ・ルーペリック?」

そう尋ね返したレンダーの表情が少し変わった。

「その名前は.....確かなのか.....?」

「ああ」

「お前の本名なんだろうな？」

「そう呼ばれてたから、そうなんじゃないか？ 何か気になるのか？」

「……いや、レベル2の割りに覚えてるもんだなと思っ
てな、じゃあ、年齢は？」

「……」

「？そついやあ、シンバ、今日が誕生日だったな？と、リグドがそ
言って笑う顔がシンバの脳裏に浮かぶ。

「？17歳か、まだ子供だ？」

リグドがそう言っただけで笑っていたのを思い出す。

「どうした？ 覚えてないか？」

「17」

「17か、ラインと同じだな。実はな、お前はラインと共通する事
がもう1つある。お前はライン同様、生まれながらにしてLT中毒
症だったと言う事だ」

「生まれながらにして？」

「ああ、血液検査のLT濃度でわかったんだが、お前の両親は父親
も母親もLT中毒者だったのだから、そして母親の胎内にいたお前
にも、その影響はあった。通常LT中毒者夫婦の間に生まれてくる
赤子は99パーセント死産なんだが、お前は死なずに生まれたんだ。
LT中毒症の赤子がLTを絶つ訳にもいかず、その為、お前はLT
入りのミルクで育てられたんだろう、親の記憶はあるか？」

「ない」

「だろうな。恐らく、お前の親は、LTのせいで、もう死んでるだ
ろ。生きていたとしても、お前の事など、記憶にないだろう。ライ
ンの父親は俺様と同じ軍人だな、友だった。母親も配属は違うが、
同じ隊員で、どちらもLT中毒者だった。母親の方はラインを生ん
で中毒症のせいもあり、直ぐに死んでしまい、父親の方は軍をやめ
て、どこかへ消えたんだ。その後、ラインは……まあ、い

るいろあって、それから国も滅び、俺様がラインと出会ったのは10年前だ」

「……アンタ、幾つなの？」

「年齢か？ 35だ。軍に入団したのは18の頃、国が滅びたのが23の頃、ラインと出会ったのが25の頃、そして、お前と出会ったのが35か」

この話でハッキリわかるのは、レンダーはLTをキメた事が一度もないと言う事。

記憶がハッキリしている。

「ラインは一日にLTを何粒も食べ、上機嫌で音楽を大音量に流しながら、町中で踊っていたよ。LTがキレると、その場にいた人を殴り、中には殴り殺された奴もいただろうな。セク隊に追われる前に、俺様がラインを連れて、この廃墟へと身を隠した。ラインの父親はとつくに死んだか、どこかで彷徨ってるのか。兎に角、ラインだけは助けてやりたいと思い、体からLTを抜く決断をした。死なせる事になるかもしれないが、このまま手に負えなくなるよりはいい。それにアイツは女だ。将来、子供だって生みたいだろう。だから俺は本の少しの希望に賭けたんだ、ラインが生き残る事を信じて」

「……それで彼女は限界を超え、リミットレベル1となったのか？」

「そうだ。だが生きていくには、金がいる。そこで俺達は何でも屋を始めたって訳だ」

「もう1人いた男は？」

「フリットか？ アイツは2年前かな、俺様が拾ってきたんだよ。

実はLT中毒者を他にもここへ連れてきて、LTを抜こうとしたが、2日と持たず、みんな死んでしまった」

シンバは少し呆れたように、レンダーを見ると、

「偽善行為で、余計な事するなよ」

吐き捨てるように、そう言った。

リミットを越えるなど、到底無理な話で、実際に超えたシンバでさえ、二度と超えたくない3日間だった事は言うまでもない。

それを望んでもない人間に超えさせ、挙げ句、死なせたのでは、善意ある事とは思えないのだろう。

まるで実験紛いじゃないかと、シンバは思う。

「偽善じゃねえ。悪意も善意もない。只、俺様は、俺様と契約する奴を探してるだけだ」

「 契約? 」

「フリットは強い。Lトリミットレベル1だしな。だが、元軍人の俺様の戦闘能力を全て伝授してもいいと思う奴じゃない。どう足掻いても、レベル1だからな」

「.....」

「だが、アイツをレベル2にステップアップさせる事はできねえ。もし死なせたら、せつかくのLトリミットを越えた奴がいなくなってしまう。そんな事、絶対にできない」

「.....何の話だ? 」

「リグド・カツツエル。お前、奴の知り合いか? 」

突然、そう聞かれ、シンバは言葉を失う。

「お前、L Tがキレた時に苦しさの余りリグドの名を口にしてたぞ? 」

「.....」

「知り合いという程、奴を知らないか? それとも覚えてないのか? どちらにしる、お前はリグドの所には戻れないだろう、戻った所で只では済まないだろうし、またL T漬けにされるだけかもな。」

Lトリミットレベル2でも奴には敵うまい? なんせアイツは、Lトリミットレベル3だからな」

「レベル3!? 」

「お前、奴に俺を殺すよう命じられたんじゃないのか? でも殺せなかった。今からでも遅くはないか? だが、俺を殺した所で、お前はリグドと共に生きていけるのか? 今もアイツはL Tをキメて

るんだろう？ それを絶つたとして、それでも尚、生きていたら、奴はレベル4になるって訳だ。レベル3で最強だからな、これ以上絶つ必要もないだろうが、アイツは化け物の域を超え、どこへ向かっているのかさえ、わからなくなっちまってる。そう思わねえか？ そんな奴の所へ戻れるのか？」

「……………」

「だが、お前は奴の所へ戻る他、行く宛などないだろうな、ましてや普通の生活などLTをキメてた奴ができる訳もなく、職もないだろう。その強さで軍や部隊に入団できたとしても健康診断で、お前がLT中毒者だった事は血液検査で直ぐにバレる」

「俺にどうしろと言っただ！？」

「ここにいろよ」

「！？」

「こうしてお前の部屋も用意してやってるんだ。俺様の仲間になれ。お前がLTの後遺症でフラッシュバックやトリップに脅える日が来ても、ここなら俺様も、ラインも、フリットもいる。LT後遺症の安定剤もある。レベル1なら、然程、後遺症もないが、レベル2ともなると、どうかかわからねえ。特にトリップは、LTを飲んでいる間も、レベルを超え、飲まなくなった後も、続く症状だ、下手したら自滅だろう」

「……………」

「仕事もある。何でも屋だが、給料だつて働いた分は支払ってやる。その稼いだ金で、休日はショッピングや映画、食べ歩き、何でもやりたい事をすればいい。人間と変わらない生活をさせてやる。身分を証明するようなものがねえから、国からの保証は何もないが、お前もラインもフリットも、寿命は50歳だ、未来なんてない分、今を楽しめばいい」

「……………条件はなんだ？」

「話が早いな。ここで生活をさせてやる代わりに、ラインを死んでも守れ」

「どついう事だ？」

「いつか、リグドは俺様を殺しに来るだろう。その時、俺様の大事に育ててきたラインを殺されるかもしれない。それをなんとしても阻止しろ。ラインは、その寿命が尽きる時まで、幸せで笑ってほしいんだ。あの子の笑顔を消したくないんだ」

「・・・アンタとリグドはどういう関係なんだ？」

「リグドは8歳で、国のモルモットとして、軍に引き渡された異民族の私生児だ」

「国のモルモット？」

「LTは元々俺様が生まれ育った国の研究者達によって作られたものだ。LTを試す人間にリグドは選ばれたんだよ。たったの8歳でな。しかもリグドは異端児でもあり、それが天才的な事でもあった。俺様が18で軍に入団仕立ての頃、リグドの世話係の任務を受け、リグドを弟のように可愛がったよ。誰にも懐かなかつたリグドが俺様にだけは懐き、心を開いた。よく笑う可愛らしい子供だったよ」

「・・・」

「それも数週間の話だ。リグドは国のモルモット。直ぐに研究材料になり、俺様の世話係りも終わった。だが、たったの数週間でも可愛がった奴が気になり、何度も面会に行ったのが間違いだつた。リグドは人間扱いなんて誰からもされやしない。LT漬けにされ、LTを抜く3日間の苦しみの後、生きていたとわかれば、直ぐにLT漬けにされた。リグドが苦しんでいる最中、見ているしかできなかった、何もできなかったんだ、何も」

レンダーは自分の罪に押し潰されそうに、胸が苦しくなる。だが、忘れてはいけない事なのだろう、しっかりと鮮明に今も蘇る過去。

？レン、助けて？

今もその声がレンダーの耳から離れない。

8歳の小さな男の子が、次第に化け物のチカラに支配されて行く様

も、瞳から離れない。

「まだ小さなガキが言うんだよ、？殺してやる？つてな。呪いをかけるような顔でさ」

「・・・・・・・・」

「アイツの姿を最後に見た時、アイツは8歳のガキの顔じゃなかった。そして？レン、オレは忘れないよ、絶対にね？そう言い残して消えた。勿論、憎しみたつぷりの声と口調で言われたさ。そりゃそつだ、何もできないなら、他の連中と一緒に、モルモットとして扱ってやれば良かったものを、俺様だけはアイツを人間として扱ってしまったんだ。それが優しさだと勝手に思っていたが、そうじゃねえよな。リグドがされている事を、俺は当たり前のように見ていたんだから。モルモットとして見れないなら、当然のように見るのは違つよな。アイツはきつと俺様が助けてくれると信じていた筈だ。

なのに俺様は、リグドの、信じていた気持ちを裏切つて、アイツに残された本の少しの人間らしさを壊してしまつたんだ・・・・・・・・」

「愛情じゃなく、同情とか哀れみとかはな、どんなに優しく接しても、憎しみに変わる。それが好きな相手なら尚更だ」

リグドがレンダーに、どれだけ懐き、どれだけ信じていたのか。それが大きければ大きい程、憎悪も増すのだろう。

「リグドがレベル3になった時、そのパワーは軍さえも齒が立たない程で、リグドに関わつた殆どの研究者はリグドに殺され、リグドは大量のLTを盗み、国から逃亡。その後、リグドがLTの服用を始めて生きていた事で、まだLTをキメてなかった軍人達もLTを服用し始め、軍は略全滅状態になり、国も潰れたが、LTなどと言う人間を兵器として生み出す薬を作つた国の代償だろう」

「・・・・・・・・」

「アイツは俺様を許さないだろう、そして忘れないだろう。だから、シンバ、お前がグールドールに来たんじゃねえのか？最近、闇ルートで何でも屋の仕事が続いたからな。俺様がグールドールに放り

込まれたという情報をリグドは聞きつけたんだろう。アイツはこの国にいるんだろう？ シンバ、アイツは俺様を殺しに来たんじゃないのか？」

「……殺しに来たのかなんて、わからない。リグドは居場所を転々と変えるし、俺は只LTさえもらえれば、どこへでも付いて行くだけだ。でも俺がグールドールに行ったのは、アンタを殺すよう言われたからだ」

「そうか。やっぱり、どんなにLTキメても、リグドは俺様を忘れないか」

レンダーは頷くと、

「俺様はLT中毒者じゃねえが、軍人としての強さがある。俺の強さをシンバが伝授すれば、リグドに勝てるかもしれねえ」

そう言つて、シンバを鋭い眼力で見ろ。

片目だけだが、元軍人と言っただけあつて、眼力だけで、ビビらせる気迫はある。

「俺がリグドに勝てる？ 冗談だろ。悪いけど、俺はリグドに逆らう気はない」

「逆らう訳じゃない。只、もし、もしも、ラインが狙われるような事があれば、その時、ラインを守ってほしいと言っ話だ。俺様が殺されようが拷問されようが、それは構わねえ。只、ラインだけは」

「
そう言つと、レンダーはソファから立ち上がり、床に座り込み、頭を床につけ、深く深く頭を下げて見せた。

「な、なにやっつてんだ？」

「頼む」

「無理だ。俺はそんな約束できない」

断ると、レンダーは顔を上げ、シンバを見上げると、

「まさか、お前、リグドの記憶しかないって言っんじゃねえだろうな！？」

そう言われ、シンバは暫し沈黙した後、

「アンタこそ……彼女の親でもないんだろう？　そこまでする理由があるのか？」
そう聞いた。

「ラインの親は俺様の友だったと言ったろう？　母親の方は……俺様が嘗て愛した女だった。俺様より、ラインの父親はいい男だったからな、当然、そっちを選ばれた。俺様はラインの父親とも、母親とも、仲良くしていた分、あの子には思い入れがある。特に母親の姿で成長していくラインを見ると、どうしても……幸せになつてほしいと思う。まあ、何れ、お前にも好きな女ができれば、わかるだろう」

「……」

「お前なら、あの子を守れる強さがある！」
そんな事を言われても　、シンバは俯いて、

「俺、アンタを殺して、リグドの所へ戻らないと……。ずっと帰らない俺に、リグドは今頃怒ってる……。」
そう言った。

「いや、グールダールから帰って来れないと思うだけだ」

「え？」

「幸いグールダールは完璧な守備が売りの牢獄だ、でもそれは脱走者がいる事を世間に報告してないだけの事。つまり、誰一人として脱獄した事がないと言うのは、それを世間に公表してないと言うだけだ。俺様達が脱獄した事は世間には誰にも知らされない。現に俺様は幾度となく捕まっている。でもこうして脱獄して来ている。今回、脱獄に時間がかかり、ラインが心配して迎えに来たが、いつもなら、俺様一人で充分、脱獄できる」

「……そうなのか！？」

「こんな廃墟に住んでいる理由のひとつは、俺様が世界中で指名手配されてるって事もある。特に何をしたりして訳じゃねえが、ある国の元軍人の生き残りって事で……。LT関連って事だろう。殆ど何でも屋の仕事や情報は俺様の携帯でとり、俺様は事務的な仕

事をしている。実際に町中に出て仕事を行うのはラインとフリットだ。俺様は特に外に出る事はない。只、まあ、ヤバイ仕事だったり、二人に何かあった時は外に出なきゃならない。そういう時に捕まってしまう場合があつてな。でもここは誰にもバレてない。リグドも俺の居場所を知ってる訳じゃないだろう？」

「お前の人生は、50まで生きれたとして、後33年。ラインもだ。その間にラインに好きな男が出来て、結婚でもしてさ、幸せな笑顔で過ごす毎日も、お前はラインを影ながら見守り続けてほしい。お前は男だ。ちゃんとした職もない人生で、結婚なんて難しいだろう？ なら、ラインを黙って見守っていてくれないか？ 変わりに何でも屋として働く給料は、それなりに出してやるし、もし、お前達より俺様の方が先に死んでも、俺様の隠し財産は、お前とフリット2人が、後33年くらい遊んで暮らせるぐらいの額はある。後33年、リグドの所で飼い犬するより、よっぽどいい」

「……それが契約？」
「ああ」

「……正直に言うが、俺は誰かを守る自信なんてない」
そう言ったシンバに、レンダーは深く呼吸をして、再びソファに腰を下ろした。

シンバはチラツとレンダーを見て、レンダーが、まるで廃人にでもなったかのように生気のない顔をして、黙っているの、

「……直ぐに契約はできない。でも」
何か言わなければと思い、そう言った。

「でも？」
当然、聞き返すレンダー。

「……少し待ってくれないか、考える時間がほしい」
「少してどのくらいだ？」

そんな面倒な事を聞かれると思わなくて、シンバは右手で前髪をかきあげ、苛立つように、そのまま髪の毛をぐしゃぐしゃいじる。

「なあ、どのくらい考える時間を与えればいい？」

それさえも考える時間を与えてくれないで、同じ事を聞き返すレンダーに、シンバは参ったなあ、今度は右足を揺すり出す。

「1時間？ 2時間？ それとも1日？ 2日？ 一週間？ 二週間？」

そう言われても、何とも言えない。

「なあ、どのくらいだ！？」

「……俺が」

「ん！？」

「俺がラインを守りたいと思う時迄」

それは契約すると言う事になってしまふ台詞だった。

しかし、シンバが、自らラインを守りたいと思う時など、そんな時が来るのだろうか。

それでも、シンバの青い瞳は答えた後も、真剣に、レンダーを見つめていた。

4・記憶

「契約を交わす以上、二度とLTはやるな。LTをやったら、契約を忘れてしまいかもしいからな。いいか、もう二度とLTはやるな。LTをやらなければ、今日からの記憶はちゃんと思い出されるだろう。大事な記憶をふと思い出し、心に残る感情は悪くないぞ」
レンダーは厳しい口調で、言い聞かせるように言った後、強面の顔を本の少し優しく微笑ませ、そう言って、シンバを見る。

シンバは無言で、首を縦に振り、頷いて見せた。

だが、記憶なんてそんなに大切なものなのだろうか。

LT関係なく、記憶はなくす事もあるだろう。

大事な記憶だって、忘れる事もあるだろう。

シンバは、頷いては見せたが、どうでもいい事だと思っている。

契約を忘れたら忘れた時。

「それから、この契約の話はラインには内緒にしてほしい。ラインが知ったら、あの子の事だ、自分の身くらい自分で守ると言うだろう」

レンダーがそう言うので、シンバはフツと鼻で笑い、

「確かに、結構な強さだからな。あれは武術なのか？」

そう聞いた。

「俺様が少し戦闘の基本を教えて、鍛えてやったら、後は自分でボクシングやら雑技やらを見て、独特の戦闘法を編み出したんだよ。

あの子には戦いのセンスがあるんだろうな。その辺は父親似だな。

お前には俺様の全ての戦闘方法を教え込んでやる。武器は剣だ」

「 剣？ 」

「俺様が入団していた軍は剣を用いた戦闘技術をマスターした者が特Aクラスの隊員になれたからな。俺様にとって剣は最強の武器。それをお前に伝授してやる」

「 剣より銃とかの方がいいんじゃないか？ 」

「これだから素人は。お前、喧嘩しかした事ねえな？ それじゃあ強いって言っても、戦闘には使えねえ。LTをやっていない俺様でも、軍人だった頃に鍛えた事で、それなりに強さってものがある。それなりに強い奴は体そのものが凶器だったりする。銃も悪くはないが、弾を弾き返されたり、避けられるような事があつたら終わるだ。だから自らの体を使って戦う方法の方が、更に強さをアップさせるって訳だ。しかもLTリミットレベル2の奴が銃を撃つたところで、弾の方が遅いだろ、まどろっこしくなる」

「本領発揮したお前は、いい表現じゃないが化け物だ。弾なんて避けて当然。そんなのレベル1でやってる事だ。ラインだって」

「レンダーがそう言いかけた時、ノック音がして、ドアが開いた。」

「まだシンバを休ませてないの!？」

ソファに座っているレンダーとシンバを見て、ラインが驚いた顔で言う。

ラインは点滴薬を持って来たようだ。

「ああ、いや、話が弾んでな」

どんな弾む話があつたと言うのか、レンダーがそう言うと、ラインは呆れ顔。

「シンバは3日間、苦しんだ挙げ句、気絶さえできなかったんだから、眠る事もできてないんだよ？ それに飲まず食わずだったんだよ、早く点滴しないと!」

「あ、ああ、そうだな、点滴だったな」

レンダーは頷きながら、ラインから点滴薬を受け取り、シンバに、ベッドに横になるよう命じる。

袖を捲り上げ、シンバの腕に細い針を入れるレンダー。

「こんな事もできるんだな」

そう言ったシンバに、レンダーは笑いながら、

「何度も言わせるなよ、俺様は元軍人だ、簡単な薬剤免許も持っているし、あらゆる乗り物の免許もある。最も国がなくなった時に免許

は全部無効となり、無免許になつたがな」

と、太い短い指の癖に器用に、注射針をシンバの腕に入れた後、腕を曲げないように、板で固定し始めた。

「シンバって夕飯は食べれるの？」

「ああ、そうだな、まあ………腹が減つたなら食わせてみるか」

レンダーがそう答えると、ラインは頷き、

「好きな食べ物とかある？」

と、ベッドで横になつてゐるシンバを覗き込み聞いた。

だが、シンバはベッドに横になると、眠気が一気に来て、意識が朦朧とし始めている為、何も答えられない。

「あれだろ、覚えてないだろ。ラインの飯は何でも美味しいから何でも気に入るだろうよ」

レンダーがそう言つて、部屋を出て行く。

続いて、ラインも、シンバに布団をかけると、部屋を出て行つた。夢うつつの中で、シンバは、これから本当にどうしようか考えていた。

やがて、うつつから夢へと入り込み、リグドが現れる。

クッククツクツと喉を鳴らし笑いながら、？お前は前世紀の子供みただな、加減つてものを知らない？と。

だが、直ぐに背を向けて、もう興味ないと行つてしまふ。

待つて、リグド！

俺を置いて行かないで！

俺を一人にしないで！

追いかけても、リグドには追いつけない。

わかっている、リグドに追いつき、追い越す事など、絶対に不可能だ。

リグドは俺にとって、崇拜する絶対神そのもの。

？シンバ？

誰かが、俺を呼んでいる。

リグドとは違う声だ。

?シンバ?

振り向くと、ラインが立っている。

?いいものあげるよ、手を出して?

ラインがそう言うので、シンバは手を出すと、シンバの手の中に飴玉を落とす、

?あげる?

と、ラインはニツコリ笑う。

?シンバ?

また誰かが名を呼ぶ。

振り向くと、今度はレンダーが立っている。

?リグドを殺すんだ?

そう言つて、剣を差し出して来るが、シンバは首を左右に振り続ける。

そんなシンバに無理矢理、剣を持たせ、

?リグドを殺すんだ?

と、レンダーは繰り返す。

?シンバ?

再び、名を呼ばれ、振り向くと、リグドが立っている。

?その剣でオレを殺すのか??

違う、リグド、話を聞いて。

俺がリグドを殺す訳ないだろう?

只、ラインを守って欲しいって言われただけで殺せとは言われてない!

嘘じゃない!

レンダー、頼むよ、レンダーからも説明して?

俺はラインを守るよと言われたただけだ! そうだろう?

?もういい、わかったよ、シンバ?

リグド! わかってくれたのか!? 本当に!?

?ああ、わかるよ、お前がラインを殺せばね?

ラインを……！！？

リグドが喉を鳴らしながら笑い、耳元で囁く。

？大丈夫大丈夫、お前ならできるって？

シンバは手に持った大きな剣を見つめていると、ふと目の前にラインがいる事に気付く。

リグドの声が耳元から離れない。

？大丈夫大丈夫、お前ならできるって？

何度も、耳元でそう囁かれているようで、シンバは自分でも言うてみる。

大丈夫大丈夫、俺ならできるって。

ラインがニツコリ笑う。

なんだか、とても懐かしい笑顔で、だけど、その懐かしさを守りたいと思う程、シンバには何も無い記憶過ぎて、剣を振り上げた。

瞬間、ハツと目を開け、ガバツと起き上がり、まるでこれからの事を暗示するような嫌な夢だったと思う。

もう点滴もとれている。

どのくらい寝たのだろう、夢のせいで、そんなに寝た感じがしない。ベッドの脇に箱が置いてある。

なんだろうとベッドから出て、箱を開けると、靴が入っている。

そういえば、靴を買ってくれろと、ラインが言っていた事を思い出す。

その靴を履かずに、手に持ち、シンバは部屋を出る。

ローカに出ると、いい香りが充満していて、その香りに誘われるがまま、歩き出し、キッチンに繋がる扉を開けた。

扉を開けると、本当に廃墟とは思えぬような部屋作りで、別の場所へワープしたんじゃないかと思ってしまう。

「シンバ、起きたの？ そろそろ夕食もできるから待ってて？」

いい香りはラインの作っている料理のようだ。

「………これ」

シンバは靴をラインに見せる。

「気に入らないの？」

「……いや」

「じゃあ、なんで履かないの？」

「悪い気がして」

「悪くないよ、履いて？ サイズはどう？」

「そう言われ、シンバは靴を履いてみる。」

「大丈夫そう」

「良かった」

と、ラインはニッコリ笑う。

「金は……幾らした？」

「ああ、いいよ、プレゼントだから」

「もらう理由はない」

「あるよ」

「？」

「新しい仲間が増えた事が嬉しいから、新しい仲間にプレゼント。これ理由だよな？」

新しい仲間。

シンバはどう答えればいいのか、わからなくて黙ってしまっ。そこへフリットがやって来て、

「腹減ったあ」

と、シンバの存在を無視するように、ラインの傍に行く。

だが、ラインはフリットを無視するように、

「あ、それでね、服も何着か買っておいだから」

と、テーブルの上にある大きな袋をシンバに渡す。

気に入らないのはフリットだ。

だが、シンバもラインもフリットの機嫌が悪くなった事に気付いてはいない。

シンバは袋を開けて、中の服を取り出して見る。

「……」

「気に入った？」

黙って服を眺めているシンバに、ラインが尋ねるが、
「もつと……こう……普通の……で良かったのに」

不満がある訳じゃないが、シンバはそう言っただけで、服を眺めている。
これもまた普通のシャツに変わりはないのだから、訳のわからない所にチャックがついていたり、破けていたり、チェーンが付いていたり。

「気に入らなかった？」

「ああ、いや、いいんだけど、こういうの俺、似合うのかな」

「似合うよ。て言っても、私もよくわからなくて、フリットが着てるのを参考にしたの」

フリットは益々気に入らない。シンバはふうんと頷いて、服をまじまじ見ながら、

「……リグドみたいだ」

そう呟いた。

「おい、お前！ 今、何て言った!？」

と、フリットが突然、噛み付くように、食いついて来た。

「は？」

「今、お前、何て言ったんだよ、誰みたいだつて!？」

「……リグド」

「なんで、その名前を、お前が知ってるんだよ!？」

「……お前こそ、リグドを知ってるのか？」

只、問い返しただけのシンバだが、何故かフリットは抑えきれない怒りが込み上げて来て、

「オイラの質問に答えろ!!!!」

気がつけば、シンバの胸倉を掴んで、大きな声で怒鳴っていた。

「おい、どうした？」

フリットの声に驚き、レンダーがドアを開け、入って来た。

フリットは舌打ちし、シンバを突き飛ばすようにして胸倉から手を離し、部屋を出て行く。

「おい！ おい！？ フリット！？」

レンダーがフリットの背に呼び止めるが、フリットは行ってしまい、部屋に残っているシンバとラインを見て、

「何があっただんだ？」

と、尋ねる。

「レンダー、アイツもリグドを知っているのか？」

「何？」

眉間に皺を寄せ、聞き返して来るレンダーに、何も知らないのかと、シンバは黙り出す。

「おい、リグドがどうした？ フリットがリグドと繋がりがああるのか？ そんな話は聞いてねえぞ！ おい、シンバ、答える！」

「……悪いが、俺は何も知らないから答えられない」

「なんだと！？」

「レン、リグドって誰なの？」

ラインがいる事を忘れ、リグドの話をしてしまった事に、レンダーは突然、挙動不審な態度で、

「誰でもない」

などと言い出す。それではラインが納得いかないだろう。機転を利かせ、

「リグドは俺の知り合いかもしれない。只、記憶がないからわからないだけだ。それをフリットが知ってるようだったから、聞いたかっただけだ」

シンバがそう説明した。

「でもレンも様子がおかしいのは何故？」

「それは急に俺の記憶が蘇るようなものが現れたら、記憶崩壊が起きるんじゃないかと心配しての事だろう、違うか？ レンダー？」

シンバがレンダーを見て、そう言うので、レンダーはウンウンと頷いて見せる。

「……ふうん」

納得したのか、しないのか、ラインは頷く。

「ああ、いい二オイだな、今日の夕飯はなんだ？　そういえば、昼間、出かけてたのか？　今日は仕事なかっただろう？　そうそう、仕事と言えば、明日から仕事のエリアを変えようと思うんだが」

レンダーは必死にラインに、別の話をする。
シンバはフリットを探す為、部屋を出た。

どこへ行つたのだろう、とりあえず、錆びてはいるが、ドアがある部屋を開けてみる。

トイレ、シャワールーム、薬剤庫、武器庫

外へ出てしまったかもしれないなと思いながら、ドアを開けると、その部屋はピンクを基調とした部屋で、思わず直ぐに閉めた。

「……………ラインの部屋？」

そう呟き、そういえば、本の少し苺の飴玉の甘い二オイがしたと思う。

なんだか凄く恥ずかしく思い、早く忘れなきゃとまだ開けてないドアをあちこち開けまくる。何もない部屋もあれば、まだリフォームの途中のような部屋もある。

ラインの部屋が頭から離れなくて、もう何の為に、あちこちのドアを開けているのか、わからなくなっている。だが、ドアを開け続けていると、やっとベッドで不貞寝しているフリットがいる部屋に辿り着いて、フリットを探していたんだと、中へ入る。

「何勝手にオイラの部屋に入って来てんだ！！！！」

と、フリットに怒鳴られて、確かに、勝手に入ったのは悪かったと思い、部屋を出て行くシンバに、

「お前何しに来たんだよ！！！！」

更に吠えられた。シンバは立ち止まり、フリットを見ると、フリットはベッドから出て、起き上がり、シンバを睨んでいる。

シンバは睨んでいる訳ではないのだが、何故か、二人で睨み合っているようになる。

やっぱり言う事を考えてから出直そうと、背を向けて、部屋を出て行くこととするシンバに、

「待てよ、言っておきたい事がある！！！！！」

フリットが叫んだので、シンバは振り向く。

「オイラはラインが好きだ」

なんでそんな告白をするのか、シンバは首を傾げる。

でもフリットが余りに深刻な顔なので、何か言わなければと、

「・・・・・・・・あぁ、俺も好きだ」

とりあえず、そう言う。

フリットにしたら、宣戦布告返しされたようなもの。

「なんだとお！？」

「いい子だと思う。レンダーも大事にしているし、飯も用意してくれてるみたいだし、服や靴まで用意してくれて、嫌いになる理由はない」

「ちっ！ ちげえだろうよ、お前のその好きとオイラのその好きは！！！！！」

「は？」
「・・・・・・・・もういい。話にならない。お前、LTのやりすぎで感情乏しすぎる」

「・・・・・・・・」
「お前、まだくせえ。自分の服が手に入ったなら、シャワー浴びて着替えるよ。オイラの服は洗って返せよな」

「・・・・・・・・」
「それからリグドの事だけど」
「そう言われ、そういえば、リグドの事だったと、シンバは思い出す。どうもラインの事が絡むと調子が狂う。」

「リグドはオイラの憧れだったのかもしれない。よくは覚えちゃいない。お前もそうだろう？ リグドの取り巻きの一人・・・・・・・・お前もそうだったんじゃないかねえの？」

「・・・・・・・・」
何も答えないシンバに、

「お前、マジでやりにくいよ、もう少しテキパキ喋れねえの？ そ

れとも喋る気ないから無言な訳？　ここに来たのはリグドの事を聞きたかったんじゃないの？」

「イラツとしながら、そう言った。」

「いや、リグドに取り巻きなんていたのか？　俺はそれこそ覚えてないのかもしれないが、リグドは必ず」

「必ず、シンバに会う時、一人だった。」

「必ず、なんだよ？」

「……リグドは俺以外にも……いたんだな……」

「何が？」

「わからないけど、俺はリグドだけだったから」

「やっぱり取り巻きの一人じゃねえか。みんな、リグドを好きになるんだよな。で、リグドに夢中になってリグドだけになる。なんでだろうな、不思議なカリスマ性があったのかな。オイラはリグドみたいになりたかったって、今もその気持ちは忘れてないんだよな、理由も記憶にないのにさ」

「……」

「リグドはオイラの事なんて、全然、知らないだろうな。いちいち取り巻きの連中の事なんて覚えてないだろ、LTやってなくてもさ」

「リグドに会いたいのか？」

「そう聞いたシンバに、フリットは少し目を伏せ、そして首を振った。「オイラはラインの傍にいたいから」

結局、リグドの事は大した事じゃないかと、シンバは、部屋を出ようとドアを開けた。

ドアを開けて直ぐにレンダーが立っているので驚く。

立ち聞きしていたのだろう、だが、レンダーも大した内容じゃないと判断したのか、

「おい、お前等、飯だ」

「そう言うと、行ってしまった。」

シンバは先にシャワーを浴び、キッチンへ向かうと、レンダーもラ

インもフリットも、まだ食べずに待っていた。

「仕事について話があるから、食べながら聞いてくれ」

シンバが椅子に座ると同時に、レンダーがそう話す。

「当分、闇ルートの仕事はしない」

「なんで？ いい金になるのに」

聞いたのはフリット。

「金なら、もう充分ある。掃除や探し物だけでも稼げるだろ。当分はそういう仕事中心だ。シンバは朝と夜、俺様が鍛えてやる。それ以外の時間で仕事をしてもらう。仕事をするエリアも変えようと思っっている。今迄通り、俺様がクライアントと電話で話し、仕事を受けるかどうかは、俺様が決める。仕事内容については、どんな内容でも、俺様が決めた仕事は文句言わずにやっってもらう。子守りでも介護でもな」

レンダーはそう言いながら、骨肉に食らいつく。

それにしても、美味しいなあとシンバも肉を食らう。

「美味しい？ スペアリブ、安かったから」

ニッコリ笑って、そう聞いたラインに、

「美味しい」

と、答え、シンバは食べる事に夢中になる。

「シンバ、給料だが、食費や生活費、携帯料金などは先に引き落とししてから渡す。料理はラインがやってくれるが、自分の部屋の掃除と自分の洗濯は自分でやれ。トイレやキッチンなどの共有スペースは交代制で掃除する。わかったな？」

食べながら頷くシンバ。

「最後に！」

急に声を大きくして、レンダーが、みんなを見回し言う。

「いいか、俺様達は家族だ。恋愛禁止だからな！」

そう言われ、食べてるものを吹き出したのはフリット。

レンダーは、ギロツと鋭い右目でフリットを睨む。

「よく聞け、ライン！！！！」

顔と目はフリットに向けられているのに、何故か、突然、自分の名前を呼ばれ、ラインは、私？と、首を傾げてレンダーを見る。

「お前はしつ野郎なんかと絶対に恋愛するんじゃないやねえ！ お前の相手はちゃんとした男だからな！ わかってるだろうな！」

「……レン、何かあったの？」

「黙って俺様の話に頷いてろ！！！！ お前は俺様の大事な娘なんだからな！！！！」

物凄い勢いで怒鳴られ、逆らわない方が身の為と、ラインはコクコク頷いた。

「それから」

「まだあんのかよ！！！！」

恋愛禁止と言われ、フリットは更に何を言われるのかと、レンダーに突っ込む。

「いや、これはシンバにだ」

と、レンダーのポケットから携帯が出され、テーブルの上に置かれた。

「最新の携帯じゃねえか、ソレ！ オイラのと変えろ！！！！」

フリットがそう言っつて、携帯に手を伸ばし、その手をラインにパシツと叩かれた。

「シンバのだつてレンは言ってるでしょ！」

「なんだよ、シンバシンバつて、コイツばかり優遇じゃねえか！」

「そんな事ないよ、フリットだつて最初の携帯はレンが買ってくれたものでしょ？ 最新の欲しければ、自分の給料で買えばいいじゃん。私だつて、ほら」

と、ラインはポケットからピンクの携帯を取り出す。

それは色は違うが、シンバと同じ機種。

最新関係なしに、シンバとラインの携帯がペアだと言う事に、フリットの顔がひくつく。

「それからこれがイヤフォン」

と、レンダーは、更に携帯の横に小さな耳に入れるだけのものを置

く。

「ポケットに通話中にした携帯を入れて、それを耳に入れておけば、発信される声は聞こえる。メールアドレスも後で確認しておけ？
仕事で電話がとれなくても、次の仕事が入れば、メールで確認できるだろ。俺様とラインとフリットのアドレスと電話番号は登録済みだ、後で空メールでいいから、俺様にメールしてみる」

「.....」

シンバはスペアリブを啜えたまま、テーブル上の携帯をジューっ
と見ている。

「どうした？ まさか、お前、携帯の使い方わからないのか？」

そう聞いたレンダーに、シンバは顔を上げ、啜えた肉を食い千切り、
「使った事ないと思う、多分」

そう言つて、もぐもぐしながら、口の中の肉をゴクンと呑んだ。

レンダーは直ぐに納得する。

シンバは生まれながらにしてLT中毒症。

どのように生きて来たかは、わからないが、リグドに出会い、その
後もずっとLTだけを欲しがったに違いない。

リグドもLTだけを与えたに違いない。

靴さえ履いてなかったシンバは、リグドとLTだけが全てだったの
だろっ。

「今時、携帯使った事ないって、そりゃ嘘だろ、お前、記憶ないだ
けだって！」

そう言つたフリットに、

「フリット、後で教えてやれ」

レンダーがそう言つた。

「なんでオイラが！？ 記憶なくしただけだろ、いじってりゃあ、
勝手に理解するさ！」

「私が教えるよ」

ラインがそう言つて、自分の携帯を見せ、

「同じ機種だから教え易いし」

そう言うので、レンダーは頷いたが、フリットが、

「オイラが教える!!!!!!」

さつきとは正反対の台詞を言い出した。

「もういいって。私が教えるから」

「ダメだ、オイラが教えるんだ!」

「なんで? シンバと仲良くしたくなっただの?」

「違う!!!!!!」

「ならいいよ、私が教えるから」

「いつ、いいのか!?!」

と、立ち上がり、ラインを指差し、レンダーを見るフリット。

何が? いいのか!?!? なのか、サッパリわからないラインは、何が? とフリットを見る。

「フリット、お前とラインを二人にするよりはいい」

レンダーがそう言うのと、フリットは悔しさの余り、ラインを指差している手をグッと握り締め、下唇を噛み締めて、噴出す苛立ちを堪え、椅子に座る。

「シンバ、後でラインに使い方を教えてもらおうといい。なるべく今日は早く寝ろ? 明日の朝早くから鍛えてやるからな」

レンダーからの話はそれで終わり、食事を済ませた後、フリットとラインで片付けを行い、レンダーはシンバを連れて、武器庫へ向かった。

様々な武器が並ぶ。 。
装飾品のようなデザインのものばかり。

「.....この紋章、見た事がある」

シンバはどの武器の装飾にも、必ず付いている印を見ながら、そう呟く。

「我が国ジュキトの紋章だ」

「ジュキト.....?」

「知らないか? 一時期、ニュースでよく流れた名だ。LT流出国として、各国からの潰しがかかり、LT中毒者じゃないジュキトの

民でさえ、どの国も、受け入れてくれず、あっという間に消え失せた国だがな」

「知らない。ニュースとか見た事ない」

「そうか、まあ、知らないのは当然だ、今となつては、ジユキトに關して、どこの国も人も、一切、語りたがらねえからな」

「これ全部、そのジユキトって国の武器なのか？」

「ああ、軍で使用したもばかりだ」

「全部、持って来たのか？」

「……全部じゃねえが、まあな」

長劍、短劍と、様々な劍に始まり、銃、槍、杖、弓、爪、棒、鞭と、コレクシヨンのように飾られている。

「……ラインは爪か？」

「いや、三節棍という三本の棒が又ンチャク状に繋がっている武器だ、早い話が棒だ、棒」

「棒？ グールダールの時、棒なんて持ってたか？」

「そりゃ持ってねえだろう、武器なんて没収されるだろ」

「ああ、そうか。じゃあ、フリットは？」

「アイツはダガー、短劍だ。割りとスピードがあるからな、武器も軽く攻撃力のある短劍を持たせた」

「ふうん」

「で、お前は長劍だ。どの長劍にするか決める。長劍なら好きなものを選んでいいぞ」

そう言われても、どれもこれも重そうで、まるで美術館に飾られているようなものを選びと言われても、価値さえ、わからないのに無理な話だ。

「……シンバ、リグドは劍を持ってたか？」

「え？」

「アイツは俺様が数週間、劍を教えてやったんだよ、勿論、子供だった事もあり、木で出来た玩具の劍だったが」

なんとなく、ＬＴリミットレベル３と言つても、子供相手に、軍や

国が潰されたのが、わかる気がした。

恐らく、レンダーは元々戦闘能力に優れていたのだろう、それで軍に入団して、若くて特Aクラスという出世もできた。

だが、その前に、リグドに戦闘を、遊びだとしても教えてしまったのだろう。

レンダーが罪を感じる所は、全てはそこらなのかもしれない。

リグドとの出会いから。

「剣は………持っていたのか、なかったのか、覚えてない」

だが、シンバはジュキトの紋章を見ながら、その印をどこかで見た感じがすると、それはもしかして、リグドが持っていた剣についた紋章だったのかもしれないと思う。

「そうか。まあ、持っていたとしても、お前に会う時は持ってなかったのかもしれない」

その台詞は、リグドが剣を持っているという確信が、レンダーにはあるんだ。

もしかしたら、レンダーはリグドに剣を与えたのか、もしくはリグドが剣も盗んで逃げたのか、兎も角、それは長剣なのだろう。

シンバは、多くある長剣の中から、剣をひとつ、手にとって、レンダーを見た。

「それにするのか？」

「ああ、どれもこれも同じに見えるし、これでいいや」

「そんな適当でいいのか？」

「こつこつのは勘で決めるよ」

「冴えてるな」

レンダーはそう言うと、

「その剣の名はノーザンファンク。今日からお前の相棒だ。いいか、武器は自分を最強にするパートナーであり、一心同体だ。お前が悪に染まるなら、その剣も邪悪になる。お前が正義を貫くなら、その剣も光になる。只の竹刀でも、英雄が持てば、英雄の剣だ」

武器という分身を、記憶に刻むよう、シンバに話した。

柄の部分は綺麗な蒼い装飾と、ジユキトの紋章があり、長さは1.3 m程、重さは2.5 kg程、刃は狭く、細めの剣。

「所謂バスタードソードって奴だ」

「バスタード？」

「私生児って意味だな、まあ、雑種って事だ」

雑種の剣。

「コイツがどこで、誰に、どういう理由で作られたかは謎だ。殆ど全部の武器には理由があって作られる。例えば、この風変わりな剣を見る、これはある戦争の為に、国が異国から仕入れた刀という種類の剣。剣を作った者の名前も刃の部分に刻まれている。だが、お前が選んだソイツはノーザンファンクという名前しかわからねえ。

誰が最初にソイツをノーザンファンクと呼んだのか、それも俺様には、わからねえ。ソイツはノーザンファンクと言う名と、そして、月夜に不気味に蒼く輝き、太陽の光を吸い取り闇を呼ぶという事で、伝えられた剣だ」

シンバはノーザンファンクを見つめる。

シンバのブルーの瞳の中に、ノーザンファンクが美しく反映している。

「後、もう一つ、言い伝えられた伝説のような話。コイツは相反する神が手を組んで生まれた雑種って事。ま、これは神話に出てくる剣の話を、コイツに重ねただけの作り話だろうが、武器には大袈裟な尾びれをつかせた話を与えるもんだ。この数多くある剣の中でも、こうして神話みてえな話がつけられているのは、ソイツだけだ。ジユキトの武器はな、LTを使用する軍人の為の武器。その為、理由のハッキリしねえソイツは、それでも、ジユキトの武器であり、最強の剣だと言う事なんだ、悪くねえ代物だろ？」

「いや、なんか、大層なものを選んでしまったなと後悔してる」

「おいおい、お前なんか選ばれたノーザンファンクの方が辛いんだ、お前が後悔するのは違うだろ」

そう言われればそうだなと、シンバは、

「頼りないだろうが、よろしくな」

と、剣に挨拶をしたが、ノーザンファンクに特に変化はなく、当たり前だが、受け入れられたのか、拒否られているのか、わからない。「これが鞘だ。背負うなり腰につけるなり、自分が剣を出しやすいような場所に身につける。ラインの三節棍やフリットのダガーと違い、長剣は隠して持ち歩けない。武器を持ってますと言って歩いていようなもんだ。だが、堂々と持っておりゃいい。誰もが、セク部隊に入る為に剣術を道場で習っているのかと思うだろうからな、それはいい。問題は誰かを尾行したりする時だ。そういう仕事が入ると、お前自身に何の特徴がなくても、剣を持っているというだけで特徴になる。セク部隊に一度は捕まり、グールドールを抜け出してるんだ、偽名を使ってないだろうから、名前もバレている。お前はセク隊の間では指名手配中みたいなもんだろう。一応、聞いておこう、お前、何をやって捕まったんだ？」

「……人殺し？」

よくわからないので、語尾にハテナをつけて言うと、レンダーは額を押さえ、宙を仰ぐ。

「窃盗とかである事を願っていたよ。まあ、LTキメてたしな、大体想像はしてたが、人殺しで捕まったとしたら、本格的に指名手配中だな」

「俺、仕事できないのか？」

「いや、まあ、お前、グールドールにいた時は汚い顔と格好で、まだ消毒シャワーも浴びる前だったしな、髪を短く切られ、囚人としてのナンバーボードを持って、その顔を写真に撮る前だ、今とは少し人相も違うし、大丈夫だろ。フリットみたいに、髪をワックスか何かで、ちんちくりんにやってもらえ。そしたら、わかりやあしねえよ」

ちんちくりんにはしてもらいたくないと、シンバは思う。

「ま、どんな仕事しても、絶対に尾行はされるな。ここがバレたらアウトだ、俺様もお前もな。まずは自分の気配を消す事から教えて

やるとするか。そうすれば剣を持ってても、気配がない奴の事なんて視界にさえ入らないもんだからな。尾行するにも、されるにも、そうするしかねえな」

今日は武器も選んだし、後は明日の朝から始めようと言う事で、シンバはノーザンファングを持ち、部屋に戻る事になった。

ノーザンファングをベッドの横に立て掛けて置き、今度は携帯の使い方を見せてもらう為、ラインの部屋を訪ねた。

ノックをしたが出て来ないので、まだキッチンで片付けをしているのかと行ってみるが、誰もいない。

フリットの部屋にでもいるのだろうかと思った時、ローカの壊れた窓から、ランプの灯りが見えた。

壊れた瓦礫の上に、ランプを置いて、ラインが座って、空を見ている。

何を見ているのだろうか、シンバも、そこから空を見上げてみる。真っ暗で何も見えない。

とりあえず、外に出てみる事にした。外に出て、ここがどこなのか、改めて疑問に思う。

周りは草や木ばかりで、他は何もなく、大体この廃墟は何の建物だったのだろうか。

シンバの気配に気付き、ラインが振り向く。

「あ、携帯？」

「ああ」

「教えてあげるよ、座れば？」

「どこで？」

「うん」

ニッコリ笑って頷かれたら、何も言えない。

大きな石の瓦礫の上、ラインの横に座り、携帯を取り出すと、ラインもピンクの携帯を取り出し、

「お揃いだね」

と、笑顔がもつと笑顔になって言う。

ピンクの飴玉のストラップがついているピンクの携帯。

「ピンク好きなのか？」

「うん」

「……………」

「何？ 似合わないって？」

「いや、そうじゃなくて……………覚えとくよ」

「え？」

「ラインが好きなもの、覚えとく」

シンバがそう言うと、ラインは照れくさそうに微笑みながら俯き、

「うん、忘れないで」

と、直ぐに顔を上げ、そう言うと、携帯の説明を始めた。

ラインの声は高めで、最初に聞いた時は男だと思ったから、まともじゃないと思ったが、女だとわかった途端、とても可愛らしく聞こえるから不思議だ。

「画像もムービーも撮れるよ、そう、それを選んで、ボタン押ししたらいいの、結構、便利だよ、人探しの依頼とかは、画像をレンに送信して、確認してもらえろしさ」

「……………」

「後、コレあげる」

と、ラインは小指の爪程の小さなカードをシンバの手の中に入れた。「データを保存して置いておけるよ、レンからはもらわなかったでしょ？」

「……………保存？」

「うん、ほら、携帯のここに差し込んで入れるの。画像とかメールとか大事に保存しておきたいものをね、カードに入れておけば、携帯をなくしても、大事なものは残るよ」

「……………大事なもの？」

「特にないかもしいないけど、携帯なんて仕事で使うだけだしね。でもね、例えば、今日見た月が綺麗で、でも、何日かしたら、そんなの忘れちゃうでしょ？ 画像を撮っておいたら、その綺麗な月、

また見られるじゃない？ でも携帯をなくしたり、壊れたりしたら、その画像もなくなっちゃうけど、カードに、その画像を保存しておけば、カードさえ、失くしたり、壊れたりしなければ、また綺麗な月に会える」

「……………また会える？」

「ねえ、永遠に失わない記憶って、あるのかなあ？ そういうの考えた事ある？ 今はもうLTやってないけど、LTの後遺症でフラッシュバックとか、トリップとか、いつまた欲するかとか、記憶障害とか、怖い事ばかりで、だから、いろんな事、忘れないように、カードに保存しちゃうんだよね。今日、作った料理とかさ。そんなの、当然、LTやってない人だって、いちいち、覚えてる訳ないのにね、でも、些細な事も忘れるのが怖かったりして。シンバは、記憶、これ以上、失うの、怖くない？」

「……………」

シンバは、黙ったまま。

持っている記憶はリグドだけ。

リグドの記憶がなくなったら、何もなくなってしまう。

それは怖い事なんだろうか……………？

ラインには、例えば月という、例えを出せるくらい、いろんな記憶があるんだなと思う。

だが、何も言えず、シンバは、携帯をいじり出す。

これから俺にも、リグド以外の記憶が、できるんだろうか。

失いたくないと思う記憶もできるんだろうか。

「あ、そのボタンはテレビ。それに音楽もダウンロードして聴けるよ、好きなタレントとかいる？ 私はねえ、街のビルの上にあるムービーでよく見かけるタレントがいるんだけど」

「……………ここで何見てた？」

「え？」

「上を見てたろ？ でも月はないな、星か？」

「うん、町中より、星がよく見えるから」

そう言われれば、星がとても綺麗だ。
景色なんてものに興味がなかったシンバは、初めて感じる感情に、不思議に思う。

夜空を見て、感じる気持ち、わからない。

何故、切なくなるのだろう。

何故、苦しくなるのだろう。

何故、涙が出そうになるのだろう。

何故、優しくなれるのだろう。

わかる事は、全然、嫌な気持ちじゃなくて、それが、LTをキメた時なんかより、とてもいい気分で。

初めて、人間なんだなあと、思えた。
夜空を見て。

遠くの空で、ヒューツという音がしたと思うと、パーンと光が弾けて、暗い空一面に大きな火花が広がり、直ぐに消えたが、また続けてパーンパーンと・・・。

「あっちの町で、今日、お祭りなの。フリットと行こうって前から約束してたんだけど、行くの中止にしたんだ、シンバがまだ外に出れないと思って」

不思議な事を言う。

フリットと行けばいい。

シンバは、人に気にかけてもらえている事が不思議でならない。

どうやら祭りがあった事を知っていたと言う事は、ラインは火花が見たくて、外に出ていたようだ。

ランプと花火の灯りで、ラインの顔が闇に照らされる。

シンバは火花を見ているラインを見つめている。

LTが抜けて、最初に出会った人。

最初に声をかけてくれた人。

最初に優しくしてくれた人。

最初に微笑んでくれた人。

最初に人として扱ってくれた人。

最初に綺麗なものを一緒に見た人。 。
まだ御礼も言っていないのは、どれだけの？ありがとう？を言えばいいのか、わからないから。

正直、レンダーからの契約は、まだよくわからないし、今すぐにリグドが現れても、リグドからラインを守る気はない。

それでも今日一日で、ラインは、忘れられない人になっただろうと思う。

ここでバイバイしても涙も出ないし、悲しくもない。
でも、二度と忘れたくない人だと感じる。

だから……二度とLTはしない。
。 。
パーンツと物凄い音が体に響く程、空で鳴り響き、大きな花火が上がる。

「すごっ！ 見た!？」

空を指差して、ラインがシンバを見て、そう言って、また空を見上げる。

花火は大きな花を空に咲かせると、あっけなく終わる。

チラチラと空に落ちる火の粉。

ふと、シンバは、前にも、こうして、ラインと空から落ちる何かを見たような気がすると思った。

チラチラと落ちる白いモノを、一緒に見た気がした。

トリップだろうか、現実だろうか、だが、シンバには何か感じる事があったても、記憶にはない。

だから、これは記憶に残そうと、シンバはラインを見つめる。

「うわ、連続!」

パンパンパンと、連続花火にパチパチと拍手しながら、ラインはそう言っていると、見た？と、またシンバを見て、空を指差した後、再び、空を見上げる。

シンバは携帯をラインに向けて、再びラインがシンバに振り向いた瞬間、シャッターを押した。シンバの携帯にラインの顔が写り、その画像を保存する。

「今、私の画像撮った!? 消して消して!」

「無理」

「なんで!?!」

「面白いから」

「変顔だったの!? やめてよ、私の顔を笑いのネタにしないでよ!」

「……じゃあ、変顔はいつもなんだよ、いつもの顔だった」「ひっど!?!?!」

ラインが手を上げて、シンバを叩く。

シンバがその手を持った瞬間、また大きな花火が空を覆いつくすように上がり、ラインは空を見上げ、シンバはラインの横顔を見つめる。

ラインの手の温もりは、優しく、初めて、人に触れた気がした。

「……お祭り、行こうか」

思いがけないシンバの台詞。驚いた顔でシンバを見るが、直ぐに冗談かと思ったのに、

「レンダーには内緒で」

シンバが更に思いがけない事を言い出すから、ラインは本気かと思う。

シンバもラインも、17歳。

まだ子供。大人の手前。

怖さなんて何も知らないし、知ってても、それを怖いと思える程、今は独りじゃなくて、縛られるのは一番嫌いな年頃だし、楽しい事なら、誰に反対されても、やってしまっう年齢で、だから、ラインが、「フリットにも内緒で?」

と、頷く事は、当たり前的事だった。

記憶なんてあってもなくても同じだと思っていたシンバ。

だが、シンバは、今、? 思い出? という記憶が欲しくなった。

何があっても、忘れられない記憶を、大事にして生きてみたいと、

夜空を見て、初めて感じていた。
ラインを忘れられない記憶として。

5・意思

一ヶ月も過ぎ、シンバにとっては始めての給料日。

シンバは、たったの2週間でレンダーの戦闘方法は全てマスターし、完璧までの強さを手にしていた。

可愛げのない奴だと、レンダーはブツクサ文句を言っていたが、シンバが早く強くなる事を願ったのはレンダーだ。

生活にも慣れて、フラッシュバックやトリップの症状もなく、仕事も順調。

そして、シンバは今日という日を待ちに待っていた。

最初の給料で、ラインに何かプレゼントをしようと決めていたからだ。

沢山の御礼を言えないまま、一ヶ月も過ぎてしまい、だが、このままって訳にもいかない。

だから初めての給料で、何かプレゼントをしたいと思っていた。でもサプライズという事を知らないシンバは、

「ライン、何か欲しい物とかないのか？」

と、聞いてしまう。

「あるよ、食器洗いの洗剤かな、後シャンプーもキレてたし」

朝御飯の仕度をしながら、ラインが答える。

「そんなんじゃないよ」

「どうしたんだ？ 早いじゃないか、シンバ。雨でも降るか？」

と、現れたのはレンダー。

朝御飯を食べる為、もうすぐフリットも来るだろうが、朝が苦手なシンバは、いつも一番遅かった。

テーブルに朝食が並ぶ。

食べる前に、レンダーが、一人一人に給料を渡し、シンバも受け取る。

無表情のシンバに、

「嬉しそう」

そう言ったのはライン。シンバはコクンと頷き、

「多分、初めてだ、自分で働いて、金をもらったのは」

と、給料の封筒を大事そうに持っているシンバに、ラインはクスクス笑うが、

「わっかんねえな、コイツ、表情乏しいのに、なんで、嬉しいとかわかる訳？ まだ犬の方がわかりやすいぞ。尻尾を左右に振るからフリットがそう言って、シンバの顔を見るが、どこら辺で、ラインはシンバの感情を理解するのだろうと、よく見てもわからないと首を傾げる。

ラインはクスクス笑いながら、

「私はフリットのご機嫌斜めになる時の方が解り難いけど」

そう言うから、フリットはムツとしながら、

「オイラが機嫌悪くなる理由がわかれば、ラインはもう少しオイラに優しくなるさ」

そう言うから、

「ね？ よくわからないでしょ？ 今、ご機嫌斜めになる理由。し

かも私のせいみたいない方だし」

シンバに意見を求めるようにラインが言う。

シンバは、フリットを見て、

「変化球つけすぎなんじゃないか？ ラインには、もっと直球じゃないと伝わらない」

変なアドバイスを言い出すから、フリットは顔を真っ赤にして、

「バカだろ、お前！ 伝わらないように言っただよ！ ここでは！」

と、立ち上がる。

ここではって辺りで、レンダーがギロリとフリットを睨み、

「ここ以外でも、それ以上、ラインに近付くなよ」

と、釘を刺され、ほらみると、シンバを睨むフリット。

そして、いつものように食事をしながら、今日の予定を話すレンダー

」。

「午前中の仕事は高層ビルの窓拭きと、3歳の女の子の子守りと、庭の草むしりの依頼が来ている。午後からは仕事がないから久し振りに休みにしよう、さて、誰がどの仕事をやるんだ？」

レンダーが、そう聞くと、直ぐに、

「オイラ、草むしり！」

と、フリットが一番に仕事を取った。

ラインはシンバをチラッと見て、

「私、子守りで」

と、どうやら、シンバには向いてないだろう仕事を選んでくれたようだ。

「じゃあ、俺は窓拭き」

シンバがそう言うのと、

「よし、決まり！」

と、レンダーが頷く。

食事が終わり、仕事に行く前、フリットがラインとシンバを呼び止めた。

「今日さ、仕事終わったら、映画でも行かねえ？」

ラインだけじゃなく、何故、シンバも誘ったかと言うと、シンバも誘った方が、ラインも行くと言い易いだろうという考えだ。

フリットの考えはそれだけではない。

高層ビルの窓拭きなんて、そう簡単に終わる仕事じゃない。

午前中に、シンバだけ、仕事が終わらないだろう。

待ち合わせを12時にしとけば、仕事が終わらないシンバは、待たせたら悪いと思い、先に映画に行ってくれとメールが来るに違いない。

ラインはきつとシンバが来ないなら帰ろうと言うだろうが、？折角だし、給料も入ったからオイラが奢るよ、シンバには土産を買って帰ればいいじゃないか？そう言えば、ラインも頷くに違いない。

ラインと二人でデートができると計算したフリットは、やけに笑顔

で、

「12時に町の映画館前で待ち合わせな？」

と、シンバとラインに言うだけ言うと、仕事に上機嫌で行ってしまった。

「そんなに観たい映画があったのかな？ 今、何やってるんだっけ？」

「さあ？」

何故、俺は誘われたんだ？と、こればかりはよくわからなくて、首を傾げるシンバに、

「ま、たまにはいいよね、じゃあ、12時にね」

と、ラインも仕事に行ってしまった。

シンバはラインが何を欲しいのか聞き出せなくて、溜息。

でも映画を観終わって、それから一緒に買い物すればいいかと、シンバも仕事へ向かう。

鬱蒼と生い茂る緑の中にある廃墟を出て、少し行けば、獣道があり、そこを自転車で走る。

やがて町に出るので、自転車置き場に自転車を置いて、そこからバスや電車などに乗り、依頼のある仕事先に向かう。

200メートルは超えるビルを見上げるシンバ。

依頼者が、困った顔で、

「まさか1人で来るとは。しかもこんな子供。何でも屋なんて頼むんじゃないかった。値段も安かったから節約になると思ったのに。業者に頼むから、帰っていいよ、1人じゃ無理だから」

と、少し怒り気味の声で言った後、

「しかもなんで背中に剣背負ってるんだよ、道場行くついでかよ」
文句をブツブツ。

「俺1人で充分です」

「は？ 何言ってるんの、キミ？」

「ちゃんと綺麗にやります。寧ろ、俺1人の方が時間はかかりません」

シンバは腰に窓拭き用洗剤を装備し、タオルを持って、飛び上がり、一階の窓の縁に立ったかと思うと、更に二階の窓へと飛び上がり、縁に立ち、また更に三階へ、四階へ、あっという間に登って行く。「う、嘘だろ、命綱なしで!？」

依頼者は驚きを隠せないが、ＬＴリミットレベル２のシンバにとって、こんな事、どうって事もない。

一番上の窓に辿り着くと、窓を拭き始め、ちゃんと自分が踏んでいる窓の縁も拭き、綺麗にすると、隣の窓に移り、グルッと、最上階の窓を全部、拭き終わると、ひとつ下に下りて、再び、窓を拭き始める。

数時間後、シンバは一階の最後の窓を拭き、窓の縁も綺麗に拭いて仕事を終わらせた。

依頼者はシンバのパフォーマンスにも喜び、

「いやあ、面白いものを見せてもらったよ、凄いんだな、キミは。」

しかも業者に頼むより窓がピカピカだ、またキミの所で頼むよ」と、封筒に入れた金を差し出した。

シンバは封筒の中身を取り出し、金額を確認して、

「確かに」

と、受け取り、

「ありがとうございます、またの依頼をよろしくお願いします」

と、棒読みの台詞だが、丁寧に頭を下げると、急いで待ち合わせ場所に向かう。

12時を過ぎてしまったが、映画館の前、ラインの姿があった。

「ライン」

声をかけると、

「シンバ、フリットからメールが来て……………」
と、携帯のメールをシンバに見せる。

「草むしりする範囲、広すぎ！ ありえねえ！ 12時までには終わらない!？」

「……………来ないのか？」

そう聞いたシンバに、

「来ないとは書いてないけど、来ないんだと思う。帰ろっか」と、ラインは歩き出す。

シンバもラインと二人ではフリットに悪いと思い、

「俺、買い物あるから。じゃあ」

と、手を上げ、背を向ける。

「シンバ？ 買い物って？」

ラインが追いかけて来て、そう聞かすが、ラインへのプレゼントと言ふと、ラインも一緒に来る事になりそうので、やっぱりラインと二人は、フリットに悪いと思い、

「いや、ちょっと……」

と、ラインの手の中にある携帯に目をやる。

ピンクの飴玉のストラップが揺れている。

「そういうの、どこで売ってるんだ？」

ストラップを指差して、シンバが聞いた。

「ああ、ストラップが欲しいの？ そっか、シンバの携帯、ストラップついてないもんね。フリットはどこで買ってるんだろう？ メールして聞いてあげようか？」

「いや、フリットがしてるような奴じゃなくて、そういうの」

「そういうのって、こういうの？」

ラインは飴玉のストラップを見て、シンバを見て、首をコテンと横にする。

「そう、そういうの」

「……シンバってば可愛い系が趣味？」

「……」

ちよつと誤解してるかもしれないが、まあ、いいだろうと、シンバは頷く。

「ふうん。意外でいいかも」

と、ラインはニッコリ笑い、

「私がよく行くファンシーショップに連れて行ってあげるよ」

そう言つて、案内してくれる事になった。
行く前にお腹が空いたからと、ラインはクレープ屋で、クレープを
買う。

苺たっぷりクリームたっぷりのチョコレートたっぷりの、ストロ
ベリーチョコ生クリームと、バナナたっぷりクリームのたっぷりの
チョコレートたっぷりの、バナナチョコ生クリームを両手に持つて、
シンバに、どっち？と尋ねる。

首を傾げるシンバに、バナナの方を差し出すが、シンバがいらな
いと首を振る。

だが、ラインはグイツとクレープをシンバの顔に近づけ、シンバの
鼻にクリームが付く。

笑いながらラインは、更に渡そうとするので、シンバは仕方なく受
け取り、クレープを口にする。

甘すぎて、逆に苦い顔をするシンバは、横で、その甘すぎるクレー
プを美味しそうに頬張るラインの頭を、後ろから、食べてるクレー
プに押し付けるように、突いた。

やられたと、鼻の頭にクリームをつけて笑うラインに、シンバも笑
う。

突然、何かを見つけ、走り出すライン。

外のウィンドウに飾られたマネキンが着ている服を見て、こういう
のはどうかとシンバに聞く。それはピンクのワンピースで、ライン
に似合うような気もするが、いつもパンツ姿のラインしか見た事が
ない為、シンバは、腕を組み、考えるが、答えは出ず、首を傾げる。
じゃあ、その隣のマネキンが着ている服は？と指を差すラインに、
シンバは直ぐに頷く。

それは男性の服で、ラインはシンバに殴る真似をして、怒った顔を
した後、笑う。

町中に流れる曲。

ビルの上に設置されたモニターに、男性が映り、踊って歌っている。
ラインが大はしゃぎで、モニターを見上げる。

時々、こうして街のモニターなどでしか見かけないが、それでも彼のファンなんだと言う。

テレビにも出ていない、CDも出してない、歌のダウンロードサイトにもない、よくわからないそんなタレントに、キャアキャアと喜びの声をあげ、カッコイイを連発し、目を輝かせるラインに、ちょっといい気分はしないが、また1つ、ラインの事がわかった事が嬉しくて、シンバもモニターの中の男を見る。

そして今度は、ケーキ屋の前で立ち止まるラインに、まだ甘いのが欲しいのか聞くと、パティシエになりたいんだと夢を語るライン。パティシエが何かわからないシンバに、菓子職人だと教えると、ラインならなれるだろうと言い出す。

無理だよと言うラインに、料理の後のデザートはいつも美味しいとシンバが言う。

いつも残す癖にと、イーツと歯を出して、ラインがシンバを突き飛ばすと、シンバは大袈裟によるけながら、甘いのが苦手なだけと笑う。

シンバは将来の夢とかないの？そう聞いたラインに、シンバは少し考えて、首を傾げた。

急に現実に戻された気がして、シンバは俯く。

夢は、これから幾らでも見つかるよと、ラインは言うが、シンバは俯いたまま。

シンバの将来はレンダーの契約の元、もう決まっているようなもの。それが嫌な訳じゃなく、只、それをラインに話せない事が凄く悲しく思えた。

このままずっと、このままで、レンダーがいて、フリットがいて、こうして横にラインがいて、未来なんて来なくて、今がずっと続いて、こうしてずっと過ごせたらと、それこそトリップでもいいからと、シンバは思う。

「お店、ここだよ」

ラインにそう言われ、店を見上げるシンバ。

「……………ここ？」

「うん」

「お、女ばっかりだ」

「そりゃそうだよ。あ、でもほら、恋人同士かな、男の人も一緒にいるよ」

「……………俺、ここ、一人で入る勇気ない」

「勇気って大袈裟な！ 私が一緒に入ってあげるってば」

「……………」

店の前で立ち尽くすシンバの腕を持って、無理矢理、中へ突入するラインに、心の準備ができてないシンバは、本当に無理矢理、店内に入って行き、それを見ていた客の女性も店員もクスクス笑う。参ったなと俯くシンバ。

ラインは商品に夢中になり、店内に入った途端、シンバの存在を忘れてる。

外に出ようと思うシンバだが、ここで出たら、二度と入る事はできないだろうし、何か買わないと、ラインにこれまでの御礼ができない。いままだ。

でも色んなものがあって、何を買いえばいいか、迷っていると、ラインがブタのヌイグルミを手に持ち、そのブタに向かってブーっと言っているのを目にする。

すっかりシンバを忘れ、可愛いものに夢中のラインは、ブタのヌイグルミを置くと、頭をポンポンと撫でるように手で弾ませ、またブーっと言って、ヌイグルミにバイバイして、二階へと向かう。

二階には何があるんだろう？

シンバはラインを目で追うが、今、ラインが一階にいないのだから、プレゼントを買うチャンスだ。

さて、何を買おう。

シンバは店内をうろつく。

幾つも並ぶストラップを見て、その中に、さっきラインが見ていたブタのヌイグルミに似たものを見つけた。

ピンクのブタはピンクのキャンディを持っている。

ブルーのブタはブルーの星を持っている。

グリーンのブタはグリーンのクローバーを持っている。

イエローのブタはイエローの花を持っている。

やはりピンクだろう、ラインはピンクが好きだ。

それにラインの好きな飴玉も付いている。

シンバはピンクの好きなブタのストラップを持って、レジに行く。

初めての給料で買うピンクのブタのストラップ。

「プレゼント用に包みますか？」

そう聞かれ、頷くと、

「何色のリボンになさいますか？」

と、色とりどりのリボンを店員はシンバに見せる。

シンバはリボンを、特に見ないまま、

「ピンク」

そう答える。

店員から、包装されたストラップを受け取り、綺麗にプレゼント用に包んでもらったのに、グシャッとポケットに入れてしまうシンバ。もうここには用はないと、ラインを探し、二階へ上がると、そこはコスメ売り場。

流石に無理だとシンバは階段を下りて、階段の途中で、ラインがオウルゴールを手にとって見ているのを見つける。

いつの間にか一階に戻っていたライン。

シンバはラインを見ながら、一步一步、ゆっくり階段を下りている。

身内の鼻真目かもしれない。

だが、少なくとも、この店内にいる女の子の中で、ラインが一番可愛いとシンバは思う。

ブラックの短い髪も、少年のような格好も、ノーメイクの素顔も、他の女の子に比べると、全然女の子っぽくないのに、どこからどう見ても、一番女の子に見える。

不思議だ。

アクアの瞳が微笑むと凄く細くなって目がなくなる所や、柔らかそうな頬にえくぼができる所、それからピンクの唇がニッコリ笑う所。
ラインの表情が、どの女の子よりも可愛くて、シンバは見惚れてしまっ。

ラインを見ているシンバの瞳に、スーツを着た男が入って来た。ラインに話しかけ、嫌がるラインの手を持ち、強引に何かしようとしている。

シンバは急いで階段を駆け下りて、その男の肩を掴んだ。

「やめる、ラインから手を離せ！」

「え？ あ、友達？」

男はシンバを見て、ラインに聞いた。それがまたイラッと来て、シンバは男の襟首を持つ。

「やめて、シンバ！」

ラインがシンバの腕を掴むが、シンバは苛立ちを抑えれず、男を殴ろうと拳を上げる。

「シンバ！ この人は只のスカウトマン！」

ラインがそう叫んだが、遅く、シンバは男を殴ってしまった。

男は店内で倒れ、男にぶつかった商品も床に転がり落ちて、悲鳴まで聞こえる始末。

ラインはシンバの腕を持ち、店を飛び出し、走り出す。

何故、逃げるみたいなの事をするのか、シンバはわからなくて、只、ラインと一緒に走っていた。

息を切らせ、公園のベンチに座るライン。

「シンバ、何考えてるの？」

「嫌がってたろ？」

「そりゃそうだけど、ああいう時は適当にしとけばいいじゃん、殴るなんてダメだよ、シンバ、まだ世の中を知らな過ぎる」

ラインは少し怒っている。

「LTキメた頃はムカついたら、直ぐに殴ったりしてたのかもし

れないけど、世の中、それじゃあ通用しないんだよ？ すっごくムカついても、とりあえず手はあげちゃダメ」

「手加減したのに？」

「手加減してもダメ」

そうなのかと、シンバは面倒そうに深い溜息。

「それにああいうのは、しょっちゅうだから、いちいち殴ってたらキリがないよ」

「しょっちゅう声かけられるのか？」

「ああいう人達は誰にでも声かけるんだよ」

「スカウトマンって、何のスカウト？」

「タレント事務所に入らないかって。後、多いのは風俗店とか、夜の仕事関係？ そういうのはしょっちゅうだよ、この街では。誰でもいいの、適当に、若い女の子に声かけてんだから。無視が一番！」

「行く訳ないじゃん」

「ならいいけど」

「シンバこそ、もう殴ったらダメだよ？」

「……フリットの俺への苛立ちがよくわかった」

シンバは自分の拳を見ながら、そう言った。

「フリット？ なんで？」

「いや、なんでもない」

フリットにとって、後から来たシンバがラインと仲良くするのは気に入らない。

今にも殴って来そうな時もある。

その気持ちを理解するシンバ。

「ストラップは買えた？」

そう聞かれ、シンバはプレゼントを渡そうと思うが、今、ラインは少し怒っているの、後の方がいいかと思ひ、首を振る。

どうせなら、物凄く喜んでもらいたいので、怒ってない時がいい。

「どうする？ 今、お店に戻ったら、店員さんに嫌な顔されるよ？」

「もういい」

「じゃあ、帰ろっか、夕飯の仕度もあるし」
頷くシンバ。

二人で駅へ向かい、電車に乗り、駐輪場に行き、自転車に乗り、そしていつもの住処となる廃墟へ。
。 人気もなくなり、いつもの獣道へ入り、シンバとラインは自転車を止め、顔を見合わせた。

「……人の気配」

ラインの呟き通り、廃墟へと続く獣道の奥の方から、人の気配を感じる。

それも1人や2人じゃない。

シンバとラインは携帯を開き、レンダーから連絡が来てないか確認するが、着信はない。

「こつちから連絡してみるか？」

「ダメ。もしレンダーが身を隠してる事があつたら、着信音でバレるもの、着信音を無音にしてあるか、わからないでしょ？」

確かにラインの言う通り。

「とりあえず、行ってみよう」

シンバとラインは自転車を置いて、草の中に身を隠しながら、廃墟へと向かう。

廃墟のまわりはセク隊が大勢、配置するように立っている。

「どういう事!？」

ラインが小声で言う。

「……居場所がバレて、俺か、レンダーを捕まえに来たのか」

「レンは捕まったのかな!？」

「いや、まだだろ、廃墟の中で隠れてるんじゃないか? 捕まったら、こんなに大勢、セク隊がいる筈ないだろう」

「どうする?」

「真っ向勝負で行くよ」

「じゃあ、私は裏からまわる。レンを見つけたら、レンを連れて逃げる。どこで落ち合う?」

「連絡は携帯で」

「オッケ!」

ラインはそう言うと、風のタイミングで草が揺れるのを計りながら、草の中、移動し、廃墟の裏へとまわる。シンバは草むらから出て、背中のノーザンフアングを抜く。

シンバ登場に、セク部隊がどよめく。

シンバの位置から、一番近くにいたセク隊を始め、次々と倒していく。

セク隊は突然の事で、まだ戦意がないのか、簡単にシンバに気絶させられていく。

ノーザンフアングは脅しと、柄の部分を使い、セク隊をあっという間に殺さずに倒す。

シンバの視界の中に、立っているセク隊はもういない。だが、油断はならない。

廃墟の中にもセク隊は大勢いる。

とりあえず、目指すはレンダーの部屋。

疾風のような動きで、シンバは駆け抜ける。

目の前に現れるセク隊を一瞬で倒しながら。

向こうから、ラインが駆けて来る。

大勢のセク隊に追いかけられている。

ラインの奴、しくじったのか!?

ラインはシンバを見つけ、逃げてと叫んだが、シンバはラインに向かって走っていく。

ラインがシンバに手を伸ばす。

シンバもラインに手を伸ばす。

セク隊は隙間なく並び、全員が銃を向けた。

シンバはラインの手を握り、引き寄せ、自分の背後にラインを隠し、銃口に向かって、手を広げ、ラインの盾になる。

もう何発もの銃弾が撃たれるのだろうと、ラインは耳を塞ぎ、悲鳴を上げる。

瞬間　！

「何やってんだ、うるせえ！！！！」

と、ドアが開き、レンダーが吠えた。

シンと静まり、皆、レンダーを見る。

「おう、帰ってたのか、シンバ、ライン。どうした、シンバ？ 大の字に立って？」

「いや、あの、レンダー？ セク隊が……」

「ああ、依頼で来てんだ。ん？ なんて銃向けられてんだ？」

「彼等が齒向かって来たもので、敵かと」

セク隊の1人がそう説明した。

すると、レンダーの背後から、更にセク隊の男が1人出てきた。

「敵など来ないと言っておいただろう。簡単に銃を向けるな。すまなかったね」

と、紳士的に頭を下げる。

どうやらセク隊の隊長のようだ。

とりあえず、シンバは、他の気絶させたセク隊の事、どう説明しようかと困った顔で、頭を下げた。

シンバとラインは、レンダーの部屋に入り、話を聞く事になった。

ソファに座るレンダーと、レンダーの後ろに立つシンバとライン。

レンダーに向かい合って座るセク部隊隊長。

「この場所を教えたのは俺様だ、安心しろ。隊長自ら、依頼してえ事があるって電話がかかって来てな。調度、今、この廃墟での暮らしぶりを話してた所だ。電気類は全部、電池式に改造して、ガスはボンベ、水は近くの湖の水を引き上げ、貯水タンクの中でする過させたものだって話したら、まるで軍のキャンプだよ、笑える事言うと思わねえか？」

何の話をしてたんだよと突っ込みたくなる。

「レン、どういう事？ セク隊に居場所なんて教えてもいいの？」

ラインが心配して聞くと、

「依頼を受けるかどうか、迷ってる」

と、レンダーは真剣な顔になった。

「依頼ってどういう依頼なんだ？ この場所を教えてまで受ける依頼なのか？」

シンバも心配して聞くと、

「依頼の報酬が、俺様とシンバを指名手配から外してくれる事だつて言うからよ」

と、それは願ってもない条件だとシンバも思うが、レンダーの顔は深刻だ。

「……依頼内容は？」

シンバが尋ねると、セク部隊隊長が話し出した。

「あるクラブを出入りしている若者5人を捕まえてほしいんですよ」

「それだけ？」

簡単な依頼だとラインが聞くと、

「その5人はLT中毒者です」

隊長はそう言つて、シンバとラインの表情を変えさせた。

隊長はテーブルの上に5人の写真と名前などが書かれた書類を広げる。

「最近、クラブでLTの売買をしている者がいると通報があり、あ
る5人が浮かび上がってきたんです。女1人に男4人のメンバー。

一度、セク隊が接触したんですが、どうもその5人、只のLT中毒
者じゃないようです」

「只の中毒者じゃないって、まさか？」

シンバの嫌な予感は当たり、

「はい、そのまさかです、彼等はリミットを越えています。セク部隊
の銃弾を避けたと報告がありましたから」

隊長はそう言つて、シンバを見る。

「……5人共？」

ラインが問うと、それはわからないと首を振る隊長。

「レベルは？」

そう問うシンバにも、わからないと首を振る隊長。
シンと静まる。

沈黙を破ったのは豪快な声で笑うレンダー。

「笑わせるだろ？ リミットを越える奴がそう簡単にゴロゴロいる訳がねえ。恐らく1人だな、しかもレベル1。レベル2がいたとしても喧嘩程度しか知らねえガキが、本当の強さってもんを知らないでイキがってんだらう。なあ？ シンバ？」

と、シンバを見る。だが、シンバではなく、ラインが、

「レン、相手はLTをキメてる奴が5人もいるんだよ。LTがキレて数十分のリミット状態に入ったら、手がつけられないでしょ。中にはリミット越えしてる者が少なくとも1人はいるって話でしょ？」

ソイツのリミットがキレたら、数十分はレベル2の強さになるんだよ。例えば、ソイツがレベル1じゃなく、レベル2だったら？

数十分はレベル3の強さになるよね。もしレベル3だったら？ これは簡単な依頼内容ではないと思う。それにリミットを越えてる奴が1人じゃなかったら？ もしかしたら5人全員って事も可能性は薄くても、有り得ない話ではないよね、しかもレベル1とは限らない」

そう言つて、事の重大さを語った。

だが、レンダーにとつて、本当の重大さは、その裏にリグドがいるかもしれないと言つ事。

「ねえ、この依頼を断つたらどうなるの？」

そう聞いたラインに、

「いえ、別にどうもありませんよ、今迄通り、指名手配は続くだけです。只、ここは引越してもらわないと」

隊長がそう答え、ラインは、ホツとした顔をする。

「なら、引越そう？」

そう言つたラインに、レンダーは黙っている。

「シンバはどう思う？」

レンダーが黙っているので、シンバに意見を求めるライン。
「……俺はレンダーに従う」

シンバがそう言うので、ラインは不安そうな顔になる。

「情報が少なえからなあ、まずは情報収集からだ」

それは依頼を受けると言う事。

隊長はレンダーに握手を求め、レンダーは、その手を握り締めるが、

「ライン、お前はこの仕事には一切関わるな」

そう言い出した。驚いたのはラインと隊長。

「しかし、アナタと彼と2人だけで、5人も相手に戦えるんですか
!?!」

隊長はレンダーとシンバを見て、聞くが、レンダーは首を振り、

「仕事を行うのはコイツ等。従って、俺様は戦う必要がない。ライ
ンとお留守番だ」

などと言い出す。

「では彼1人で!?!」

隊長が驚きの声を上げた時、

「おい、どうなってんだよ、セク隊の集まり場になってんじゃない」

と、仕事を終えたフリットがタイミング良く現れ、

「いや、彼等2人で」

と、レンダーが隊長を見て、そう言った後、フリットは何が何だかわからなくて、首を傾げて、間の抜けた顔。

セク隊が帰った後、ヒステリックに怒り出したのはライン。

「どうかしてる! レンが全くわからない! 私は反対だから!

今直ぐ断って!」

「断れる訳ねえだろう、もう引き受けちゃったもんは」

シンバは隊長が置いていった5人の書類に目を通している。

その横で、フリットが、

「おい、お前、今日、映画行ったのか?」

などと、今はそれどころじゃない事を聞いて来る。

シンバはフリットを見て、コイツと組んで大丈夫だろうかと考えて

しまつ。

「それになんで私はダメなの!? 私が役に立たないでも!？」

「そんな事は言つてねえ。只、シンバとフリットだけで充分だと判断しただけだ」

「充分な訳ないじゃん! 私だつて戦力になる! なのになんで!？」

ラインとレンダーの言い合いが続く中、シンバはフリットにも書類を見せる。

「映画は行つてない。それより、この連中、覚えがあるか? 俺はない。リグドの取り巻きつて奴等とは違うか?」

映画には行つてないと言う事で、フリットは安心し、書類を見る。

「……………わかんねえ。覚えちゃいねえよ」

「コイツ等をセク部隊に引き渡すのが俺達の仕事。だとしたら、やつぱり1人になる所を狙つて、捕まえて、セク部隊に渡すか」

「せこくねえ? もつとさあ、派手にやろうぜ」

「派手に? 俺達の顔がバレたらどうするんだ、この5人の裏に誰がいるのか、わからないのに派手にやる意味があるのか」

「バレなきゃいいんだろ? オイラに考えがある」

「……………聞いてやるが、多分、却下する」

「聞く前に却下宣言するなよ! いいか? クラブに集まつた所でオイラがクラブの内部に侵入してだな、全ての電源を落とす。ブレイカーが落ちて、音楽も光も何もなくなった闇の中、パニック前だよな。その時を狙つて、お前が5人を気絶させて、吊るし上げる。その間にオイラはセク部隊に連絡。灯りが点いて、コイツ等5人纏めて吊るし上げられてる所をセク部隊が発見。オイラ達は客のふりして、そこで様子を見てりゃいい。まわりの客達はコイツ等5人がセク部隊によつて捕まつたと思う。オイラ達は何の関係もないつてな。どうよ?」

「……………俺が1人で5人を吊るし上げるのか?」

「当然だろ、報酬はお前が指名手配じゃなくなるつてだけだろ、オ

イラは関係ない話だ。それを手伝ってやるってんだから、危険度が
高い仕事はお前の役目だろ」

「……ブレイカーが落ちた暗闇で、どうやって5人を見つ
けるんだ？」

「なんだよ、レベル2とかだと目が暗視スコープみたいになんねえ
のかよ」

「なる訳ないだろ！」

「じゃあ、こういうのはどうよ？」

次の案をフリットが言う前に、ラインが、

「シンバからも言っちゃってよ！」

と、突然、話に入ってきた。

「セク部隊からの依頼を受けるなら、私も仕事に加わる。シンバも
レンに言っちゃって？」

「なんでオイラじゃなくシンバに頼むんだよ」

フリットがムツとしてラインに言う。

「……俺はレンに賛成だ」

シンバがそう言うのと、ラインもフリットもシンバを見て、シンと静
まり返る。

「……危険なんだ、わざわざ自分から仕事に加わる必要な
いだろ」

「邪魔って事!?!」

「そうじゃない。そうじゃないけど、今日だってセク部隊にしくじ
つたろ?」

「しくじった訳じゃない! 只、最近、子守りの仕事が多くて、油
断もあつたから」

「向いてると思うよ、そういう仕事の方が」

「どついう事? シンバは私が足手纏いだって言いたいの?」

「そうじゃない。なんでそういう風にとるんだ。ラインは優しいか
ら、只」

「優しい!?! 言っとくけど、シンバが来る前は私がやってたんだ

よ、どんな仕事も！」

「……………」

「レベル2だから？ 男だから？ シンバの方が強いって言う訳？」

「……………やめよう、お互い、多分、話が行き違ってる」

「シンバなんか大嫌い」

ラインはそう言うと、走って部屋を出て行き、フリットが追いかけてようとして、

「待て、フリット。お前、今日の仕事、午前中で終わらなかつたらしいな。クライアントから電話で苦情が来てる」

と、レンダーの説教で呼び止められた。フリットはラインを追いかけたのに、追いかけられず、レンダーの説教を受ける。

シンバは少し迷ったが、ラインを追いかけた。

外の瓦礫の上で、膝を抱え、うずくまっているライン。

近付くと、

「来ないで」

拒まれ、シンバは立ち尽くす。

「……………ライン？ 俺もレンダーも、ラインを危険な事に巻き込みたくないんだ」

「シンバとフリットは危険でもいいの？」

「よくない、でもレンダーは俺とフリットが適任だと判断したんだ、一番それが安全な事だと判断したんだよ、仕事に寄ったら、俺よりラインの方が向いてる時もある。今回はそうじゃなかっただけで、そんなのラインもわかってるだろう？」

「わからない」

意外に頑固だ。

だが、ラインはシンバとフリットが心配なだけなのだ。それは伝わる。

だからこそ、話が行き違う方が辛い。

「もうこの話は終わろう。もう決まった事だ」

「……………」

「どつやったら機嫌が直る？」

「向こうへ行つて」

「わかった」

頷いて、背を向けるが、ブーメランのように戻って、シンバは何か言おうとするが、言葉が見つからず、頭をガシガシ掻き掻いた後、再び背を向ける。

だが、やはりラインを放っておけず、ラインに近付く。

「あっちへ行つてよ、来ないでって言ってるでしょ！」

「もういい」

「え？」

「怒りたければ好きなだけ怒ればいい。今日、夕方から、ずっと怒ってる。ずっと笑顔見てない。それ、俺が原因っばい。でもどうしていいか、わからないから、怒ってればいいと思う。どうせ、あっちへ行つても、近くへ行つても怒ってるんだろう？ だったら近付く事にする」

「なにそれ」

と、ラインはピイツと横を向く。シンバはそんなラインの目の前にプレゼントを差し出して見せた。

ラインはシンバの手の平の中、グシャグシャになったピンクのリボンの付いたプレゼントを見て、シンバを見る。

本当は普通に笑顔の時に渡して、更に笑顔になるのが見たかったが、もう機嫌を直してくれるアイテムとして遣うしかない、シンバは、プレゼントを差し出したが、こんな事で機嫌が直るだろうかと不安。お願い、機嫌直してと、願いながら、ラインの出方を待つシンバ。

「……なにこれ？」

「プレゼント」

「誰に？」

「ラインに」

「誰が？」

「俺が」

「なんで？」

「いいから開けてみるって！」

と、シンバはラインの手にプレゼントを入れた。包装紙もリボンもグシャグシャになっていてプレゼント。

「こんなもので機嫌直らないよ」

痛い宣告をされる。

とりあえず、ラインはプレゼントを開けて見る事にした。中からピンクのブタのストラップが出てくる。

どう？と言わんばかりに、シンバがラインの顔を覗き込む。

「……………これ、シンバが選んだの？」

「そう！ 今日行ったあの店で！ すっげえ恥ずかしい思いしたけど！ 俺の頑張り通じた？ 機嫌直してくれる？」

今迄、シンバがこんなに必死になって、想いを言葉にして伝えた事があっただろうか。

だが、

「大した頑張りじゃない」

そう言われ、確かにその通りと、シンバはガクンと落ち込む。

「でも、気持ち通じてる」

ラインはそう言って、シンバにプレゼントを渡す。

「……………え？」

「ほら、いいから開けてみるって！」

と、ラインはシンバの口調を真似て、シンバの手にプレゼントを入れた。

中からブルーのブタのストラップが出てくる。

「……………これ？」

「シンバ、可愛い系が好きなんでしょ？ どうせ恥ずかしくてレジにも行けないだろうなって買ってあげたの」

得意げにそう言ったライン。

シンバはブルーのブタと目が合い、苦笑い。

ラインはピンクのブタを自分の携帯につけて、シンバに見せる。

「ありがとブルー」

自分の鼻を人差し指でブタ鼻にして、そう言ったラインに、シンバは笑う。

「シンバも携帯につけて？」

「俺はいいよ」

「ダメ！ つけるの！」

ラインは瓦礫から飛び降りて、シンバの携帯をズボンのポケットからスルリと抜き取ると、ブルーのブタも、シンバの手から取り上げ、携帯につけた。

そして、自分の携帯を右手に、シンバの携帯を左手に持ち、

「可愛いね！」

と、ニツコリ笑った。

ラインが笑うなら、ブタのストラップをつけてもいいかとシンバは思う。

機嫌が直って良かったとも思う。

そして、その深夜遅く、シンバはベッドで横になりながら、携帯を片手に、ストラップのブルーのブタを見ていた。

ブタを見ながら、今日一日の事を思い返していた。

スカウトマンを殴った事、銃口を目の前に大の字に立った事、そして、危険な仕事を引き受けた事など。

シンバはベッドから出て、部屋を出ると、レンダールの部屋のドアをノックしていた。

まだ寝てなかったレンダールは、直ぐにドアを開けて、シンバを部屋に入れた。

「仕事の話か？」

酒を飲みながら、ほろ酔い気分で、そう聞いたレンダールに、シンバは首を振り、

「レンダールとの契約、無効にしてもらいたいと思って」

そう言い出した。一気に酔いが冷め、

「冗談だろ？」

と、レンダーは怖い声で聞くが、シンバは冗談じゃないと首を横に振る。

「無茶な依頼を受けたからか？　だが、俺様とお前が指名手配から外れれば、こんな場所じゃなく、ちゃんとした家を借りられる、そうすればアドレスだって持てる。それにラインもフリットもお前も、ちゃんとした職にも付けろし」

「俺は何でも屋でいいよ」

「……わかった。じゃあ、お前に依頼しよう」
シンバは首を横に振り、

「レンダーからのラインに関しての依頼は受けない」
キツパリと断った。

「ここを出て行くのか？」

「……レンダー、俺、契約とか依頼とか関係なく、ラインを守るよ」

まさか、そんな台詞を言うと思わず、レンダーは驚いて言葉を失う。
「よくわからないけど、無意識の内にラインを守ろうとする俺がいる。俺はレンダーがラインを守りたいと思うその意思を受け継ぐよ。俺がラインを守る」

「……いいのか？　一生だぞ？」

「いい」

「でも、ラインは他の男と結婚させる！　お前じゃない！」

「勿論。俺なんか、絶対にダメだ。俺はラインが幸せになる相手じゃない」

「いいのか？　本当にいいのか？」

「何度も聞くなよ、何度も聞かれても、答えは変わらない」

「……」

「契約は破棄してくれ。依頼も受けないからな。これは俺の意思だから」

これはレンダーが最初に望んだ事だった。

だが、望みが叶うと同時に、どうして不安がやってくるのだろう。

レンダーは、シンバの意思に頷けなかった。

6・疑惑

LT中毒者の女1人、男4人を、セク部隊に引き渡す為、その5人がよく現れるというクラブの前に来ていた。

狭い路地に身を潜め、5人がクラブに来るのを待っている。

「面積約500坪、総収容人数3000人の大型クラブ。オールミックス系のイベントを中心に、OLやサラリーマン、主婦、学生、フリーター、幅広い客層から人気で、週末には一日辺り2000人が来店。アパレル業界関係者や芸能人にも幅広く支持を受けている……だつてよ」

どこで仕入れた情報かと思えば、雑誌の受け売り文句だなと、シンバはフリットを睨む。

「そんな顔するなよ、他にも調べて来てるつて。この男。よく5人に接触してる。ここ一週間、見てただけど、この男がさりげなくコイツ等に擦れ違う時とかにさ、LTを渡してる。5人は動きが余りないし、LTキメても売ってはなさそうだな」

と、フリットは、携帯で撮った画像をシンバの携帯に送信する。

シンバは携帯を取り出し、メールを開き、画像を見た。

フリットはシンバの携帯についているブタのストラップを凝視。

何つけてるんだとばかりに、ジイーっと見ている。

「……コイツ、ラインがファンだつて言ってた男だ」

画像は見覚えのある男の顔で、シンバがそう言うと、フリットはブタから目を離し、

「え？ ファン？」

と、聞き返した。

「ああ、なんか、街のモニターで歌って踊ってた」

「コイツ、芸能人なの！？ 知らなかった……オイラ、女しか見ないからな」

「俺も」

「お前はタレントそのものの興味ないだけだろ！ でも一応サインとかもらっちゃう!？」

本当に緊張感のない奴だなあと、シンバはフリットを睨む。

「5人じゃなく、コイツが黒幕の売買人か、運び屋の可能性ありだな。報告しとくか」

と、シンバはレンダーに、男の画像をメールで送信する。

「じゃあ、どうすんの？ 5人を捕まえて、コイツも捕まえんの？」

「レンダーからの返信待ちだな」

だが、幾ら待っても返信が来ない。

「おい、まだかよ」

そう言われても、返信が来ないものはしょうがない。

シンバは何度も携帯をチェックする。

「おかしくないか？ レンダーが直ぐに返事をくれないなんて」

そう言ったシンバに、フリットは、

「何かあったって言うのか？」

と、聞き返す。

シンバとフリットは見合う。

廃墟にはレンダーとラインしかない。

レンダーもラインも強いが……。

「帰るか？」

フリットがそう言った途端、お目当ての5人がクラブに入って行くのを目にする。

「仕事が先だ。俺達がしてる仕事以外でヤバイ事なんて何も無い。

もし、レンダーに何かあったんだとしても、この仕事片付けば、問題ない」

シンバがそう言って、路地から出て、クラブへ向かって行くのを見ながら、フリットもクラブへ向かって行くと、シンバが立ち止まり、携帯を急いで耳にやった。

レンダーからの電話だろうと、フリットは駆け足で、シンバの傍に行く。

「ラインがいなくなった!？」

『ああ、まさかとは思うが、そっちへ行っただんじやないか!？』

「いや、俺達とは合流してない」

『もうクラブ内に浸入してるかもしれない。シンバ、ラインを頼む』
「わかつてる」

携帯を切って、ズボンのポケットに仕舞い、シンバはフリットを見る。

「ラインが来てるかもしんねえって?」

シンバだけの会話で、内容を察したフリット。

「……もう中に浸入してるかも。大人しくしてたのに」

「大丈夫だろ、ラインは強いからよ。大体、この任務に入れてやるべきだったんだよ、反対なんかせずにさ。お前もレンも心配しすぎなんだよ」

「フリットは心配しないのか?」

「してるけど、マジでラインは強いよ。アイツの戦う姿見たら惚れるよ。いや、惚れんなよ!？」

どっちなんだよとシンバは思うが、フリットがラインを信頼してる気持ちに嫉妬しそうで、何も言わず、只、頷き、

「とりあえず、俺達も中へ入ろう」

と、クラブへ入る事にした。

勿論、金がかかる事はしない。

裏にまわり、狭い幅の壁を登り、小さなトイレの窓から侵入。

大音量で流れる音楽。

鼓膜が痛くて、しょうがない。

シンバはフロア、フリットはステージ付近をうろつく。

5人の位置を確認し、一番、見やすい場所、それでいて近くなく遠くなく、向こうからは見え難い場所へ移動。

ラインもどこかにいないか、辺りを確認しながら、聞きなれない音楽と、飲み慣れない飲み物を片手に、その場で、待機。

そして、シンバは、ある男を見つける。

「……………リグド？」

今、リグドに似た男が、人の影に隠れてしまい、よく確認できなくて、シンバは、人を掻き分けながら、男を追う。

シンバの突然の勝手な行動に、フリットは何やってんだと舌打ち。男は通路に出ると、通路脇にあるトイレに入った。思わず、シンバもトイレに駆け込み、それを見たフリットは、仕事の前に済ませておけよと、シンバを追うのを止めて、狙いの5人の見張りに徹する。トイレに入ると、鏡の前で、立っている男に、シンバは立ち止まる。ジャラジャラと鎖のようなものを巻きつけた服装と銀のアクセサリ。

そのせいか、シンバと同じように背負われた剣は、アクセサリーの1つとして、身につけている感じで、セク部隊に入団したい為と言うよりは、風変わりなお洒落としてと言った感じにとれる。

背はシンバより少し高い。

ダークレッドの長めや短めの髪が無造作で、そして鏡に映っているリグドの瞳も髪の色と同じダークレッドで美しく、今、その瞳に、シンバが映っている。

鏡越しに見つめ合う二人。

間違いなく、リグドだ。

リグドが、今、直ぐ目の前にいる。

何故、シンバは、リグドを追って来てしまったのだろうか。

シンバ自身、わからない。

LTが必要ないシンバは、今更、リグドには何の用もない筈だ。

寧ろ、レンダーの事もあり、ラインを守らなければならないシンバにとって、一番、会っちゃいけない相手だろう。

シンバはゴクリと唾を呑み込み、リグドから視線を逸らした瞬間、

「元氣そうだ」

リグドがそう言った。シンバは痛いくらいの鼓動の速さに息を呑み、フリーズ。

そして、ゆっくりとリグドを目だけ動かして見ると、リグドは、体

を向き直し、鏡越しではなく、シンバ自身を見ている。
今、リグドの細く白い指が、リグドの口元へ行く。
そして、リグドは口の中に何か入れた。

LTだ。

「ほしいか？」

そう聞かれ、シンバは首を左右に小さく振るが、ちゃんと振れていない。

「お前、今、レンに飼われてるのか？」

「……………」

「そんな顔するなよ、オレがお前を捨てたと思ってるのか？ そして忘れられていると思っただか？ 飼い主が大事なペットを忘れる訳ないだろう？ お前はオレのお気に入りだから。だから忘れないようにシンバ・ルーペリックって名付けてやったんだらう？」

「……………どういう意味？」

震える声で、そう聞いたシンバに、リグドの口元が笑いながら、何か言おうとした時、奥の個室が開いて、中から、ラインが好きだと言っていたタレントの男性がヨロヨロしながら出てきた。

「今のオレのお気に入りはアイツ。有名人だから、忘れても、誰かつて事ぐらいは直ぐにわかる」

言いながら、リグドは、

「吐き終わった？」

男にそう尋ね、男は青冷めた顔で、リグドを見ている。

「鳩尾、蹴っちゃったら、吐いちゃって。次は吐かないように、全部、胃にあるもの吐いとけよって言ったんだよね」

聞いてないが、そう説明するリグドに、シンバは冷や汗が流れる。

「シンバ、妬かないのか？ オレがシンバ以外を可愛がったら、いつも嫌な顔して、不貞腐れていただらう？」

「……………俺はもう……………LTは必要ないし……………リグドとは……………」

「聞こえないよ、もっとハッキリ大きな声で言えよ」

「……………」

「おいで、シンバ」

優しい笑みで、手招きをするリグド。

歩いて、4、5歩くらい距離にいるので、おいでと言われる意味がわからない。

充分、近い。

それでも手招きをするリグドに逆らえないのか、シンバは、一歩、リグドに近付き、また一歩、リグドに近づく。
今、リグドの直ぐ目の前で足を止めるシンバ。

鼓動が速い。

リグドはシンバの首に手を回すと、シンバの顔に顔を近づけて、

「レンの所は居心地いい？」

囁くように聞いた。何も答えねず、只、小刻みに震えるシンバに、

「レンに伝えて。オレのペットをもう暫くよろしくってね」

そう言うと、シンバの腹部に思い切り膝を入れる。

シンバは前のめりになり、ヨダレを垂らしながら、その場に跪く。

そんなシンバの前髪を掴み、顔を上に上げさせると、

「シンバ、忘れるなよ、お前の飼い主はまだこのオレだ。オレはお前を捨てた覚えはない」

そう言った。そして、

「それに、あんまりレンを信じない方がいい」

と、

「裏切るのが得意な男だから」

笑うように、そう言うと、リグドは、シンバの髪から手を離し、シンバの顔面目掛け、思いつき蹴りを入れ、倒れたシンバの頭を足で踏みながら、

「ジュキトの武器か、お前もレンに教わったのか？」

シンバの背中にあるノーザンファンクを見て、そう言った。そして、倒れて鼻やら口から血を出しているシンバを暫く見下ろしていたが、飽きたのか、つまんなそうな表情になると、溜息を吐いて、トイレ

を出て行く。

タレントである男性も、リグドを追うように出て行く。蹴られた顔も腹部も痛い、シンバは蹲るようにして、小さく丸くなるが、もしかしてラインがいなくなったのはリグドのせいなのかと、直ぐに立ち上がる。

立ち上がるが、どうにも、こうにも、ダメージが大きすぎて、よろけてしまう。

ふと、鏡に映る自分を見て、よろけながら洗面台に立ち、水を流して顔を洗い、血を洗い流すと、再び、鏡の中の自分を見る。

「シンバ・ルーペリックって……誰なんだ……？」
リグドが忘れないように名付けたと言う名前。

そして、この名前を聞いたレンダーは、表情を少し変えた。暫し、自分の顔を見ていたが、こんな事をしてる場合じゃないと、トイレを飛び出し、リグドを探すが、もうどこにもいない。

「シンバ！」
呼びかけられても、音楽のボリュームが大きすぎて、全くシンバの耳に届いておらず、フリットはシンバの肩をグイッと引っ張り、

「おい！」
そう叫んだ。思わず、ビクツとして、体にギュツと力を入れるシンバ。

ビビりすぎ……。

「何やってんだよ、トイレ長すぎだろ！　こんな時に！」

「こんな時？　あ、ああ……悪い……」

ここに、何しに来たのか、ようやく思い出したシンバ。

「お前、顔、どうかしたのか？　腫れてないか？」

「いや、ちよつと」

「あ！　それよりあの5人、変だぞ」

「変？」

「いい加減、LTを口にしてもいい筈だ。だが、誰も口元に手を持っていかない。飲み物に何か入れた気配もない。寧ろ、まだ飲み物

さえ、口にしていな。さつき、メールしたる？」

確認してないと、シンバは携帯を取り出して見ると、

「奴等、LTをまだ飲んでない。そろそろキレルんじゃないか？

まさかとは思うが、オイラ達の存在に気付いたのかも。どうする??

今更、メールを読んでいるシンバに、フリットはトイレで何やってたんだと苛立つ。

「ラインは？」

携帯を閉じて、ポケットに仕舞いながら、そう聞いたシンバに、フリットは、わからないと、首を振る。

今、5人の内、1人の男がヨダレを垂らし、呼吸を乱しながら、客の首を絞め始め、近くにいた女性が悲鳴をあげるが、大音量で流れる曲が、悲鳴を掻き消し、誰も逃げようとはしない。皆、上機嫌で踊っている。

「どいてくれ！」

シンバもフリットも首を絞められている女性の所へ行こうとするが、人が邪魔で中々通してもらえない。

瞬間、鳴り響いていた音楽がピタリと消え、

「火事だあ！」

DJが叫んだ。

静かになったフロアに女性の悲鳴が一齐に響き渡り、皆、押し合いながら、外へ流れるように逃げていく。

シンバとフリットは流されないよう、突き飛ばされないよう、身を固め、そして、暫くすると、5人とシンバとフリットだけがフロアに残された。

首を絞められた女性は死体として、転がっている。

5人の内の1人、女が正常みたいだ。

「久し振りね、フリット」

女はフリットを知っているようだが、フリットは眉間に皺を寄せている。

「あら、残念、記憶から消えちゃったのね、アタシ。ずっと一緒に

いたじゃない？ アタシ達」

つまり、それは、フリットがリグドの取り巻きだったとしたら、この女もリグドの取り巻きの一人と言う事か　！？

「時間がないから説明しとくわね、私はＬＴリミットレベル１、そして、コイツ等はＬＴリミットレベル１を超えて、尚、ＬＴ中毒中。つまり、ＬＴがキレた今から数十分はＬＴリミットレベル２の強さって訳」

ニッコリ笑う女の顔に、同じ笑顔でもラインとはだいぶ違うと思う。「なら、ＬＴリミットレベル１のキミは私が相手してあげる」

ＤＪがそう言って、帽子をとった。

「ライン！？」

シンバとフリットが声を上げる。

ＤＪに変装していたなんて！

怒るよりも呆れるが、何より無事だった事に、シンバはホッとした。そして、こうなったらラインも戦闘してもらうしかないと、

「じゃあ、俺はこっち２人相手だな。フリット、そっち２人でいいか？」

シンバは戦う相手を決めた。

「・・・・・・ああ、ＬＴリミットレベル２の強さ、しかも２人が・・・・・・」

「不安そうな声出すなよ、勝算はある。数十分、適当に相手して、逃げ切れば、その後はＬＴキレた、只の中毒症患者だ」

「成る程。逃げるのは得意よ、オイラ」

と、フリットは頷き、ダガーを構えた。女はフフフと笑いながら、ラインに向かって走りながら、手の甲から爪を出し、

「アタシを指名してくれるなんて、嬉しいわ、子猫ちゃん」

と、ライン目掛け、大きな爪を振り落とした。

武器！？

コイツ等、武器を使うのか！？

只のＬＴリミット越えのガキじゃない!?

ラインは後ろへ飛び跳ねながら攻撃を避け、背が壁につくと、追い詰められる前に、女の足に向かって滑り込み、女と位置を逆転させる。

「やるじゃない、子猫ちゃん」

「私より、キミの方が猫だっつーの!」

確かに武器からして、猫みたいな女だ。

「言っとくけど、同じレベル1なら、私の方が強いよ」

ラインは3つの棒を1つに纏め、長い棒にすると、反撃に出た。

女は三節棍を受け止め、

「子猫ちゃん、フリットとはどこまでいったの?」

などと聞き出す。

「はあ!?!」

「あら、私の元カレは結構うまいでしょ?」

「何が!?!」

「まさか、まだ何も!? フッフ、やだ、そうなの? アハハハ」

意味深に笑う女に、

「おい、何言ってるんだ、誤解するような事言つなよ! つーか誰が元カレだ!?!」

二人の男から逃げながらフリットがステージの上で、女に吠えた。

ラインは三節棍を振り上げ、その攻撃を爪で受け止めながら笑う女に、

「フリット、キミは女の趣味悪すぎだ!?!?!」

そう吠えながら、三節棍を左右反対にグルンとチカラ一杯まわした。爪で受け止めていなかった反対側で、思いっきり顎に当てられ、女は上に飛ぶように吹っ飛ぶ。

「勘弁してよお、オイラはそんな女知らないんだってばあ」

そう言いながら逃げるフリットを見て、2人共、結構、余裕のバートルだなどシンバは思う。

さて、本領発揮で行きますかと、シンバはノーザンファンングを構え

る。

槍を持った男。

又ンチャクを持った男。

「…………どこに持ってたんだよ、そんなもの」

男2人が武器を手にしたのを見て、疑問を呟く。

槍男が走って来て、シンバの目の前で高くジャンプする。

見上げるシンバに、もう1人、又ンチャク男は、又ンチャクを投げて、ノーザンフアングに鎖を巻きつかせ、又ンチャクを引っ張り、シンバと引っ張り合い。

飛び上がった槍男が、シンバ目掛け、槍と自分の体重を合わせて、重い風を纏いながら落ちてくる。

嘘だろ!?

コイツ等、喧嘩じゃなく、完璧な戦闘マニアだ。

シンバはノーザンフアングを放し、床を転がるようにして、槍から避け、又ンチャクで取り上げられたノーザンフアングを取り返す為、又ンチャク男に走るが、槍男がシンバ目掛け、槍を何度も突き刺して来る。

避けながら、又ンチャク男の所へ行きたいが、隙のない攻撃と速いスピードに、シンバは思うように動けない。

だが、攻撃に隙がなくても、守備に隙はある。

シンバは槍を避けながら、飛び跳ね、槍男の肩に手を突いて、宙で回転しながら、槍男の背後への着地した。そのまま、又ンチャク男へ向かって走る。

片手でノーザンフアングを持ち、片手で、又ンチャクを操る男に、

「そんなんじゃ攻撃力半減だ」

と、飛んできた又ンチャクを片手でパシッと受け止める。

背後から飛んでくる槍の気配に、ギリギリで避けると、まさか槍が飛んでくるとは思ってた。又ンチャク男が、避けきれず、横腹の肉を槍に持っていていかれ、その場で倒れる。

シンバは倒れた又ンチャク男の手から、ノーザンフアングを取り返

し、

「おかえり、相棒」

と、ノーザンファンクを見る。

そして直ぐに斜めから降り落ちる槍をノーザンファンクで受け止めて、槍男と2人見合う。

ガキンガキンと火花を散らし、槍とノーザンファンクの刃がぶつかり合う。

ミラーボールの上、フリットが呼吸を整え、

「マジ勘弁してよ、オイラ1人でレベル2が2人って、無理あるって」

と、無理だと言えるだけの余裕がある台詞。

グルンとミラーボールがまわるように揺れ、見ると、ナツクルをした男がミラーボールの上に、フリットを追って、立っている。

「頼むよ、そつとしといて、オイラの事は」

ここでも1人になれないのかと、フリットはグルンと宙返りしながら、ステージへ戻り、バック転しながら、銃をぶっ放して来る男の銃弾から逃げる。

3回宙返りした後、着地寸前で、フリットは横腹に衝撃を受け、吹き飛ばされる。

無防備な横腹をナツクルをした拳で思いっきり殴り飛ばされたのだ。銃を持った男も倒れたフリットに近付き、至近距離で撃とうとしている。

幾ら、スピードに自信があるとしても、レベル2相手に、数十分も逃げ切れる訳がない。

「いつてえ……」

横腹を押さえ、立ち上がるフリットは、右斜めからナツクルの男、左斜めから銃の男が近づいて来るのを見て、左右ダメなら、真正面と、走り抜けた所で、銃弾が足を掠める。

掠っただけだが、痛みで顔を歪ませながら、踏み切った足は進行方向のまま、振り上げた足を回転へ、それを繰り返し側転で、勢いを

つけ、銃弾を避ける為、床に着いた手で思いつき床を突き飛ばし、体を宙へ上げ、回転しながら、着地。

容赦なく飛んでくる銃弾と、接近戦で殴りかかってくるナツクルの男。

フリットはダガーを握り締め、ナツクルの男の攻撃を避けながら、男の体の中への潜り込むように入り込み、勿論、接近戦を好むナツクルの男はチャンスとばかりにフリットの顔目掛けて拳を振り上げた瞬間、フリットは下から斜め右上に向かって、ダガーを薙ぎ払う。攻撃はして来ないと思いついてしまっていたせいか、男は深手を負い、腹から胸にかけて血が溢れるのを見て、少し驚いた顔をするが、直ぐにフリットの胸倉を掴み、思いつき、投げ飛ばした。流石、LTキメてるだけあって、痛さに鈍感。

「へへっ、得意なのは逃げるだけじゃないのよ、オイラ」

壁にぶち当たり、呼吸を乱しながら、それこそ、額から血を流して、フリットは笑いながら呟き、ダガーを片手でクルツと器用に回転させ、男2人に構える。

長く鋭い女の爪を弾き飛ばし、三節棍を女の顔に向け、

「セク部隊が来る迄、大人しくしてる？ それともやっぱり気絶させてほしい？」

ラインがそう尋ね、女はフンツと鼻で笑う。

「威勢がいいわね、子猫ちゃん」

「もうすぐLTがキレて数十分経過。リミット状態でいられるのも時間の問題。そしたらシンバもフリットもアイツ等を気絶させる。

勝機は私達にあるからね」

「どうかしら？」

「可愛くないよ、強がりなんて」

「元から可愛い系じゃないからいいわよ。そんな事より気付いてないから教えてあげる。そっちはアタシ達を捕まえるのが目的。でもね、アタシ達はアンタ等を殺すのが目的。殺意アリアリのアタシ達にどう勝てるのか教えてほしいもんだわね、子猫ちゃん！」

と、女は手榴弾を取り出し、ピンを口でとり、ラインに投げつけた。直ぐにドカッと言う音と煙が充満し、床が落ちる。

火薬は少なめだが、まともに当たれば死ぬか、運良く重症で気絶か。「その可愛い顔に傷をつけないよう、ちゃんと守るのね。最も死んだらどうでもいいわね」

女はラインにニッコリ微笑み、ラインは防御体勢を解き、女を睨み見る。

シンバとフリットは爆発音で驚くが、ラインが無事なのを確認すると、他に構ってる余裕はないと、自分の相手とバトルを続ける。

槍を持って高くジャンプする男に、その技は下にいたら危険だと、シンバも高くジャンプし、空中で、槍と剣を交じ合わせる。

フルパワーで、ノーザンファンクに槍を落として来る男に、シンバもノーザンファンクに力を込めて、刃を上へ薙ぎ払い、直ぐにノーザンファンクを振り落とすが、槍で受け止められる。繰り返し、刃を交じ合わせ、足が床に着いた瞬間、お互いが消えるように、また宙へと舞い上がり、シンバはミラーボールから出ているコードにぶら下がり、反動をつける。シンバの姿が目で追いつかなくて、男はキョロキョロしている。

左右に揺れるミラーボール。

男が上かと気付いた瞬間、シンバはコードから手を離し、

「遅えっ!!!」

と、男目掛けて飛び落ちる。

槍で向かい撃つてやるとばかりに、槍を向けるが、シンバは物凄いスピードで、その槍を手に持ち、グルンと男の真下へ潜り込み、ノーザンファンクの柄を男の顎へ思いつき突き上げた。男は後ろへ飛びながら、仰け反って、ドサツと床に落ちる。

「やべ、やりすぎ？」

直ぐに倒れた男の傍に行つて確認する。

白目を向いて、何本か歯も折れて、鼻から口から血は出ているが、生きてはいる。

ホツとするのも束の間、シンバは、フリットに銃を向けている男の背後へとまわり、男の後頭部を、ノーザンフアングの柄で殴りつける。

ふいをついた攻撃だったから、直ぐに気絶してくれた。

「シンバ、タッチ！」

と、向こうからフリットが手をあげて走って来る。

シンバが手を上げると、フリットは、シンバの手をパシンと叩き、

「じゃあ、後よろしく。オイラはラインを助けに行くんで」

と、ナツクルの男を任される。

フリットに負傷を負わされたナツクルの男は、シンバではなく、フリットを相手にしたいようだが、シンバが目の前に現れ、舌打ちしながら、邪魔なシンバをサッサと始末しようと、大きく拳を振り上げる。

シンバは、男が拳を振り落とす瞬間、男の頭を超え、グルンと宙で回転しながら、男の背後にまわる。

男はシンバの気配を背中に、空振った拳をそのままグルンと背後にまわすが、また空振る。

とつくにシンバは再び男の頭を超え、グルンとバツク宙で元に戻り、男の背後に再びまわっている。

男が再びシンバの気配に気付き、振り向くが、シンバの姿はな

360度グルンとまわりながらシンバを探す男。

「ここだよ」

その声に男が見上げようとした瞬間、ノーザンフアングの柄が男の後頭部に落ち、男は口から泡を吹きながら倒れる。

シンバはフウツと呼吸を整え、ラインとフリットを見る。

フリットに背後にまわられ、ラインに正面から迫られ、逃げ場の失った女は、前と後ろに神経を集中させながらも、左右を確認している。

「右は壁、左は俺。逃げ場はない」

シンバが左側から歩いてくるのを見て、女は再び、手榴弾を出して来た。

その攻撃は反則だと、フリットとラインが顔を伏せるが、爆発音もない為、そつと目を開けると、シンバが女の手元を蹴り上げ、手榴弾を遠くに飛ばしていた。

シンバのレベル2のスピードの速さに、驚きながらもラインはチャンスだと、女に向かって走り出し、鎖で繋がれた三節棍を3つに解き放つと、1つの棒を投げた。

鎖が伸びて、飛んでくる棒に、女は避けきれず、腹部に入り、前のめりに倒れる。

ラインは鎖をうまく引き戻し、棒も一緒に戻した後、3つの筒状の棒をクルンと宙で回し、纏め、

「任務完了?」

語尾にハテナはついてるものの、そう言って、シンバとフリットを見た。

額から血が出ているフリットを除けば、シンバとラインは掠り傷程度で、リミット超えている者5人に対し、これは圧勝と言ってもいいだろう。

「被害は、首を絞められて殺された女が一人と、フロアに手榴弾で穴を開けられた事、後はシンバが相手した2人は、かなりの重症

」

フリットが状況を口にし、それをシンバは携帯をピコピコ鳴らし、レンダーに報告のメールを打つ。

「ま、一応、任務完了つっー事で」

フリットがそう言い終わっても、シンバは携帯をピコピコ。

「つーか、今時メール打つの遅せえ。お前、実はじいちゃんだろ。そのストラップも変だ」

「.....」

シンバは真剣にメールしている。

しょうがないなあと、フリットは肩を竦め、ラインはクスクス笑っ

ている。

「よし！」

と、メールを送信したシンバは携帯を閉じ、フリットとラインを見て、

「外は火事だと思った人で一杯だろう、レンダーがセク部隊に連絡すると、もつと大勢の人が集まる。セク部隊が来る前に、それぞれ出口を自分で見つけ、外に出てくれ。人込みから抜け出したら、メールで確認し合い、落ち合おう？」

そう言った。フリットとラインは頷き、

「解散」

そのシンバの言葉と共に、みんな、その場から散った。そして、3人は外には出ずに、クラブ内の照明ルームに身を潜めていた。

「おい、なんなんだよ、メールといい、電話といい」

フリットが携帯を見ながら、シンバに聞く。

『クラブ内の照明ルームで待つ』

レンダーにメールした後、シンバは、フリットとラインに、そうメールしていた。

「ステージやフロアの天井に数箇所、カメラが回っていた。俺達の戦闘シーンは録画されてるだろう。もしかしたら声も届くかもしれないと思い、メールで伝えた。それに、ここならステージとフロアを見渡せる。後は俺の携帯を通話中にして置いて来たから、フリットの携帯と繋がってるだろ、フロアでの会話は聞ける」

「意味わかんねえよ。今回の仕事はセク隊が絡んでるんだぜ？ 録画されたテープが押収されても、セク隊の方で消去してくれるだろう。それにここならステージとフロアを見渡せるからなんなんだ？ 誰の会話を聞くつもりなんだよ？ アイツ等が目覚めて逃げ出すとか？ そう簡単に目が覚めるかよ、お前がやりすぎって程、やりすぎてるしな」

「そうじゃない。誰が来るか確認したいんだ」

3階にある照明ルームはステージやフロアに色様々な照明を当てる為にある部屋。

その為、ステージやフロアが見渡せる大きなガラス窓がある。今、ここで誰がステージに現れても、直ぐに確認できる。

「誰って、セク部隊だろ、あの隊長が来んじゃねえの？」

フリットは眉間に皺を寄せながら、シンバに疑問をぶつける。

ラインは外が見える窓の傍で、外の様子を確認している。

シンバはリグドが最後に、？ジュキトの武器か、お前もレンに教わったのか？？そう言っていたのを思い出しながら、

「・・・・アイツ等の武器、見たか？」

フリットにそう尋ねた。

「アイツ等って、あの5人の？ そりゃあ、戦ったんだぜ？ ナツクルに銃に槍とヌンチャクと爪だっけ？ 手榴弾は驚いたよなあ、あれは反則っつーか、ナシだろ。それがどうかしたのか？」

フリットが戦いを思い出しながら言うと、外の様子を見ながら、

「私達の武器と同じ紋章があった」

ラインがそう言った。フリットは振り向いて、そう言ったラインを見て、シンバを見て、

「紋章って、レンダーの故郷の・・・・今はもうないって言う国の？」

そう問いながら、自分の武器であるダガーを取り出して、紋章を見る。

どの武器も、紋章は装飾に紛れ、小さく刻まれているが、シンバもラインもソレを見逃さなかった。

「妙だと思わないか？」

シンバに聞かれ、フリットは首を傾げる。

「アイツ等、完璧に戦闘モードだったろ？ 只、LTキメてる奴が、なんで戦闘方法を知って、それを身に付けてる？ ましてや手榴弾なんて・・・・ナシだろ」

「・・・・それはオイラ達みたい」

「疑問はまだある。俺達が住んでいる廃墟の武器庫には数多くの武器がある。あれをレンダー1人で集めたとは思えない」

「……つまり、お前はレンを疑ってるのか？」

そう聞いたフリットに、シンバは黙り込み、リグドの台詞を思い出している。

？それに、あんまりレンを信じない方がいい？

？裏切るのが得意な男だから？

「おい、黙ってないで、何とか言えよ！」

「疑問はもう1つ」

突然、ラインがそう言っつて、シンバとフリットを見ると、

「あの5人、私達を殺す為に、ここにいたんじゃない？ 私達が待ち伏せしたと言うより、待ち伏せされていた……。現に、

あの女は私達を殺すのが目的だと言っつていたし」

そう言っつた後、また窓の外に目を向ける。

「ちよつと待てよ、ラインまで。何言っつてんだよ？」

フリットは、冗談だと、シンバとラインを交互に見て、焦った表情を見せる。

「セク部隊の登場。隊長もね」

と、窓の外を見ながら、ラインが言う。フリットはホツとして、

「なんだよ、やっぱりセク部隊が来るんじゃない。驚かせやがって。

シンバは考えすぎなんだよ、いちいち勘繰ってたら、こんな仕事やっつてらんねえよ。いいか、こういう仕事はな、信用第一だ。特に仲間を疑っつちゃダメだろ」

と、フリットは先輩風を吹かせ、シンバにクドクド言い出す。

シンバはフリットを無視し、フリットの携帯と繋がるイヤフォンを片方の耳に入れて、影に隠れ、窓ガラスからフロアを見る。

ラインも外の窓から離れ、シンバと共に、フロアを覗きながら、携帯でムービーを撮り始める。フリットは舌打ちしながらも、とりあえず身を潜めながら、もう片方のイヤフォンをつけて、フロアに目をやる。

来たのはセク部隊隊長と、もう1人、スーツを着た見た目年齢45から50代くらいの男。

『本当にリミット超えた者を倒しています。それも依頼通り、生きたまま。後で録画を見ればわかりますが、これはかなりの戦力ですね』

倒れている槍男と又ンチャク男を見て、それからナツクルの男や銃の男、爪の女を見ながら、隊長がそう言っているのが携帯電話を通じて聞こえる。

『L1リミットレベル2か。当時のリグドがレベル3……』

だつたな？』

男が聞いた。

『はい』

頷く隊長。

当時の？

なら、今のリグドは？

「男のスーツの襟についているピンバッジを見て」

ラインが小声でそう言うので、シンバは目を細め、ピンバッジを見る。

それは、レンダーの故郷となる国の紋章。

「あの男、何者？」

ラインが小声で疑問を口にする。

『レンダーとの取引はどうなっている？』

『ご安心下さい、必ず成立させます』

『そう簡単に頷く男なのか？』

『いえ、ですが、彼もよくわかつているのではないでしょうが、リグドと対等のチカラを得る者がいるとしたら、シンバ・ルーペリックしかない』

俺？

なんで俺がリグドと対等のチカラ？

『だからこそ、今回の依頼も引き受けたのだと思います』

その台詞に、イヤフォンを通じて会話を聞いているシンバとフリットは、お互いに顔を見合し、やはり、今回の依頼の事で、レンダーは何か隠していると察する。

『リグドは現在どうしてる？』

『我々の目の届く範囲で動いています、特にこれといった大きな動きはないのですが、彼のお気に入りが我々の指示に従っている事、彼を支持する若者達が我々のモルモットのようなものという事を、いつまで彼に隠し通せるか……』

『リグドのレベルは？』

『情報によると、ここ最近、LTを食べる量が減ったらしいのですが……次の段階へアップするのかもしれませんが』

『……LTリミットレベル4か？』

『いえ、既にリグドのレベルは4です。次は最終段階の5』

『超えるのか、ラストを』

シンバとフリットは冷や汗をかきながら、只、会話を黙って聞いている事しかできない。

『リグドはシンバを手放した事で、そしてシンバがレンダーと共にいる事を知り、最終段階に入らなければならぬと判断したのでしよう。それ程、リグドもシンバを脅威に感じているのです』

『LTリミットレベルラストとなったリグド・カツエルとLTリミットレベル2のシンバ・ルーペリックでは、確実に結果が見えている』

『今回、シンバのリミットレベル2の強さがわかりました、この強さには、まだ余裕があると判断し、間違いなく、LTリミットを更に越えられる筈です。肉体的にもレベルアップの必要と共に、更に分析後、シンバ・ルーペリックを強化できると思います』

セク部隊隊長は自信に満ち溢れるばかりの声で、そう言い、男を見る。

男はフツと笑みを浮かべ、

『キミに任せるよ、デンバー・ルーペリック君』

男は敬意を込めて、セク部隊隊長の名をフルネームで呼んだ。
セク部隊隊長は深く頭を下げ、

『ありがとうございます』

そう言つて、男の敬意を栄光と共に、己の記憶に刻み付ける。

ルーペリック？

俺のセカンドと同じ？

同じセカンドなだけか？

まさか俺と血縁関係にあつたりするの？

俺の父親と母親はLT中毒症だったんだよな？

レンダーが俺の血液検査で、そういう結果を出したんだよな？
紋章のピンバッジをつけた男が去り、隊長が1人残ると、倒れてい
る槍男の顔を見下ろし、

『本当に前世紀の子供みたいだな、加減つてものを知らない』
そう言つた。

シンバはイヤフォンから聞こえたその台詞が、当然リグドの台詞と
同じだと気付く。

隊長は武器の回収だけすると、倒れている連中は、セク部隊に任せ
るのだろう、フロアから出て行つた。

シンバはイヤフォンを外し、フロアへ向かい、カメラには映らない
よう、セク部隊が入つて来る前に、隠しておいた自分の携帯を持っ
て、外へ脱出。

ラインとフリットも、それぞれ、外へ脱出していた。

ラインは、紋章のピンバッジをつけた男とセク部隊隊長の会話を聞
いていない為、よくわかつていないが、シンバとフリットは2人、
リグドが関連する何か大きな歯車が動き出した事を感じている。

そしてフリットは、それがシンバと何か関係があるのだと言う事も
感じている。

シンバは、シンバ・ルーペリックという名前は、誰の名前だったの
か、考えてもわからないが、考えている。

「で、レンダーには何て報告する？」

フリットが地面を見ながら、呟くように聞いた。

自転車には乗らず、3人は自転車をつぎながらトボトボ歩いている。

「普通に任務完了しましたでいいだろ」

そう言ったシンバを、

「でもさ、レンに聞き出したい事とかあんだろ？」

と、更にフリットは聞き、

「聞いても答えないだろ」

シンバはそう言って、ラインを見る。

「そうだね、元軍人だけあって口は堅いだろうし、拷問だって耐え抜くよ、元軍人は」

と、ラインは溜息を吐きながら、そう言った。

暫し、沈黙が続く、シンバが、

「ジュキトのピンバッチをつけてた男、今更、なんでジュキトのバッチなんか。ジュキトって国の事、もつとちゃんと最初から調べてみるか」

そう言った。

「無理だよ、オイラ、昔、レンダーの故郷であるジュキトがどんな国だったのか、気になって……ジュキトの紋章がさ……
・・オイラの武器にも付いてるだろ？ 他でも見た事ある気がして、それで気になっただけなんだけど、ネットで調べたら検索結果はゼロ。世界中がジュキトって国を抹消したがつて、ネットで検索しても出てこないんだ。当時はニュースでも騒がれたみたいだけど、今となつては歴史からも消え失せた国だ。それをどうやって調べるんだよ？」

フリットがそう言いながら、足元の小石を蹴った。

コロココロンと闇の中へ消えていく小石。

ラインは空を見上げ、星を眺めながら、自転車をつぎ、歩いている。

「……多分、フリットが見た事がある気がしたのは、リグドが持っていた剣に、ジュキトの紋章があったからだと思う」
フリットは、そう言ったシンバを見る。

ラインは、リグドって？と、シンバを見る。

だが、シンバは、その事に関して、それ以上、何も言わず、
「歴史からも人々からも闇に葬られたが、紋章が残ってる。ジユキトはまだ消えてない」

そう言った。フリットは、なんだか、この深刻な雰囲気耐えれなくなり、

「紋章のピンバッチとか、剣の装飾にある紋章とか、只の飾りじゃない、お洒落お洒落！」

そう言って、一人、笑う。笑えないシンバと、溜息を吐くライン。

「な、なんだよ、考えすぎだって！」

「何を考えすぎなんだよ？」

「何って、だって、歴史からも人々からも闇に葬られた国が、今更だろ」

「何が今更だよ？」

「今更復活なんて有り得ないって！」

そう言ったフリットに、

「俺もそう思う。ジユキトを復活させようとしてんじゃないのかって」

シンバがそう言うから、

「お前！ 誘導尋問するなよ！」

と、フリットが怒り出す。

「誘導尋問？ 何を考えすぎなんだ？ 何が今更なんだ？ そう聞いただけだろ？」

「それが誘導って言うんだよ！」

「その程度の質問で本音を言う方が悪い」

「なんだとお！？ オイラは復活なんて有り得ないって言ったんだ、それが本音なら、有り得ないって事だ！」

「有り得るから、そう言ったんだろ」

「違うね！ シンバ、お前はオイラでもない癖に、言い切るんじゃない、ねえ！」

「いや、言い切る」

「じゃあ、オイラだって言わせてもらっけどな！ シンバ、お前の携帯に付いてるストラップ！ ラインと色違いじゃねえのかよ！ ラインがセク部隊隊長の動画を撮ってる時、オイラは見逃さなかったぞ！！！！ お前の携帯を見た時は妙なストラップ付けてんなあとは思ってたんだが、そういうつもりか？ それとも、そういうつもりだ、ええ！？」

そういうつもりも、どういいうつもりも、シンバは何のつもりもなく、

「……フリットも買ってやるうか？」

そう言う他、思いつかなかった。

「は？」

「まだ色違いのブタがあった。緑と黄色だったか……」

「死ね！ アホ！ 仲良し3人組みでもしたいんか！ オイラはそんなガキじゃねえ！」

「どうしろと言うんだ！ 成り行きでこうなったただけだ！」

「成り行きで、どうお揃いにしてんだ、コノヤロウ！！！！」

話がずれているが、シンバとフリットは言い合いを続けていると、

「二人共うるさい！！！！」

ラインがイラッとして怒鳴り、シンバもフリットも黙る。

ラインは夜空を見上げながら、

「私もジュキト復活を企んでいるんだと思う。レンはソレに協力してる気がする。かなりの愛国者でしょ、レンって。レンの部屋を調べれば何か出てくるかも」

本来の話に戻し、そう言った。

「マジで言ってる？ だったらレンの部屋ってどうやって調べる？

あのオッサン、指名手配中を理由に、ずっと廃墟にいるじゃん」

確かにフリットの言う通り、レンダーの部屋を調べるのは難しい。

「あの廃墟って、元は何の建物だったんだ？」

そう聞いたシンバに、

「はあ？ あれは……知らねえよ、そんなの！！」
フリットは、シンバに対しての怒りが治まってなくて、怒るように
そう言った。

ラインも知らないのだろう、夜空を見上げたまま、無言だ。

「廃墟より問題はお前とリグドの関係だろ！ それとストラップだ
！」

フリットがそう言うと、ラインは顔をシンバに向け、

「前にも出たね、その名前。誰なの？」
そう聞いて来た。

「……誰かは、うまく説明できない。只、俺は……
リグドだけだったんだ、ずっと」

そんな記憶しかないシンバは、俯いて、前へ前へ歩く自分の足を見
る。

だが、心のどこかで、リグドもそうならいいと思う。
シンバしか知らない。

そうなら、シンバは孤独も悪くないと思え、少しでも救われる。

「オイラが知ってるのは、リグドはカツコよくてさ、取り巻きがい
つもいて。オイラもその取り巻きの一人で、リグドに憧れて、いつ
かりグドみたいになりてえなって無謀な夢を見てさ。あの頃、オイ
ラもリグドだけだったよ、ずっと」

フリットは、あの頃を思い出し、遠くを見ている。

そんなフリットを、シンバは、？あの頃？か、と、想い出しに
しているんだなあと思う。

シンバは違う、あの頃ではなく、今も尚、リグドへの気持ちは続い
ている。

あの頃も、今も、そしてこれからも、リグドだけだと、シンバは思
う。

ラインは、ふうんと頷き、

「二人が憧れる人なんだね。私も会ってみたいな、その人に」

そう言った。

会うなとも、会わせたくないとも、2人は言えない。

リグドの魅力に敵うものなどないと思う。

リグドに会えば、ラインもリグドに夢中になってしまつかもしれない。

急に黙り込むシンバとフリットに、ラインはなんで無言？と首を傾げる。

そんなラインに、

「いや、ほら、リグドは本当にカッコイイからさ、ラインが好きになっちゃったら、えっと、ほら、レンが怒るだろ？」

笑いながらフリットが言うと、

「本当にかっこいいの？ 当てにならないなあ、フリットの元カノさんを見ると、かなり趣味悪いから」

ラインが笑いながら、そう言って、フリットも笑いながら、ひでえ！と、ラインの自転車に自分の自転車の前輪を向けて、ガツンと前輪を当てる。

「でも彼女なんていたのかな、オイラ。マジで覚えてないんだけど

！ あの女がそうなんて認めたくないなあ」

「きつとイイ所があつたんだよ、多分ね」

趣味が悪いと言いながらもフォローするライン。

「でも嫌だなあ、シンバの元カノなんて出てきたら」

「えー！ なんでだよ、いいじゃん、出てきても。なんでイヤ！？」

フリットがそう言って、唇を尖らせる。

「なんかイヤだよ。フリットに彼女がいたって事もイヤだし」

「うっそ！ それって、オイラにヤキモチ妬いてるって事！？」

「そういうんじゃないくて、自分への劣等感かな。私だって彼氏いた事ないのに、なんでコイツが！？ みたいなの？」

また笑いながら、そう言ったラインに、再び、フリットもひでえ！と、笑う。

「俺には誰もいないから、誰も出てこないよ」

「え？ そんな事ないでしょ、何も覚えてないだけだよ。私も覚えてないだけだな、きつと。うん、そういう事にしよう」

「どういう事だとフリットは笑う。だが、シンバが、

「いないよ。誰も。例え、いたとしても、ソイツを殺すよ。俺と・・・俺の記憶に入って欲しくない」

言葉を濁したが、シンバは、俺とリグドの二人だけの記憶に入っただけで欲しくない、そう言おうとしていた。

シンバが殺すなどと、真剣な顔で言うので、ラインもフリットも笑顔が消える。

LTをやっけてなくても、人が人を殺す事はある。

その人は孤独だからだろうか。

何にせよ、シンバが孤独を耐える事ができたのは、リグドがいたからだろう。

それだけリグドだけだったのだろう。

もう疑惑よりも、只、リグドだけがシンバの脳を支配する。

LTなんて、もう欲しくないのに、今も、リグドはシンバの中で、強く存在している。

だから、リグドを見つけた瞬間、考えるよりも先に、リグドを追いかけていた。

「シンバの記憶には、私がいるよ、入って欲しくないって言っても入っちゃった」

ラインがニッコリ笑って、そう言うので、シンバはフツと笑い、夜空を見上げる。

「オイラもいる」

フリットもそう言って、シンバが見ている空を見上げ、ラインもまた星を見上げる。

LTをキメた人間は、記憶に障害が起こり、多くの思い出を失くしてしまう。

例え孤独じゃなかったとしても、記憶を失くしてしまえば、孤独となる。

人間は記憶がなければ、独りだ。 。
フリットもラインも、孤独をよく知っているからこそ、シンバの孤独もわかるのだろう。

そして、どうしても忘れたくない記憶を守ろうとする事も、わかるのだろう。

シンバにとって、リグドがシンバの全てであるように、そして、今ここに存在しているシンバが、リグドの記憶で、成り立っているシンバである事も。 。

「オイラが一番！」

突然、フリットが自転車に跨り、猛スピードで走っていく。

「ずるい！」

と、ラインも自転車に乗り、フリットを追いかける。

下らない事をするなあと思いつつも、シンバも自転車に跨り、ペダルを踏む。 。

廃墟に着き、リビングとなる部屋で、レンダーは勝手な行動をしたラインに激怒り状態。

顔を真っ赤にし、ラインを叱り付けている。

レンダーの説教は長い。

部屋を調べるなら今がチャンスじゃないかとシンバはフリットを見る。

フリットも同じ事を考えていたのだろう、シンバと目が合う。

「ラインは無事だった訳だし、任務は完了した。俺には説教はないよな？」

そう聞いたシンバに、レンダーは頷く。

「じゃあ、俺は先に休むよ」

「オイラも怪我してるし、先に休むよ。ライン、頑張れよ？」

と、シンバとフリットは部屋を出た。

勿論、向かったのはレンダーの部屋。

ベッド、テーブル、ソファ、棚、これと言って、特別なものがある訳じゃない。

ベッドの下やら、棚に置いてあるものやら、ソファのクッションの下など、シンバとフリットは無言で調べる。

ガチャリとドアが開き、

「男性タレントの件はどうなったか報告がねえなと思えば、コソコソ何のつもりだ」

と、レンダーが部屋に来て、シンバとフリットはその場で、そのままフリーズ。

レンダーの後ろで、手を合わせ、時間稼ぎができずに、ごめんと口を動かしているライン。

レンダーの表情が今迄見た事もない顔。

「あ……あのさ……そう、その、タレントは今日は現場に現れなかったんだ、シンバが送った画像は、オイラが前に録ったもので、5人に接触してる男だつて言ったら、シンバが黒幕の売買人が運び屋の可能性あるから、レンに報告しとくかってメールしたんだけど、ラインがいなくなった事で、返事が来なかったからさ、なんか、いいのかなあって……そのままになっちゃって……あはは……な？」

フリットは、そう言った後、乾いた笑いをして、シンバを見たが、シンバは、そのフリットの、な？という振りに無反応。

只、黙つて、シンバはレンダーを見ている。それでも、なんとかこの場を切り抜けようと、

「な？ シンバ？ 現れなかったんだよな？」

フリットは、シンバに一生懸命、話を振るが、

「いたよ」

なんてシンバが言い出すから、フリットは驚く。と言うか、話を合わせて来ないシンバではなく、いたと言う台詞に。

「いたのか!？」

「ああ」

「どこに!？」

「……トイレに」

「なんで言わないんだよ、お前！」

そりゃそうだ、今更、過ぎた現場の事を言われても遅すぎる。

フリットの様子が怒った感じになるのがわかり、このままでは、陰悪過ぎると、

「男性タレントって？ 誰なの？ 私の知ってる人かなあ？」

明るい声を弾ませて、全く空気が読めてないような雰囲気醸し出すライン。

勿論、誰もラインにノッて来ない。

フリットはシンバを、シンバはレンダーを、そしてレンダーはシンバとフリットを睨み見て、シーンと静まり返っている。これではダメだと、

「ねえー！ 男性タレントって？ 私にも画像見せてよー！」

と、レンダーの部屋にスルリと入り込み、一番、絡み易いだろうとフリットの腕を引っ張り、携帯を取り上げた。

そして、その画像を見て、

「えー！？ ルーシー・ミストじゃん！ うっそ！ 私、大ファン！」

本気で弾んだ声を出すライン。

画像を何度も見ながら、キヤツキヤツと一人大喜びしているラインは、ふと、シンバとフリットとレンダーを見て、やっぱり、重い空気が抜け出さないよねえ……と、急に黙り込む。

「……お前等、俺様の部屋で、何をしていた？」

シンバとフリットは黙っている。

「何を探していた？」

シンバとフリットは黙っている。

「俺様に何か聞きたい事があるなら、こんな事せず、聞けばいいだろう！」

「聞けば答えてくれるのか！」

レンダーに負けず、大きな声で怒鳴ったのはシンバ。

「答えられる事は答える」

「答えられる事は……か」

「なんなんだ？ 何が聞きたいんだ？」

眉間に皺を寄せ、レンダーはシンバを見る。

「ＬＴリミットレベル５になった人間はどうなる？」

シンバが一番最初に聞いたのは、リグドの最終段階に入ったＬＴの症状の事だった。

「死なないよな？」

「そんな話が聞きたくて俺様の部屋に入ったって言うのか！？」

「答えるよ！」

余りにも怖い顔で、大きな声を出すシンバに、

「……記憶は全てなくなり、肉体も増大なパワーについていけず崩壊し、食する事も寝る事もなく、只、死ぬ迄、目の前にある全てを破壊し続けるだろう」

レンダーは、そう答えた。

「今迄、レベル５になった症例はあるのか？」

「ねえよ。もし俺様の知らない所で、そういう奴がいたとしたら、ニュースにでもなってるだろうよ、肉体が悲鳴をあげ、記憶もない只の殺戮を繰り返し、そうだな、たったの数時間で何万という人が死に、その被害はまだ続いているなんてニュースが流れるだろうよ。そして数日後、世界中の？死？で終わるようなもんだ」

まるで生物兵器だと、ラインとフリットは思い、改めてＬＴの恐怖を知る。

だが、シンバは、リグドの心配で頭が一杯だった。

「本当にそんな事が聞きたかったのか！？」

そんな事じゃないと、シンバは、更に質問を続ける。

「……リグドはシンバ・ルーペリックとどんな関係があるんだ？」

「ああ！？」

「シンバ・ルーペリックって誰なんだ？」

「誰って、そりゃお前自身だろうが」

「セク部隊隊長の名がデンバー・ルーペリックと言うのは知ってるだろう？ 依頼者だったんだ。俺のセカンドと同じだ。何かあるのか？」

「………たまたまだろうよ」

「その隊長が、？リグドと対等のチカラを得る者がいるとしたら、シンバ・ルーペリックしかいない？ そう言っていた」

「何の話だ？」

「隊長は、だからこそ、今回の依頼もレンダーが引き受けたのだと、そう言っていた。レンダー、今回の依頼の真意は、なんなんだ！？」シンバがそう言うと、ラインは自分の携帯を出し、クラブで撮った動画をレンダーに見せる。レンダーは動画を見ながら、

「依頼は知っての通りだ。LT中毒である5人の若者を生きたまま捕まえると言う事。真意も何も、それ以外、何もねえ」

「とぼけるなよ！！！！」

大声で叫んだシンバに、

「落ち着け、シンバ」

と、フリットが言う。そして、

「レン、オイラ達、別にレンを疑ってる訳じゃないんだ。只、今回の仕事、幾つか引つ掛かる部分があるんだよ。まず、セク部隊隊長からの依頼で捕まえて欲しいという5人。アイツ等、武器を持って挑んで来た。それだけじゃない、武器はオイラ達と同じ、レンの故郷だろう国の紋章も入っていた。5人の中の1人いた女がオイラの事を知っていた。と言う事はリグドの仲間なのかとも考えた。オイラは昔、リグドの取り巻きの1人だと言う記憶が少しだけあるから。だけど、武器はリグドが用意したものとは思えない。それに戦い方はまさに戦闘と言った感じで、あれは喧嘩慣れしてるとか、そういうレベルじゃない。そして、5人全員がLTリミットレベル1だった。4人は更に中毒中で、LTがキレて数十分、LTリミットレベル2の強さを発揮した」

フリットの話聞きながら、レンダーは、何も言わず、黙っている。

「ねえ、レン。このムービーの男、レンの国の紋章のピンバッチをつけてたの。レンの国って、潰れたのよね？ だったら、どうして今更ピンバッチなんか？ 私達はもしかしたら、レンの国が復活するんじゃないかって思ってるんだけど、レンはどう思う？」

ラインがそう言っつて、レンダーを見るが、レンダーは何も言わず、黙ったまま。

「答えられる事は答えるんだろう？ 何も答えないって事は答えられないって事か？」

シンバがそう言っつと、レンダーは右目でギロリとシンバを見て、

「答えれないんじゃない！ 俺様はそんなに信用ないのかと、悲しいだけだ！」

悔しそうにそう言っつた。フリットが、

「そ、そういう訳じゃねえよ、レン。オイラ達は別にレンを信用してない訳じゃない。信頼し合っつてなきや仕事なんてできないだろ？ そう言っつが、レンダーの部屋を黙っつて漁っつておいて、その台詞は説得力がない。」

「レンダー、信用と言っつならば、セク部隊隊長は何者なんだ？ レンダーにとっつて、この廃墟に呼べるくらい信用がある相手なんだろっ？ それさえも話してくれないのなら、俺はここを出て行く。ラインもフリットも俺が連れて行く」

シンバがそう言っつて、レンダーを見る。

ラインもフリットも、驚いて、お互い顔を見合わせるが、シンバの表情の深刻さに、否定はできなくなる。

シンバは本気だろう、もしレンダーが何も言わないのであれば、ここを出て行く気だ。

行く宛がない事なんて、どうでもいいと思っつ程、レンダーと共にいる事の方が、身の危険を感じていると言っつ事だ。

レンダーは深く重い溜息を吐いた。

「シンバ、お前は俺様じゃなくて、誰の事を信じて、俺様を疑おうと思っつたんだ？ デンバーの……セク部隊隊長の話だけで、

俺様への信頼がなくなる程、セク部隊隊長を知ってる訳じゃないだろっ」

その通りだ。

シンバはリグドを信じている。

リグドが言った？裏切るのが得意な男だから？その台詞が、レンダーへの疑惑を大きくしている。

黙っているシンバに、

「お前こそ、何か隠しているんじゃないのか？」

レンダーがそう言うので、シンバは俯き、

「何も」

小さく唇が動き、そう答えるが、その答え方は、レンダーだけでなく、ラインやフリットも、シンバが何か隠しているように感じた。

7・嫉妬

？レンに伝えて。オレのペットをもう暫くよろしくつてね？

リグドの台詞が、シンバの全てを支配するように、他の思考が停止する。

この場所が、リグドに知られていて、今にも背後から通り抜ける風のように、気付いたら、既に目の前にいる……なんて事になるのではと、シンバは表情を硬直させる。

「シンバ？」

黙ったまま、動かなくなったシンバの顔を覗き込むライン。

シンバはラインの顔にハツとして、レンダーを見ると、レンダーは、シンバを疑わしい表情で見ている。

それはお互い様だと、シンバは、

「シンバ・ルーペリックと言うのは誰なんだ？俺じゃない誰かなんだろう？」

そう聞いた。

「……………」

「デンバー・ルーペリックは本当にセク部隊隊長、それだけなのか？」

「……………」

「答えられないのか？」

「いや、話そう。デンバーは俺様の戦友だった男だ。部隊は違うが、ジュキトと言う国の軍人だった。ジュキトと言う国は他国から戦闘民族とも言われる程、軍に力を入れた強さを誇る国だった。もっと強さを手に入れる為LTが開発され、軍に使用する前にリグドという少年をテストにかけた。テストは失敗、いや、ある意味で成功だったのか、強さを誇る我が国ジュキトは、たった8歳という幼い子供に潰され、それはLTを使用した人の強さを証明する事でもあった。あれから12年、現在、LTは各国に流出した……………」

「レンダーの右目は遠い所を見ている。」

記憶の旅だろうか、その目はレンダーの思い出の中の遠い所に行っている。

「LTは未完成の薬だ。リグドが特殊だっただけで、一般的に使い、飲み続ければ、リミットを越える所か、直ぐに記憶崩壊が始まり、肉体だって筋肉の膨張について行けず、死に至るのが普通だ。軍人の肉体はそれなりに鍛えてもある分、LTに耐えられる者も少なくなかったが、結局は滅びを辿った。だが、国が滅びた後も、生き残った者達で、薬の開発は続き、LTを完成へと導こうとした。その為、LTのテストを行う為の人体実験は耐えなかった。それがこの場所だ。」

「……この廃墟がジュキトの研究所だったのか？」

そう聞いたシンバに、レンダーは頷いて、

「ああ、ジュキトの武器や薬、技術や知識も、全て、ここに。そう言った後、少し俯き、再び、話し出した。」

「ジュキトの国の生き残りは、どの国も受け入れてもらえなかった。戦闘民族と言われる程、戦いを好み、平和とは掛け離れた価値観と文化があり、前世紀には、子供達でさえ、凶暴で、只の喧嘩も加減を知らない程の国だったからな。」

リグドとデンバーの？本当に前世紀の子供みたいだな、加減つてものを知らない？その台詞が重なったのは、同じジュキトと言う国にいたからかと、シンバは思う。

「当時は悪魔の国と言われ、やたらと忌み嫌われた事もあったらしい。だから今も尚、ジュキトという国の名を口にする者はいない。他国から見たら、恐ろしい戦闘民族であり、国が潰れたのも当然であると言われているしな。確かにそうだ、平和より戦争で力を魅せ付け、世界を脅かす存在で頂点を目指そうとする、それが我等が王だったからな。王の言う事は絶対だ、誰も逆らわない。王がそれだから、子供まで凶暴性の高い生き物だったよ。だが、そんな考えは

間違いだっただ」

レンダーのグリーンの右目が悲しそう。

「この建物を買取り、身柄を隠しながら、各国で受け入れてもらえなかった自分の存在を、再び世界で認めさせようと、ジユキトの生き残りは密かにLTの研究を続けた。だが、LTを服用し続けてリミット越えする法則は結局、わからないまま……」

レンダーは言葉を失う。

わからないまま、その後の台詞を口の中で、止めている。

「じゃあ、LTは結局、未完成のままなの？」

そう聞いたラインに、

「あ、ああ、そうだ」

何か言いたげな雰囲気を残したまま、レンダーは頷いた。そして

「どこの国にも受け入れられなかった我々は、この国にだって受け入れてもらえず、だが、ここで隠れてLTを研究し続けていた結果、この国のセク部隊に捕まった。建物も破壊され、無残な姿のままの廃墟となり、その時の人体実験をされていた子供達も、どこへ連れて行かれたのか、或いはどこへ逃げたのか、俺様の他の生き残りもどこへ消えたのか、俺様にはわかる術もなかった。そして、ある日、ラインに出会った、ストリートチルドレンとして生き抜いたようだった、LTを買う為、人を襲った事もあったみたいだ、そんなラインを連れて、ここへ戻ってみたと云う訳だ。武器も殆どそのまま残っていたし、薬もあった。後は生きて行く為に何でも屋を始めた。それが今に至るって訳だ」

「……」

「デンバーは故郷であるジユキトという国の名を出さず、生まれも育ちもこの国だと偽り、セク隊に入団したらしい。ま、ジユキトの軍人だったんだ、この国のセク隊ぐらい、あつという間に締め上げる力はあるだろうよ、隊長になる迄、時間もかからんよ」

シンバは腕を組んで、顔を俯かせ、上目遣いで、レンダーを見ながら、話を聞いている。

「今回の依頼は、何でも屋として、俺様の携帯でいつものように、かかってきた。それが昔の戦友デンバーだった。向こうは俺様だとわかっていて、電話をかけて来た。グールダールに何度も捕まっている事もあったしな。昔の研究所に住んでいると話したら、直ぐに来た。奴はよくこんな廃墟で生活がやっていけるなって笑ったよ。生活状況を話したら、まるで軍のキャンプだってな。昔を思い出すつてよ。そんな下らない話から始まった事だ。お前達にデンバーの話をしなかったのは、特にする必要はないと思った。それに奴は部下を引き連れて行動をする。部下に俺様と戦友である事がバレる訳にいかねえ。奴は今、隊長という地位を手に入れている。元軍人が、潰れたとは言え、背負っていた国を捨てて、手に入れた地位だ。奴の立場を大事にしてやりてえし、奴もそうしてくれと願った。だから、お前達の前でも、初対面のように振る舞い、戦友である事は伏せた」

「昔の戦友つてだけじゃなさそうな程、レンダーには、随分と優しくないか？」

「……戦友つてだけだ。只、デンバーが笑う時が来るなんて、昔は思ってたから、笑っているアイツを見て、今のまま、そつとしておいてやりたいって思う事は、優しさとか関係なく、普通じゃねえか？」

笑う時が来るなんて思ってたなかつた？

それ程、大変だったって事か？

「ねえ、シンバ、レンは特に何も隠してないんじゃない？ レンの話、嘘じゃないと思う」

ラインがそう言うが、シンバは納得いかない。

それはフリットも同様。

？レンダーとの取引はどうなっている？？

？ご安心下さい、必ず成立させます？

デンバーと、ジュキトのピンバッチの男との、そんな会話をシンバもフリットも聞いているからだ。

「俺とレンダーが出会った事は偶然か？」

「偶然だろ、俺様はグールダールに捕まっていたが、お前と出会う為に捕まった訳じゃねえ。寧ろ、お前を放っておけないと言い出したのは俺様じゃねえ。ラインだ」

確かにそうだと、ラインは頷いて、

「あ、別に、その、大した意味はなくて、只、シンバって初めて会った気がなくて。だから放っておけなくて。ほら、シンバだって私と前に会っていた気がしてたでしょ？」

そうだったなと、シンバは頷き、

「じゃあ、ジユキトのピンバッチをしている男は何者が、心当たりは？」

と、尋ねた。

「携帯のムービーだけでは、何とも言えないが、恐らくソルク・モルザじゃねえかと……」

「ソルク・モルザ？ 誰それ？」

フリットがラインを見ながら、そう問うが、ラインも首を振り、

「元ジユキトの人？」

と、レンダーに聞く。

「お前等……少しはニュースとかチェックしたらどうだ？」

どうせ歌番組やドラマやアニメしか見てねえんだろ」

レンダーは呆れたように、そう言うと、フリットもラインも苦笑い。「ソルク・モルザ。この国のプレジデントとは腹違いの兄弟になり、一時期、どちらがこの国の王となるか、ニュースでも話題になった。何故か本妻の子供ソルクの方が、王には選ばれず、愛人の子供の方がプレジデントに選ばれた後、ソルクは国家から姿を消したと言われている。何故、ソルクがプレジデントに選ばれなかったのか、それは謎だ」

「そのソルク・モルザって人が、このジユキトのピンバッチの男なの？」

ラインは携帯のムービーを見ながら、そう聞くが、

「さあ？ さつきも言ったが、携帯のムービーだけでは何とも。只、もしそうだとしたら、ソルク・モルザとデンバー・ルーペリックの関係がわからねえな」

レンダーは考え込むように、そう言って、うーんと唸り出す。

「関係は未来計画の一致って所じゃないのか。そのソルクって男は、国家から姿を消したと言っても、元プレジデントの本妻の子供だろう？ その男がこの国の軍とも言えるセク部隊隊長と繋がりを持ち、そして、そのセク部隊隊長は元ジユキトの軍人。そのソルクって男が、何故、本妻の子供にも関わらず、国の王に選ばれなかったのか、理由として、王に相応しくなかったからだろう。どう相応しくなかったのか、それは絶対に国を任せられない理由があった。例えば、もう既に、ソルクに似た考えの王がいて、その王がいた国は滅びてしまっているとか。そう、ジユキトという国の王と同じで、ソルクは強さを極め、他国へチカラを見せ付けるような考えの持ち主だったとしたら？ その野望を見抜かれ、王に選ばれなかった。だが、その野心は捨ててはいない。元ジユキトの軍人であるデンバーと手を組み、この国をジユキトにし、王になり、全ての国を支配下にしようって魂胆じゃないのか。デンバーはジユキト復活に反対はないだろう？」

シンバがそう言うと、成る程と、ラインとフリットは頷くが、レンダーが、

「有り得ないだろう」

と、鼻で笑う。

「ジユキトは、只、滅びただけじゃない、抹消されたんだ、歴史からも、人類の記憶からも、なにもかも。チカラを捨て、戦争を終わらせ、平和へと導く王達と共に世界の1つとならなければ、国は滅びる事位、デンバーも理解している。再びジユキトを復活させるにしても、二度と同じ方法で国を発展しようとは、絶対にデンバーは考えない筈だ」

デンバーは？

どうしてデンバーはつて言い切るんだろう？

「それはレンの考えだろ」

フリットがそう言うが、レンダーは、

「元ジユキトの考えだ！」

そう言った。

「でもさ、元ジユキトだからこそ、他国から受け入れてもらえなかった事や、今、レンのように無国籍で、どこにも行き場がなくなつた奴等とかは、世界の国々を恨んでるんじゃないの？ レンはいいよ、元軍人で強いし、オイラ達がいるから、何でも屋をやっつけているだろうけど、そうじゃない奴等は？」

「確かに世界を恨んでいる奴もいるだろう、しかしデンバーは今セク部隊隊長なんだ、特に行き場がない訳でもない」

そう言われれば、そうなんだがと、フリットは黙ってしまった。

「兎に角、国が滅びるような事など、今更、誰も望んじやないだろう」

そう言ったレンダーに、

「国なんてどうでもいい！ リグドは？ リグドはまだジユキトの実験台なのか？ アイツ等、リグドの事を、？我々の目の届く範囲で動いている？そう言っていた。それはどういう意味なんだ？ リグドは未だジユキトのテストなのか！？」

シンバは、そう叫んだ。

ラインもフリットも、レンダーも、黙って、シンバの気迫にシンと静まり返る。

「俺達が倒したら五人組、アレはリグドの取り巻きだったのか？ ？ 彼のお気に入りが我々の指示に従っている事、彼を支持する若者達が我々のモルモットのようなものという事を、いつまで彼に隠し通せるか？それも言っていた。アイツ等はリグドをどうしようって考えてんだ！ まさかあのタレントもアイツ等の差し金か？ リグドはソレを知らずに、あのタレントの事を可愛がってるんじゃないのか？ リグドに懐きながら、何れリグドの前から姿を消すのか？

俺みたいに！！！！！！」

「シンバ……お前……リグドの心配をしてるのか？」

レンダーがそう尋ね、シンバはハツとする。

「べ、別にそうじゃない。只、？リグドと対等のチカラを得る者がいるとしたら、シンバ・ルーペリックしかない？そう言っていたから、リグドが気になるだけで……」

ちよつと言いつくさくて、シンバは途中、声が小さくなる。そして、「そのシンバ・ルーペリックって俺の事？それとも違う誰か？」レンダーを見て、そう聞いた。

「わからない」

「何故わからないとか言うんだ、誤魔化す必要がある事なのか？」

「誤魔化してる訳じゃない、その台詞がデンバーによるものだとしたら、それがお前の事なのか、それとも違うのか、わからないんだ！」

「どついう意味だ？」

「ここで、この建物でLTの研究を続けたが、LTを服用し続けてリミットを越える法則は何もわからないまま……第二のリグドが生まれた。ソイツはリグドと同じでリミットレベル3となった。リグドと異なつたのは、リグドのように凶暴さはなく、とても大人しい性質で、確かにLTのせいでハイテンションではあつたが、LTがキレても、人を傷付けるような事はなく、只、苛立つ自分と戦うように小さく蹲り、頭を抱え苦しそうにしていた。ソイツの名前がシンバ・ルーペリック。デンバーの息子だ」

シンバもラインもフリットも、驚きの余り、何も言葉が出てこない。LTリミットレベル3。

そんな奴が、リグドの他にいると言っただけで驚きなのに、それがデンバーの息子であり、しかもシンバと同姓同名。

「な、なあ？それってシンバなのか？」

フリットはシンバを指差し、そう聞いた。レンダーは首を振り、

「シンバはリミットレベル2だ。デンバーの息子ではない。逆に何故シンバがシンバ・ルーペリックと名乗っているのか、俺様が聞きたい。シンバ、その名前は誰が付けたか覚えてないのか？ その辺の記憶はどうなっているんだ？」

と、シンバを見る。
「シンバ。お前はシンバ・ルーペリックだ？
リグドがそう言っていた。」

「そんな顔するなよ、オレがお前を捨てたと思っているのか？ そして忘れられていると思っただか？ 飼い主が大事なペットを忘れる訳ないだろう？ お前はオレのお気に入りだから。だから忘れないようにシンバ・ルーペリックって名付けてやったんだらう？？」
シンバはリグドがそう言っていた事を思い出しながら、何故か心に穴が空いたような気持ちになり、凄く凄く悲しくなっていく。

リグドが忘れられないのは俺じゃない。

自分と同じリミットレベル3だったシンバ・ルーペリックだ。

ジュキトの実験台となったシンバ・ルーペリックだ。

リグドにとって、俺は……… たった一人じゃないんだな。

リグドのたった一人の、変わりだったんだな………。

「なあ？ デンバーはさ、何故、息子を？ 自分の息子なんだらう？」

フリットが尋ね、レンダーは、俯いて、話し出した。

「その頃はもう切羽詰った状態だった。リグドが世界中で指名手配され、他国にリグドを渡す訳にはいかないと、ジュキトの生き残り達は、必死だった。もしもリグドが捕らわれ、その国とリグドが手を組んだら、ジュキトを恨んでいるリグドは、必ずジュキトの生き残りを見つけ出し、全てを全滅させるだらうと、そして、ジュキトは終わってしまうと……… 既にジュキトは終わっていたのに、あの頃はまだ誰も諦めていなかったんだ。諦めるくらいならと、デンバーは自分の息子にLTを飲ませた。他にもLTのテストとして子供達がいたが、テストできる子供が、一人でも多く、もっと、も

つと必要だった。こんな場所で、金も尽きて、人を買う事も、攫ってくる事も、何もできない状態だった。そして……リグドはどの国でも捕まらず、ここに現れた。やはりジユキトを恨んでいるリグドは生き残りを探していたんだ。リグドはジユキトへの恨みを忘れない。絶対に。どんなにLTをキメても、記憶障害が酷くても、リグドは忘れないんだ。それは執念なのか、或いは、只、メモや日記のような記録で常に記憶を呼び覚ますのか、わからないが、アイツは忘れないんだ……自分がジユキトが生み出した闇だと言う事も」

「……それでデンバーの息子つてのはどうなったんだ？」

俯いて落ち込んでいるレンダーに、聞き辛そうに、フリットは尋ねる。

「シンバは……デンバーの息子はリグドに連れて行かれた……」

「連れて行かれた？ それって？ つまり攫われたって事か？」

フリットは驚いて声を上げて聞く。

「いや、そうじゃない。攫われたというよりは、デンバーの息子の方から付いて行ったと言うべきか……リグドに魅力を感じたのか、自分と似ていると思ったからなのか、それもわからない。わかる事は、デンバーの息子は父であるデンバーから離れ、リグドと共に去ったと言う事。そしてその後、デンバーの息子は消息を絶った。リグドの噂は聞いてもデンバーの息子の情報は何も得れなかった。それからデンバーは廃人のようだった。俺様はデンバーの為に探したんだ……デンバーの息子をリグドから取り返そうと、俺様はリグドを追った。だが、本当に何もわからないまま。デンバーの息子はLTのせいで亡くなったか、リグドに殺されたか、それとも今も生きて、どこかにいるのか、本当に何もわからない。もしもリグドに尋ねる事ができたとしても、それこそ今更、記憶にあるのか、どうか。そして俺様がここに戻った時はセク部隊に乗り込まれた後で、廃墟となった有様だった。だから、俺様には、その

時の人体実験をされていた子供達も、俺様の他の生き残りもどこへ消えたのか、わかる術もなく、今回、デンバーから連絡をもらう迄、元ジュキトの生き残りに会えるなんて思ってもいなかったし、デンバーの口から、シンバ・ルーペリックと言う名前が出て、それが、息子の事なのか、ここにいるシンバの事なのか、俺様には、わからねえんだよ。レベル2と言ったのなら、シンバ、お前の事かもしれねえ、だが、言い間違えたのかもしれない。だってよう、シンバよう、お前の名前を聞いたデンバーは、普通だった。まるで息子を忘れていたかのように、いや、まるで息子は今も傍にいたかのように、本当に傍にいたのかもしれない。……？」

シンと静まり、レンダーの悲しそうな表情を黙って見つめるしかできないラインとフリット。シンバだけが、何故か冷めた表情で、足元の床を見つめている。

「だからな、そんなデンバーが今更ジュキト復活を望み、チカラで全ての国を捻じ伏せるような遣り方を繰り返すとは思えない。二度とリグドや息子のシンバのような人間をつくってはいけないと、だから奴はセク部隊隊長であり、この国の安全と秩序を守る為に頑張っているんだと思う」

「その話、納得はいかない」

そう言ったシンバに、ラインもフリットも、そしてレンダーも、シンバを見る。

シンバは床を見つめたまま、

「納得なんてできる訳ないだろう、だったら俺は……」

言葉を失う。

俺にシンバ・ルーペリックと名付けたのは、リグドはソイツを忘れられないから？

だったら俺は？

その息子と俺と、リグドにとって、どう違っつて言っただ？

ソイツがレベル3で、俺がレベル2だからか？

俺のレベルが低いから、リグドは俺を対等に見てくれないのか？

なんで………なんでこんなにも、俺の記憶はリグドだけなんだ!!!!!!

苛立ちで、シンバは拳をギュツと握り締め、床を睨むように見つめている。

「納得なんてしなくていい。だが、お互い信用は大事だ。そうだろう?」

そう言ったレンダーを無視するよう、シンバは床を見つめたまま、その部屋を出て行く。

リグドは俺だけじゃない。

そんなのわかってる。

でも、沢山いる連中の中で、俺だけしかいないって、どこかで思っていた。

俺だけじゃないけど、きっと俺だけがリグドの特別。

俺がリグドを特別なように………。

なあ、リグド?

もし、俺がリミットレベル3になれば、リグドは俺を見てくれる?

シンバ・ルーペリックは俺しか知らないって、俺だけを見てくれる?

「シンバ」

その声に振り向くと、フリットが立っている。

「明日の夕方、デンバーが依頼の報酬の件でここに来るってよ」

「………そうか」

「その時に聞いてみようぜ、レンダーとの取引ってなんだったのかってね」

「………どうでもいい」

「は?」

「どうでもいいんだよ、もう、そんな事。何を聞いても、俺は変わらない」

「何が?」

「どうせ何も変わらないんだよ、お前と違って、俺は今も昔も何も変わってない。LTやってようが、やってなかるうが、俺は……」

「お前みたいに誰かを愛せたらな」

「何言ってるの？ サツパリわからん。お前、もう少し自分の中で整理してから、台詞にしるよ、毎回毎回、感情表現の下手さ加減にイラッと来る」

そう言ったフリットに、コイツさえいなければ、真正面向いて、正直に、真っ向勝負で、ラインを愛せたかなとシンバは思う。

フリットがラインを好きだと言う事を知っているから、ストップしている自分がいる。

そして、ラインには、真面目で優しく、LTとは無関係の男と幸せになってほしいと言う気持ちがある。

だから、自分の中からラインを消したら、残っているのは、リグドしかなくて、ラインの幸せを考えると、ラインに縋りつくのは間違っているから、リグドに縋りつくしかなくて。

「兎に角さ、あの5人がジュキトの紋章の武器を持っていた事も、レンは知らないって言うし、だったら、明日、デンバーに直接、聞いてみようぜ？ な？」

「……ああ」

シンバはフリットに頷き、フリットは、頷いたシンバに、意味のわからない事を言わず、素直に頷いてくれたとホッとする。

次の日の朝食は、皆、無言で、どこか、よそよそしくて、ちょっとした事で、簡単に壊れそうになるなんて、やはり他人なんだなと感じさせる雰囲気漂っていた。

午前中の仕事は、シンバが引越しの手伝い、フリットがビルの清掃、ラインが行方不明の仔猫探し。

午後からは、シンバとフリットがスーパーでの万引き常習犯を捕まえる為の見張り、ラインは引き続き、仔猫探し。

万引き常習犯を捕まえたら、急いで帰ろうとフリットは言う。夕方からデンバーが来るだろう。

その為だろうが、そう簡単にこちらの都合に合わせ、万引き常習犯が来るとは限らず、まして、今日、必ず来るとも限らない。

スーパーの閉店時間は夜の9時。

それまで、常習犯が現れなければ、見張りは続く。

「4時か。デンバーって奴、夕方って何時に来るんだろうな？ 5時くらいかな？」

フリットは携帯を取り出し、時間を見て、そうばやく。

「フーかさあ、オイラ達が、スーパーのカゴ持って、買い物してる風に歩いてると、変じゃねえか？ やっぱ、ここはオイラとラインが組めば良かったよな！ オイラの家で手料理つくってくれる彼女と一緒にラブラブ買い物中ってシュチュエーションでさー！」

何の理想を妄想しているのか、フリットは言いながら、ニヤニヤ。

「俺とラブラブ買い物中でもいいだろ」

「…………お前、そのシュチュエーション嫌じゃないのか？」
「嫌だ」

「だったら言うなよ、真顔で。お前の感情の無さは冗談なのか、本気かわからん」

だが、ラインとフリットがラブラブ買い物中よりはいいと思うシンバ。

「あ、ラインからメール来た！ 仔猫見つかんねえってよ。いなくなつて数年経つんだろ？ もう仔猫じゃないだろ。替え玉用意しろよ」と

持っていた携帯を見ながら、返信し、そう言ったフリットに、シンバも携帯を見てみるとメールが入っている。ラインからだ。どうせ同じ内容だろうと、開くと、

「ねえー、この猫に黒いブチをマジックで書きちゃうってどう?? ? と、画像付き。」

見ると、真っ白の猫の画像。

探している猫は黒いブチのある猫。

フリットが替え玉用意しろと返信したからだなど、シンバはクツと

軽く笑みを零すと、

「いいかも。バレても俺のせいじゃないけどね？
と、返信。」

「えー？ 共犯でしょ？（*^_^）？」

「パス？」

「ひどっ！？（、／＼）？」

「俺のアイディアじゃないだろ？」

「じゃあ、バレたらフリットに全て罪を擦り付けよう。^（o

）o？」

「いいかも。フリットが怒っても俺のせいじゃないけどね？」

「えー？ 結局、そうなの？（、*）？」

メールのタイトル部分にリターンが続く。

今朝の険悪なムードを消す為だろうか、ラインは仕事にも関わらず、シンバとフリットに楽しげな顔文字たっぷりのメールを送る。

「おい、シンバ、来たぞ」

そう言われ、シンバはハツとして、メールに夢中で見張りを忘れていたと我に返り、携帯をポケットに入れる。

スーパーの店長に見せてもらった映像に映っていた男だ。

この店内に設置されているカメラで撮られてた映像だが、商品を盗んでいる所は、映っていない。

只、彼で間違いないと店長は言う。

だから、来たと思って見張っていても、商品をいつ盗ったか、全くわからず、いつも捕まらないと。

万引きというのは、その場で現行犯逮捕ではないとダメらしく、セク部隊に頼んで大袈裟にするのも店の評判的にどうなのかと、困っていると言う依頼だ。

「……年齢……微妙だな、オイラ達より年下って感じるから14歳か、15歳って感じ？ どうでもいいけど、あの服、ブランドもんだぜ、お坊ちゃんかよ」

フリットが男を見ながら、そう言って、こっちから回り込むと指を

差すので、シンバは逆方向に回る。

シンバは男を見ながら、男が着ているシャツを見て、

「アレがブランド物？ 俺には普通のシャツに見える」

と、呟く。

だが、お洒落にうるさいフリットが言うなら間違いないだろう。

万引き犯は金に困ってる訳ではなく、只の遊び程度で万引きをしていると言う事だろうか。

今、男が鞆に駄菓子を入れた。

速い。

あの手捌き、普通じゃないだろ。

まさかＬＴリミットレベル１？

シンバがそう思う通り、フリットも思ったのだろう、？見えたか？

ＬＴやっぺんじゃねえの？ このガキ？と、フリットからメールが来た。

ラインからメールが来ているが、それは後でチェックすればいいだろう、とりあえず、フリットのメールを見て、？俺もそう思った？とだけ返信。

男は手に持っている大きめの鞆に、次から次へと駄菓子を入れていく。

根こそぎ盗る気か？

アイツが来て、棚の商品が全て消えれば、そりゃ店側も疑うだろうな。

根こそぎ盗らなきゃ見つからないだろう。

なのに、疑われる事をわざわざやるって、どういつ心理だ？

犯人は俺だと言っているようなもんだ。

フリットからメール。

？もしもアイツがＬＴ中毒者だったら、人気のない所で捕まえないとバトルになったら被害が大きくなる。とりあえずオイラは店長に話して、人気のない所まで尾行し続けてから捕まえると伝えてくる。ついでにアイツを縛る縄ももらって来る。シンバはこのまま尾行続

行。携帯は電源入れとけよ、GPSで場所確認するから？

？わかった？と返信すると、シンバは携帯をポケットに仕舞い、男の後をつける。

男は暫く駄菓子コーナーでウロウロしていたが、暫くして、青果コーナー、精肉コーナーをグルッと周り、惣菜コーナーで、フランクフルトを手にとると、それをナイロン袋に入れて持ち歩き、棚の影で見えなくなっただと思っただら、もう手には何も持たれていない。

鞆に入れたか？

そして、男はスーパ―を出た。

シンバは後を追う。

100メートル程、歩くと、男は鞆の中から、フランクフルトを取り出し、食べ始める。

万引きした奴だ。

アレは駄菓子の時と違い、食べたいから盗ったって感じだな。

男はフランクフルトと歩きながら、フランクフルトの棒を捨てると、そのまま公園に入って行く。

シンバは男が捨てた棒を拾っていると、フリットが走って来た。

「アイツは？」

「公園に入った」

「よし、じゃあ、捕まえに行こうぜ」

と、フリットは手に丈夫そうな縄を持って走って行く。シンバもフリットに続き、公園に入る。男は、公園のゴミ箱に、鞆の中身を全て引つ繰り返し捨てていた。

人気がないから調度いい。無論、男も人気がないから駄菓子を捨てていたのだろう。

シンバは男が道に捨てた棒をゴミ箱に捨てる。

「勿体ねえだろ！！！！」

そう吠えるフリットを、男はチラッと見ると、無視して行こうとするが、直ぐ傍で、シンバが立ちはだかる。男は振り向いて、フリットが立っているのを見ると、また向きなおし、シンバが立っている

のを見て、

「何か用ですか？」

そう尋ねて来た。

「お前なあ、何か用かじゃねえだろ、万引きしといて！」

フリットがそう言うのと、男は再び振り向いてフリットを見て、また向きなおし、シンバを見て、

「セク部隊……ですか？ バトルスーツ着てないけど」
そう聞いた。

「セク部隊じゃない。だが、店長の依頼で、お前を捕まえに来た」
そう言ったシンバに、男はクスクス笑い出し、

「セク部隊じゃないの？ なあんだ、ビックリして損した！ 僕を捕まえる？ 無理だよ、だって僕、相当強いよ？ やめといた方がいいと思うなあ」

と、シンバとフリット二人を目の前にして、余裕の台詞。

「奇遇だな」

「え？」

「俺も相当強い」

シンバがそう言うのと、

「ホント、奇遇だねえ」

「は？」

「オイラも相当強いよ」

フリットもそう言って、ニヤリと笑う。

男は少し考えるような仕草をした後、鞆からゴソゴソと何か取り出し、そして、鞆を地に捨てるように置くと、

「わかってないなあ。僕はね、普通じゃないんだよ」

と、両手にナツクルを嵌める。

「……ジュキトの紋章！」

思わず、ナツクルに描かれた印に、そう呟くシンバ。

「ジュキトの紋章？ あ、これ？ この紋章、ジュキトって言うんだ？ へえ」

男は、両手のナツクルを見ながら、フウンと頷いている。

「その武器、どこで手に入れたんだ？」

そう聞いたシンバを見て、男はフンツと鼻で笑うと、

「さあね？」

と、生意気な態度。そして、

「知りたければ、まずは僕に勝つ事じゃないの？ 無理だろうけど、更に生意気な台詞。」

シンバは剣を抜き、男に構えると、

「武器の紋章まで奇遇だな」

そう言った。男は、少し首を傾げると、

「ホントホント。武器の紋章まで同じって、やっぱ、Lトリミット越えてるって感じ？」

と、フリットが言うので、男は驚いた顔でフリットを見る。

「どうしてLトリミット越えてるって!？」

「わかったのかって？ そりゃわかるだろ、お前の手捌き、異常に速すぎて、あんなのオイラ達じゃなきゃ見れないっつーの。オイラ達って、つまりLトリミット超えてる奴って意味ね、ちなみに、ここにいる奴はレベル2。オイラはレベル1だけど。でも、まさかの予想外の展開？ そこんとこ、わかった上で喧嘩売った方が良かったね」

フリットがそう言うから、男は驚きを隠せず、目を丸くして、

「レベル2!？ レベル2だって!？ そんなバカな!？ そんなの嘘に決まってる!」

と、シンバを見ている。

「素直に捕まって、スーパーの店長の所へ一緒に向かい、その武器の出所を話せ」

シンバがそう言うと、男は少し焦っていたが、

「冗談でしょ、そんな事したら、僕がLT中毒症だったって親にバレてしまう」

と、ナツクルをした拳を構え出した。

「バカだねえ、やめときゃいいのに、やっちゃうんだ？ 大体、親にバレル前に、死刑になる心配しろよ、ＬＴ関係のある人間は捕まると死刑なんだぞ」

フリットがそう言うのと、男はうるさいと大声で怒鳴るように吠えたかと思うと、耳にイヤフォンをつけ、深呼吸するとリズムをとるように体を動かし、シンバをキツと睨むと、拳を振り上げ、飛び掛かった。

突然の事だったが、予想しなかった訳ではない。

シンバはスルツと身を交わし、再び、シンバ目掛けて飛んでくる拳を剣の平らな部分で受け止める。

レベル1って割りに、まあまあいい動きをする。

コイツも喧嘩ではない戦闘というものを少しばかり知っているって感じだな。

耳に入れたイヤフォンは何だろう？

少し音が漏れている……何の曲だろう……？
シンバは余裕の動きで、男からの攻撃を交わし続ける。

フリットが、

「そろそろガツンと一発やっちゃえよ」

などと言い出すから、男は焦ったのか、拳を大振りに何度も振り上げ、その攻撃は隙だらけで、シンバは、剣を鞘に仕舞う。

武器を使う程でもないかと判断したからだ。

そのシンバの行動で、男は、シンバとのチカラの差を悟り、負けてしまうと判断したのか、走って逃げようとしたが、フリットが立ち塞がり、

「逃げれるって思う辺り、バカだっつーの」と、呆れ顔。

男は、雄叫びを上げながら、フリットに拳を振るうが、フリットもサツと身を交わし、

「おいおい、落ち着けて。もう少し落ち着いたら、もっといい動きできるだろ、いいか、脇が甘いんだよ、お前。もっとこう、脇を

しめて、パンチは振り上げるより、真っ直ぐ狙いを定めて弾丸のよ
うに打つべし！ 特にお前は小柄なんだから、それを利用しないと
勿体ねえだろ？ 怖がってたらダメだ、いいか、相手の懐に入って
その小さな体全体を使って、拳にチカラを入れる。そして上へ向け
てアップ！ そのナツクルもより活かされ、攻撃力も振り上げる
より増すっつー訳だ。わかったか？ 大丈夫、相手はレベル2つて
言っても、一人だ。なんとかなるなる！ よし、頑張っ行ってみ
よう！ 2ラウンド！」

と、男をクルツと回転させ、シンバに向き直させ、男の背中を押す
フリット。

何をアドバイスしてるんだと、シンバはフリットを睨み、

「遊びすぎだ」

と、溜息。

だが、フリットのその余裕あるアドバイスの御蔭で、男はブルブル
震え出し、絶対に勝てないと思ったのか、その場にガクンと跪き、
土下座体勢。そして、

「ご、ごめんなさい…………許して下さい…………」

と、頭を下げる。

シンバとフリットは顔を見合わせる。

LTに手を出した者は強さと引き換えに、いろんなモノを失う。

寿命も50年。

この男は、そういう事を知っているのだろうか。

震える男に、シンバとフリットは近付いて、

「最初から大人しくしてくれれば、別にさ、オイラ達、お前をどう
こうしようって思わねえよ。LTやってた奴は死刑なんだぜ？ セ
ク隊に突き出されたくないだろう？」

「万引きはしないと店長に約束し、二度と人に対し、そのチカラを
使わず、生きていけばいい。今はもうLTやってないなら、LT中
毒者だった事を隠して生きていくしかないだろ」
優しく声をかける。

男は顔を上げて、シンバとフリットを見る。

「その武器はどこで手に入れたんだ？」

そう聞いたシンバに、

「……ルーパー・ミストのライブに行くと……もらえるんだ……」

男は、そう答え、俯く。

「ルーパー・ミスト？ ラインが好きだったっー、あのタレントか？ ソイツのライブに行くとももらえるって、ライブに行った奴全員に配ってるって言うのか？」

フリットがそう言うと、男は首を振った。

「ルーパー・ミストのライブは一ヶ月に一度。テレビには出演してなくて、たまに街のムービー放送でライブの中継が流れても、それ以外のメディアにはルーパーは全く出ないから、ライブだけの活動だけ。ネットもファンがホームページを作ってるぐらいで、特に公式ページはない。タレント事務所もどこに所属してるのかも、わからない。そういう意味でも都市伝説になってるタレントで、架空人物とも言われる程。僕はルーパーのファンで、最初はビルの上に設置されてるムービーにルーパーが出てるのを見て、それからルーパーについて、ファンが作ってるホームページなどを見たりして。そのファンサイトには、チャットもあって、そこで、チケットがあるんだけど、買わないかって言われて」

「そのチケットは、そのホームページの管理者が売ってるのか？」

シンバがそう尋ねると、男は、首を振った。

「ライブチケットは、ネット上の至る所で取引されてて、たまたま、そのホームページの管理者が数枚、手に入れたんだと思う。それで、ライブに友達と一緒にいったんだ。そしたらＬＴを配られてて、一ヶ月分あるって。飲みたくなったら飲めって。内容はそんな感じで言われて、最初は怖かったんだけど、ライブにいる皆が飲んでるから、勢いで飲んじゃって。そしたらライブは大盛り上がりで、気分が最高で、トリップできて、でも、ＬＴがキレると飲まずにはいら

れなくて、そうやって一ヶ月過ぎた頃、今度はライブのチケットを買わなくても、ルーシーから手紙が来て招待されたんだ。もうLTもなかったし、行ってLTをもらわなければって、そしたら僕も友達も3日間の監禁。気付いたら、LTはもう欲しくなかったけど

「

「リミットを越えたって訳か。その友達は？」

シンバが尋ねると、男は俯いたまま。

「ルーシーの都市伝説のひとつで、ルーシーのライブに行った奴は必ず死ぬって言うのがあるんだ。でもルーシーの人気を煽る為の作られた都市伝説だって噂だった。でも真実は、殆どLTで死ぬんだと思う。僕の友達も……多分……」

「おかしくねえか？ だってさ、ライブだろ？ かなりの人数だよな？ 1000や2000じゃないだろ、500は行くだろ？ 下手したら1000？ そんな人数が殆ど死ぬとなったら、セク部隊だって動く筈じゃん？ その話、信用なんねえな」

フリットがそう言うと、男は顔を上げ、首を振りながら、

「う、嘘じゃないよ、本当だよ、それに、ルーシーは小規模のライブを開くから、多くても300程で、1000もいかないよ、信じて、嘘なんて言わないよ！」

と、フリットに縋るように、腕を掴み、抱きつく。

「わ、わかったって。そんな怯えるなよ、オイラ達は別にお前をどうこうしやしねえよ」

フリットはそう言っつて、後ろへ下がりが、男から逃げるような態度。

男に抱きつかれるのは当然だが、嫌らしい。

シンバは、ルーシー・ミストが、何者なんだろうと考える。

リグドの傍にいて、ジュキトの武器を持っていて、そして、タレントという立場で、ファンを利用している。

デンバーが言っていた台詞を思い出す。

？ 彼のお気に入りが我々の指示に従っている事、彼を支持する若者達が我々のモルモットのようなものという事を、いつまで彼に

隠し通せるか………？

やはり、デンバーの差し金か？

リグドは本当に何も知らないのか？

「お前、バトル中、何聴いてた？」

シンバが聞くと、男はイヤフォンを外し、

「ルーシー・ミストの歌。これ聴きながらだと、戦闘のムービーを
思い出せるから」

と、ポケットから携帯を出して来た。イヤフォンは携帯に繋がって
いる。

「ムービー？」

シンバが聞き返すと、男は携帯の画面にダウンロードしたムービー
を映し、ソレを見せる。

そこには誰でも簡単に体を動かし、戦闘モードに使えるステップを
踏むCGアニメの男性が、ルーシーの曲に合わせ踊っている。

「すげえな、まるで流行りのダンスを取り入れたダイエットのムー
ビーみてえじゃん。アレ売れてんだってなあ。これもその類で、流
行のダンスを取り入れた戦闘方法って奴？」

フリットが笑いながら言うが、笑い事ではない。

「ルーシーは僕を楽屋に呼んで、このムービーをくれたんだ。これ
でパワーとスピードさえあれば、誰でも戦士になれるって、それは
LTで手に入るから、後は武器だねって、武器をくれたんだ……
」

男がそう言って、シンバとフリットを見る。

「フウン、やつぱ信用できねえよ、だつてさ、お前、LTやってた
割りに普通に記憶あんじゃん？ 記憶少しも失くしてる感じしねえ
よな？」

確かにフリットの言う通りだ、男は記憶がハッキリしているように
感じる。

「記憶って？ 僕は別に記憶喪失とかじゃないと思うけど」

そう言った男に、シンバもフリットも顔を見合わせ、眉間に皺を寄

せて不思議そう。

シンバはLTをキメていた頃、記憶が殆どないと自覚していた。それはフリットもそうなのだろう。

そして、今現在、LTは絶ったが、記憶がない事を自覚している。なのに記憶喪失ではないとキツパリ言う男が不思議だ。

「なあ、お前、名前は？」

「な、名前言っても、セク部隊に言わない？」

「言わねえよ。だから覚えてるなら名前言ってみろ」

「アニル・セイファン」

「年齢は？」

「15歳」

「家族構成は？」

「父と母と姉。それからハムスター」

「ハムスター！？ それペットだろ」

「ペットも家族だよ！」

そう言ったアニルに、どう思う？とフリットがシンバを見るが、シンバは黙って、どうでもいいから質問を続けると睨むので、フリットは仕方なく納得し、再び質問を繰り返す。

「好きな食べ物は？」

「フランクフルトとコーラ」

「苦手な物は？」

「昆虫類。でも蜘蛛は平気」

「なんで蜘蛛だけ……まあいいや、じゃあ、LTをやり始めてから、家族から妙だと言われた事は？」

「ないよ。言う程、コミュニケーションないし、それにLTやってるのをバレないように、普通にしてたよ、何も気付かれないように、本当に普通に過ごしてた。何も疑われてない」

「そうじゃねえよ、最近、忘れっぽいとか言われたりしなかったか？」

「ないよ。別に何も忘れてない。ねえ、さっきから何なの？」

何なのだろうと、シンバとフリットはお互い見合っ。

アニルがＬＴ中毒症だったとは思えない。

だが、強さはＬＴリミットレベル１に間違いないだろう。

そして、本人もＬＴをやっていたと話している。

公園に散歩にやって来た親子が、シンバとフリットとアニルの様子が変に感じたのか、チラチラとコチラを伺っている。

ここで、いつまでも話を続けるのは無理があると、シンバは、

「……とりあえず、スーパーに戻って、アニルは謝罪しろ。それからレンダーに電話して、状況を話して、コイツをどうするか聞くか」

そう言うと、アニルは、

「どうするかって、どういう事？ セク部隊を呼ぶの？」

再び怯え出す。

「そうじゃない。只、お前に協力してもらっかもしれない、そのル―シーって、タレントとは未だ繋がりあるんだろう？」

そう言ったシンバに、アニルは黙ってしまう。

「とりあえず、謝罪が先だ。来い」

シンバにそう言われ、アニルは俯いたまま、トボトボと歩き、シンバの後ろを付いて行く。

フリットはレンダーに電話しながら、アニルの後ろを歩いている。

スーパーで、アニルは反省している態度で、ずっと俯き、謝り続け、シンバとフリットは二度と万引きしないと約束をさせるからと、アニルと一緒に頭を下げる。

そんなシンバとフリットを見て、アニルは、涙をポロポロと落とし、二人が下げた頭の分も絶対に約束しなければと、二度と万引きはしないと誓う。

本当に反省しているようだし、今回はセク部隊に通報しないと言う事になり、シンバもフリットもホッとする。

「レンがコイツを連れて来いってさ。お前、親に電話して、帰りは遅くなるよか言えよ」

フリットがそう言つと、

「電話しなくても大丈夫。いつも帰りは遅いし、一ヶ月帰らなくても平気だから」

と、アニルは言う。

「そういうもん？ オイラ、ラインが帰り遅くなったら不安だけど？ 家族つてそういうもんじゃねえの？」

「………わからないよ、家族つてどんなものなのか」

「家族がいるのに、わかんねえのか？」

「………うん。それよりラインつて誰？」

「一緒に住んでんだよ、オイラ達と同じ仲間つて言うのかな」

「そうなんだ、フリットさんの彼女？」

「かつ！ 彼女！？ あ、あはは、お前、結構いい奴だな！」

と、フリットはアニルの肩を叩くが、

「仲間つて言つただろ、聞けよ、ちゃんと」

シンバがそう突っ込むので、フリットは嫌な顔で、

「余計な事言つなよ！」

と、シンバを睨む。

シンバはフリットとアニルの後ろで、二人に付いて行く感じに歩いている。

フリットの笑顔。

アニルの笑顔。

シンバは、フリットはもうアニルの全てを信じたのだろうかと思いつながら歩いていると、

「それからシンバさん」

と、アニルが振り向いて、

「本当にありがとうございました」

と、頭を下げる。

「………」

立ち止まるシンバに、フリットは笑いながら、

「ああ、コイツ、人様に礼を言われるなんて慣れてないからフリー

ズしてやがるんだよ」

そう言うと、アニルはそうかと笑った。シンバは再び歩きながら、フリットを見るが、フリットはアニルを見て、話をしているので、シンバの視線に気付かない。

なんでコイツ、俺の名前を知ってるんだ？

話したのか？

そういえば、フリットの名前も普通に呼んでいたな。

コイツを目の前にして、俺達、名前を呼び合う会話したか？
したとしたら、それで名前を覚えたのか？

そういえば、コイツ、なんで万引きをしたんだろう？

しかも根こそぎ駄菓子を盗んで、棚を空にしていた。

犯人は自分だとメッセージを残すかのように……。

そういえば、ラインの名前を聞いて、フリットの彼女かって質問も変だ。

何故、ラインが女だとわかったんだろう？

ラインという名は男性でも有り得る……。

だが、シンバは何も気付かないふりをする事にした。

アニルがルーシー・ミストと関わりがあるなら、その繋がりを手に入れるまで、アニルを手放したくないからだ。

ルーシーがジユキトの紋章の武器を配っているとしたら、ルーシーはデンバーの手下かもしれない。

ルーシーがリグドと一緒にいる理由は、リグドを監視しているからなのかもしれない。

そうになると、リグドは何も知らないで、ルーシーを傍に置いているのかもしれない。

もし、その事がハッキリわかれば、リグドは……。

リグドは？

俺、何を考えてるんだ？

まさか、またリグドの傍にいられるって……俺、考える？

ルーシー・ミストって奴さえいなければって思ってる？

俺、レンダーやフリット、それからラインと離れて、リグドの所へ戻るうとしてる？

自分の考えがわからなくなり、シンバは深い溜息。

そういえば、ラインからメールが来ていたんだつたと、携帯を開き、メールを確認すると、

？仔猫見つからないって依頼者に話したら、逆に申し訳なかったつて、夕飯ご馳走してくれるつて言うのね、遠慮はしたんだけど、数年前にいなくなった仔猫を探してくれた気持ち嬉しいからつて。

しかも仔猫見つからなかったから報酬はいらないつて言っただけど、それも払うつて言うつてくれてるし、余計に断るの悪い気がして食事に行く事にしたの、だから今夜の夕食は、帰りに何か買って帰るから、レンとフリットにも、そう伝えて？ あの二人にメールしたら、食事には行くな、絶対に戻つて来いつて言われそうだからさ、シンバから伝えてほしいの、お願い！？

俺だつて行くなと言いたいんだが、そんな権利ないだろうと思いいながら、返信する。

？返事遅くなつてごめん。こっちは仕事終えたところ。夕食の事は伝えとく。でもレンダーもフリットも機嫌悪くなるから、余り遅くならないようにな？

シンバは携帯を仕舞うと、

「ラインは依頼者と一緒に食事に行くそうだ」

と、フリットの背中に話しかける。振り向くフリットに、

「数年前にいなくなった猫を探してくれた御礼らしい。見つからなかったらしいが、報酬もくれるつて言われて、食事に誘われたら断れなかったみたいだ。俺達の夕飯は何か買ってくるつて」

そう説明すると、

「は！？ 依頼者つて男か！？」

と、フリットの顔色が変わる。

「さあ？ 男かもな」

「なんでお前は反対しないんだよ！」

「なんでって……メールの確認も遅かったし、とつくに食事に向かっているだろ、今更、反対したら、余計ラインが困るだけだろ」

「レンが怒るぞ！ 絶対に！」

「俺のせいじゃないだろ、ラインのせいでもない。なのに誰に怒るんだ」

「オイラじゃない事は確かだな！！！！」

怒っているのはフリットじゃないかと、シンバは面倒そうな顔で、溜息。

「溜息が多いと幸せ逃げちゃうよ」

と、アニルが言うから、余計に溜息。

廃墟に辿り着くと同時に、アニルが、こんな所で人が住めるのかと不思議そうに聞いていたが、フリットの部屋に入ると、普通に部屋だったので確かに人が住める場所だと納得。

レンダーはデンバーが来ているようで、部屋から話し声が聞こえ、シンバとフリットは、話が終わるのを待つ事にした。

シンバは一人、自分の部屋に戻るが、デンバーが帰ってしまうとわからないと、廃墟から出て、外で待つ事にした。

瓦礫の上に座り、すっかり暗くなった空を見上げ、星を探す。

曇っているのだろう、星は見えない。それでも僅かな光を探すシンバ。

曇っていても、闇ばかりでも、空は美しいと思う。

こうして夜空を見上げていると、思い出すのはラインの事ばかり。

綺麗なモノは全てラインへとリンクする。

シンバは携帯を取り出し、保存してある画像を見る。

そこには、ラインが映っている。

いろんな姿のラインを隠れて撮って来たが、一番最初に撮った、火花を一緒に見た時の画像が一番気に入っている。

「……変な顔」

そう呟くものの、愛おしくてならない気持ち溢れてくる。

初めて手に入れた綺麗な宝物を必死で守るように、シンバはラインを守りたいと思う反面、元々持っていた大切なモノを奪われたくない。必死でリグドを奪い返そうとする自分もいる。

LTが抜けて、最初に出会った人。

最初に声をかけてくれた人。

最初に優しくしてくれた人。

最初に微笑んでくれた人。

最初に人として扱ってくれた人。

最初に綺麗なものを一緒に見た人。

それがシンバにとってのライン。

孤独じゃないと、最後まで思わせてくれた人。

最後まで振り向いてほしいと願った人。

最後まで頼りにして縋った人。

最後まで怖いと思う程に憧れてしまう人。

最後まで悪も善も右も左も運命を決めた人。

最後には同じ景色を見ていたいと思う人。

それがシンバにとってのリグド。

「シンバ」

その声に振り向くとフリットが廃墟から出て来て、こちらへ歩いて来るので、シンバは携帯を仕舞い、

「アニルは？」

そう聞いた。

「オイラの部屋にいる」

「一人にして平気なのか？」

「なんで？」

「いや、別に」

「アイツが名乗ってもないオイラやお前の名前を知ってたから？」

そう言ったフリットに気付いてたのかと驚いた顔を見ると、フリットは、シンバと背中合わせになるように瓦礫に腰を下ろし、

「バカにすんなよ？ オイラだってアイツが怪しいってわかってんよ。アイツを泳がせてルーシー・ミストと接触しようって、お前もそう考えての気付かないふりだろ？」
そう言った。

「……流石だな」

「お前より、この仕事長いつーの！ 言っとくけど、お前レベル2つてだけだからな」

「確かに」

「オイラだって記憶がなくならなければ、LT続けてレベル2ぐらい……無理だな、あの過酷な3日間は二度と耐えれない。」

「というか、耐えたくない。薬抜ける事より死を選ぶな、アレは」

「……俺は耐えるかもな」

「耐えられるのか！？ ボ口雑巾のようになるんだぞ！？ ゲロや尿まみれだぞ！？ 誰が片付けるんだ、ソレ！ つーか、片付けられるのも恥ずい！ それでも耐えられるのか！？」

「……記憶さえ、このままなら、耐えるよ。そしたらリグドと同じになれる」

「何したってリグドにはなれねえよ、あの人はオイラ達の手の届かない人なんだって！」

「……そんなの、わからない。なってみないと」

「言いながら、リグドになりたい訳じゃない、只、リグドの気持ちになつてみたいとシンバは思う。そしたら、こんな自分でもリグドに何かできる事があるのではないかと思う。」

「まあ、な。オイラだって、記憶ない癖にリグドに近付きたいと思ってる。そうだな、お前の言う通りかもな。リグドに近付けるならどんな試練も耐えられるかもしれねえな」

「ああ……でも俺は忘れたくない」

「何を？」

「ラインを。」

「お前とか、レンダーとか、ラインとか、かなり世話になつたる？」

そういう人、忘れたくない」

「へえ、ラインだけかと思った」

背後でそう言ったフリットに、鋭いなとシンバは思うが、

「それはお前だろ」

と、何も悟られないように言いながら、空を見上げるシンバ。フリットも空を見上げ、

「明日は雨かな」

と、咳く。

メール着信音。

何のメロディでもなく、ピロピロと鳴るだけの音はシンバの携帯だと、フリットは携帯を確認しない。

シンバがポケットから携帯を取り出そうとした時、廃墟からデンバーが出て来た。

長い時間、ずっとレンダーと話していたデンバー！

何を話していたのだろう、その辺も聞き出したい。

シンバとフリットは、瓦礫から腰を上げて、デンバーを見て、とりあえず、軽く会釈。

「キミ達の御蔭で、助かりました」

と、デンバーはシンバとフリットの目の前で足を止める。

「仕事だから」

そう言ったフリットに、デンバーはにこやかだ。

「通りまで出たらタクシーを拾えるかな？」

「通りまで出るのが遠いっすよ」

「ここまで歩いて来たから、距離はわかっているつもりだが」

と、フリットにそう言って、始終笑顔だ。

「あの、今回の仕事の依頼で、報酬はレンとシンバの指名手配を解くと言う他に、何かあったんすか？」

「うん？ 何かとは？」

「レンと話が長引いてたし。しかも今回は、隊長一人でここに来た事と何かあるのかなって思ってた。誰にも聞かれたくない話とか」

そう言ったフリットに、シンバは話の持って行き方がうまいなと感心する。

「実はレンに取引を持ちかけているんですよ」

正直にもそう言ったデンバーに、シンバとフリットは少し驚くが、顔には出さない。

「レンからは、まだ聞いてないみたいだね？」

そう聞かれ、コクンとシンバとフリットは頷く。

「ワタシから話しましょうか？　でも勝手に話したらレンに怒られるかな」

「聞かなかった事にしますんで」

そう言ったフリットに、デンバーは少し笑いながら、話し出した。

「レンがジユキトと言う国の出身者だと言う事は知っていますか？　頷くシンバとフリット。

「ワタシもジユキト出身です。ここ最近、そのジユキトの紋章入りの武器が出回り、その武器を装備して、喧嘩ではなく、まるで戦闘方法を知っているかのような若者が増えているんですよ。そしてLトリミットを越えているんです。アナタ達が倒してくれたら5人組もそうだった筈です。こうなったら、セク部隊のチカラではどうしようもありません。そこで、シンバ君とフリット君を我が部隊に招き入れたいのです」

「俺達をセク部隊にか！？　無理だろう、だって俺達はLトリミットを越えてる。つまりLト中毒者だったんだ。そんな人間が人々を守る為の職業になれる訳ない」

「いえ、そこはワタシの地位で何とでも誤魔化せますから」

「誤魔化すって、それ、悪い事なんじゃねえの？」

フリットがそう言うと、デンバーは、苦笑いしながら頷く。

「まあ、良い事ではないですが、そうでもしないと、Lト中毒者達を取り締められなくなって来ているんです、奴等はLトリミット越えた戦闘を知った戦士です。我が部隊は戦闘を知っている普通の人間の戦士なんですから。レンには、今回の仕事、本当に5人も捕ま

えられる事ができるのなら、是非、二人をセク部隊に入団させたい、その代わり、レンにも部隊を訓練する教官として雇う話を出したんですが、断られたんですよ」

「そりゃそうだろ、そうなたらラインはどうなる？ レンダーはラインを一人にするような選択はしない」

シンバがそう言うと、フリットも、

「オイラもラインを一人にはしたくねえ」

と、頷く。

「もう1人いた女の子の事ですな、それもワタシとしては、彼女を知り合いの菓子職人の家で働いてもらおうと言うのはどうかと提案したんです」

ふと、シンバは、パティシエになりたいと言っていたラインを思い出す。

「LT中毒者は平均寿命が50歳だと言います、短いですが、それでも、キミ達はまだ若い。何も人生を捨てる必要はないんじゃないのかな？ LTについては、確かに違法だが、今、キミ達のチカラが必要とされている。どうか我が部隊に入る事を考えてみてはどうでしょうか？ レンだって、ここでキミ達と何でも屋という不安定な仕事をしているより、ちゃんとした安定ある暮らしをして、彼もまだ若いんだし、何れ結婚でもして、幸せになる権利はあると思うんです。例えばジュキト出身でも」

黙って俯いているシンバとフリットに、

「リグド・カツツェルという人物を知っていますか？」

そう聞いたデンバーに、シンバとフリットは、顔を上げる。

「彼は……とても恐ろしい人物です。彼のLTリミットは近々ファイナルとなるかもしれませんが。キミ達は、その彼に立ち向かえる英雄になるかもしれない」

デンバーは、そう言うと、シンバとフリットの手の中に、小瓶を入れる。

なんだろうと、シンバとフリットは小瓶を見て、中に入っている錠

剤を確認して、直ぐにL.Tだとわかり、驚いた顔でデンバーを見る。
「キミ達はL.Tの何を恐れ、何に不安を持ち、何に悲しみを感じて、手放したのですか？」

「………なんでこんなもの」
フリットは驚愕した表情で、そう呟きながら、震える手で小瓶を持っている。

「もしも、キミ達が恐れ、不安に思い、悲しみを感ずる事、全てが解決できるとしたら、キミ達はレベルを上げるんじゃないでしょうか？」

「………どういう意味だ？」
シンバがそう尋ねるのを待っていたかのように、デンバーはフツと笑みを浮かべると、

「ワタシの電話番号が、その小瓶の中に入っている。もし気が向いたら、電話を下さい。レンはきつとキミ達がセク部隊に入る事を納得しないでしょうから。直接、話し合いますよ、キミ達だって、何でも屋をやるより、世の英雄になった方がいいに決まっています」と、じゃあと手を上げて、シンバとフリットの横を通り抜けて帰って行く。

フリットはシンバの手の中の小瓶を見て、自分の手の中の小瓶を見て、

「こ、こ、これ、聞かなかった事にしとけないだろ！」

そう言うが、シンバは、

「俺は聞かなかった事にする」

と、小瓶をポケットに仕舞った。

「お前、まさか」

「言うな」

「………」

「わかってるから何も言うな、何も聞きたくない。俺もお前がどうしようとも何も言う気はないし、俺がどうしようとも何も言われたくない」

「でも………畏かもしれないぞ」

「だから簡単に言葉にできない。まずはルーシー・ミストに接触する！ ジュキトの武器やLTの出所、ハッキリさせよう。レンダーには言うな。俺達だけでやるんだ」

「………本気か？」

「嫌なら俺だけでやるから、邪魔しないでくれ」

邪魔をする気はないが、フリットは不安で一杯になる。

シンバは、これ以上、話せば、言い合いになるかもしれないと、フリットから視線を逸らす為、携帯を取り出し、さっきメールが来ていたなと確認をする。

「………シンバ、どんな決断をしても、ラインだけは悲しませないようにしようって約束しような？ オイラはラインさえ笑顔でいられるなら、別にそれでいいんだ」

それはシンバも同じ気持ちだったので、

「ああ」

直ぐに頷いた。

そう、確かに、この時は頷いたのだが、メールを見た途端、その約束を忘れ去る程の衝撃がシンバの体を突き抜け、

「………ラインと………リグドが一緒にいる」

携帯を片手に、そう呟いた。

「え？」

フリットはシンバが何を言っているのか、わからない。

黙ったまま、硬直するように動かず、ジツと自分の携帯画面を見つめ続けるシンバに、フリットは、シンバの携帯を覗き込んだ。

そこにはラインとリグドが笑顔で一緒に映っている。

訳がわからず、シンバの携帯を取り上げ、フリットは、

「なんだよ、これ！？」

と、メールの宛先を確認しようと、メール内容に戻ると、

？仔猫探しの依頼者の友人さん！ 一緒に食事したの！ かなり男前じゃない？ 思わず一緒に画像撮っちゃった！？

ラインからの、その内容に、フリットは愕然。

シンバは空を見上げ、深呼吸し、気持ちを落ち着かせようとするが、全く意味のない深呼吸で終わる。

「なんで………ラインがリグドと一緒に………ラインは帰って来るよな？」

わざわざ、こんな画像を撮ってよこしたのだ、こちらの反応を伺っているのだろう、こちらが大騒ぎさえしなければ、ラインは無事に帰って来るだろう、だが、

「ラインの気持ちは帰ってこないかもしれない」

シンバはそう呟く。

「え？」

「フリット、お前も知ってるだろ、リグドを知ったら、リグドに夢中になる。俺やお前のように。ラインだってリグドに魅了される。

きつとリグドに夢中になる」

そう言ったシンバに、フリットは嘘だと、その言葉さえ出て来ずに呆然とする。

「フリット、俺はLトリミットを越える」

言うなと言っていたのに、簡単に言葉にできないと言っていたのに！ハッキリと言いつつ切ったシンバに、フリットはまたも啞然。

その台詞を吐いたシンバの心境は、フリットには、絶対に言えないだろう。

そしてシンバも、リグドに対し、こんな気持ちを抱いたのも初めてだろう。

それは強い嫉妬。

シンバとフリットはアニルを連れて、レンダーの部屋に来ていた。「そうか、親がいるのか。だったら俺様達と一緒に住む事はできねえな」

アニルを仲間にしようと考えていたのか、レンダーがそう言うが、「僕はシンバさんとフリットさんの下で働きたいよ、僕も仲間に入れて！」

と、アニルが言う。レンダーがシンバとフリットをギロリと睨み、「セク部隊に渡さなかった事で随分と気に入られて懐かれたようだな」

そう言うのと、シンバはレンダーから目を逸らし、フリットは首を傾げて苦笑い。

「それよりアニル、お前の武器をレンダーに見せてやれ」

シンバがそう言うのと、アニルは頷き、鞆からナックルを取り出してレンダーに見せた。

「ジュキトの紋章が入ってるだろ？」

フリットがそう言うのと、レンダーは頷いたが、

「だが、これはお前達が持っているジュキトの武器とは違う。フリット、お前のダガーを貸してみる」

そう言うて、フリットからダガーを受け取ると、

「紋章は同じだが、そのまわりにある武器の装飾が違う。この装飾も紋章を刻む時に付けられたものだ。つまり、この武器は、元ジュキトの武器ではなく、新しくジュキトの紋章が彫られたものだ」

そう説明し、シンバとフリットは、武器を見て、確かに装飾が違うと思う。

「で、この武器をLTで生き残った奴に、タレントが配ってるって？」

レンダーがそう言うて、今度はその鋭い片目をギロリと動かし、ア

二ルを見る。

アニルはビクツとして、俯いて、レンダーの瞳から目を逸らし、体を小さくすくめている。

「そんな怖い顔で詰め寄ったら怯えるだけじゃねえか」

フリットがそう言うが、レンダーはフンツと鼻で笑い、

「ＬＴリミットレベル１が俺様を怖がるのかよ」

と、アニルを見て、また鼻でフンツと笑う。

「そんな事より、レンはデンバーから何か聞き出せたのか？ あのジユキトのピンバッチをしてる男は、やっぱりこの国のプレジデントとは腹違いの兄弟だったのか？」

「ああ、ソルク・モルザ。国家から姿を消したとは言っても、戦士の方に位置し、今はセク部隊や、この国の海軍、陸軍、空軍をまとめる大元帥という立場らしい。ジユキトのピンバッチは特に意味はないと言っていた」

「・・・意味はないか。ソレを信じたのか？」

そう聞いたシンバに、レンダーは黙る。

勿論、信じた訳じゃないだろう、何かあるとは察しているが、聞けなかったのだろう。

深く追求して、何かに巻き込まれるのを避けたか、或いは、昔の戦友との関係を壊したくないと考えたか、聞くまでもなく、納得の上の事なのか。

「兎も角、俺様とシンバの指名手配は帳消しとなり、これからは仕事もしやすくなるだろう。セク部隊と関わる事もないだろうから、この事はもう忘れるんだ」

そう言ったレンダーに、

「ジユキトの紋章の武器が出回り、ジユキトのピンバッチを付けた男が、この国の戦士達を統一させ、ＬＴリミットを越えた奴がゴロゴロ出てきてるのに忘れるのか？」

シンバが問う。レンダーは即決で頷き、

「俺様達には関係のない事だ。関わる必要はねえだろ」

そう言った。

「わかった」

シンバも即決で頷き、フリットも、

「オイラもわかった」

と、頷いたので、レンダーは驚いた顔でシンバとフリットを見た。

「随分と物分りがいいじゃねえか？」

「動くのはオイラ達だけど、決めるのはレンの仕事だ。オイラ達は従うよ」

フリットにそう言われたら、レンダーもそうかと頷くしかない。

「それで、うちの姫はどこにいるんだ？」

レンダーはラインの姿がない事に尋ねる。

「仔猫が見つからなかったらしいが、報酬を渡すと言われたらしく、しかも数年前にいなくなった猫探しをしてくれた御礼にと、食事に誘われ、断れなくて食べてくるらしい。俺達の夕飯は何か買ってくるってメールが来た」

シンバがそう言うと、レンダーは、不機嫌な顔になり、

「何故ダメだと言わなかった!？」

と、シンバに怒鳴る。

「そのメールが来てる最中、俺は仕事だった! 直ぐに返信できなかったから、メールが来てから時間が経ってたのもあるし、正直、飯位、いいかと思った!」

怒鳴り返すように、そう言ったシンバに、レンダーは、圧倒される。

「な、なんで、怒ってるんだ、お前が？」

わからなくて、そう聞いたレンダーに、今、ラインはリグドと一緒にいるんだと言いそうになるが、シンバは、言葉を呑み込み、

「そっちが怒鳴るからだ」

そう言って、溜息。

「あの、僕は仲間に入れてもらえるんでしょうか？」

アニルが、そう言って、皆を見回す。

「お前、もう帰れ」

レンダーがそう言つと、なんで!?!と、アニルが、
「役に立つよ! これでも結構強いんだ!」
と、必死。

「そりゃ強えだろつよ、ＬＴリミットレベル１なんだから。だが、親もいるなら、真つ当な道を歩め。まず親にＬＴ中毒だった事を話し、これからの事を話し合つんだ、お前はこれから先の人生、就職は難しいだろう。だが、自営業つて手もある。中毒中でなければ、子供をつくつても、その子供にはＬＴの影響はない。二度とＬＴに手を出さず生きていけ」

アニルは黙って俯いて、レンダーの話聞いていたが、
「親に言いたくないよ」

などと甘えた事を言い出す。そこまで面倒みれるかと、レンダーは、
「追い出せ」

と、シンバとフリットに命令。勿論、シンバとフリットはレンダーがそう言つならと、頷き、アニルは二人に両脇を抱えられて、レンダーの部屋を出る。

「シンバさん! フリットさん! 僕は　!」

「友達になろう」

突然、そう言つたシンバ。

「ここには一緒にいられないが、友達になるなどはレンは言わなかつたしな」

にこやかに、そう言つたフリット。

アニルはシンバとフリットを交互に見上げるようにして、コクコク頷く。

シンバとフリットはアニルを離し、

「ＬＴリミットを越えた者同士だ、仲良くやろう」

「そうそう、何かと悩み多き年頃だしな、オイラ達。相談相手になつてよ、勿論、なるよ」

そう言つので、アニルは、

「うん! ありがとう! 仲良くしようね!」

と、本当に嬉しそうな笑顔。

「んじゃ、今日の所は帰れ。道わかるか？ オイラが途中まで送ってやるうか？」

「ううん、大丈夫！ あ、僕の携帯を……………」

「ああ、じゃあ、通信で」

フリットとアニルは携帯を取り出し、お互いの番号とアドレスを交換。その後、シンバとアニルも通信で、番号とアドレスを交換。

アニルは嬉しそうに、そして携帯を大事そうに持って、手を振り、帰って行く。

何度も振り返るアニルに、フリットも笑顔で手を振り返し、シンバも見送りながら、

「かなりの演技力だな。どうする？ シンバ？ 後付けるか？」

「いや、向こうから動き出すのを待つ。それに尾行がバレて、アニルとリグドに接点があれば、今、リグドとラインが一緒にいる時点で危険度が増す。兎に角、今はラインの無事が先決だからな。でもこれで……………ルーシー・ミストに近付けそうだ」

小声で口は動かさず、会話。

アニルが全く見えなくなるまで見送り、そして、シンバとフリットは廃墟へ戻る。

時間は8時をまわっている。

キッチンとなる部屋へ向かい、シンバは何か食べれるものがないかと冷蔵庫を開け、食材はあるが、何も作れないと、スポーツ飲料を手に取り、それを飲み始める。

レンダーもフリットも同じ事を考えていたのだろう、二人、キッチンへ入って来た。

フリットも冷蔵庫を開け、牛乳を取り出し、そのまま飲み始めるから、

「コップ使えよ、お前だけの飲み物じゃないんだぞ」

シンバが注意すると、

「全部、飲み切るからいいだろ」

と、牛乳で空腹を紛らわす気だ。

「ラインの奴、遅くねえか、電話してみる」

そう言ったレンに、電話したら、傍にリグドがいた場合、こちらが心配しているのがバレてしまう。ラインに対して、無関心だとリグドには思わせたい。

「まだ8時だ、普通だろ」

そう言ったシンバに、

「もう8時だ！」

と、レンダーは怒鳴り、

「おい、フリット、お前もそう思うだろ？ 電話しろ」

シンバでは話にならないと、フリットに持ちかけるが、フリットは少し考えて、

「オイラも電話したいけど、こういう時って、電話したらウザイって思われそう。レンだって、ラインに嫌われたくないだろう？ あ

んまりガミガミ言つと、逆に反抗して帰って来なくなると嫌だし、ここは帰って来てから、いつものように説教がいいと思うけど」

一応、尤もらしい意見を言う。

「朝帰りしたらどうするんだ！」

怒鳴るレンダーに、

「その時はその時だろ、17歳の女の子だぞ、それぐらい、たまにはいいだろ」

そう言ったシンバに、

「17歳の女の子だからダメなんだろうが！！！！」

更に大きな声で怒鳴り、シンバとフリットは耳を塞ぎたくなる。

「そんなに心配なら聞か、ラインが引き受けた仕事の仔猫探しを依頼した人、どんな奴だったんだ？ 男なのか？」

さりげなく、怪しいと思われないように、質問するシンバ。

「女だった。電話ではな。だが、わからんだろう、電話だけでは。

いつも言っているが、客相手に深入りは絶対にするなってな。危険な仕事の場合のみ、俺様が直々にクライアントに会いに行き、信用

なる相手かどうか確認してから仕事を受ける。今回は別に危険な仕事じゃねえと判断したから、クライアントには会ってない。電話だけだ。それをわかっていながら、ラインの奴、勝手な行動に出て、万が一って事があるだろう！」

「これからは危険じゃない仕事だとしても電話だけってのはやめようぜ？ もうレンも指名手配じゃねえんだしさ、ちゃんと依頼者に会って、ソイツの素性を調べてから、仕事を受けるか受けないか決めた方がいい」

フリットの言う通りだ、レンダーも、そう思ったのだろう、コケリと頷き、

「そうだな、その方がいいな」

そう言うが、もう手遅れだとシンバは思う。

シンと一瞬静まり返り、フリットは、この空気がヤバイヤバイと、「腹も減るしな！ やっぱ仕事終わって直ぐに帰って来てくれないときー！」

と、笑う。その時、

「どうしたの？ みんなして冷蔵庫の前で」

ラインがキッチンを覗き込み、現れた。

「ハンバーガー買ってきたよ」

と、テーブルの上に、買い物袋を置いて、そう言った。

シンバとフリットは、その買い物袋を漁り、ハンバーガーを何個か手にすると、黙ってキッチンを出て行く。レンダーの説教が始まるからだ。

ラインはソレを察して、

「私もシャワー浴びて、寝ようかなあ」

と、伸びをして、出て行くこうとするが、

「ここに座れ、ライン」

怖い顔で、レンダーが言うので、やっぱり？と、ラインは苦笑い。

シンバとフリットは自分の部屋へ向かう途中、安堵の溜息を吐いていた。

「無事に戻って来て良かったなあ。お前がラインもリグドに魅了されるなんて言うからさ。帰って来ないんじゃないかと心配したぜ、全く！」

「フリットは、ラインとリグドなら、どっちを取る？」

「は？」

「リグドに近付きたいと思う程、リグドに憧れてるんだろう？でもラインの事を好きだよな？もし、どっちかって言ったら？」

「どっちかって何がだよ、比べる対象が違うだろ、それにさ、リグドは関係ないだろ、今回、たまたまラインと出会っただけで、これからは」

「リグドはラインを殺すかもしれない」

そう言ったシンバに、フリットは足を止める。シンバは振り向いてフリットを見る。

「レンダーはジュキトの生き残り。リグドはジュキトの実験材料。

ジュキトへの恨みが消えてなかったら？リグドはジュキトが生み出した、ジュキトの闇だ。その闇に呑み込まれ死んでいった者が、まだ光の下で生きていると知ったら、闇はどうすると思う？」

「……ラインには関係ない話だろ、殺されるならレンダー！？」

「レンダーが大事にしている者を奪う事も有り得る」

「それがラインだって言うのか！？」

「違うのか？」

「そうだけど！」

「レンダーはソレを恐れている」

「！？」

「だからレンダーには、この事に関して何も伝えたくない。大騒ぎになり兼ねない」

「もしかして、今回、ラインに接触したのは……」

「ああ、多分、俺達に画像まで送らせて、ラインをどれだけ大事に思っているのか、俺達を試したのかもな。大騒ぎせずに正解だ、ラ

インは無事に戻って来た」

「でもレンに話した方がいいんじゃないのか!？」

「話しても、逃げるだけだろ、直ぐにまた捕まる。それに逃げたら余計に追うだろうな、そして今度こそ、逃げる程に大事だったのだと気付かせてしまう」

「……………」

フリットは手に持っているハンバーガーをポロポロと下に落とし、何とも言えない表情でシンバを見ている。シンバはそのハンバーガーを拾いながら、

「ラインとリグド、どっちを選ぶ?」

再び、その質問を投げかける。

「ライン」

そう答えたフリットにハンバーガーを渡し、

「そう言うと思ったよ」

と、シンバは少し笑ってみせる。

「そりゃそうだろ、だって、憧れと大事なものは違う! リグドは確かにオイラにとって憧れであり、そうなりたいと思う相手かもしれないけど、ラインは失いたくない家族だ! 傍にいてほしい人だ! 大事な人なんだよ! シンバ、お前もそう思ってたんだろ?」

「……………俺はリグドも家族みたいなもんだったよ」

「え?」

「誰もいなかった、リグドしか」

「そ、それじゃあ、お前はラインが殺されてもいいのかよ?」

「よくない」

そう答えたシンバに、フリットはホツとして、

「そうだろ? でもオイラのラインだからな?」

と、笑いながら言うが、シンバは黙っている。フリットは不安になる。

「……………シンバ? 何考えてる?」

「いや、別に。只、Lトリミットを越えて、リグドと同じ強さを手

に入れた時、その時に、ラインを守ってやれる奴がいて良かったな
って。フリット、お前で良かったよ、ラインの傍にいる奴が」

「どういう意味だよ？」

「これでも俺は結構お前に感謝してるって意味だよ」

シンバはそう言つと、自分の部屋へと向かう。その背に、フリット
は何も言えない。

でもフリットも同じ事を思っている。

最初は気に入らない相手だったが、それでも共に朝起きて、食事し
て、何気ない会話をして、教え、教えられ、一緒に仕事もこなして
来た今は、気に入らないどころか、最高のパートナー。

いつしか、気付かない内に、友達、それ以上の親友だと思う程、心
を許していた。

シンバの言動全てを根拠もなく、理由もなく、信じられた。

シンバに対し、？ありがとう？そう言いたい事は沢山ある。

だが、ソレを言葉に出して言う事も、態度で示した事もない。

何故なら、これから先もずっと仲間として傍にいると思っっているか
ら。

「……………レベル超えてもオイラ達は一緒にいるんだよな？」

今更、見えなくなったシンバの背に、独り言で問いかけるフリット。

シンバは部屋を閉めて、ベッドに座り、ハンバーガーを口にする。

ラインの料理がいいと思いつながら、もくもく口を動かして食べる。

そして、ポケットからデンバーにもらったLTの小瓶を取り出して
見る。

LTを口にできれば、それだけで最高だった。

口の中で噛み砕く音が、脳に響くと、直ぐにでもトリップできそう
で、世界が色鮮やかに、背中に翼がはえたようで、体が軽くな
り、ハイテンションになれる。

自分は世界の中心で、どんな奴でも自分には跪くだろうと、変な自
信が湧く。

気に入らない奴は叩き潰せばいい。

それだけのチカラが漲っている。

銃だろうが、大砲だろうが、光線だろうが、どんな兵器も怖くない。恐怖なんて全く知らない。

知っているのは、最高の気分、最強のチカラ、最大の自信。

最高の気分と最強のチカラと最大の自信をLTという薬で手に入れている頃。

？シンバ、ほしいか？？

LTを指で弾き、リグドが言う。

コクコク頷くと、リグドが嬉しそうにニヤリと笑い、

？なら、誰を殺す？ そうだな、適当にホームレス辺り、殺してみるか？

そう言つて、LTを投げってくる。

小さなLTを、パシッと受け取ると、

？イイコだ、もっと欲しけりゃ、ムカツク奴、手当たり次第、殴り殺して来い？

と、まるで仔犬を撫でるように、頭を撫でてくれた。

今はもう、その後の事は覚えてない。

誰を殺したのだろう、どうやって殺しただろう、全く記憶にない。だから罪悪感もない。

記憶とは不思議なもので、失うと、大事なモノでも、大事ではなくなり、持っているだけで、どんなに過酷で辛い運命だとしても、それだけしか知らないから、それが大切なモノになる。

だから忘れたくない、ラインを。

シンバはLTが体から抜けて、ラインに会い、LTを欲しいと思わなくなった。

そして、最愛という事を知った。

掛け替えのない存在。

我が身を盾にしても守りたいと思う存在。

生きて欲しいと願い、幸せになってほしいと祈り、愛おしい気持ち溢れて止まない存在。

シンバはラインを守りたいと思う。
そして、リグドの傍にいようと思う。

そう思う事を忘れたくない。何も失いたくはない。記憶をひとつひとつ覚えていたい。

アイツ………アニルは何故、記憶があるんだろう？

いや、記憶は失っているが、本人がそれに全く気付いてない状態とか？

だとしたら、周りの反応も変わってくると思うが………。
シンバはLTの小瓶の蓋を開けて、中の紙切れを取り出し、デンバ
ーの電話番号を見る。

携帯に登録しておくかと、デンバーの番号を携帯に登録した後、その紙切れをまた瓶の中に入れようとして、一粒、シンバの手の中に転げ落ちたLTに、違和感。

これ………？ LTなのか………？

シンバはその一錠を手の平に置いたまま、ジーツと見つめ、首を傾げる。

LTってもっと大きくて、噛み砕かなきゃ飲み込めないイメ
ジがあっただけ。

これ、小さくないか？

普通に水なしで飲み込めるよな？

そういえば、クラブで会ったリグドはLTを噛み砕いただろうか。
シンバは思い出そうと考え込むが、思い出せず、フリットにこのLTを見せてみようと思い、ハンバーガーを頬張り、食べ終わると、
部屋を出た。

フリットの部屋はノックしても返事がなく、少しドアが開いていた
ラインの部屋から話し声が聞こえ、シンバはそっちへ向かう。

ドアは開いているものの、トントンとノックをして、部屋を覗くと、

「シンバ、聞いてよ！」

と、ラインが早速シンバに話題を振る。

どうやらレンダーの説教はもう終わったようだ。

「フリットがね、私の携帯を見せろって言うの！ プライバシーの侵害だよ！」

「全部見せろって言うてないだろ、今日、一緒に食事した奴の番号とアドレスを登録してあるのか、どうか、確認させろって言うてんだよ！」

「そんなのフリットに関係ないじゃん！」

「レンから説教されたんだろ！？ 客と深く関わるなよ！」

「もう依頼受けてないんだから客じゃないでしょ！？」

「兎に角、確認させろ！」

そう吠えるフリットに、シンバが、やれやれと溜息。

「いいじゃないか、そんなの見逃してやれよ」

まさかのシンバの台詞にフリットは何言っただと怒りの矛先がシンバに向かうが、フリットが何か言う前に、

「あの画像の男、かつこよかったな、名前なんて言う人？」

と、笑顔でラインに聞くから、フリットはシンバがわからなくて、

「何考えてんだよ！」

と、シンバの胸倉を掴んだ。

「お前と同じ事しか考えてない」

小声でそう言ったシンバに、フリットは何が？どこが？と眉間に皺を寄せるが、シンバに胸倉を持っていた手を振り解かれ、フリットはとりあえず、シンバの出方を伺う事にする。

「………名前はクロスって言った」

そう言ったラインに、やはり本名の？リグド・カツツエル？とは名乗ってないかと、シンバとフリットは思う。

名乗っていたら、ラインも気付いている筈だ。

「へえ、クロス。名前もカツコイイな。良かったな、いい男と知り合いになれて。それより、ちょっとフリット借りる。今日の仕事の事で、ちょっと話があった」

シンバはそう言うと、フリットをチラッと見て、目で合図するよう
に、ラインの部屋を出て行く。フリットはラインを見て、何か言お

うとするが、言葉を我慢して、部屋を出て行ったシンバを追い、口
ーカに出る。

少し離れた場所で、シンバが待っているの、シンバに歩み寄りな
から、

「何考えてんだ、お前」

不機嫌にそう言った。

「あんな風に否定してもラインは納得しない。でもラインにクロス
がリグドだと知られたくない。知ったら、ラインがどう思うか、心
配だ。リグドに惹かれるまま、リグドの所へ行くかもしれないから
な」

「だったら！」

「ラインがシャワーでも浴びてる隙に、ラインの携帯のクロスって
登録のアドレスと番号を変えるんだよ。こっちからメールしても届
かなくなる。いちいち、どんなアドレスと番号だったか、覚えちゃ
いないだろ。クロスの本当のアドレスと番号は着信拒否にするんだ。
向こうからもメールが届かない。電話もな。後はもう会わせないよ
うにするだけ」

「……………成る程。そういう手があったか」

「それより、デンバーからもらったLTだけど」

シンバは小瓶を取り出し、蓋を開けて、一粒、手の平にLTを乗せ
てフリットに見せる。

「粒が小さくないか？」

「そうか？ もうLTから離れて、かなり経つからなあ。そう言わ
れても……………」

「噛み砕いたんだよ、俺。一粒が大きくて、噛み砕いて食べてた。
そうして食べた記憶は残ってる。でも、これ、水なしで飲み込める
大きさだと思わないか？」

「ああ、そう言われれば」

「どついう事だと思っ？」

「どついう事って？」

「昔のLTとは違っつて事だろ？ LTは研究され続けていたとは考えられないか？」

「・・・・・・オイラ達が食べてたLTは開発途中だったと？ これは新しいLT？」

「デンバーの台詞、覚えてるか？ もしも恐れや不安や悲しみを感ずる事全てがっつて奴」

「もしも、キミ達が恐れ、不安に思い、悲しみを感ずる事、全てが解決できるとしたら、キミ達はレベルを上げるんじゃないでしょうか？」

「ああ、覚えてるよ」

「・・・・・・アニルは記憶を失ってなかった」

「ちよつと待てよ、シンバ。このLTは記憶を失わずに、レベルを上げれるっつて言うのか？」

「わからない。でも、だとしたら」

「ちよつと待てっつて、早まるなよ？ まずはちゃんとした情報を得てからだろ？ 勝手な思い込みで早まるなよ」

「わかつてる」

「とりあえずさ、ジユキトの紋章入りの武器の出所を探ろっぜ？ デンバーやソルクッて奴等が絡んでる気がするし、アイツ等の狙いがジユキト復活であるという証拠を掴まないとき、レンはデンバーを信じきってるし、まずは証拠だろ」

「・・・・・・ああ、そうだな」

証拠を掴んだ所で、どうなると言うのだろう。

この国の軍やセク部隊、そういう戦士達を仕切っているのはソルクだと言うのなら、この国がジユキトに変わろうとしていると、誰に伝えれば、それを阻止できるのだろう。

戦わなければならないのであれば、軍もセク部隊も蹴散らせるチカラが必要だ。

そして、それが、LTというチカラなのではないだろうか。

だが、LTを持っているのもデンバー達だ。

シンバは無力だと、深い溜息を吐く。
だから、敵を倒すという目的じゃなく、ラインを守るといふ使命で動くしかないと思う。

今、ラインの部屋のドアが開き、

「まだそんな所にいたの？」

と、バスタオルと着替えを持ってラインが出て来た。シャワーを浴びに行くのだろう。

「ああ、ちよつと話が長引いて」

そう言ったシンバに、フウンと頷き、ラインは行ってしまふ。

シンバとフリットは二人、頷くと、ラインの部屋に入り、充電してある携帯に手を伸ばす。

今の所、クロスからメールが来た形跡はない。

こちらから出した形跡もない。

フリットはクロスで登録してあるアドレスと番号を拒否設定にし、その後、そのアドレスと番号をデタラメに変えて、登録し直す。

「バレなきやいいけどな」

そう呟く。

シンバは、万が一、ラインが直ぐに戻って来た時の為に、ドアの前に立っている。

「……………なんでクロスなんだろう？」

「は？」

「偽名。なんでクロスなのかなって」

「そんなの適当だろ」

「そうかな、リグドの大切な何かかもしれないだろ？」

「どうでもいいよ」

「……………気にならないのか？」

「気になるどころか、気に入らねえよ」

「リグドが気に入らない？」

「ああ。オイラ、わかったんだ」

「……………」

「人ってさ、大事なモノがないと、リグドみたいになるんだ。恐怖なんて知らない人間。それがカツコイイって思ってたオイラは、遠い遠いと思ってたけど、リグドに一番近かったのかもしれない。でも今は違う。怖いんだよ、この生活を失う事が。ラインがいなくなる事が。死ぬ事が。大事なモノがあるから、怖いんだ。それってカツコ悪いって思ってた。だからリグドみたいになりたくて、リグドをカツコイイって思ってた。カツコ悪くても守る事がカツコイイのにさ。あの頃のオイラは大事なモノなんてなかったから、本当の力ツコ良さを知らなかったんだ。攻撃的で、歯向かう者には拳を振り上げて、血を見て、喜んで、ハイテンションで浮かれて、オイラは、そうやって、ちゃんと現実と向き合わず、トリップした世界で、強さに勘違いして、何人の大事なものを奪ったんだろう。本当のカツコ良さを知るのが遅すぎて、そんな事も気付かず、今は後悔ばかり」

「……」

「それに気付いた今は、もう、リグドに憧れはない」

「……」

「シンバ、お前は？」

「……でもリグドは被害者だ」

「被害者なら何してもいい訳じゃない」

「わかってる！ ラインだけは守る！ お前がラインの傍にいればいい。ずっと」

シンバはそう言うと、フリットから目を逸らし、行ってしまふ。

「おい、おいって！ シンバ！」

シンバを追うが、振り向きもせず、背を向けて行ってしまふシンバに、フリットは追いかけるのをやめて、

「わかってねえだろ、ラインはお前に傍にいてほしいんだって……」

言いたくない台詞を独り言。

シンバは部屋に戻ろうと歩いていると、髪を濡らしたラインが向こ

うからやって来る。

ラインはシンバと目が合うと、ツンとそっぽを向いて、横を通り過ぎて行こうとするから、シンバはラインの腕を引っ張った。

「何か怒ってるのか？」

「別に」

「怒ってるだろ」

ラインはジロツとシンバを見ると、

「シンバがあんまり物分りいいから驚いてるだけ！」

トゲトゲした言い方で、そう言うと、腕を掴んでいるシンバの手を振り解いた。

「何が？」

「？良かったな、いい男と知り合いになれて？って、そんなのシンバに言われたくない」

「………？」

首を傾げるシンバに、ラインはベツと舌を出して、思いつきり怒ってますオーラを放ちながら、ドスドス足を鳴らし、自分の部屋へと向かう。

「………は？」

全く理解できないシンバは、ラインの態度に、思いつきり疑問。そして溜息。

また何かやらかしてしまったのだろうか、意味はわからないが、深く反省気分。

シンバは部屋に戻り、ベッドに寝転がる。

天井を見ながら、ラインは何故怒っているんだろうとか、リグドはルーシーがやっている事を知っているのだろうかとか、フリットはもう迷わないんだろうとか、いろんな事を考える。

寝返りを何度か繰り返し、その内、寝てしまった。

朝。

いつものように仕事に向かう。

夕方には終わり、帰り際、アニルからメールが入り、駅前で待ち合

わせ。

ポツポツと振っている雨。

ナイロンの錆びた傘を持ち、立っているシンバ。

「シンバさん、ごめんなさい、待ちました?」

と、アニルは青い傘を持って、走って来た。

「いや」

そう答え、アニルの手に持たれている食べかけのフランクフルトを見ると、

「あ、これはちゃんと買いました!」

アニルがそう言うので、シンバはそうかと頷いた。

アニルは、傘を肩と顎で持つと、片手で、ショルダーバッグの中から、

「あの、これ、ルーシー・ミストのライブチケットです」

と、チケットを出してきた。

「……どうしたんだ? これ?」

「ネットで、オークションで売られていたので、昨夜、競り落としました!」

「それをなんで俺に?」

「……なんででしょうね?」

苦笑いしながら、首を傾げて、そう言ったアニルに、

「誰に頼まれて、俺に渡せって?」

聞いてみると、

「ルーシーです……」

意外に正直な答え。

「ルーシー・ミストが俺を呼んでるって事?」

「はい、勿論、僕がチケットを競り落とせたらって事で。今月のチケットはもう完売してますから。なんか……よくわからないけど……?元お気に入りと話がしたい?だそうです……」

「元……ね、いいよ、ライブ、楽しみだって伝えてくれ、

て言っても、そんな事、言えないか」

「・・・・・・・・挑戦を受けるんですか？」

「その為に、お前は俺に接触したんじゃないのか？ わざわざ万引き常習犯になって。柵にある全ての駄菓子を盗んで、犯人ですって言っているようなもんだろ。しかも証拠が掴めないんじゃないよあ、店側も御手上げで、何でも屋に相談するしかないよな。セク部隊に頼んで大事になって、万が一、犯人じゃなかった場合、大変な事になるし」

「そこまでわかってたんですか？ いつから？」

「お前が俺の名前を知ってた時から」

「・・・・・・・・そっか」

「わからないのは、なんでお前が、素直にルーシーに頼まれたと吐いたかって事だ。意外にも動き出すのが、昨日の今日で早いのも驚いたが、まさか正直に言うなんて、まさに予想外。何か考えがあつての事か？ 何を企んでる？」

そう聞いて、これもまた正直に話すだろうか、シンバは疑わしい顔をするが、

「企みなんて、昨日、？友達になろう？って言ってくれたから
アニルは恥ずかしそうに俯くと、そう言った。

「・・・・・・・・・・は？」

シンバは眉間に皺を寄せて、なんだそれ？と、わからないと言った表情。

「あ、やっぱり、友達になろうなんて、嘘だったんだ？」

苦笑いしながら、アニルはそう言って、

「嘘かと思ってたんだけど、でも、嘘でも嬉しかったんだ。僕、ＬＴリミット越えてから、友達がいないから。レンダーってオジサンは二度とＬＴに手を出さず生きていけって言ったけど、一度ＬＴに手を出して、リミット越えたら、普通の人じゃないんだよね。あ、確かにルーシーから、シンバさんの所に潜り込めって言われて、昨日は仲間になろうとしたけど、今日は別に仲間になりたいから、こ

んな事、言ってるんじゃないよ?」

照れくさそうな顔で、シンバから目を逸らし、そう話す。

「僕さ、友達も失って、独りだったんだ。LTリミットレベル1つで強さは手に入ったんだけど、孤独でさ、家族にも話せないと思うし、寧ろ、家族だからこそ、話すべきじゃないと思うんだよ。レンダーってオジサンは話せて言ってたけど。僕はまだ子供で、未熟で、独りで決断する事ができなくて、いろんな事、ルーシーに決断してもらって、僕はソレに従う。そうする事でルーシーの傍にいられるって、独りじゃないって」

チラツとシンバを見て、

「でもまさかレベル2なんてね。聞いてないよってビビッちゃった。ルーシー以外で、俺より強い人に会ったのは初めてだよ」と、照れたように笑うアニル。

コイツも孤独なんだな。

家族がいても独りなんて、LTの代償は大きい。

コイツにとって、ルーシー・ミストが、俺にとってのリグドみたいなものかな。

そして俺が、俺にとってのラインみたいなものかな。

そういえば俺もそうだったな、リグド以外で俺より強い奴に会ったのは初めてだった。

幾らLTがキレそうだからって、小柄なピース・ラバーにやられた事は不覚だった。

まさか女だったなんてな。

少し思い出し笑いで、顔が緩むシンバに、アニルは首を傾げる。

でも、あそこで、やられなかったら、俺、未だ、LTキメてトリップしてたのかな。

それでもリグドの傍にいられるだけ、幸せだったのだろうか。

あの頃はLTをもらう事で IPPAI IPPAI だ。

リグドの傍にいられる事に、どうこう考えた事があっただろうか。

極当たり前に、明日も明後日もリグドは俺の隣にいるもんだと思っていた。

それを失って、こんなにも自分はリグドだけだったんだと思知らされた。

「それじゃあ、僕はこれで。塾があるんで。一応、ちゃんと勉強だけはしてるんだ」

と、手を振るので、シンバも手を上げ、バイバイと別れた。

手元に残ったルーシー・ミストのチケット。

シンバはチケットを見ながら、

「元お気に入りか。本当に、俺を気に入ってくれてたなら、こんなにムカツク事もなかったかもな」

と、チケットを手の中でグシャツと握り締めた。

そして、携帯を取り出し、誰かに電話。

「あ、もしもし、デンバーさん？ LTについて、質問があるんですが……」

シンバは、この後、デンバーと会う事になる。

9・特別

鼻歌を歌いながら、ご機嫌に帰って来たシンバに、

「お前、何の連絡もなく、仕事終わっても帰って来ないって、レンが怒ってるぞ」

と、廢墟のローカでフリットが、シンバの腕を掴み、小声でそう言った。そして、

「お前……びしょ濡れじゃないか、傘どうしたんだよ？」

濡れているシンバに不思議に思い、聞くと、シンバはヘラツと笑い、

「ああ、傘？ ええつと？ 持ってたっけ？ ちよつと町をぶらぶらしてたからさあ」

そう言った。その明るい声色とシンバの明るい表情に、フリットは眉間に皺を寄せる。

「……お前、まさか、LT飲んだのか？」

「ん？ うーん？ あはは、何、大丈夫だって！」

言いながら、フリットの手を振り解こうとするシンバを、グイッと引き寄せ、フリットはシンバの懐、ズボンのポケットなどに手を入れ、そして、LTの小瓶を見つけ、取り出した。

「なんで持ち歩いてんだよ！ しかも、かなり減ってるし！」

「返せよ！」

突然、大きな声で怒り出し、フリットからLTを奪い取るシンバ。

「……思いつきし症状出てんじやねえか」

「大丈夫だって！ このLTは新しく開発されたLTで、記憶はなくならない。しかもハイテンションなのは慣れる間だけ。慣れたら通常に戻って、LTも徐々に減らしていけばいいだけなんだって。そんで飲まなくなってる頃には、レベル上がってるって言うからさあ」

「

「誰から聞いたんだよ？」

「うん？ ああ、えつと……」

「デンバーに電話したのか？ 会ったのか!？」

「ああ、えつと、もういいだろ、レンダーに謝ってくるよ、遅くなつた事」

「待てよ、シンバ！ なんで勝手に行動するんだよ、オイラに何の相談もなくて」

「相談したらどうなるって言うんだ!」

また大声で怒り出すシンバに、フリットは黙り込む。

「時間がないんだよ、ルーシーのチケットが手に入ったんだ、会うしかない。だからもう俺には時間がないんだよ!」

そう吠えると、シンバは、ヘラツとまた笑い、フリットの肩をぽんぽんと叩き、

「内緒な」

と、レンダーの所へ行く。

「言える訳ないだろ……ラインが悲しむ事しないって言った癖に……」

と、フリットは俯いて呟く。

とりあえず、レンダーからは、大した小言はなく、これからは連絡するようになると言われただけで、直ぐに食事となり、皆、テーブルを囲み、いつものように食べていると、

「ああーっ!!!!!!」

と、突然、シンバは大声を上げ、立ち上がり、自分の部屋へと向かう。

レンダーとラインがビックリした顔で、フリーズしていると、

「あ、アイツ、なんか体調悪いらしくて。頭痛が酷いってイライラしてるみたい。オイラ、ちょっと様子見てくるよ」

と、フリットはシンバを追った。

シンバはベッドの上に座り、LTを飲んでいる。

「おい、本当に大丈夫なのか!？」

「なにが？」

「徐々にやめられるのか？」

「慣れれば」

「本当に慣れるのかよ!? アニルがLT飲んだ後、3日間監禁されたって言うってたよな? 徐々にやめれるなら、監禁必要ないだろ?」

「…………ウルサイな」

「このまま、レンヤラインを騙し通せると思うか?」

「そう言われ、シンバはフウツと溜息を吐くと、荷造りを始めた。

「何してるんだよ」

「出てくよ」

「はあ!?!」

「だってそうするしかないだろ、レンダーやラインに騙し通せる訳ないんだろ? LTやってるなんて知られたら、面倒になる。そうなる前に出てくよ」

「ちよつと待てよ、シンバ! 行く宛なんかないだろ」

「…………デンバーのことか」

「そんなのデンバーの思い通りじゃねえかよ!」

と、フリットが吠えると、シンバは面倒そうに、

「じゃあ、どうしろって言うんだ!?!」

そう吠え返した。

「…………LTやめるよ、今直ぐ。今日、飲み始めたなら、副作用も然程ないだろ、二夜程の下痢や嘔吐、発熱、それなら、ちよつと酷い風邪で騙し通せる」

「…………それじゃあ、レベルは上がらない。体の隅々までLTを染み込ませないと」

「そんな事したら、3日間、監禁しなければ、LTよこせって暴れるだろ! LTが体に染み付くと、LTなしでは生きられないって思うだろ! 記憶だって、本当に失わないのか!?!」

お前、傘をどこで失くしたか、既に覚えてないだろ!? 傘なら別にいい、でも大事な記憶を失ってからだと何もかも遅いんだぞ!? お前、レンヤオイラの事も忘れて、ラインの事も忘れるんだぞ!

「？」

「忘れねえよ！！！！！」

怒鳴るように吠えるシンバ。そして、LTの入った瓶をギュツと握り締め、

「ライブがあるのは、2週間後。LTが体の隅々まで染み付くにはギリギリの日にち。今、飲まなければ、レベル3にはなれない」

そう言った。フリットは眉間に皺を寄せたまま、

「ギリギリの日にちって、監禁される3日間は入ってないの？」

と、もうその疑問の答えはわかっているが、口にした。

「ああ、ライブで、LTはキレルだろう。その時、少しの間は無力になるが、それを超えたら、数十分はレベル3の強さになる」

「それ、落ち着いて考えたのか？ その後、お前は完璧にLTが体からなくなり、一気に力を失うぞ？ 気絶して、倒れて、目が覚めたら、あの悪夢だぞ？ いや、苦痛で気絶して、本当に悪夢を見ていられるなら、その方がいい。目が覚めたら最後、どんなに苦しくても、気絶さえできないんだぞ？ その時、お前は何て言うだろうな？ オイラにはわかる。お前は、LTをよこせと、叫ぶんだ」

「……………いちいちそんな説明しなくても、俺も知っている情報だ、寧ろ、おれ自身が受けた仕打ちだ、ソレ。覚えてるよ、ちゃん」と

「なら、どうして！？」

「どうしてだと！？ ルーシーを潰したいんだよ、どうしても！」

「はあ！？」

「リグドに伝えたい、ルーシーは元ジュキトの連中と繋がってるってな」

「……………それで？ その後は？」

「……………俺はリグドの信用を取り戻して、リグドの所へ戻る。そしたら、リグドがラインを狙うとしても、直ぐにわかるだろう、その時は、お前に連絡するから、お前はラインを守る」

「……そんな事、オイラが頷くと思うのか？」

「なら、他にラインを守る手段があるのか？」

「……ガツカリだよ、シンバ」

「ああ!？」

「お前がLTに手を出して、レベルを上げるとしても、オイラやラインの傍にいて、レベルを上げるんだと思ってた。いや、そう信じていた。結局、お前はラインを悲しませるんだな。なんでなんだよ？　ラインを好きだろ？　好きなんだろ？」

「わからない」

「わからない訳ないだろ、危険を犯し、ラインから離れて、ラインを守るうとしてるじゃねえか！　ソレ、好きじゃなかったら、できねえだろ！」

「わからないんだ、本当に！　俺は女と接した事なんて、ラインしか記憶にない！　だから特別に思うだけなのかもしれない！　リグドの記憶しかないから、リグドだけが特別だと思うように！　けど、ひとつ、ハッキリしている事がある。リグドはジュキトが生み出した闇そのもので、あの闇は、どんな光を持ってても、何一つ、照らし出せない。そこにあるものは、真っ黒い闇だけだから。でもそれは誰でも、持っている闇なのかもしれないけど、リグドの闇は大きすぎて、僅かな光さえもないんだよ。俺、ラインだけは、その闇に吞まれてほしくない。いつか、ちゃんとした真面目ない人と結婚して、子供生んで、最期の時まで笑ってて欲しい。俺はそれを遠くで見たい。遠くで」

「……」

フリットは言葉を失う。何故なら、フリット自身も、ラインの幸せを願うなら、ラインから離れた方が良くなってしまっからだ。

「なあ、フリット、それにはまず、ルーシーを消さなければならないんだよ。リグドの隣にいるルーシーを。わかるだろ？　アイツがいたら、俺がリグドの隣にいられない」

「……それでLTなのかよ、レベル3じゃねえと倒せない

のかよ!？」

「ルーシーのファンを調べた。アニルの言う事は嘘じゃない。確かにルーシーのライブは小規模で行われていて、200から300人程、毎月、集まっている。だが、ルーシーは架空人物として有名ではあるが、実在人物としての知名度は低い。街のモニターに流れているのを見た人も、あれが本当のルーシーなのか、知らずに、好きだと言っている者ばかりだ。だから、毎月のライブに集まるファンの面子は同じに等しい。そして、その300人程のファン、殆どがLTを飲んで生き残っている」

「い!？ 生き残って!？」

「ああ、少なくとも、この国の若者300人はLT中毒者だと言う事だ」

「……その情報はどこからなんだよ？ どうやってルーシーのファンを調べた？」

「疑わしそうな顔で、フリットはシンバを見る。シンバはそんなフリットを見て、

「知ってるか？ 今、セク部隊の方に通報されている問題のひとつで、この国の子供の行方不明者が、月に、1人から3人程度、出ているって事」

「そう聞いた。」

「え？ いや、知らないけど？」

「セク部隊のホームページなどで公開されている事件だ、子供達の顔写真を載せ、お心当たりのある方は連絡して下さいと言う文句が書かれている」

「それがどうかしたのか？」

「ルーシーのファンは13歳から16歳の子供ばかりだ。そして、LTが体に合わず、死んだとしても、1人から3人程度で、毎月、その程度の入替わりがあるだけなんだ」

「つまり、その行方不明者はLTが体に合わずに死んだ奴等って事か？」

「ああ。そして生き残った奴等、みんな、揃いも揃って、何故、毎月、ライブに行くかと言うと、LTをもらいたい為。つまり、レベル1になつた者達にも、再びLTを渡し、中毒中にさせているんだ。アニルには、レベル1になつた後、繋がりを絶つ事はせず、だが、LTを渡すのをやめたんだ、理由は、恐らく、アニルの友達が死んでしまつて、アニルが大騒ぎするんじゃないかと思つたんだろう。まだ子供だからな、結局は頼るのは親や大人になる。万が一、親になんかバれてみる、それで大事になつたら、折角の300人のレベル1中毒中の奴等は、国、いや、世界が全て葬るだろうからな。実際に、行方不明者の友達は、アニルのようにレベル1で、中毒中ではなく、だが、ルーシーと繋がっている」

「・・・・・・・・」

「つまり、俺は、行方不明者からルーシーへと辿り着き、この情報を得たんだ。帰りが遅くなつたのは、ネットカフェに寄つていた」

「・・・・・・・・よく考え付いたな、行方不明者からなんて」

「実はデンバーにLTの副作用などについて、会つて聞いたんだ、その時、今、子供が毎月、2、3人いなくなるつて、親は只の家族かと、数ヶ月も通報しない場合があり、捜査が行き詰っているんだと言う話を聞いたんだ。只の愚痴だったが、なんとなく気になつて・・・・・・・・」

「・・・・・・・・態とお前にそんな愚痴を聞かせたんじゃないかねえのか？」

「・・・・・・・・かもな」

「ルーシーがジュキトの紋章入りの武器を配っている以上はデンバーと繋がっている可能性は高いんだぞ？」

「わかつてる」

「リグドだつて、ルーシーをお気に入りだと可愛がつてるとしたら、一番の曲者はルーシーだぞ！？」

「わかつてる」

「しかもレベル1とは言え、300人だぞ！？ 300人の手下がいるようなもんだぞ！？」

「ああ」

まるで、わかってなさそうに、普通に頷くシンバに、フリットはイライラする。

「300人と戦うから、レベル上げなのかよ？」

「そうじゃない。その300人はレベル1で、中毒中。つまり、LTがキレて、数十分はレベル2の強さになる。どうして、その強さで留めているのか、何故、レベル2へ上げさせないのか、考えたんだ。多分、ルーシーのレベルは3なんだよ」

「成る程ね、手下は自分より弱くないと意味ないか。で、お前はレベル3に上がれるのか？ ルーシーと戦い、勝ったとして、その後、お前は苦しみを乗り越え、生き残れると思うのか？ たまたまレベル2まで、うまく上がったが、次も上がれると思うのか？」

黙り込むシンバに、フリットは苛立った顔から、呆れ顔になる。

「そこまで考えなかったか？」

「……………」

「相手の事は調べても、自分の事は見抜けなかったか？」

「……………」

「LTがどんなものなのか、オイラ達が一番わかってんじゃないのか？ 只のレベル上げの道具じゃない、中毒になったら飲み続けなければ、死ぬかもしれない薬なんだぞ、中毒中はどんなに思考がハッキリしてても、通常の間人から見たら、異常者だぞ。上機嫌だと思っただら、急にキレ出して、人を殺しかねない人間になるんだぞ。それだけじゃない、LT欲しさに、なんでもするようになるぞ。人を殺しても何も思わなくなるんだ！」

「……………レベルは必ず上がる。中毒の間も大人しく、自分を保てる」

「デンバーがそう言ったのか？ お前にLTを飲ませたくて、都合のいい嘘を並べ立てたんだよ、LTを飲んでくれさえすれば、後はデンバーの言いなりだろ、LT欲しさにさ」

「……………そうかもしれない。でも、他に、道はない」

「そんな事ない！ 今ならやめれるって！ まだ間に合ってる！
LTを全部、オイラによこせ！ な？ 頼むよ、シンバ。お前がもし死んだら、それこそ、オイラ一人でラインを守る事なんてできねえよ、だからシンバの今のレベル2の強さが充分必要なんだって！」
「……………今の強さで、ルーシーにも勝てないのに、どうやって守れるんだ」

シンバはそう呟くと、直ぐに、

「俺は死なない、絶対に」

そう言い放つので、フリットは、呆れて、

「ソレ、LTの影響で自信满满で言ってるだけだろ。確かに生き残る可能性はあるだろう、でも死ぬ可能性だってある」
そう言った。

「300人、生き残ってるんだぞ」

「だから？」

「俺はレベル1も2も超えて、今、こうして生きている」

「それが根拠になるとでも？」

「ああ」

「……………わかったよ、もう何も言わない」

これ以上、話しても平行線だと、フリットは諦めた。

「だが、今日、出て行くな。明日も明後日も、ライブがある2週間まで、ここにいろ」

フリットはそう言うのと、シンバから目を逸らし、俯いて、

「オイラにも心の準備つーのがあるだろ、2週間ぐらい、時間くれよ。お前がいなくても、オイラ一人で大丈夫だって、ラインはオイラが守っていくってさ」

そう言った。シンバは黙ってフリットを見ていると、フリットは顔を上げ、

「とりあえず、いつものように過ごせよ、LTはオイラも小分けにして、持ってるようにして、キレそうになったら、さりげなく渡すから、ラインにだけはバレないようにしろ。ガムと一緒に食うとか

してさ。わかったか？」

と、笑顔で言うから、シンバは、益々、無言になってしまふ。

「……………」

「わかったか!？」

返事のないシンバに、念を押すように、もう一度聞くと、

「……………ああ」

シンバは小さく頷き、フリットも頷く。

「せめて、後2週間、お前が死ぬのか、それとも、リグドの所へ戻るのか、オイラには、わかんねえけど、お前が、ここを離れる直前までは、ラインと一緒に、楽しい時間を過ごそう。オイラだって、お前と離れるのは、ちょっとだけ寂しいからな、最後の時まで笑顔で過ごそうぜ、嫌な事なんて考えずにさ」

そう言うと、フリットはドアを開け、部屋を出て行こうとしたが、ドアの前、レンダーが立っていて、シンバもフリットもフリーズする。だが、レンダーは、来たばかりなのか、

「気分はどうだ？」

と、シンバに、普通に尋ねてきた。

「気分？」

と、眉間に皺を寄せ、それはどういう意味で聞いているんだ?とばかりのシンバに、

「あ、ああ、オイラが、シンバは体調が悪いつて言ったから……………
…ああ、えっと、だいぶいいみたい?」

と、シンバを見て、そう言うので、シンバも、

「あ、ああ、うん、まあ、風邪かな」

と、頷いて答える。

「そうか、うつすなよ」

それだけ言うと、レンダーは行ってしまった。

「……………聞かれてなかった……………みたい……………
?」

小声で、呟くように、フリットがそう言うと、シンバは溜息混じり

に、

「どうかな、聞いてて、あの態度かもな。一番の曲者はレンダーかも」

と、ベッドに寝転がった。

誰が敵で、誰が味方で、それさえわからない中、それでも動き出したシンバに、フリットは自分も何かしなければと、少し焦りを感じていた。

「……なあ、シンバ」

「え？」

まだ部屋を出て行かず、そこにいるフリットに、シンバは顔だけ起き上がらせ、見ると、

「お前が信じれる味方はリグドとラインだけなのか？」
そう聞いた。

「……リグドは味方とも敵とも言えない。信じれるのかと聞かれても、よくわからない。厄介だよな、LTの症状の記憶障害ってさ。別に他の人だっていたかもしれない。でも、その人しかないから、どうしても、その人にしがみ付きたくなる。たった一つの、俺の記憶だから」

シンバはそう言うと、
「悪い、少し寝る」

と、布団の中に潜り込んだ。

フリットが部屋から出て行くと、シンバはムクツと起き上がり、小瓶の中からLTを出し、口へ入れる。そして、溜息。

「やっぱ、騙されたかなあ。記憶もなくならない、慣れたらハイテシオンも治まり、通常に戻って、LTも徐々に減らしていけばいいだけなんて、そんな都合よくないよなあ。でもアニルと300人は記憶を失っていない。記憶がなくならないと言う事だけは本当の事だったら、それでいいか……」

ラインを覚えておける。

ラインを守っていける。

ラインを想っていられる。

例え、遠くからでも。

二度と目が合う事も、声を聞く事も、触れる事もなくても。
それだけで救われるような気になり、おかしくもないのに、笑いが込み出して、天にも昇る気分になれるのは、LTのせいだろうか。
次の日、午前中の仕事が終わると、シンバは仕事場の近くにあったスーパーで、昼飯を買い、ついでにガムを買おうとして、いろんな種類の飴玉がたくさん入った大きな袋が目に入り、ガムはやめて、ソレにした。

午後の仕事が終わると、まだ日も明るく、シンバは公園に寄り、ベンチで、飴玉を取り出し、軽快なリズムの口笛を吹きながら、くると巻いて包装された飴玉だけを分けていく。

ラインがくれた飴玉に似ていて、とても可愛らしいと、シンバは飴玉を見ながら思う。

そして、ひとつひとつ、包装を丁寧に外し、LTを一粒、飴の中に入れると、またくるんと巻いていく。

その作業を繰り返してやっていると、小さな男の子が、シンバの傍に来て、さつきから、ずーっと見ているので、シンバは、LTの入っていない飴玉を差し出してみる。

すると、男の子はパアツと明るい笑顔になり、その飴玉を受け取った。

バイバイと手を振るので、シンバもバイバイと手を振ってみる。

暫くして、同じ作業を繰り返していると、さつきの男の子が、女の子を連れて来た。

手を繋いで、一緒にこちらをジッと見ているので、シンバはハッと笑いを零し、また飴玉を二人に差し出すと、二人は笑顔で、受け取り、バイバイと去っていく。

遠ざかって行く小さな二人の背中を見ながら、シンバは、自分もあんな頃があったのだろうかと思う。

仲良く手を繋いで、駆けて行く二人。

シンバは自分の手の平を見つめ、女の子と手を繋いだりした事ってあるのだろうか、考えるが、考えてもわかる訳もなく。

そして、すっかり空が暗くなって、シンバは帰ろうと歩き出し、公園を出て、駅へと向かい、携帯にメールが幾つか来ているのを確認する。

アドレスはライン。タイトルはリターン。

『何してるの？ 仕事はもう終わったんでしょ？ 体調、まだ悪いの？』

アドレスはフリット。タイトルはなし。

『おい、頼むよ、いつも通りにして、仕事終わったら即効で帰って来いよ』

またもアドレスはフリット。タイトルはなし。

『どっかで暴れてんじゃねえだろうなあ！？』

アドレスはアニル。タイトルはこんにちわ。

『ルーシーに、チケット、うまく渡せたと報告しました』
駅のホーム。

まだ電車が来ない。

その間、シンバは、まずラインに返信。

『悪い、もうすぐ帰るから、飯、みんなで先に食っていいよ』
そして、フリットに返信。

『暴れてない。そんな言う程、まだハイテンションではない。気分は落ち着いている方だ』

最後にアニルに返信。

『そうか。もう余りルーシーに関わるのはやめた方がいい。LTを必要としないなら、関わる必要もないだろう。後は俺に任せて』
調度、送信が終わると、電車が来た。

携帯をズボンのポケットに入れ、電車に乗り込む。

ラッシュ時ではないのか、電車の中は人が疎らで、席は空いているが、扉付近に立って、流れる景色を見つめる。

ザーツと流れる景色は、街のネオンが光っていて、夜も明るいなあ

と思う。

街や店などで、よく流れる歌を、知りもしないが、鼻歌交じりに、口ずさみ、景色を見ていると、トンネルに入り、景色が真っ黒になった瞬間、自分の背後に立っている男の顔が窓に浮かび上がり、シンバは鼻歌を止めて、ゴクリと唾を呑み込んだ。

「ご機嫌だね」

男の口がそう動いた。

リグド・・・・・・・・。

シンバは動けなくて、窓に映るリグドを見つめているが、トンネルを抜けると、景色が浮かび上がり、一瞬、リグドを見失い、トリップしたかと思う。

直ぐに振り向くと、リグドの姿がなくて、やはりトリップだったかと思うが、気配を感じていて、直ぐ隣の席にドカツと座るリグドに、ハツとして、また動けなくなる。

「ご機嫌の理由はLT？ キメてんの？」

リグドのその声も割りりと弾んでいて、明るく、ご機嫌だ。

足を組み、その太股の上に肘を立て、顎を手で支えて、シンバを見上げるリグド。

シンバはゴクリと喉を鳴らし、ゆっくりと顔を横に向けて、リグドの視線に応えるように、合わせる。

今、バチツと目と目が完璧に合った。

「・・・・・・リグド。この前のクラブで一緒にいたタレントのルーシーって男」

そこまで言うと、シンバはまた黙り込んだ。

ジツと見つめるリグドに、何か話さなければと、

「どうして電車に乗ってるんだ？」

そう聞いた。

ルーシーの事を何か言えば、きっと、リグドは気に入らない。

リグドが気に入っているものを貶す事は許されない。

それは、なんとなく覚えていく感覚。

今、リグドが、ルーシー・ミストを気に入っているのなら、シンバがルーシーについて、何か言う事は、リグドに怒りを与えるだけだろう。

こんな所で、殺されては意味がない。

だが、ルーシーがいなくなれば、リグドのお気に入りには、また変わる筈。

「オレだって電車ぐらい乗るさ。楽しいよな、電車に乗ってさ、知らない街に降りて、探検とかしたりして。でもさ、どこの街も変わらないんだよね、ある物は」

と、リグドは振り向いて、窓を眺め、

「24時間明るい街の影にあるのは、ゴミと死体とLTと」
そう呟き、シンバを見て、

「要らないって言われるものばかりだ」

と、笑う。

「……でも、必要なものもあるよ」

「例えば？」

「……わからないけど」

「わからないってなんだよ、相変わらずだなあ」
と、笑うリグドに、シンバは切なくなる。

リグドの記憶に、自分がちゃんと存在していると知ったからだ。

そして、リグドは、ポケットから飴を取り出し、ソレを口の中に入れた。

「その飴!？」

「ああ、ラインって女からもらったんだ。この前、食事したから」

ライン……リグドにも、飴、あげたんだ……。

「でさ、その女に電話もメールも届かないんだよね、着拒否されてるっぽい」

「……」

「向こうからも、連絡一切なし。こんな初めて。このオレがだよ? ショック!」

「・・・・・・・・」

黙っているシンバに、シヨックとは思えないニコニコ笑顔で話すリグド。

「どう思う？ ふられたのかな？」

「・・・・・・・・」

「なあ？」

「・・・・・・・・わからない」

「そっか。オレの話とか出ない訳？」

「・・・・・・・・特には」

そう答えたシンバにリグドはクツクツと笑い、

「やっぱり、一緒にいるんだ、あの女と」

そう言うから、シンバはハツと自分の口を押さえる。

「わかりやすい態度とるなよ、そういう所、可愛いけどね」

と、更に笑うリグド。

「で、彼女の携帯いじって、オレの番号やアドレスを着拒否したのって、お前？」

さっきまで笑っていたのに、突然、笑顔が消え、シンバを見るリグドのダークレッドの瞳。

シンバは怖くて、何も答えられない。

リグドは立ち上がり、シンバの真正面に立ったかと思うと、思いつきり腹部に拳を入れた。

ガハツと口から唾が吐き出され、前のめりになるシンバの額を人差し指で支え、そして、元の姿勢になるよう、その人差し指でシンバを押し上げる。

「オレの邪魔を二度とするな」

ご機嫌だった口調はどこへやら。

空気が重く、流れない怖い声で、そう囁かれ、シンバが小さくコクコク頷くと、電車は停まり、ドアが開いた。

リグドはそのまま、電車から降りて、シンバはリグドの背を見つめるが、リグドは振り向きもせず、行ってしまった。

リグドが見えなくなり、電車のドアも閉まると、シンバは緊張を一気に解き、その場に座り込み、呼吸を乱す。

汗も一気に溢れ出てくる。

そして少し震える手で、LTを口の中に入れた。

くっそお、思いつきり怯えてしまう。

情けない。

こんなんじゃない、ルーシーを倒しても、リグドの傍にいられないじゃないか。

LTを飲んでも気分が晴れなくて、考えれば考える程、苛立ってしまっシンバ。

しかも、殴られた腹部がかなり痛い、一発のダメージがでかすぎると苦痛の顔。

廃墟に戻った頃には、痛みはなくなっていたが、それでも、気分はどん底。

「シンバ、レンが怒ってるよ、遅くなるなら、なるで連絡入れないと！」

調度、風呂上りのラインが髪を拭きながら歩いていて、バッテリー会った。

「……ああ」

「どうしたの？ 顔色悪いよ？」

「あ、いや」

「まだ体調悪いの？ それでどこかで休んでたとか？」

「いや、大丈夫」

「そう？ 夕飯、キッチンにシンバの分置いてあるよ、温めてあげようか？」

「自分でやるからいいよ、先にレンに謝ってくる」

シンバはそう言うと、レンダーの部屋へ向かった。

ノックをして入ると、レンダーは酒を飲んでて、

「シンバか。昨日、言ったよな、遅くなる時は連絡を入れろと」

怒っているのか、ないのか、いつも通りの口調で、淡々とそう言わ

れ、シンバが頷くと、

「わかればいい。仕事はちゃんと終わってるみたいだからな、他に問題は無い」

昨日と同じく、そう言われただけで、特に説教はない。ラインと違い、男だから、遅くなっても問題ないと思っているのか、それとも。

シンバは、レンダールの部屋から出て、キッチンへ向かう。テーブルの上には、オムライス。

ケチャップで、シンバと名前が描かれていて、ハートも付いている。

「……可愛いな」

思わず、そう呟いて、オムライスを見つめる。

「オイラにはハートはなかったけど」

いつの間にか、背後に立っていたフリットがそう言ったので、思わず、

「嘘!？」

と、振り向いて聞き返すと、

「フリットって、4文字で、ハート入らないってさ」

そう言いながら、冷蔵庫を開けて、缶ジュースを取り出し、それを飲み始めるフリット。

「なんだ、そんな理由か」

「残念そうだな」

「……まさか。只、これはちょっと、嬉しいだけ。こういうの作ってもらった事ないと思う。多分」

と、携帯を取り出し、オムライスの画像を撮るシンバ。

「オイラが描いたんだよ、それ」

「嘘!？」

画像を撮った後で、そんな事を言うフリットに、思わず振り向いて、また聞き返す。

「嘘に決まってるんだろ、気持ち悪いよ、お前にハートなんて」

「……ああ、だよな」

ホツとするシンバに、フリットは、

「あんまり帰り遅くなるなよ、ラインと一緒にいられるのも、後少しなんだろ」

急に、深刻な話をするから、シンバは黙って頷くしかできなくて。

そして、座って、オムライスを食べ始めるシンバに、

「おやすみ」

それだけ言うと、フリットはキッチンから出て行った。

シンバはオムライスを食べながら、もうすぐラインの手料理も食べれなくなるのかと溜息。

次の日、仕事へ向かう前に、フリットが、

「今日こそ、午後から仕事ないんだから、3人で映画行こうぜ！

この前のリベンジ！」

と、言い出した。

「とか言って、またフリットが仕事遅くなって来れなくなるんじゃないの？」

と、ラインは呆れ顔。

「大丈夫だって！ 今日の仕事は午前中だけ頼まれた事務仕事。シンバも午前中だけのバイト代理だったよな？ ラインも午前中に終わる老人の介護だろ？ 全員、確実に午前で終わる仕事だろ？」

「……………そうだけど、観たい映画とかある？」

ラインは余り乗り気じゃないのか、頷いたものの、シンバに尋ねる。

「俺？ 俺はなんでもいい。任せる」

「映画館に行つてから決めればいいじゃん、観たいのあるって、きつとー！」

フリットはそう言いながら、靴を履き、

「映画館の前で12時な」

と、走って出て行った。ラインはやれやれと溜息。

シンバも靴を履きながら、

「観たくないなら、観たくないと言えよ？」

余り乗り気じゃないラインにそう言うと、

「観たくないんじゃないの？ 折角、仕事休みなんだし、体を休ませた方がいいんじゃないかと思って」

と、ラインが言うので、

「俺の事は気にしないでいい。気分は悪くないんだ、本当に」

シンバはいつもの口調で、普通にそう答えたが、内心、気にかけてもらっているのが、とても嬉しくて、テンションが高くなるのを必死で抑えている。

「本当に？」

「ああ、それに、楽しみだ。3人で映画なんて、初めてで」

「そうだね」

と、クスツと笑うラインに、シンバも少し微笑んでみるが、

「これから休日とかは、3人で出かけてもいいかもね、ここでゴロゴロして過ごすよりは」

などとラインが言うから、シンバの笑みは薄れていく。

「どうかした？」

「ああ、いや、じゃあ、お先」

と、シンバは先に外に出た。

街に出て、依頼者と会い、バイトの代理を引き受け、仕事が終わったのは12時ジャスト。

映画館の前に着くと、フリットもラインもとっくに来ていた。

「遅れるならメールしろよ」

フリットがそう言うので、シンバを睨む。

「仕事してた所が、ここから近かったから、メールするより走った方が早いと思って」

「15分の遅刻だ」

「悪い、途中で……」

途中でLT飲んでたとは、ラインの前で言えず、黙り込むシンバに、フリットは察して、

「まあ、いいや、早く中に入ろっぜ」

と、映画館の中へ入る。

初めての映画館に、シンバは少し戸惑いながら、フリットを追う。今、上映されている映画のポスターの前に立ち、どれにするかと、フリットは腕組み。

ラインもポスターをあれこれ見ている。

「これがいいや」

と、フリットが選んだのはヒーローもの。

頷くシンバ。

「ねえ、これにしよう？」

と、ラインが選んだものはラブストーリー。

フリットもシンバも嫌な顔をして、ラインを見ると、ラインは、

「なによ、こういう場合、女の子の意見優先なんじゃないの!？」

と、頬を膨らませ、

「じゃあ、間をとって、これ」

と、ラインがまた選んだものはホラー。

「ちょ、ちょっと待てよ、俺、多分、映画とか初めてで、そういうの大事にしたいような気がする」

「気がするってなんだよ」

と、シンバの意見に笑うフリット。

「いや、だからさ、ほら、折角、ラインと……フリットと観るものだから、それも最初に。だからホラーはやめよう」

そう言ったシンバに、ラインは笑いながら、わかったと頷き、フリットも笑いながら頷く。

「じゃあさあ、これにしようぜ、ヒューマンドラマ系の感動作!」フリットがそう言って、ポスターを指差し、シンバもラインも、そのポスターを見て、頷いた。

そして、ポップコーンとコーラを買い、上映時間まで少し待機。

「このポップコーン美味しい、梅プルの味がする」

と、ラインがシンバとフリットに自分の持っているポップコーンを差し出し、シンバは幾つか手に取り、口に入れると、ふんわりとメ

ーブルの甘い香りが、口の中に広がった。

「俺の、普通の塩だけだ」

と、ラインとフリットに差し出すと、ラインは笑いながら、幾つか、シンバの持っているポップコーンを手に取った。

「オイラのキャラメルだから、甘いぞ」

と、フリットが言うと、ラインは嬉しそうに手を伸ばすが、シンバはいらないと拒否。

「なんだよ、お前、オイラのポップコーンが食べねえっつーのか！？」

「甘いのが苦手なんだって」

「ラインのメーブルは食った癖に」

「………なんとなくだろ」

「じゃあ、なんとなくキャラメルも食べよ」

「なんとなくで食べない。もう口の中はメーブルで甘さ限界だから」

「限界ってどんだけ苦手なんだよ」

「なんか映画始まる前に食べ終えちゃいそつだよね」

ラインがそう言うと、フリットは頷き、

「昼飯食ってないからな。映画観たら、なんか食いに行こうぜ」

と、言いながら、ポップコーンを頬張る。

案の定、映画が始まる前にポップコーンは食べ終えてしまい、結局、上映が始まる頃、手に持っていたのはコーラだけの3人。

平日の昼間と言う事もあり、いい席に座れた。

ラインを真ん中にして、シンバ、ライン、フリットの順番に座り、映画が始まると、室内が暗闇になる事に、シンバは少し驚く。

しかも大画面じゃないかと、スクリーンの大きさにも驚くシンバ。

映画の内容は、家族の絆を題材にしている、シンバには、よくわからなかったが、フリットが鼻を齧る音がして、泣いてるのかと、チラッと横を見ると、ラインが、無言で涙を流していたので、思わず、そのラインの横顔に見惚れてしまっていた。

暗闇の中、僅かな光で浮かび上がるラインの顔は、初めて見る表情。

柔らかかそうな頬に流れて止まない涙が、小さな顎の先で、滴になつて落ちていく。

涙で濡れた瞳はキラキラに光って見える。

そして、シンバの視線にも気付かない程、映画に集中している。

そのラインの横で、フリットがズズツと鼻を嚼る音を立てるから、きつとアイツも泣いてんだらうなあと思ふながら、ラインを見つめ続ける。

映画よりも、ラインの、初めて見る表情の方が、見ていて飽きない。携帯でラインの横顔を撮りたいなあと思ふが、流石に、ここでは無理だらうなあと思ふ。

ふと、記憶がなくなるかもしれないと言う不安が急に大きく押し掛かり、シンバは溜息。

映画が終わった後、ラインとフリットは映画について語り出す。

どのシーンが良かったかの、あのシーンは泣けたかの、そのシーンはムカついたかの。

「でね、あの女の人！ あの人がさあ、どうして迷っちゃったかって事だよなあ」

「そうそう！ あれさあ、迷わなければ間に合ったよなあ！ 主人公もさあ、幸せになれよって、いなくなるなんて、悲しすぎるだろう！ そう思うだろ？ シンバも」

そう言われても、何の話かサツパリわからないシンバ。

だが、とりあえず、コクコク頷くと、だよなあ、フリットは、またラインに向き直り、映画について、二人話し出す。

「俺、トイレ」

と、シンバは映画館のトイレへ走った。

そして、個室に入り、LTを飲む。

一応、ラインの前でも飲むように、飴と一緒に入っているLTも持っているが、こうして、ラインのいない所で飲めれば、その方がいい。

トイレから出ると、

「飯食いに行こうぜ、何がいい？」

と、フリットが聞くから、ラインの手料理がいいとは言えず、

「なんでもいい、任せる」

そう答えると、

「お前、いつつもソレな。任せる任せるって、お前が食いたいもん
言えよ、オイラが、お前の意見、聞いてやるなんて、絶対になんか
なんだぞ？」

フリットなりに、2週間後にいなくなるだろうシンバを気遣っての
事だとは思うが、そう言われても、シンバは逆に困ってしまう。

「ねえ、軽めにホットドッグでも買ってさ、公園で食べない？ も
う夕方だし、帰って、夕飯の支度しないと、レンが待ってるしさ」
そうしようと直ぐに頷くシンバに、フリットは舌打ち。

「お前、ちゃんとした店で食った事ないだろ」

フリットはシンバにそう言うが、別にレストランとか行きたいと思
わないシンバは無言。

「また今度でいいじゃない？」

ラインはそう言うが、フリットは、今度なんてない事を知っている。
だから、余計にフリットは今日という日を、シンバに残してあげた
いのだ。

例え、忘れてしまおうとしても。

それがフリットの優しさなんだと言う事を、シンバはわかっている。
だから、

「じゃあさ、ラインの手料理で……まだ俺が食ってないも
のとかあったら、食ってみたい」

ワガママを言ってみた。

「私の手料理で？ いいけど……殆ど食べてると思うよ？」
と、ラインは考えながら、そう言うつと、何か閃いたように、笑顔に
なり、

「なら、初めての料理に挑戦したら？ シンバとフリットが！」
そう言った。

「俺とフリットが？」

「うん、そう！ 二人で料理作って、私に食べさせて？」

そんな事を言われても、シンバもフリットも、料理は本当に初挑戦で、しかも自信がない為、嫌な顔をするが、

「どっちが料理上手か競争！ 今時、料理もできない男なんてモテないぞ！」

そう言われては、料理上手だと思われないフリットは、

「オイラはいいぜ、シンバ相手に楽勝だっつーの」

と、不敵に笑う。

何故こうなっただらうと、シンバはラインの手料理が食べたかった筈なのにと落胆。

だが、あんまりラインが楽しそうに笑顔を見せるので、シンバは頷くしかなく。

そして買い出しの為、スーパーへ。

毎月の食費からの予算でと、ラインは二人にお金を渡すが、一日の食費って、こんな少ないの！？と、二人は手の中のお金を見つめて驚く。

「毎日、頑張っつて、節約してるのよ、少しは私の有り難さ、わかった？」

シンバもフリットもコクコク頷く事しかできず、だが、二人がこの予算内で、料理を作るなど無理な話で、結局、かなりの量の食材を買ったが、全て自分の金で負担した。

帰りの電車の中、

「ねえ、何作ってくれるの？」

ラインはシンバとフリットの顔を覗き込むように見て、聞くが、二人共、口を閉ざし、シンバとフリットはお互い見合つと、ピッとそっぽを向いた。

ラインはそんな二人にふふふと笑い、夕飯が楽しみだと呟く。

ていうか、野菜も肉も調味料も、いろいろ買ったけど、何作ればいいんだ？

参ったなあ。

不味いもの作って、今更、好感度、下がるの、嫌なんだけど。フリットも同じ事を考えているのか、難しい顔で、大きな袋を2つ抱えている。

ラインも大きな袋2つ、シンバとフリットが買ったものを持ってくれている、シンバは3つも。

電車が混雑していなくて良かったと思う。

それよりリグドが電車に乗ってないか、シンバは辺りを念入りにさつきから確認。

フリットが、それに気付き、L.Tのせいで落ち着きがないと思って、「電車酔いか？ 飴かガムでも食べば？」

と言うが、そうではない為、首を振るシンバ。

廃墟に無事に辿り着くと、シンバはホツと安堵の溜息を吐いた。そんなシンバに、

「疲れた？」

ラインが、そう言って、心配そうな顔をするから、ううんと首を振り、シンバは荷物をキッチンに運び、袖を捲り上げ、

「何作るうか」

と、まるで手馴れた感じで言ってみる。

「何作るうかと言える程、作れるものがあるのか？」

嫌味ったらしく言うフリットは、シンバを見て、ニヤリと笑い、その表情は、もう何を作るのか決めているようだ。

「何か手伝う？」

そう聞いたラインに、本当は手伝ってもらいたいが、

「いいや、俺は大丈夫」

と、シンバは余裕の台詞を吐く。勿論、シンバがそう言うなら、フリットも、

「ラインは向こうでゆっくりしてて。オイラに任せてくれて大丈夫だから」

と、余裕を見せる。

二人揃って、大丈夫と言うのならと、ラインは頷く。

シンバとフリットはお互い睨み合い、キッチンの奪い合い。

「オイラが先に使う！」

「ジャンケンだろ」

「つか、お前、まず野菜とか切ってるよ、向こうのテーブルで出来るだろ」

「そっちこそ、狭いんだから、突っ立ってるだけなら、あっち行けよ」

声のトーンは下がらずも上がらず、淡々と言い合う二人に、

「仲良くね!？」

と、少し怒った声で、ラインが注意すると、二人は、にこやかな表情を作り、

「はあい」

素直に頷いて見せるが、ラインが見てないと、ぶつくさと言い合いが続く。

「何の騒ぎだ？」

と、レンダーが、キッチンへやって来て、

「今日の夕飯は二人が作ってくれるんだって」

ラインがそう言うと、レンダーは如何わしそうな顔で、

「食べるんだろうな？」

と、シンバとフリットを睨む。

「大丈夫だって！」

二人揃って、同じ事を言うので、更にレンダーの表情は歪む。

「なんか、ここ最近、シンバ明るいよね、体調を崩してるって言ってたけど、そうは思えない程、声のトーンも上がってるし、いい事でもあったのかな？」

レンダーに小声で、ラインが囁いた。

「この暮らしにも慣れたんだろうよ」

レンダーはそう言うと、キッチンを出て行き、ラインも、

「じゃあ、お二人さん、仲良くやってね？ 私、洗濯物、取り込ん

でくるから」

と、行ってしまった。

「見よ！ この包丁さばき！！」

フリットが白菜を千切りにしている。

「……ダガー装備する奴は包丁もつまいな。ていうか、それキャベツじゃないのに、千切りか？」

「細かく切って、餃子にしようと思って！ ニラも買ったし！ あ、後、酢豚も！」

「二品！？」

「ライン、好きだろ？ 杏仁豆腐付きだぞ！」

「デザートも！？」

「お前どうするんだよ？」

「……俺、簡単に肉焼いて、サラダだけにしようと思ってたけど」

「ははは、そうしろそうしろ、所詮、長剣装備する奴に短い刃物は扱えねえって！」

「ハンバーグにする」

「は！？」

「いや、やっぱり、キャベツ買ったし、ロールキャベツにする。ライン好きだし」

「何ライン基準で考えてんだよ！ オイラだって食べるんだぞ！」

「フリットも、ライン基準じゃないか。審査するのはラインだろ？」

「だったらラインの好みに合わせて合わせる方がいいだろ」

「そう言われたら、フリットは言い返せず、ムツとするだけ。」

「で、ロールキャベツってどうやって作るんだ？」

「はあ！？」

「デザートはラインの好きなクレープ……って、どうやって作るんだ？」

「……ライバルのオイラに聞くなよ！」

「……なあ」

「なんだよ？」

「飯物がないと、ライン、怒りそうじゃないか？ 白い飯炊くか？ 餃子には白飯だろ、俺、米の準備しようか？」

「っーか、お前、オイラの料理に便乗しようとしてんじゃねえだろ
うな！？」

「……バレた？」

と、笑うシンバに、フリットはその笑顔はLTのせいだと知っている為、少し、胸の奥が痛くなる。

元々、シンバは、そんなに笑顔で人と話すような人間じゃなかった。確かにこここの暮らしには慣れて来ただろう。

だが、いつもどこか思い詰めていて、何を考えているのか、わからなくて、うまく言葉で表現しなくて、こっちがイライラする事ばかりの連続で、なのに、ラインを想っている事は伝わってしまうから、余計にフリットはイライラする日々だった訳で。

だが、シンバは男だから、勿論、恋愛なんて関係なく、傍にいる存在で、それはフリットに初めてできた友達と言うもの。

「……なあ、シンバ、オイラ達、違った生き方してたら、もつと仲良くなれたと思うか？」

「何の質問だ、それ？」

眉間に皺を寄せ、不思議そうな顔をするシンバに、笑いながら、

「いや、ほら、今日観た映画みたいな主人公だったらさ、オイラ達、LTなんてやってなくてさ、想ってくれる両親がいて、学校とか行っっちゃってたりして、そういう所で知り合ってたら、オイラ達、もつと仲良かったかな？ あの主人公と……親友いたじゃん、アイツ等みたいにな……」

フリットは、そんな例え話をする。
今日観た映画は、シンバは殆ど観てない為、首を傾げ、考え込むから、

「そんな考えるならいいよ、別に、どうでもいい話に真剣になるなよ」

と、即答しないシンバにフリットは苦笑いで、そう言った。

「LTやってなかったら、お前とは仲良く所か、知り合いでもないと思う」

「……だよな」

「そう思わなきゃ、LTの意味がなくなるから」

「え？」

「だってそうだろう？ 俺達、LTで繋がったようなもんだ。LT中毒者だったから、お前はここへ連れて来られ、リミットを越え、レベル1となった。俺も。レンダーは疑わしいオッサンだけど、その辺は感謝してる。お前に会えたし、ラインに会えた。それは俺にとって、多分、一生分のラッキーだ。LTやってて良かったと思える瞬間」

「なんか、メチャクチャ、やられた気分」

「は？」

「何か心にガツンと残るような事、言っただけなのにさ、逆に言われた感じ」

「……フリット、充分だ」

「充分？」

「お前が俺にしてくれた事、充分、嬉しかった。今日は多分、俺が生まれて初めて、楽しいと感じた一日だったと思う。充分、幸せだなあって思えたよ」

「バカだな、幸せに上限なんてないんだぜ？ もっともつと幸せだと思える事、これから沢山あるかもしれねえだろ……きつと、あるよ、多分、絶対」

「そうだな」

「ああ！ LTだってオイラ達を会わせてくれたんだ、悪い事がいい事になる事もあるさ」

フリットはそう言って、笑顔で頷く。

だが、大事な人に引き合わせてくれた、そのLTが、繋がりを解き放とうとしている。

フリットは複雑な胸の内を隠すように、

「お前、ソレ、キャベツじゃなくてレタスだぞ！」

明るい声を出し、いつも以上のテンションで、後少しの間、シンバの傍にいようと思う。

シンバのテンションがおかしいと思われないように。

そして、数時間後、テーブルの上に並んだ料理は……。

「……コレ、食べられるの？」

不安そうに尋ねるライン。

そりゃそうだ、餃子はカチカチに硬くなって、まるで石ころのよう。酢豚も酸っぱ過ぎるニオイが漂い、杏仁豆腐に至っては、只の白い牛乳のように液体のまま、挙げ句、ロールキャベツは、キャベツと肉の炒め物のようになっていて、見た目が酷いし、クレープも、なんだかドロドロに溶けた果物が、まるで皿に乗った生ゴミ。

食べなくてもわかる、不味そうな料理に、レンダーは恐ろしい顔をヒクつかせている。

だが、シンバとフリットは遣り遂げた感で一杯の爽やかな表情で、ラインを見ている。

「……そんな瞳で見ないでくれる？ 食べたくないって言えなくなるから」

ラインも、顔をヒクつかせ、そう言つと、

「おい、ライン、インスタントとか、買い置きしないのか!？」

と、レンダーが言つと、フリットが、

「なんでだよ！ オイラ達の料理、食ってくれつて！ 見た目はちよつとだけヤバイけど、味は美味いって！ な？」

そう言つてシンバに同意見を求め、シンバも、その意見に頷くので、レンダーは、冗談だと、額を押さえ、ラインを睨み、

「ライン、何故、お前が作らないんだ、これはお前のせいだぞ、ライン！」

と、ラインに叱り出した。

「ちよつと待つてよ！ 私のせい!？」

「でもさ、言われてみれば、オイラ達に料理させようと提案したのはラインだよな」

フリットがそう言うと、シンバも頷き、

「俺は……ラインの手料理が食べたかったのに」

なんて言い出し、みんなで、ラインを責めるような目で見る。

「ちよつ！ ちよつと！ 酷くない！？ 料理失敗したのはシンバとフリットでしょ！」

「食ってもないのに失敗って言うな！」

そう言ったフリットに、なら食べてみると、ラインが、餃子を驚掴み、フリットの口の中に入れようとするが、フリットは必死で抵抗する。

「フリット、往生際が悪いぞ、自分で作ったもの、食ってみせろ」

「それを言うなら、シンバも、この得体の知れない残飯みてえなの食え！！！！！」

「俺は……ラインの為に作ったから」

「なっ！？ 何泣きそうに言ってるの、シンバ！？ キャラ変わってない！？ そんな悲しそうな仔犬みたいな顔しても、私、食べないから！ これ、どう見ても食べれそうじゃないもん！ お腹壊したら、明日、仕事できなくなるし！！！」

「そんな毒みてえな言い方すんな！ 一口でも食べよ、オイラ達、

折角、作ったんだぞ！」

「そうだ、折角作ったんだ、俺達」

「ていうか、シンバ、さつきからズルくない！？ フリットと私に食べさそうとばかりして！ 自分はどなの！？」

「そうだぞ、シンバ、お前が手本になって最初に食え！」

「俺……甘いのが苦手だから」

「甘くねえだろ！！！！！」

「甘くないでしょ！！！！！」

フリットとラインが同時にシンバに突っ込み、レンダーは呆れて、酒だけ持ってキッチンから出て行ったが、3人の言い合いは続き、

結局、料理は誰も手を付けず、ご飯は炊けていたので、ラインの指示に従い、3人でおにぎりを作った。

「大体、なんであんな生ゴミみたいなもの作るのに、これだけキッチン汚すかなあ！？　こんなにフライパンやら鍋やら、何に使ったわけ！？　お皿も無駄に……汚してるだけじゃなく、割れてるのもあるし……」

キッチンを片付けながら、ぶつぶつ文句を言うライン。

これなら自分で作った方が良かったとまで言われ、シンバとフリットは床に正座させられ、反省中。

やっとキッチンが綺麗になると、ラインはシンバとフリットのおにぎりを、正座している二人の前に置き、そこで食べるとばかりに、見下ろし、無言でレンダーの分のおにぎりを持って、出て行った。

「……相当、怒ってるな、アレ。俺達、大丈夫って言い切ったしな」

シンバがそう言うと、フリットも頷き、

「フーか、オイラ達、床で食えって事？　犬みたいに？　そしていつまで正座？」

目の前に置かれたおにぎりを見ながら呟く。

「とりあえず、ラインが戻って来るまでは、このままがいいだろう、ラインの分のおにぎり、置いたままだし、レンダーに渡したら、多分、直ぐに戻ってくる。その時、正座してなかったら、ブチギレられそうだ」

「……だな、ラインが食うまで、このおにぎりも手をつけない方がいいな」

そう言ったフリットを見ると、フリットもシンバを見て、二人、笑いを堪えきれず、クツと喉で笑いが漏れると、一気に笑いが溢れ出し、だが、笑い声がラインに聞こえるとマズイだろうと、笑い声を必死で堪えながら、笑う。

「シンバのロールキャベツ、アレはないだろう」

「フリットの餃子もアリかナシかで言うとナイ」

俯いて、笑いを堪えながら、そう言った後、二人揃って、

「料理下手過ぎ」

声を揃えて、お互いに向けて、そう言った。

「楽しそうね」

その声に、二人、ギクツとして、顔をソツと上げると、ラインが立っている。

「ラインって凄いなあって話してたんだよ、毎日、あんな美味しい飯作ってくれるなんて、感謝しなきゃだよな、オイラ達！」

ココココ頷くシンバ。

「やっぱり料理上手の女の子って最高！」

ココココ頷くシンバ。

「片付け上手の女の子も最高！」

ココココ頷くシンバ。

「オイラ達が、毎日、幸せなのはライン様の御蔭！」

ココココ頷くシンバ。

「流石ライン様、オイラ達のアイドル！」

ココココ頷くシンバ。

ネタがなくなっただのか、フリットは、次はお前が何か言えとばかりに、肘でシンバを突く。

だが、それ以上、何を言っているのか、わからないシンバはココココ頷き続けるだけ。

駄目だこりゃと、フリットは、苦笑いで、ラインを見ると、ラインは怒った顔で二人を見下ろしているの、黙って俯き、シンバもラインの表情に、黙って俯いた。だが、

「料理下手過ぎ！」

ラインが、そう言ったので、自分達が言った台詞と同じだと、何故か笑いが込み上げて、

シンバはフリットを、フリットはシンバを指差し、

「ほーら！ 料理下手過ぎだった！」

お互いを笑いながら言うから、

「二人共よ！」

ラインが怒って、そう言った。

「あ……オイラ達、二人共ね……」

と、フリットは呟き、シンバも笑いを止め、二人共、再び、反省のポーズで俯く。

「私、部屋に戻るから、自分達が食べたお皿はちゃんと洗ってね！」

ラインはそう言うと、おにぎりを持って、行ってしまった。

シンバとフリットは、立ち上がり、床に置かれたおにぎりをテーブルの上に置いて、体を伸ばし、腕を上にあげたり、指をポキポキ鳴らしたり。

「これ食べたら、後は風呂入って寝るだけか」

フリットは少し寂しげにそう言った。

「……そうだな」

シンバも今日という終わりに、少し寂しそうに頷く。

「テレビ、なんか、面白えのあったっけ？ 今日」

「さあ？」

「ライン呼んで来て、ゲームでもすっつか？」

「フリット」

「うん？」

「別に無理に何かしなくていい。本当に、もう充分なんだ、そりゃ、少し寂しい気もするけど、いつも通りでいいんだ、そうじゃないと、これ以上は、ラインが、変に思う……」

「……そっか、わかった」

「俺も部屋で、おにぎり食べてくる」

「おう」

「フリット……ありがとな」

シンバは、そう言うと、フリットに見送られ、おにぎりを持って、部屋に行く。

幾ら、楽しい事をして、思い出にすらならなければ、今日という

日が無駄に終わってしまうから、どうか、記憶がなくなりませんようにと祈るばかり。

それに、今日という日が、どんなに楽しくても、シンバにとって、特別な日という訳ではない。

只、楽しいというだけの日。

おにぎりを食べ終わり、お皿を片付けにキッチンへ戻り、また部屋へ戻ろうとした時、外の瓦礫にランプの灯りが見える。

ラインが瓦礫の上に座り、空を見上げている。

ここへ来た、最初の日の夜のようにだ。

外へ出ると、直ぐにシンバの気配に、ラインは振り向き、

「結構、虫が来るね」

と、ランプの灯りにつられて飛んできた蛾を見て、そう言った。

「……虫、平気だっけ？」

「まあ、ね、ゴキブリも悲鳴あげる事なく、ぶっ叩いて殺せるタイプですから」

笑いながら言うラインに、シンバも笑う。

「今日、どこかで祭りとかやってて、花火が上がるとか？」

「別に花火が見たいだけで空を見上げてる訳じゃないよ、星が綺麗だから」

「そっか」

「シンバは？」

「……ラインがいるのが見えたから、何してるのかなって思ってた」

「冬になるとさ、寒くて、部屋から出られなくなるのね、ここら辺は雪とか降っちゃうから。そしたら、こうして、のんびり、なかなか夜空を見られないから、暖かい今の内に、のんびり、星空を堪能しとこうかなって思ってた」

「……雪が降るのか？」

「そっだよ。ねえ、シンバって、雪を連想させるんだよね、雪の日に、私と会ってたりしたのかも」

「・・・・・・・・雪？」

確かに、空から降る白いものをラインを見たような気がする、シンバは思う。

だが、それが雪だったのか、思い出せる記憶がない。

「ああ、いいの、別に、私もちゃんと思い出せたりしてる訳じゃないから」

「・・・・・・・・」

「フリットも雪のイメージなんだ。フリットはね、雪が凄く降った日に、レンが連れて来たの、LTがキレて倒れてたから、そのままにしといたら凍え死ぬだろうからってね」

「・・・・・・・・そうか」

「凍え死ぬ方がマシだったって程の苦痛を味わって3日後、フリットは生きて、レベル1となったんだよ。雪が降ると、その事を思い出して、フリットに話すんだけど、フリットは余りいい思い出じゃないから話すなって」

笑いながら話すラインに、シンバは微笑んでみる。そして、雪が降るのかと、シンバは空を見上げる。

寒くなる頃、もうここにはシンバはいない。

こうしてラインと共に空を見上げる事もない。きつと、これが最後だ。

だから、シンバは、星に手を伸ばし、

「あの一番、光っている奴、手に取れたらいいな、そしたらラインにあげるのに」

柄にもなく、ロマンチックな事を口走る。

「成る程、だから男性は女性に、キラキラの宝石のついたアクセサリーをプレゼントするのね、そういう時の男性って、きつと、今のシンバの心理に近いんだわ、絶対に怪しい！」

照れ隠しか、そんな事を言うラインに、シンバは、

「下心あるって？」

と、眉間に皺を寄せて聞いてみた。

「そうそう、大体、男性って言うのは、そういうもんでしょ」

「否定はしないが、今の俺は純粹だったと思うけど？」

「純粹に私を口説いたって、何にも出ないから」

「下心あって口説いても何も無い癖に」

「鋭い！」

「ラインを口説く時は宝石より食いものでしょ」

と、笑うシンバ。

ラインは、シンバをジッと見つめるから、シンバも笑うのをやめて、ラインを見つめた。

「シンバ、明るくなったよね」

「え？」

「ここ最近、凄く明るい。フリットと笑い合ったりとか、そうやって、よく笑顔見せてくれたりとか、表情があるから」

これでも結構テンションを抑えているシンバ。

それでもテンションが上がっているのを抑え切れてないんだと、ヤバイかなと俯く。

「なんかシンバとフリットが仲いいと、妬げちゃう」

「は？」

「だって、シンバは私に懐いてたのに、フリットにも懐いちゃって」

「懐くって、犬かよ」

「シンバは狼かな、フリットが犬、この前、会ったイケメンさんはライオンかな」

「そのイケメンって、一緒に食事した……えっと、なんだっけ、名前？」

リグドの事だろうが、確か、リグドとは名乗ってなかった筈。

「クロス」

「ああ！ そうだ、クロス。その人と……メールとかしてんの？」

「ううん、だって、メール来ないもん、電話も」

「ラインからしてみたりした？」

「してない」

「……………どうして？」

「どうしてって？」

「もう一度、会いたいとか、そういうのなの？」

「ないよ」

「……………イケメンなの？」

「うーん、好みではないかな」

「そうなのかな？」

「あの人って、男女関係なく好かれそうな雰囲気持ってる、多分、自信家で、余裕があって、何でも軽くこなしちゃう感じ。シンバとは逆だよな」

「え、俺、逆？」

「うん、パツと見た目、悪くないのに、表情暗いから取っ付き難いし、男女関係なく余り関わりたくないって思われそう、強い癖に、自信なくて、なんかギリギリ頑張ってる感凄しいし、何でも必死っぽい。ね？ 逆でしょ？」

俺、そんななんだ……………。

しかもラインに言われると、とても落ち込んでしまう。

「でも本当は優しいし、人がダイスキよね、もつと人と関わりたいって思ってる、自信がないのは、人にちゃんと応えられるチカラがないからで、それでも必死に応えようと頑張ってるだけなんだよね。そういうの、私だけ、知ってる、シンバが誰にも相手にされなければいいのって、だからフリットに妬げちゃうんだよね。だって、フリットも、シンバのそういう所に、気付いて、シンバに笑顔で話してるんだと思うから」

「……………」

「私は、シンバの方が好きだよ、あのイケメンさんより」

「……………」

初めて、俺は、リグドに勝った気がした。

それは許されない事で、どこかで、凄く怯えている自分がある

のに……

そんな自分より、大はしゃぎしたい自分の方が勝る。

それはラインだから。ラインが、俺を選んでくれたから。

だから今日という日が、今、この瞬間に、俺にとって特別になる。

「夢だといいな」

「え？」

「後、数分で今日が終わってしまう。でも、夢ならいい。そしたら、絶対に起きないで、この夢を見続けるのに。今日という特別な日はまだずっと続くんだ、ずっと」

「ずっと？」

「ああ、トリップでもいい、ずっと」

「そんなに楽しかった？ 今日」

「ああ、そうだな、楽しかったよ、トリップしてるんじゃないかって、現実か、夢か、わからなくなるくらいに」

「私も」

頷くシンバに、

「また行こうね、映画」

と、笑顔で言うライン。

「……また行こうね」

そう答えるシンバ。

「あ、見た？ 流れ星！」

空を指差し、見上げるライン。

シンバも空を見上げるが、キラキラ光る綺麗な満天の星空よりも、その綺麗な空を見ているラインの瞳を見ていたくて、ラインの横顔を見つめる。

「俺も、ラインの方が好きだよ、どんな美人より」

「ソレ、本当に美人が現れた時に言ってみせてよ、どうせ美人選ぶ癖に！」

「そうかもな」

「ひどっ!」

「イーッと歯を見せるラインに、シンバは忘れたくない願う。」

「どうか、ラインだけは覚えていきますようにと、星に願い、祈る。」

「ライン、幸せになれよ」

「え?」

「絶対に幸せになれ」

「何? 突然?」

「俺は、ラインの笑顔が好きだから。お前が笑ってれば、どんな美人が現れても、俺はラインしか見えない。どんなに遠くても、あの星のように、輝いて見えるから、ずっと笑ってほしい。ラインの横に俺の知らない男が立ってても、それでも、俺は見たい、ラインの幸せそうな笑顔を」

「・・・・・・?」

「俺にとって特別なんだよ、ラインは」

「特別って?」

「・・・・・・だから幸せになれよ」

「シンバは言いたい事だけ言っと、背を向けて、廃墟へと戻っていく。」

「シンバの言動がわからなくて、ラインは首を傾げる。」

「0時ジャスト、今日が終わった。」

ライブ当日、偶然なのか、仕事はオフ。

ラインは髪を切りに美容院に出掛け、フリットは服を買いにショッピングに出掛け、シンバは、ライブの場所へと向かっていた。

ライブは夕方から始まるようで、小さなビルの地下で行われる。

ビルの外壁には落書きが酷く、いや、そのビルだけでなく、あちこちの建物は、落書きだらけで、空き缶やら吸殻のゴミがあちこちに捨てられていて、始めて電車で降り立ったこの街は、見るからに治安が悪い。

外れかけたポスターは、ルーシー・ミストのライブ予告のもの。

まだライブが始まる迄、時間があり、シンバは喫茶店に入り、時間を潰す事にした。

簡単にコーヒーを注文し、携帯をいじり出す。

俺のアドレス、変えた方がいいな。

ラインとフリットとアニルの番号は削除しよう。

いや、削除すると、見られた場合、登録してないと変か？

データメな番号とアドレスを入れとくか。

フリットのアドレスだけはカードに保存。

フリットと連絡とれなくなったら、ラインを守れなくなるから

な。

あ、ラインから電話かかって来たらヤバイか。

ラインの番号は着拒否だな。

そうすると、アニルのも着拒否しとかないと駄目か。

いや、フリットのも拒否だな、向こうからかかって来たらヤバ

い。

フリットには、こっちから連絡入れるようにすればいいか。

レンダーの番号は……………このままで大丈夫だろ……………

。

よし！ 万が一、この携帯がリグドに見られても、これで問題ないだろう。

カードはどこへ隠し持っておこうか……。ていうか、この携帯の契約者ってレンダーだったけ。レンダーに解約されるかな。

でもカードは新しい携帯でも見れるんだよな。

つか、俺、リグドと一緒にいたら、携帯って持ってられるのか？

リグドと一緒にいた頃、俺、どんな生活してたっけ？

コーヒーターブルの上に置かれ、シンバは、喫茶店なんて入ったの、初めてだなと思う。

こうして、人として生活をしていく事が、これから先、あるのだろうか。

普通の当たり前が、シンバにとって、特別だったと、今更、改めて思う。

頼むよ、リグド。

ルーシーを倒したボロ雑巾のような俺を、拾ってくれよ。

もう俺はリグドの所しかないんだから。

そして、もし、デンバーが、リグドを倒すのなら、その時は一緒に戦おう。

リグドの悪夢になるジュキト復活が、本当に行われるなら、俺は全力で戦う。

もう見たくないよな、悪夢なんてさ……。

ストラップの豚を見つめながら、心の中で独り言を囁き続けるシンバ。

そして、後、数粒しか残っていないLTをテーブルの上に並べ、溜息。

今日までテンションを下げるのは苦労した。

今でさえ、本当は声を叫び上げ、力一杯、拳をどこかにぶつきたい気分を、必死で抑えている。

もうすぐ暴れられる、それまで我慢だと、自分に言い聞かせながら、よくトリップしなかったと思う。

うまく感情をコントロールできたのは、フリットの御蔭だろう。フリットがいなかったら、きつと、暴走していた。

それにラインの笑顔を思い出せば、あの笑顔を大事にしたくて、自分を落ち着かせる事ができた。

人は人を想う事ができた時、強くなれる。

その強さは、傷つける強さではなく、守る強さ。

自分が傷付いても、守れる強さ。

剣ではなく、盾となれる強さ。

だからこそ、自分を抑え、辛くても我慢できるものなんだと知った。だからだろうか、ひとつ、精神的にアップしたようで、

きつと俺は大丈夫。

全てうまくいく。

何も失わない。

LTのせいもあるだろう、そんな意味のない自信が湧きあがっていた。

夕方、ビルの地下に集まり出す若者達。

どう見ても、まだ子供だ。

シンバ自身も大人ではないが、流石に、17歳から見た13歳から15歳は、まだまだ子供に見える。

その程度の子供達が集まって、LTを飲んでいるのだと思うと、この国の未来は恐ろしい。

テレビ局の人だろうか、カメラを持った人と数人の大人達が、何か文句を言っている。

「今日のライブは中継しないって突然の拒否だよ」

「別にこっちはいいんだけどね、テレビ出演してる訳じゃなく、街に流すムービーだから、前のを使ってもさ。そんなのルーシーのCMみたいなもので、こっちとしては何の利益もない訳だし。只さあ、ここまで来た以上、金払ってほしいよね」

「そうそう、ドタキャンはないでしょー、最近の若い奴って、こうなんですかねえ」

「ホントだよ、前もって連絡するって知らないんすかね」

フウン。

今日はカメラ入れないのか。

そりゃそうか、俺を呼んでおいて、カメラに映せる状況じゃなくなるよな。

シンバは辺りをキョロキョロしながら、リグドが来ていないか、確認する。

来る訳ないか。

多分、リグドはルーシーの人气が気に入らないだろうし。

それでもルーシーをお気に入りにしたのは、なんでだろう？

忘れても、タレントだから、直ぐにわかるって理由だけじゃないだろうしな。

ビルの地下へ入る前に、チケットの確認が行われる。

シンバはチケットを渡すと、半券だけもらい、中へ入る。

そこは前に仕事で行ったクラブのような場所で、あのクラブよりは規模は小さいが、薄暗く、流行の曲が流れていて、余り落ち着けるような場所ではない。

だが、クラブより、流れている音楽は小さめで、それはまだ始まってはないからだろう。

シンバはステージから一番離れた後ろで、壁に持たれ掛け、腕を組んで、全てを見渡すように立っている。

カウンターで飲み物を注文している者、フロアで音楽に合わせてように、体を揺らしリズムをとっている者、既にステージの前で場所取りしている者。

俺が来てる事、ルーシーはどうやって知るんだろう？

薄暗いけど、ステージからは、よく見えるのか？

俺がどこにいたりとか、わかるのか？

それに、この規模で、300人って言ったら、詰め込み過ぎだ

る。

後ろになると頭しか見えないんじゃないのか？

そんなんで俺を見つけれられるのか？

まさか、俺に、本気でライブ見せたかっただけとかじゃないだろうな！？

シンバの周囲にも人が集まり出し、窮屈そうに、身を小さくすると、照明が落とされ、更に暗くなったかと思うと、皆が悲鳴のような奇声を上げ、ステージの方向を見ている。

そろそろ始まるらしい。 。
ステージからスモークが溢れ、これでは余計に視界が悪くなるじゃないかと思う。

静かに鳴っていた曲が止まり、途端、最大音量で流れる音楽。すると、皆、一斉にルーシーコール。

そしてステージに照らされた光の中、現れる男。
ルーシー・ミスト。

一気に熱気が上がり、上下に体をジャンプさせ、両手をあげ、ルーシーへ向けて、手を叩き、声援のような、悲鳴のような、奇声が響く。

ゆっくりスローテンポで踊っていると思ったら、激しいダンスを見せ、更に盛り上がりを見せるので、ボサツと突っ立っているシンバは、周囲から、かなり浮いている。

なんか、凄いな。

よくわかんないけど。

だが、やはり、ルーシーを敵だと思っているシンバは、幾らLTをキメていても、この雰囲気にもなる気は全くない。
腕を組み、ルーシーを見ているだけ。

一曲、終わったのだろう、ルーシーの動きと音がピタリと止まり、二曲目に入るらしい。

また違うリズムの曲とダンスが始まり、ファンにとつたら、更に盛り上がる所なのだろうか、急上昇で、皆のテンションが上がるのが

わかる。

ルーシーの声も一曲目より、ハイテンションになる。三曲目に入ると、バックダンサーまで出てきて、照明も色が変わり、派手なパフォーマンスを見せる。

おいおい、何曲歌って踊る気だ？

俺が来てるって、わかってんだよな？

少し、ここに来た事の意味がわからなくなって来ているシンバ。だが、三曲目が終わった所で、ルーシーのMCが入る。

「今日もご機嫌に過ごしたい奴等が集まったようだね、持って来たよ、キミ達が欲しい物。そう、ラストトリップ」

と、ポケットから、小瓶を取り出すルーシーに、ファン達が手を伸ばし、奇声を上げる。

「だが、残念な事に、この中に裏切り者がいて、これを渡す事はできなくなつた」

裏切り者？

俺………じゃないよな？

眉間に皺を寄せながら、腕を組んだまま突っ立って、シンバはルーシーを見ていると、今、ルーシーがシンバに気付いたのか、目が合ったように思えた。瞬間、ルーシーの口元がニヤリと笑ったようにも見えた。

「ボクの信者達。ボクを裏切ったらどうなるか、見せてあげよう」

ルーシーがそう言って、指を鳴らすと、ステージの上から何か降りて来た。

それは、十字架に鎖でグルグルに繋がれた………

アニル！？

シンバは、十字架に磔に合い、酷く痛めつけられたアニルの姿に目を疑う。

そして、ルーシーはスタンドからマイクを抜くと、それが長剣になつていて、アニルへと剣先が向けられると同時に、殺せコールが始

まる。

ルーシーは静かにと人差し指を立て、
「どうやらこの中にもセク部隊の犬がいるようだ」
などと言いつ出す。

セク部隊の犬？

誰の事だ？

だが、直ぐに、自分の事だとわかった。

ルーシーが、ジッとシンバを見ているからだ。

なんで俺がセク部隊？

そして、突然、ルーシーはシンバを指差し、

「いたいた、アイツだ、セク部隊の犬。LT中毒を処刑しよう」と、
ボクの聖域に踏み込んで来た勇敢な戦士。アイツを殺さないと、み
ーんな捕まって、処刑される。そうだったら、もう二度と、トリッ
プできない。最高の気分を味わえないよ？」

と、皆の怒りをシンバに向けさせた。
そして、曲が流れる。

この曲………？

アニルがバトル中にイヤフォンで聞いてた曲か！？

ルーシーがマイク片手に声を張り上げ、歌い出し、瞬間、そのフロ
ア、全員が戦闘態勢で、殺気立った。

ヤバイ。

シンバは小刻みに震え出す。

力が全身から抜けていく。

LTがキレル。

数秒は無気力になる………。

その頃、フリットは街の大きなビルの上に設置されたモニターを見
上げていた。

ニュース速報で流れるLT事件。

タレントのルーシー・ミストが、今現在、ライブを行っている最中

だが、LTが使用されているとして、ライブ場となるビルをセク部隊が包囲している。

中ではLTがキレた者が大暴れしていて、セク部隊も突入はできない様子。

「フリット？」

その声に振り向くと、

「結構、短めに切っちゃった。ベリーショートって奴？ どう？」

と、元々、短い髪が、更に短くなったラインが立っている。

フリットは、何も言わず、呆然とした顔をしているので、ラインは首を傾げ、モニターを見上げ、

「うっそ！ ルーシーって、やっぱりLTやってたの！？」

と、驚く。

「……………ライブって今日だったのか？」

「え？ なあに？ フリットもルーシーのライブ行きたかったの？」

その質問には答えず、

「ライン、これ俺の服！」

と、紙袋二つをラインにむりやり持たせると、

「先帰ってて。オイラ、ちよつと行くとこあるから！」

そう言つと、猛ダツシュ。

「ちよつと！ フリット！ どういう事！？ なによ、これ！？」

自分で買った物でしょ！ 信じらんない！ 私に荷物持たせて、しかも運ばせるなんて！ 私だつてこれからショッピング楽しもうと思つてたのに！」

ラインの叫び声は聞こえていたが、振り向きもせず、フリットはルーシーのライブ場へと急ぐ。

携帯を取り出し、走りながら、アニルにメール。

『お前、なんで嘘ついたんだよ！ ライブ、今日じゃねえかよ！』

送信ボックスには、一週間前にアニルへ送ったメールが残っている。それには、ルーシーのライブの日がいつなのか、尋ねてある。

アニルは、嘘の日にちを、フリットに教えた。

その時、既にアニルはルーシーに捕まっていたのだろう。そんな事、知らないフリットは、アニルからの返信がなくて、苛立ちながら、シンバに電話をかける。だが、通話中。

「くそつ！ こんな時に、誰と話してるんだよ！」
苛立って、そう怒鳴るが、直ぐに、

「まさか、着拒否!？」
と、通話中の理由に勘付く。

駅に着いたはいいが、長蛇の列になっている切符売り場。そんな列に並んでる暇はないと、改札を通り抜けると、駅員が追って来るが、フリットのスピードに追いつける筈もなく、しかも駅員はフリットを見失い、諦めたようだ。

人身事故があつたらしく、電車が遅れている。

こんな時に、何故なんだと、フリットはホームでウロウロ。携帯を取り出し、テレビモードにすると、ニュースを確認するが、電波が悪く、映像がうまく入らない。

「くそつ!!!!!!」
そう叫んだフリットに、周りにいた人がビククリして、フリットから遠ざかる。

フリットは携帯の只の時計となる待ち受けを見つめながら、その場に座り込み、

「なんでなんだよ、シンバ………」
と、深い溜息を吐き、頭を抱えるように、蹲る。

「なんでだよ、なんで一言くらい何か言って行かないんだよ、オイラだって、何か手伝える事があるかもしれねえじゃん、なんで1人で行っちゃうかなあ!？」

「そんな所で座り込んで、長い独り言って、かなり怪しいわよ、フリット！」

その声に顔を上げると ……
「アンタ………クラブでラインに倒された爪の女………」

「？」

「ラインに倒されたとか、余計だわ！ 言い訳になるから言いたくないんだけど、でも言っておくわ、アタシ、戦闘タイプじゃないのよね、頭脳タイプ。だからあそこまで戦えたアタシは凄いつて事よ」

「頭脳タイプ？」

「LTの御蔭で、分厚い本なんて、パラパラ捲るだけで完璧に全て暗記できるし、計算だって大得意だったのが、一瞬で答え出しちゃう程の大大得意になったし、後はコンピューターなら任せてって感じかしら？」

「なんだそれ？ どうでもいいけど、アンタ、釈放されたのか！？ セク部隊に捕まったる！？」

「釈放っていうか脱走？ セキュリティー解除なんて、アタシにとつて容易い事だから」

「脱走！？ じゃあ、指名手配になってるのか？」

「さあ？ 逃走してるつもりはないわ、アタシ、LTリミットレベル1だけど、中毒中じゃないし」

「でも、LTやってたんだから、死刑だろ！？」

「だったら、この国の殆どの連中、死刑になるんじゃないの？ フリット、アナタもね」

と、クスクス笑いながら、フリットの横にしゃがみ込み、フリットの顔を覗き込んで、

「アタシの事、本当に忘れてるの？ あのラインって女の子の手前、忘れたふりしてるんじゃないか？」

と、尋ねてきた。

「……オイラ、アンタみたいな趣味じゃない」

「酷いわね、敵として現れたからって、そんな言い草しなくてもいいじゃない？ あんなに愛し合ったのに」

「愛し合う？ 冗談だろ、本当に大事に思っている人じゃないと、愛し合えない」

「……変わったわねえ、フリット」

「は？」

「フリットじゃないみたい。記憶って、人格まで変えちゃうのねえ。でも着てる服を見ると、相変わらず、リグドに影響されてる感じするけど？」

「……………なあ、アンタさあ、リグドの取り巻きの1人だったのか？」

「さあ？ 覚えてない」

と、目線をずらし、立ち上がる女に、フリットも立ち上がる。

「ルーシー・ミストからLTもらってたよな！？ ライブに行ってもらってたのか？ あの爪みたいな武器もルーシーから？」

「あの時はもうLTもらってた訳じゃないわよ、中毒中じゃないんだから。LT中毒中の奴等いたでしょ？ ほらレベル2の強さを発揮した男達4人。アイツ等がもらってたのを、アタシが見て確認して、ちゃんともらってたって覚えててあげただけ。中毒中の時って、些細な物忘れ程度だけど、自分が忘れてる癖に、逆ギレして暴れたりする奴もいるからさ」

「……………アンタって、オイラの事、覚えてるみたいだけど、オイラ達って、リグドの取り巻きだったよな？ オイラ、アンタの事は覚えてないけど、自分が取り巻きだった記憶は少しあるんだ。ルーシーは、リグドの取り巻きの1人だったのか？ それとも、リグドからルーシーに接触したのか？」

「そんな事知ってどうするの？」

「どうもしないけど！ 知りたいんだよ！」

「じゃあ、アタシとエッチする？」

「は？」

「ご休憩しましょ？ そしたら教えてあげてもいいわよ」

「……………そういうの、やめた方がいいよ」

フリットが悲しそうな顔で、そう言うので、

「どうして？ 今を楽しみましょうよ、なんなら、LTやっちゃおう？ 一応、持ってるのよね。LTキメて、エッチしたら、最高、気

持ち良かったでしょ？」

と、小さなポシエットから、LTの入った小瓶を見せる女。だが、フリットの顔がどんどん悲しくなるので、女は溜息を吐いて、小瓶をポシエットに仕舞った。

「つまらない男になったわね」

「……オイラ、そういう男だったんだな」

「え？」

「……かつこわりい」

「は？」

「……かつこいい服で、かつこわりい自分隠しても、かつこよくないなあ」

「フリット？」

「アンタもさあ、今、中毒中じゃないなら、レベル1になった頃の記憶からはハッキリとあるんだろ？ もっと普通に女の子として生きた方がいいよ」

「普通って？」

「もっと、普通に……自分を大事にした方がいい」

「何それ？ ダッサ！ オヤジっぽいよ？」

「……ダサイ方がカッコイイって思えるようになったんだよ」

「フーン、それって、あのラインって女の影響？ リグドより影響力あるのね、その女」

「どうでもいいだろ、それより、俺の質問に答えなければ、どっか行けよ」

「どっか行けって酷いわね、質問ってなんだっけ？ ルーシーはリグドの取り巻きだったのか？って話だっけ？ 元々、アタシ達ってリグドからLTもらってたじゃない？ で、リグドはルーシーからもらってたのよ、リグドって、どこにいるのか、わからないじゃない？ 突然、現れるから。だから、アタシは、リグドより確実に会えるルーシーにLTをもらうようになったの。ルーシーはどこから

LTを手に入れてるのか、アタシは知らない。でもライブに行くとももらえるのよ、で、監禁されて、リミット越えちゃったの、アタシ

「
アニルと同じだと、フリットは思う。」

「リミット超えてからLTは必要なくなったんだけど、ルーシーから連絡が来て、LTやった事がセク部隊にバレた場合、バトルになるだろうって。戦闘を学んだ方がいいって言われて、武器ももらったわ。その代わりに、ルーシーのパシリみたいな事させられてるけど」

「やっぱりアニルと同じだと、フリットは思う。」

「フリットとアタシが出会ったのは、アタシがレベル1になってからで、フリットはまだ中毒中だったわね。でもある日、突然、フリットがいなくなっって、リグドにLTもらえなくて、どこかでLTキレて、死んじゃったのかもって思ってたわ。だからルーシーになら確実にもらえるわよって伝えたかった。その頃はまだルーシーも、今より有名じゃなかったし、ルーシー自身、LTに手を出してなかったんじゃないかしら？ そのまま、フリットとは会えなくて、数年後、やっと会えたと思ったら、レベル1だし、アタシを忘れてるし、敵だし、ラインなんて女を好きになっってるし！」

「オイラとアンタの事なんて、どうでもいいよ」

「寂しい事言うわね」

「それより、ルーシーとリグドの関係を話せよ」

「ルーシーとリグドの関係？ そんなの知らないわ。お互い似てるから知り会ったんじゃないかしら？ リグドのカリスマ性、ルーシーのタレント性、どちらも人を惹き付けるチカラを持って二人だったから、二人が接触するのは自然だったのかも。でも、何故かりグドの方が上回るのよね、それはやっぱりLTリミットレベルが高いからかしら」

「……リグドって、今、レベル4？」

「さあ？ 知らない。会ってないし。リグドは気まぐれだから、ど

ここに現れるのかも、わからないし、付き纏っても、相手にされる訳でもないし、よっぽどじゃないと、気に入ってもらえないし。LT頂戴って言えば、飴をくれるようにくれるけど、只、それだけ。彼は誰の事も気にとめないし、誰の事も見ていない」

「……………」

「その点、ルーシーは、気にかけてくれるし、人をちゃんと見てるわ。ファンは大事にしないとね、タレントはやっていけないでしょ。多分、見ていないのは、リグドの事だけ。自分がリグドになれないから、目を逸らすのよ」

「……………リグドになれない？」

「一番、リグドに近い人間はルーシーだって、ルーシーは思ってるでも、なれない事をよく理解してる。ルーシーは自分が好き。自分の歌が好き、自分のダンスが好き、そして、それを支持してくれるファンが大事。そこがリグドとルーシーの決定的な違いよ。どんなに人が集まっても、どんなに人から好かれても、支持されても、リグドはそれに応えない。常に孤独だし、何も持ってないし、持たないし、自分の事もどうでも良さそう。でもそれがリグドの強さの理由だわ、孤独だから、誰も悲しませないし、何も持ってないから失うモノはないし、自分が今直ぐ死んでも、何の後悔もない。ルーシーは、そんなリグドになりたいんだと思うわ、でも、なれない。なれっこない、大事なものがあ限りね」

「……………大事なのにLTを使ってライブか？」

「LTがなきゃ、ルーシーなんて、無名よ」と、女はケタケタ笑う。

「ダンスがうまいのも、歌がうまいのも、LTの御蔭。そして、ファンが必ず集まるのは、LTの御蔭でしょ？ そうやってファンをゲットしてんのよ、大事なものって言ってもね、世の中、そんなものでしょ、フリットだって、LTやって、いろんなもの、手に入れたでしょ？ 強さもそうだし、お金だって、女だって、欲しいものは、なんだって手に入る。LTって、そんなご機嫌な薬だったじゃ

ない？ でしょ？」

「……帰ったら、ラインに、お前も相当、男の趣味悪いって言ってる」

フリットはそう呟くと、

「ルーシーって奴、バカだよな。LTやってて、リグドと接触ある奴なんて、みんな、自分をリグドに一番近い人間だって思ってる、オイラもな」

と、自分の服を親指で差して言う。そして、

「折角、歌もダンスも、恵まれた才能があるのにさ、努力じゃなく、LTなんかで誤魔化して、トリップして、折角の大事なもん、台無し。欲しい物が、なんだって手に入ったら、残るのは要らない物ばかりだ。LTはさ、何でも手に入る凄くいい夢なんだ、でもその夢は、全てを壊す悪夢なんだ、オイラはそんな悪夢、二度とごめんだ。大事なもん、壊されたくない、自分で、自分の力で守りたい。あ、電車、来た、オイラ、行かないや」

遅れていた電車が来る。

電車の扉が止まる場所に並ぶフリット。

女はその電車には乗らないのだろう、フリットに続いて並ばないが、

「どこへ行くの？」

そう聞いた。

フリットは振り向いて女を見た。

シンバの台詞が脳裏に浮かぶ。

「お前に会えたし、ラインに会えた。それは俺にとって、多分、一生分のラッキーだ。LTやってて良かったと思える瞬間？」

「友達を助けに。トリップさせたくないんだ、この現実世界で一緒に生きたい仲間だから」

「仲間？ どうせLTやってるんでしょ？」

「だからソイツに会えた」

「出会いなんて、忘れられたら終わりよ、フリットだってアタシを見て何も思いつかないじゃない？ アタシの名前さえ覚えてない

んでしょ？ それに、LTやってるなら、その人もルーシーと変わらないわ、そんな人を助けるって言うの？ さっきルーシーをバカだっけ言っただけに」

「でもソイツは自分をリグドに近い人間だとは思ってない」

「え？」

「リグドを助けたいと思ってる。大事な人を救えると思ってる。LTの手カラで守れると思ってる。ソイツも相当バカだから、オイラが気付かせてやらないとさ！ バカだっけ」

フリットは笑いながら、そう言っていると、ラッシュ時以上に、ギョウギユウ詰めめの電車に乗り込んだ。

「……人に押し潰されて、カッコ悪い去り方するのね」

と、クスツと笑う女に、苦笑いしながら、動かせない手を振ろうとして、振れなくて、指でバイバイと振ってみるフリットに、女は更にクスツと笑い、

「でも昔より、カッコイイかも」

と、呟いた。

シンバは、数秒の脱力の後、殴られ蹴られしたが、それを耐え抜き、そしてレベル3の強さを纏い、300人程のファンをぶっ潰していた。

もう倒れて気絶している最後の男を、まだボコボコに殴り飛ばすシンバに、ルーシーはステージ上で、歌を止め、驚いている。

「……これはどういう事だ？ ボクの歌で戦闘法マニユアを、理解してる連中を、一人で潰したなんて、有り得ない。ボクはトリップしてるのか？」

目の前で起きている現実が飲み込めないルーシー。

そして、今、シンバは、ルーシーを見ると、

「ひゃーっはっはっはっはっはあ！！！！」

と、気が離れた笑いを遠吠えのように吠えた。

ずっと気分を抑え、大人しく過ごしていたシンバはストレスが溜ま

つていたのだろう、そのストレスが一気に発散され、気分上昇で、ハイテンション過ぎるシンバ。

「……………有り得ない。ボクより強いのはリグドだけだ」

ルーシーはそう呟きながら、それでも認めなければならぬ現実、最後の手段だろう、マイクの剣をアニルへと向け、

「コイツを殺す！ いいのか？」

そう叫んだ。

首をコテンと横に倒し、わからないと言った態度のシンバ。

「コイツはお前の友達だろう！？ いいのか！？」

アニルは薄っすらと目を開け、シンバを見て、

「助けて……………シンバさん……………」

そう囁くが、シンバはそんな事、どうでもいいのか、一步一步、ステージへと近付く。

「おい、止まれ！ 勝手に動くな！ コイツを殺すぞ！」

その台詞にか、シンバは足を止めた。いや、ステージ横から出てきたリグドに足を止めた。

ルーシーもリグドの存在に気付き、

「……………どう……………して……………ここに……………？」

驚愕の表情でそう聞いた。

「オレは毎月、お前のライブ、楽しみに見に来てただけだよ」

「……………嘘だ」

「ああ、嘘だ、楽しみではない。しょぼいライブだなあってさ、特に今日のは最低だな」

と、十字架に鎖で縛られたアニルを見て、

「自分のファンを吊るし上げて何がしたい？ 吊るし上げる人間、間違ってるだろ」

そう言った。

「ま、間違ってる？ そんなバカな！ ソイツはボクを裏切って、アイツと仲良くしてるんだよ！ メールも繋がってる！」

「でも間違ってるから最低のライブなんだよ。男なんて吊るすな、

パフォーマンス的にもつままないだろ。吊るすなら女でしょ?」
と、リグドはシンバを見るので、シンバの鼓動が早くなる。

ラインの事、言ってるのか?

そう思ったのが聞こえたかのように、リグドがフツと笑う。

ゴクリと喉を鳴らし、唾を飲み込むシンバと、威圧的な微笑を浮かべるリグド。

二人の視線が繋がっているのが、気に入らないルーシーは、

「……い、今から、最高になる!」

そう叫んだ。リグドは、シンバから目を離し、ルーシーを見る。

ルーシーはリグドが自分を見てくれた事に笑みを浮かべ、

「アイツをボクが殺す。見たいだろう? 元お気に入りがどんな顔で死に行くのか! 今直ぐに最高に楽しませてあげるよ!」

喜々として、そう言うのと、剣先をアニルから、シンバへと向けた。

リグドはクツクツクツと笑い、

「元?」

と、尋ねる。

「……元お気に入りじゃないの? あの男」

違うのか?と、焦った顔で、ルーシーはリグドを見る。

リグドは、笑いを止め、一気に不機嫌なオーラを身に纏い、

「今も気に入っている」

そう言うので、ルーシーは驚愕の表情で怯え出し、急いで剣を下ろす。

「ご、ごめつ、リグド、ごめん、ボク、知らなくて! もう気に入

ってないのかと! だって手放してるようだったから! じゃあ、

じゃあさ、アイツを殺すのはやめるよ!」

「殺して見せる」

「え?」

「殺して見せる、そしたら、許してやる。でも、お前のレベルじゃ無理かな」

ルーシーはコクコク頷き、

「僕のレベルは3だよ？ 見てて！ 今直ぐ、コイツを殺してやるから！」

と、シンバに再び剣先を向ける。

さっきまで気分上昇していた明るい表情のシンバは、リグド登場でテンションが下がったのか、それとも平常心に戻ったのか、無表情だが、その瞳はもうルーシーではなく、ずっとリグドだけを映し見ている。

その瞳が気に入らないルーシーは、

「どこ見てるんだよ、ボクが直々に相手してやるって言うんだ、有り難く思え！」

と、ステージから飛び降り、マイクの剣を構えたまま、シンバに近付いて行く。

今、リグドの唇が、殺せと、シンバを見て動いた。

シンバはリグドの唇を読み間違えたのかと、リグドを見つめるが、リグドは不敵な笑みを浮かべているだけ。

殺せって言ったのか？

ルーシーを気に入っているんじゃないのか？

リグドの考えが、全くわからない。

ルーシーには、殺して見せろと言い、シンバには、殺せと命令。

俺達を本気で戦わせたいだけ？

これもリグドの遊びか？

今、ルーシーの剣がシンバの目の前、振り上げられ、シンバは素早く背中の子ザンファングを抜いて、ルーシーの剣を弾いた。

マイクの下に忍ばせるようなオモチャみたいな剣と、ノーザンファングの一振りの威力は、相当な差がある。

同じチカラで剣を振るっただとしても、ノーザンファングは元ジュキトの本格的な武器のひとつだ。

それこそ、LTを使用した軍人が扱う為に仕入れた武器。

大きなチカラに応える事のできる武器なのだ。

ルーシーの剣は、そのたったの一振りで、刃が折れてしまい、ルー

シーの剣の柄を握っている手は、ノーザンフアングに弾き返された衝撃で、ビリビリと痛みが伝わり震えている。

ルーシーが焦った顔をしているのに、リグドは楽しそうにクスクス笑っている。

その笑い声に振り向いて、ルーシーは、リグドに助けを求めるように表情だが、リグドは笑っているだけ。

歯を食いしばり、体に力を入れて、雄叫びを上げながら、折れた剣でシンバに向かって行くルーシー。

だが、折れた剣も、弾き返され、しかも余りの衝撃に、ルーシーは手から剣を離してしまった。

滑稽に床に転がる折れた剣と同時に、ルーシーも床にガクンと膝から落ちる。

だが、シンバはノーザンフアングを鞘に仕舞うと、ルーシーの胸倉を持ち、立ち上がらせ、無言で殴り飛ばす。

タレントだから顔なんて殴られた事はないだろう、それだけでシヨツクも大きいのか、ルーシーからは一気に闘争心が消えている。

だが、シンバはルーシーを突き飛ばすように放すと、その場に跪いた。

どうやら、そろそろLTが完璧にキレルようだ。
体から力が抜けていくのがわかり、気を失いそうになる。

気がつけば、すぐ目の前に、ルーシーが立っていて、折れた剣を振り上げていて。

だが、
「もう逃げた方がいいんじゃない？」

と、リグドの声に、ルーシーは、剣を振り上げたまま、振り向いてリグドを見る。

シンバもまだ意識があるので、歪んで見える視界の中、リグドがどこにいるのか、声のする方を見て、探している。

「LTが完璧にキレル頃だって、そろそろセク部隊が乗り込んで来るんじゃないかな」

「セク部隊？」

「あれ？ 知らないの？ このビル、セク部隊に包囲されてるよ」

「どういう事！？」

「どういう事？ それはね、1つの間違いは、1つの敗因」

と、リグドは吊るし上げられたアニルを見て言う。そして、またルーシーを見て、

「お前の敗因はシンバの大事なものを間違えた事。それさえ間違えなければ、俺はお前を褒めてやったのに。そしてシンバの敗因は

」

と、フロア全てを眺め、

「俺の命令を聞かず、レンを殺さなかった事。そして今このフロアにいる全員が生きてるって事。レンに飼い慣らされて甘くなっただんじやないか？ それとも、お前を変えたのは、大事な大事なラインちゃん？」

と、シンバを見て、そう聞くと、シンバの視界は既にぼんやりとしていて、リグドの存在は捉えているものの、リグドの表情まで見えない。

それどころか、シンバは、レンって誰だ？とまで思っている。

薄れていく意識の中で、シンバは記憶が消えて行くのを感じている。

「ま、待って、リグド！ 敗因って、今、これから止め刺すから！」

と、ルーシーはシンバを見下ろすが、

「ルーシー、お前、もう終わりだよ、自分の立場忘れてないか？」

お前はタレントだろ？ セク部隊が動いているって事はさ、ニユースで流れちゃってるよ」

リグドがそう言うから、ルーシーは、震えながら、剣を下ろし、そして、振り向いて、リグドを見ると、

「ボ、ボクがLT所有で捕まったら、LTはもう手に入らない！」
と、震える声ながらも、しっかりとした口調で叫んだ。

リグドは一瞬、困った顔になったと思っただら、直ぐに大笑いし、

「何か勘違いしてる？ オレ、もうLTいらぬから」

と、ポケットの中に手を入れて、持っているLTをバラバラバラと床に落とし、

「超えるんだ、ラストを」

そう言った。

「……でも！ ボクは捕まらない！ 捕まえられないさ！
ボクにLTを渡していたのはセク部隊隊長だ！」

「知ってるよ、知らないのは、お前の方だ、俺もお前も奴等の手の中で転がされているって事に。で、俺の目的は何か教えてやろうか？」

リグドは、そう言つと、ステージから飛び降りて、ツカツカと歩み寄ってくる。

シンバはもう視界が暗くて、何も見えなかったが、リグドの気配が強くなるのと足音で、近付いて来ているのがわかった。

「オレの目的はジユキト復活。奇遇だね、セク部隊隊長と同じだ。と言うか、ソイツの手の中に入り込んでみた。その方が、俺にとっても好都合。バラバラになったジユキトをひとつに纏めた方が、簡単に潰せるから。それこそ記憶がなくても、大きな存在ってのは邪魔だから潰す事になるだろう。ルーシー、オレに隠れて、コソコソとファンに武器を渡したり、元ジユキトの連中とコンタクトとつたり、そして、オレにたくさんのお金を運んでくれて、ご苦労様」

今、どうなっているのか、わからないが、ルーシーの怯えている空気がシンバに伝わり、シンバも跪いたまま、その恐怖心に吞まれそうになる。

「ああ、でもまだ、ご苦労様には早いか、仕事が残ってるからね。LTリミット越えたタレントがセク部隊に捕まるって言う、セク部隊の強さを世界にアピールする為の仕事が」

ルーシーは、リグドからも、デンバーからも、利用されていたって事かと、シンバは思うが、ルーシーはまだ諦められないのだろう、

「ボクは捕まらない！ リグド、お願いだよ、ボクと一緒に連れて行って！」

と、必死な声を出している。恐らくリグドに縋っているのだろうと思うが、その後、ルーシーの嗚咽が聞こえ、その音で、殴られたなとシンバは悟る。

「ゲームオーバー」

リグドがそう囁くのが聞こえたのと同時に、シンバは誰かが自分を呼ぶ声を耳にする。

だが、その声为谁なのか、もう思い出せない。

シンバと叫ぶ声を聞きながら、シンバは気を失った。

「シンバ！ シンバ！ シンバア！！！！」

ルーシーのライブ場となる周囲には、KEEP OUTと書かれた黄色いテープが張られ、セク部隊が立っている。

そのテープの向こう側は、野次馬の人込み。

その人込みを掻き分け、フリットがシンバの名を叫んでいる。

今、ビルの中から、タンカで運ばれてくる人。

どれもこれも、重症っぽいけど、シンバではない。

報道人も結構来ていて、フリットは裏側へ回り、ビルの中へ入れないか考える。

裏側の方がセク部隊が結構多く、だが、野次馬も報道人もいない。

フリットが通ろうとすると、セク部隊に、今は立ち入り禁止だと止められるが、無理矢理、突破すると、セク部隊に銃を構えられ、直ぐに、手をあげ、フリットは立ち止まる。

今、裏口からタンカで運ばれて来たシンバに、

「シンバア！！！！」

そう叫び、フリットは走り出した。

その場のセク部隊全員が、フリットに銃口を向ける。だが、

「やあ！ 確か……フリット君だったね、キミも来てたのか」

と、デンバーが現れ、フリットに声をかけたので、セク部隊達は銃口を下ろした。

「あの、シンバは!?」
「ああ、今のところは大丈夫、気を失っているだけですから」
「オイラが連れて帰ります!」
「それはできません」
「どうしてですか!？」
「……彼はもうリミットを越える時が来ているんです」
「知ってます、だからオイラ達の方で引き取ります」
「……キミ、レンから何も聞いてないんですか？」
「え?」
「彼はね、セク部隊に入る事になったんですよ」
「は!？」
「レンはその事に承諾しています」
「……ちよつ、ちよつと待って下さい、話が読めません」
「ワタシは説明しましたよね? ここ最近、ジユキトの紋章入りの武器が出回り、その武器を装備して、喧嘩ではなく、まるで戦闘方法を知っているかのような若者が増えてる事、そしてLトリミットを越えている事など。こうなったら、セク部隊のチカラではどうしようもなく、シンバ君とフリット君を我が部隊に招き入れたいと言つ事を」
「そ、それは聞きましたけど、レンが承諾しているって言うのは?」
「ええ、承諾してくれています、帰って、直接、レンから聞くといいでしよう」
「そう言うと、デンバーは背を向けて、行ってしまおうとするので、」
「あの!」
フリットは走って行って、デンバーの前に立ち、
「新しく開発されたLTは記憶がなくならいつて本当なんですか!？」
「そう尋ねた。」
デンバーはフリットを見て、
「……ええ、リミットレベル1を超えても記憶はなくなり

ません」

そう答えた。

フリットはホツとして、アニルの記憶がなくなってない事を思い出し、納得するが、直ぐにハツと気付き、

「リミットレベル1って？　じゃあ、リミットレベル2を超えてる者は！？」

大声で叫び返し、尋ねた。

「……フリット君」

デンバーは、フリットに近付き、小さな声で、

「我々が知っている人物でLTリミットレベル2を超えたのはリグドと、それからシンバ君だけだ」

そう言った。フリットは眉間に皺を寄せ、

「え？　二人だけ？　だってルーシーは？　というか、それってどういう意味ですか？」

再び、尋ねる。

「フリット君、どうして我々が新しいLTならば、リミットレベル1を超えても記憶を失わないと言い切れると思っっているのですか？」

「え？　それは……レベル1を超えても記憶を失ってない奴等がいるから？」

「それは誰なんですか？」

「誰って？」

「つまりですよ、LTを新しく開発しても、その効果は理論だけでは言い切れない。多分、恐らくなどと言っている訳ではなく、必ず、絶対と言い切れる自信があるのは、どうしてだと思っっているんですか？」

「……え？　あの？　どうしてなんですか？」

「わかりませんか？　言い切れるのは100パーセントの実証済みだからですよ」

「実証……済み……？」

「我々は、この国の一員です、実験室も研究室も全て国の許可がい

る。だが、許可なしでLTを研究し続ける事は密かに行えるが、実験は難しい。新たな風邪の予防薬だと嘘を吐いて、モルモットなどで試して、万が一、そのモルモットが凶暴になり、研究員を襲うような事があつたら、どうなると思います？」

「・・・・・・・・え？ すいません・・・・・・・・言っている意味がよく」

わからなくてと言おうとしたフリットの言葉を遮り、

「だから我々は隔離できる人のモルモットを手に入れる為に、ルーシーをつくりあげたんですよ」

デンバーはそう言つて、言葉を失うフリットを見る。

「フリット君、隠していても仕方ないので話しますが、内密にしておいて下さい。我々はこの国を乗っ取るつもりです、ジユキトとして」

「・・・・・・・・」

「その為に強大な武力が必要なんです、この国を乗っ取る為に、全ての国を支配する為に、そして、リグドを倒す為に」

「・・・・・・・・」

「だから我々はLTを研究し続け、リグドを追い続けた。今でさえ、リグドもルーシーも、二人がどうやって知り合つたのか、記憶にさえないでしょうが、全ては我々の手の中で動いているのです。人というのはね、記憶で作られている。才能さえ、記憶で左右される。」

「実際にルーシーという人間がそうだ。歌もダンスも流行も、全てこちらが与えた記憶でつくられた人物。そうして、狭い部屋に300人の人間を閉じ込めておける事に成功。外でLTを渡すだけでは、確保するにも大変だ。それにね、モルモットと言うのは決まった日に薬を服用するものだ。ルーシーのライブの日、時間、こちらの設定で、皆、一斉に薬を飲み始める」

「・・・・・・・・」

「キミもそうだろうが、ルーシーもね、昔のLTを服用していて、レベル1になつたが、記憶を失っている部分が多々あるんですよ、

だから、我々が彼にレベル3だと思込込ませているだけ。それだけでルーシーはレベル3に成り切つて、レベル1の連中をうまく動かしてくれるよ」

「……アニルは……アニル・セイファンも、アンタ等のモルモットなのか？ オイラ達にアニルと出会わせ、記憶を失つていない事を見せたのか？ それでシンバは安心してLTを飲んだんじゃないのか！？ ちゃんとシンバに説明してくれたのか！？ レベル2以降は記憶を失わない保証はないって話してくれたのか！？」

「……フリット君、シンバ君が服用していたLTはまた違うものだ」

「え？」

「確実に記憶を全て失うものなんですよ」

「は？」

「レンも承諾された事です」

「なんで！？ どういう事！？ シンバの記憶って全部なくなるの

！？ ラインやオイラの事も忘れて、アイツ、これからどうなる訳

！？」

「……セク部隊として働いてもらいます、そういう記憶を与えますから」

「何言つてんだよ、シンバはなあ、シンバはラインを守りたくてLTを飲んでたんだよ、リグドを救えるかもってLTを飲んでたんだよ！ セク部隊になる為じゃねえんだよお！」

フリットは興奮の余り、デンバーの胸倉を掴み、そう怒鳴るので、周囲にいたセク部隊が全員、銃口をフリットに向けた。

デンバーは落ち着けと、周囲に両手で合図し、胸倉を掴んでいるフリットの手を持ち、

「結果、そうなるでしょう、何も心配いりませんよ」
そう言つた。

「結果？」

「シンバ君は、リグドを倒す、そうすれば、ラインという方は守られる。でしよう?」

そんなんじゃないと、フリットはデンバーの胸倉を強く握るが、
「キミもセク部隊に入りませんか? 歓迎しますよ」

デンバーが、そんな事を言うので、フリットは力を失うように、胸倉から手を離し、只、呆然と突っ立って、どこを見ているのか、わからない瞳をし始める。

「……シンバがリグドを倒したら……シンバは誰に倒される訳?」

ぼんやりと呟いたフリットの質問に、デンバーはフツと鼻で笑みを零すと、その場を立ち去った。

慌しく動く周囲の中、ずつと、立ち尽くしたままのフリット。

体の中から冷えていくのがわかり、ふと、ラインの笑顔が思い浮かび、そこへ帰れば、温かくなれると、トボトボ歩き出したが、途中、このままラインと一緒にレンダーの傍にはいられないと、急いで帰る為、走り出した。

廃墟に着くと、すっかり夜も遅く、

「フリット、どこへ行ってたの? シンバとも全然、連絡とれないんだけど」

と、ラインが、走り寄ってきたが、何も言わず、フリットは自分の部屋に向かうと、大きな鞆に自分の荷物を詰め始め、

「ラインも、早くここを出て行く準備しろ」

そう言った。ラインは、なんで?と首を傾げ、

「何かあったの? ここを出て行くってレンに話した? シンバも一緒?」

そう聞いた。シンバも一緒かと聞かれ、フリットは手を止め、ラインを見る。

ラインは首を傾げたまま。

「おい、帰って来たのか、フリット。帰ったなら遅くなった理由を話せ」

と、レンダーが現れ、フリットは怒りで拳を握り締め、キツとレンダーを睨むと、

「シンバは！？ もう帰って来たのか！？」
大声でそう叫んだ。

「……………まだだが」

「帰って来るのか？」

「知らねえよ、俺様に聞く事じゃねえだろ」

「知らない訳ねえだろ！！！！」

フリットはまた大声で叫び、ラインはビクツと体を小さくする。

「レン、アンタさあ、シンバに何をしたんだよ」

「何の話だ」

「とぼけんなよ！！！！」

「何の話だと言ってるだろう、俺様にはサツパリわからんが？」

「言わなきゃわかんねえか、ああ、そうかよ、なら言ってるよ、

シンバがLT飲んでた事、知ってやがっただろう！！！！」

そう叫ぶフリットに、ラインは驚いて、フリットを見る。

フリットはレンダーを怒りの表情で見つめたまま、レンダーは無表情でフリットを見つめたまま。

「……………LT飲んでたって……………どういう事……………」

「？」

シーンと静まり返る部屋で、ラインが小さな声で聞いた。

だが、フリットは、レンダーを憎しむ目で見つめたまま、

「シンバが飲んでたLTは全ての記憶が消えるって、知ってて、止めなかっただろう」
そう言った。

レンダーは無言で、無表情のまま、フリットを見ている。

「なんとか言えよ！！！！」

そう吠えながら、フリットは鞆に詰めようと持っていた服を思いっきり床に叩きつける。

「……………他にどうしろと言うんだ、シンバはレベル2だ。も

うアイツしかいないだろう、リグドを止めれる奴は」

「だからって、遣り方が卑怯だろ！ オイラ達を騙してたんだぞ！

LTやって、レベルを超えても、これはオイラ達の体だ、シンバの体はシンバのもんだろ、その強さをどう使うか、決めるのは、シンバ自身だろ！」

「黙れ！ お前達はまだ子供だ、力の使い方など、わかってないだろう！」

「は！？ 子供？ だったら子供に危険な事さすんじゃねえ！」

「だから危険じゃないよう、俺様が仕事を選んで来たんだろう、黙って与えられた仕事をやってればいいんだ」

「もううんざりなんだよ！！！！！」

フリットはそう怒鳴ると、

「出てく。ラインも連れて行く」

そう言った。レンダーは、ラインを見て、そしてフリットを見ると、

「出て行くなら、お前だけにしろ。ラインを巻き込むな」

と、ラインを自分の背後に引っ張ろうとするから、

「テメエの傍にいたから、シンバは巻き込まれたんじゃないのかよ！」

フリットはまた大声で叫んだ。

「レン、アンタさあ、オイラを助けてくれたんだよな？ LTのキ

レたオイラを拾ってくれて、ここでレベルを超えた後、オイラはここで生きて来た。アンタを信用して。でもさ、今更、オイラ、アンタの事、信用できないんだよ。もしオイラがレベル2だったら？

そしたら、アンタ、オイラをどうした？」

「・・・・・・・・」

「なんでLT中毒中のオイラを助けた？」

「・・・・・・・・」

「リグドを倒せそうかもしれないと思ったからオイラを助けたのか？」

「・・・・・・・・」

「アンタにとって、オイラもシンバも、なんだった？」

「……………」

「レン、アンタが守りたいのはラインだけだろ？ それは別にいい。只、守る方法が違うんじゃないか？ オイラだってシンバだって、ラインを守って行きたいって思ってたさ、なのに、どうして、こんな犠牲を払う方法で守る事を決めたんだよ？」

「……………他にどんな方法があった？」

「ないよ！ ないに決まってるじゃない！ リグドと戦って勝てる方法なんて、LT使っしかねえよ！ でもさ、どうしてそれを嘘で固めて、シンバに全て押し付けたんだよ！ せめて真実を話してくれていたら、シンバは、それでも受け入れただろうよ、でも結果じゃないだろう？ その過程が大事なんだろう？ だってオイラ達……………人間なんだぜ？」

「……………少しここで待ってる」

「レンダーはそう言うのと、どこかへ行くので、フリットは、苛立って、ベッドに拳を沈める。」

「フリット、どういう事？ ねえ、シンバがLTやってるって、いつから？ 今、シンバはどこにいるの？」

「ラインが、フリットに駆け寄り、不安な顔で、尋ねる。」

「シンバはLTがキレてセク部隊に確保されてる。LTを飲み始めたのは2週間前ぐらいから。記憶がなくなると言われたんだ。」

「シンバはどうしても強さが欲しかった。リグドが……………ラインに何かする前に……………」

「私に何かするって？」

「ラインが猫探しの仕事をした時があっただろう？ その時、その客と食事したよな？ その後、シンバに画像を送って来ただろ、客の友人って奴と二人で……………」

「クロス？」

「そう、そのクロスって名乗って男……………リグドなんだ……………」

「え！？」

その時、レンダーが、

「おい、テーブルの上開ける」

と、大きな箱のような古いコンピュータを抱え、持って来て、フリットがテーブルの上を片付けると、それをドンツと置き、電源を入れた。

「これはな、この廃墟にそのまま残っていたコンピュータだ。中に入っているデータも残っていた。雨風にやられちまつてるかと思っただが、意外に丈夫だな」

言いながら、レンダーは画面に映ったパスワード入力画面に、パスワードを入れていく。

そして開いた画面の端に並ぶフォルダの中から、LTテストと書かれたフォルダを選び、それを開くと、実験中のLT漬けの子供達データが出てきた。

ズラツと並ぶ名前の中から、ライン・ポトリーと書かれものがあり、

「私？」

と、ラインが指を差し、レンダーは頷くと、ラインの名前を選んだ。するとラインのデータが詳しく出てきた。

「指紋も一致している。間違いない、これはお前だ。この写真でもわかる通り、白い肌、黒い髪、アクアの瞳。成長しても変わらないものが一致しているからな」

ラインはフーンと頷き、レンダーは、その画面を閉じて、またズラツと並ぶ名前の画面に戻した。そして、シンバ・ルーペリックと書かれた名前を選んだ。

「これはデンバー・ルーペリックの息子だ。見てわかるだろう、お前達の知っているシンバではない」

確かに、画面に映るシンバは、赤茶色の髪と瞳で、シンバとは異なる。

「このシンバこそが当時第二のリグドと言われ、リミットレベル3となった少年だ。だが、このデータを見る限り、この少年は肉体

の膨張と精神の安定さが一致してねえ。今でこそ言える事だが、LTリミットレベル4になる為、更に服用中だったが、恐らくレベル4になる前に、中毒中で死んだだろう。リグドにくっ付いて行ってしまったが、どこかで死んで、そのままだな。確率的には低いが生きているとしても廃人になっているか……。只、リグドにとって、コイツは只1人の仲間だったのかもしれないねえ。同じレベルに達した奴なんて、早々いないだろう、最早、人間じゃねえ。だからこそ、リグドは常に独りなんだろうしな」

言いながら、またズラツと名前が並ぶ画面に切り替える。瞬間、ラインが、ひとつの名前を指差した。

「この人、クロス・セイト！」

「クロス・セイトって……」

フリットがそう言うと、ラインはフリットにコクンと頷くので、リグドが名乗った偽名かと悟る。

レンダーは、

「よくわかったな」

そう言うと、その名前を選び、クロス・セイトのデータを出した。蒼い髪と瞳の少年。

「そう、これが、お前達のよく知っているシンバだろう。指紋が一致した」

「……このデータって、リグドも持ってるのか？」

フリットが尋ねると、レンダーは頷き、

「持つてるかもな、当時、ここを襲撃した時に、持って行ったかもしれない」

そう言うと、その画面のまま、蒼い髪と瞳の少年を見つめ、

「この少年の事は、よく覚えてるんだよ」

呟くように、そう言った。

「クロスはな、ラインと同じ牢屋に入れられていた。ラインは俺様のよく知っている軍人であった友の子だったが、クロスはやはり軍人の子だったが、俺様の知らない奴の子だった。只、両親がLT漬

けで中毒中だったから、妊娠したまま服用していた為、ラインは生まれながらのLT中毒症だった。このクロスもな。そう言った意味で、同じ牢屋に入れられていたんだ。まだ子供だったから、男も女も関係なかったしな」

「……私がシンバと一緒にいたの？ 小さい頃？」

「ああ」

「……それで？」

「俺様がクロスを気にかけてやる事はなかったが、ラインは、いつもクロスを気にかけていた。俺様が毎日、飴玉をやるんだが、それをクロスに渡しちまうんだ。クロスも、その飴玉を食わねえで、全部、取っておくんだよ、まるで大事な宝物みてえによ」

レンダーは昔を思い出しながら、遠い目をする。

「開け晒しの空気穴みてえな窓があつてな、雪が降ると、そこから2人で外を覗き込んで、手を伸ばして、雪を掴もうとしていたな。寒いから一枚の毛布に2人で身を包んで。冷たい手足をしながら、雪がそんなに嬉しいのか、それともLTのせいか、2人で声を出して笑っていたっけな」

「……そっか、だからか。なんとなくシンバを見ると雪を思い出すのは」

ラインはそう言うと、

「記憶はないんだけどね、なんとなく連想されるの。それに最初に会った時から、どっかで会ってるような気がしてた」

と、悲しげな笑顔で言った後、涙をポロポロ落とし、

「どうして記憶をなくしちゃうLTなんて作ったの」

誰に責めていいのか、わからず、レンダーに責めるように言い放つ。「想い出して人から聞くものじゃない。なのにレンから想い出を聞いても、何も想い出せない。なんとなく、どこかで納得してるだけで、鮮明さも懐かしさも何もない。どうしてそんな薬……未だあるのよ！」

そう言うと、ワァッと泣き出し、しゃがみ込むライン。

フリットはラインの肩を抱き、

「なんで、そんなデーター、オイラ達に見せた？」
そう聞いた。

「……リグドの子供の頃のデーターと、このクロスのデーター。恐ろしい程、一致するんだよ、肉体の膨張も、精神の安定さも。だから、もうシンバに託すしかねえと思った。だが、LTを服用し、俺様達の事を覚えている保証などない。リグドも、昔の事を覚えているのか、それとも、記録を取り、それを毎日読んで確認しての事なのか、わからねえ。大体、レベルファイナルを迎えた人間の感情がどうなっているのかも、わからねえ。理論的には無理な話だ、肉体が悲鳴をあげ、記憶もない、只の殺戮を繰り返す化け物となる筈。だが、もうすぐリグドはファイナルを迎えるらしい。今となっては各国にLTは流出してしまい、どこの国もLT撲滅キャンペーンをしているが、リグドを止めるには、LTしかない。しかも同じファイナルを迎える事ができる人間しか、世界に希望の光を与えられない。リグドは直ぐに世界を滅亡へと変えていくだろうから

「

言いながら、レンダーは深い溜息を吐いた。

「記憶を忘れないと言えば、LTを飲むと思った。だが、LTを服用し、中途半端に俺様達の事を覚えていたら、愛情であれ、憎悪であれ、何かしらの感情の矛先がこちらに向かって来る。シンバは、あくまでもリグドを倒す兵器。だからデンバーから、いつその全て記憶を消そうと、そう申し出があり、俺様は頷いた」

「シンバをなんだと思ってるんだ」

そう呟いたフリットは、震えるラインの肩を強く抱き締める。

レンダーはコンピューター画面に映る幼いシンバを見つめながら、また溜息。そして、

「シンバはヒーローになるんだ」
そう言った。

「ヒーロー!?!?」

聞き返すフリット。

「言つたら、各国にLTは流出してるんだ、LTの恐ろしさは、この国も知っている事だ。つまりリグドの強さは全世界が恐怖に思っている。今迄、リグドは世界中を適当に彷徨っていた。だが、ここ最近、この国に留まっている。他国から閉鎖され、この国に爆弾が落とされてもいいのか？ リグドが死ぬなら、攻撃に出る国は少なくないだろう、寧ろ、遣りかねない国ばかりだ。だから、そうならねえ為に、シンバが、セク部隊というヒーローになって、リグドを倒すんだ。シナリオ的には悪くねえだろ」

「それでセク部隊は、力を見せつけ、この国を乗っ取って、ジユキトにするんだぞ、それがヒーローだったのか？ 今のレジデントが退き、ソルク・モルザが即位する。その手伝いをシンバがするんだぞ！」

「仕方ないだろう、リグドを倒せるのはシンバしかいねえ。そして、リグドを倒せるシンバを作れるのはデンバーしかいねえ。LTを所持しているのはデンバーだからな」

「……そうか、だったら、オイラもセク部隊に入る」
そう言ったフリットを驚いて見るレンダーとライン。

「シンバがファイナルを迎えても、リグドに勝てる確立は五分五分だろ？ 恐らく、相打ち。それをデンバー達も狙ってただろうな。

その後、この国がどうなろうと、セク部隊に逆らう奴はいないだろうし、シンバもいなければ、文句を言う奴もいない。そこまで勝手な事させてたまるかよ。筋書き通りになんてさせやしねえ。オイラ、少しでもシンバに加勢して、リグドを倒し、シンバを生き残らせる！」

「私も！ セク部隊に入る！ 男に化ければ問題ないでしょ？」

「何言つてやがる！ 駄目に決まってるんだろ！」

レンダーが怒鳴るが、ラインも、

「私達は国なんてどうでもいいの！ シンバを助けたいだけ！」
そう怒鳴り返した。

「アイツはもうお前等の記憶なんてないんだぞ！」

更に怒鳴り返すレンダーに、

「また初めから出会えばいいんだよ！ 記憶なんて、今からでも作れる！」

怒鳴り返すフリット。

「ラインは駄目だ！」

もつと怒鳴り出すレンダーに、

「レンの友達想いの所が好きだったのに！」

ラインは大声で、そう叫び、レンダーを無言にさせた。

「私のお父さんとお母さんの事、今も大事に思ってくれて、私を大事にしてくれてるのは嬉しい。レンのそういう所、大好きだから。

だから、レンのそういう所を私もフリットも受け継ぎたい。戦う事を教えてくれたのはレンだけど、それだけじゃない、レンの想いも、ちゃんと私達、わかってる。何にもわかんないような、そんな子供じゃないよ、私達。だから、私達もレンのように友達を想いたい。裏切ったりしたくない。信じていたい。シンバを助けてたい」

「……こんな事になるとは、まるで悪夢だな」

レンダーはそうポツリと呟き、俯く。

「悪い事の後には、いい事が待ってるから！ 絶対！」

ラインは信じている、シンバを助けられると。

「本当に言いたくねえ事があるんだ」

レンダーは俯いたまま、囁くように、そう言うので、ラインもフリットも黙り込み、レンダーを見つめる。

レンダーは静かになった間で、大きく溜息を吐くと、俯いたまま、話し出した。

「シンバは助けられねえ。無理なんだ。フリットの言った通り、もしシンバがレベルファイナルになれたとしても、リグドとは五分だろう。そんな事、デンバーだって、わかっている。そして、デンバーが欲しいのは強い武力だが、それは手に負えなくなるようなレベルファイナルの戦士じゃない。それはあくまでリグドを倒す為だけ

の道具」

「道具？」

フリットが聞き返すと、レンダーはコクンと頷き、

「シンバの心臓付近に爆弾を入れるそうだ……」

それは本当に小さな小さな声で囁かれた。

だが、フリットもラインも、ちゃんと聞こえていて、驚愕の表情を浮かべる。

「シンバがリグドに勝利したら、シンバの中の爆弾のスイッチが入る。戦いが五分で、しかもリグド優勢なら、接近戦の時に、爆弾のスイッチを入れ、リグドと共にドカーン。LTやってたと言っても、直接攻撃を避けなければ、お陀仏だ」

「嘘でしょ……？」

ラインが信じたくない、首を振り、

「そこまでするか……？」

フリットも信じられないと、首を振る。

「お前達がセク部隊に入ったとしても、シンバには記憶がない。お前達が何したって、もう意味のない事だ。諦める」

「待てよ、諦めるには早いだろ、だって、その爆弾って、止める事もできんだろ？ 安全装置みたいなものが付いてないと危険だよな？」

フリットの質問に、レンダーは馬鹿にしたように笑い、

「そりゃあな、爆弾を止める装置もあるだろう、だがそんなの巧妙につくられたコンピューターシステムによって管理されてるんだ。」

お前達は携帯ぐらいしかいじった事がないだろう、それを無理にいじってみろ、それこそ爆発しちゃう可能性がある」

そう言っつて、更に、追い討ちをかけるように、

「お前達はLTを強くなる為の薬だと思っているようだが、LTとというのは覚醒の意味があるんだ、軍人だけじゃない、ジュキトには優秀な科学班もいた、だからLTという薬が開発されたんだ。その科学班がLTを飲めば、頭脳明晰だった人間達が更にレベルアップ

するんだ。そんな奴等がいた事を俺様が知っていると云う事は、デ
ンバーもよく知っていると云う事だ。そしてデンバーは、その元ジ
ュキトの科学力を手にしているんだらう、だからこそLTの開発が
続けられて、新しいLTを生み出している。そんな所で、お前等が
シンバの爆弾を止められると思うか？ 多少、コンピューターがで
きますってだけのお前等が！」

止めを刺すかのような言い草で、レンダーはそう言った。

ラインが諦めたのか、黙ったまま、悲しそうに俯く。

そんなラインを見たら、諦められないと、フリットは、何かいい案
がないか考える。

レンダーは、これで諦めてくれるだらうとホッとするが、

「コンピューターに詳しい奴がいる！」

突然、フリットが喜々として声を上げるので、レンダーは、まさか
と、眉間に皺を寄せる。

ラインは顔を上げ、フリットの明るい表情に、自分もにこやかに
なる。

「ライン、覚えてるか？ クラブで戦った爪の女」

「フリットの元カノ？」

「元カノは余計だっつーの。その女さあ、コンピューターに詳しい
っばい！ 今日、駅で会ったんだ。でもなあ、あの女、どこにいる
んだらう、携番、聞いとくんだったなあ」

と、困ったなあと言う顔で、フリットはまた考え込み、レンダーは
ホッとするが、

「あの駅を利用してんのかな、暫く、張り込んでみるか」

フリットが前向きな提案をするので、レンダーは首を振るが、ライ
ンはコクコク頷く。

「シンバのレベルは3だろ、ファイナルまで2ヶ月はかかる。その
間に、こっちも準備しよう、どうせさ、シンバがファイナルになる
迄、嚴重警備の場所にいるだらうし、そんな所、セク部隊に入団し
ても、直ぐには配属されないだらうからな、だったら、こっちはこ

「つちで、準備しよう」

ラインは嬉しそうに頷き、

「流石、フリット！　なんだかんだ頼りになるよね！」

と、大喜び。

ラインが喜んでくれるだけで、フリットは嬉しくて、やる気が出てくる。

「後、オイラが気になってんのは、アニルだ」

「アニル？」

アニルを知らないラインは首を傾げる。

「ああ、ソイツの家に行ってみる。名前は知ってるから、なんとか家は調べられると思う。オイラ、ちょっと今回の事で、アニルにメールしたんだけど、嘔吐かれてさ。嘔吐くって事は何かあるからだろ？　だからアニルに聞き出せる事、まだありそうなんだよね。情報力はなりつてね、些細な事でも手に入れたい方がいいだろ？」

「……フリットって、私の知らない所で、結構、いろんな人と関わってんのね」

「え？　あ、そう？　かな？」

「なんかシヨック」

「え？　なんでシヨック？」

「なんとなく、私がクロスと知り合った時、フリットが携帯を見せてるって怒って来たの、ちょっとだけ、わかる気がした」

「……それってヤキモチ！？」

「かもね。シンバもそうだったのかなあ、可愛い女の子と知り合っでデートとかしてたのかなあ。なんか嫌だなあ」

「……そっちのがヤキモチじゃん」

フリットは落胆しながらも、とりあえず今は恋愛よりも友情！と、自分に言い聞かす。

「お前等、本気でシンバを助けるのか？」

「レンは協力してくれないの？」

この期に及んで、その質問はないだろうと、フリットはラインを見

るが、ラインにしてみたら、レンダーは親のようなもの。

事実、レンダーはラインだけは大事にしている、それは認めてもいいとフリットは思い、

「オイラ達を二度と裏切らないって約束しろよ」

レンダーにそう言い放つ。

レンダーはフリットとラインを見て、

「俺様はお前等の計画を阻止する」

言い切った。黙るフリットとライン。

「お前等にとって、シンバがそんなに大事になるとは計算外だった。考えたら、友達になるのに当然の環境を与えてしまったんだな。だがな、俺様にとってもデンバーは友人だ。それに、デンバーの考えは正しいと思う。世界をリグドから、そしてL1レベルファイナルから守るには、シンバが犠牲になる他ないんだ」

そう言うと、レンダーは、部屋を出て行くこうとして、

「この廃墟は好きに使い。俺様はデンバーの所へ行く」

そう言うから、フリットとラインは焦るが、

「心配するな、お前等が今話した計画はデンバーには言わん。だがな、やれるもんならやってみる、ガキのお前等が大人の指示もなく、どこまでやれるのか、そして、ジユキト相手にどこまで足掻くのか、やってみたらいい。所詮、辿るのは破滅だ」

レンダーはそう言うと、部屋から出て行った。

暫く、フリットもラインも出て行ったレンダーを見つめたまま、黙って立ち尽くしていたが、お互い、見合い、お互いが凄く不安な顔をしているので、お互い苦笑いする。

「じゃあさあ、オイラはアニルを探すから、ラインは爪の女を張り込んでくれるか？」

「うん」

「そんな顔すんなよ、大丈夫だつて！」

「フリットこそ、そんな顔すんなよ」

「あー！ もー！ 辛気臭えなあ！ こんなんじゃうまく行くもん

も行かねえよ！」

言いながら、フリットは、部屋の隅に置いてある、今日買った紙袋2つを持ち、紙袋の中の服を全部ベッドの上に出すと、

「オイラのファッションショー、見る？」

と、ラインに笑顔で聞いた。ラインはプイツと横を向くと、

「見ない。ていつか、ご飯、食べちゃってね、キッチンに用意してあるから」

そう言っつて、部屋から出て行くので、フリットはハイハイと頷く。

次の日の朝、レンダーの姿はなく、レンダーの部屋はそのままだったが、ある程度の荷物がなくなっていた。

テーブルの上には、大金と手紙が置かれていて、手紙には、今迄、働いた金を少しずつ貯金していたから、渡しておくと言われていた。まるで本当の親みたいだとラインもフリットも思っている。

それに寂しいのはラインだけではない、フリットだって、それなりにレンダーに対し情は持っている。

18歳とは言え、まだ大人と子供の間。

寧ろ、子供をやっていた期間の方が長い為、大人にはなりきれしていない年齢。

だから大人がいなくなると言う事が、こんなに心細い事だと、二人は初めて知る。

だが、フリットは、いつも以上に明るく振舞い、アニルを探す為に朝早くから出て行き、ラインもフリットに釣られながら、明るく過ぎ、張り込みに出掛けた。

フリットは駅に向かって歩きながら、

「さて、どうすっつかな、電話してみるか。出ねえだろうけど」

言いながら、携帯で、アニルに電話してみる。

ブルルルルル……ブルルルルル……ブルルルルル……

『はい』

電話に出たのが女の声で、フリットは予想外過ぎて、無言になってしまっつ。

『もしもし?』

「あ、す、すいません、アニルの携帯じゃないですか?」

『そうですけど』

「あ、え? あ、そうですか、あのアニルは?」

『………あの子の友達?』

「はい」

『そう、今、あの子、出られないの、伝言があるなら伝えておくわ』
「………そうっすか。あの、貸してた本、返してもらいたくて」

こういう時の嘘はうまいと自分でも思うフリット。

携帯に出たのはアニルの姉だった。

貸していた本を返してもらっ為、住所を教えてもらい、これから伺う事になり、ラッキーだとフリットは思う。

「ていうか、なんでねえちゃんが出んの? 弟の携帯に?」

まあ、そんな疑問はどうでもいいやと、アニルの家に向かった。

アニルの家は、静かな住宅街で、結構な豪邸。

「予想はしてたけどね。アイツ、ブランドの服だったし」

そう呟きながら、インターフォンを鳴らすフリット。

出てきたのは、携帯で話をしたアニルの姉。

家に招かれると、

「悪いけど、あの子の部屋に行つて、勝手に本持って帰つて?」

と、部屋に案内されるが、肝心のアニルの姿が見当たらない。

「アニルは?」

そう尋ねると、姉は、首を傾げるだけ。

広い豪邸、どこかにいるのだろうかと、フリットはキョロキョロ。

アニルの部屋はルーシーのポスターで一杯だ。

モノトーンを基調とした、いかにも男の子の部屋。

片付けてないから、あちこちに、いろんなものが乱雑に置かれている。

カラカラカラと音を立て、輪の中を走っているハムスター。

小さな鳥かこのようなものに入っている。

ふと、思い出す、アニルとの会話。

？家族構成は？？

？父と母と姉。それからハムスター？

？ハムスター！？ それペットだろ？

？ペットも家族だよ！？

フリットがぼんやりとハムスターを見つめていると、

「本、探さないの？」

ドアの所で、煙草を吸っている姉に、そう聞かれ、慌てて、本を探すふりをする。

「アナタ、本当にアニルの友達？」

「ええ、まあ」

「あの子、友達なんていたのね」

「そりゃいるでしょ」

「昔はね、結構いたみたいよ。でも、名門校へ行き始めてから変になったのよね、どこで手に入れたのか、ブランドの服なんて着るようになってっちゃうし。こんな訳のわからないポスター張り出した頃からは、友達なんていなくなっただんじやないかしら。何が不満なのか、家に殆ど帰って来なくなっただ、そしたら」

「そしたら？」

「……昨日のニュース知らない？ あの子も、ライブに行つてたのよ」

「え？ ライブって、ルーシー・ミストの！？」

「名前なんて知らないわ、そのポスターの奴よ」

嘘だと、フリットは驚く。

「うちはさあ、裕福な家に見えるでしょうけど、本当は借金だらけで、この家のローンも残ってるのよねえ。父がアニルの事で会社クビになるかもしれないって、昨夜、慌ててたわ。母もパートに出てるんだけど、アニルがこんな事になって、辞めさせられちゃうんじゃない？ 私なんて、今朝、会社から電話かかってきて、退職願出

してくれって頼まれたわ、この就職難の時代に、何やってくれちゃってんのかしら、アニルの奴！ ねえ、いい仕事先があったら紹介してよ」

「オイラも無職ですから」

「あつそ」

と、フーツと煙草の白い煙を吐く姉。

「あの、アニルは？ アニルはどうなったんですか！？」

「……. . . LT収容所の病院施設で入院中。まさか薬物に手を出してたなんてね」

「アニルは無事なんですよね！？」

「今の所はね、でも、確かLTに手を出したら死刑でしょ？ 死刑日が決まるまで、収容所で過ごせるみたいだけど」

「面会つてできますか？」

「家族はね」

「そうですね」

「死ねばいいのよ、さつさと。父も母もそう言ってたわ、こんな事件起こすなら、死んでくれた方が良かったって」

そんな事を呟く姉に、フリットは悲しく思う。

「名門校に入れたのよ、将来も安定して、この家を支えていく筈だったのに、迷惑な話よ。あの子も親に似て、見栄っ張りだから、名門校の友達に合わせて、ブランドの服、万引きでもして、着飾ってたんだろうけど、結局さ、お坊ちゃん相手に友達できなくて、変なおカルト集団みたいなタレント好きになったと思ったら、薬になんて手を出して、家族巻き込んで、ホント、迷惑！」

「電話しなくても大丈夫。いつも帰りは遅いし、一ヶ月帰らなくても平気だから？」

「……. . . わからないよ、家族ってどんなものなのか？」

アニルがどんな気持ちで、そういう台詞を吐いたのか、フリットは今更、気付く。

「……. . . 友達になろうって言ったら、仲良くしようねって嬉

しそつに言うから、かなりの演技力だつて思ったけど、アレ、本気だつたんだな」

そう呟くフリットに、姉は、何の独り言？と、フリットを睨む。カラカラと音を鳴らし、走り続けるハムスター。

アニルにとつて、家族はこのハムスターだけだったのかもしれない。

「LTつて……人の心の隙間に入り込むんだよなあ……」

シンバがLTを飲んだ事、アニルがLTを手にした事、そして、自分もそうだったのかなとフリットは無い記憶の中、考えてみる。

昨夜見たジュキトのLTテストの子供達のデータの中に、フリット・デーグレイという名はなかった。

つまり、フリットは自分自身でLTを飲み始めたのだろう。

それはどういう理由があつて、LTという薬物に手を出したのだろうか。

自分にも家族がいたのだろうか、友達がいたのだろうか、守りたい人はいたのだろうか、自分の弱さはなんだっただろうかとか。

フリットは無い記憶を考える。

「ねえ、本、探さないの？」

「あ、本、見当たらないので、もういいです、アニルによろしく」
そう言うと、フリットは、ペコリとお辞儀をして、その豪邸を後にした。

サンドイッチとジュースを買い、張り込みをしているラインの所へ向かうと、ラインはホーム全体を見渡せる場所で、立っていた。

フリットが近付くと、ラインは、ニッコリ笑つて、

「アニルつて人の家はわかつた？」

そう聞いた。フリットは頷き、

「差し入れ」

と、サンドイッチとジュースを渡すと、ラインは嬉しそうに受け取り、早速食べ始める。

「家はわかつたんだけど、アニルは、LT收容所つて所にいるみたいなんだ、爪の女もそこにいたんじゃないかねえかな。だから爪の女に收容所の事も聞いてみなきゃな」

「爪の女つて、なんだか、カニみたい。名前、覚えてないの？ 元カノでしょ？」

「だから元カノつて、爪の女が勝手にそう言ってるだけで、オイラは認めてねえつて！」

言いながら、フリットも、自分の分のサンドイッチを食べ始める。

「ねえ、今頃、シンバ、爆弾とか入れられてるのかな」

「……かもな」

「もし爪の女が協力してくれなかったらどうする？」

「……大丈夫だよ、うまくいくつて」

「もしセク部隊に入団できなかつたら？」

「……オイラはデンバーから誘われてるから、入団できるよ」

「私は!？」

「ラインも入団できるように、デンバーに頼んでみるよ」

「でもさ、デンバーつて人の所にレンは行っちゃったんだよ？ レ

ンが私を入団させるかな？ 絶対にさせないよね」

「マイナス方向に考えんのやめようぜ、今、できる事をやるしかねえんだからさ！」

フリットがそう言うので、ラインはコクンと頷くしかない。

その日は、終電まで張り込んだが、爪の女は現れなかった。

次の日も次の日も次の日も、爪の女は現れず。

「ライン、今日はオイラ一人で張り込むから、少し息抜きして来たら？」

「……やる事ないもん、一緒に張り込むよ、それに一人より二人の方が、トイレ行きたくなった時とか、お腹すいた時の買出しとか、使えるでしょ？」

フリットは、そうかと笑顔で頷いたが、このまま爪の女が現れなか

つたらと不安が過ぎる。

大体、収容所を抜け出した者が、同じ駅を利用するだろうか。とりあえずは逃亡の身。

同じ場所にずっといるとは考え難い。

だが、爪の女が変装していた訳もなく、逃げてる雰囲気があった訳でもない。

いつものように、フリットとラインはホームが見渡せる場所で、張り込んでいた。

「なんか、今日、やけにセク部隊、多くねえか？」

あちこちにセク部隊が配置されている。その時、

「………嘘、あれ、シンバじゃない？」

ラインが指差した先に、シンバらしい男が電車に乗ろうとしている。腕時計を見て、時間を確認しているようだ。

「………あれから3日以上経ってる」

フリットはそう呟くと、走り出そうとするラインの腕を掴んだ。

「待てよ、セク部隊も多く配置されてるって事は、シンバを見張ってんだろ、多分、3日の監禁が解けて、自由になったんだろうけど、今、シンバがどうなっているのか、わかんねえ以上、オイラ達がシンバに接触するのは、今後の計画に支障が出るかもしれない」

「でも………近くににいるのに」

泣きそうな顔をするライン。

フリットはラインの腕をギュッと強く握り締めると、

「ここで待ってる、様子だけ伺ってくるから」

そう言って、ラインの腕を離すと、シンバへと近付いていく。

今、シンバの近くに立ち、電車を待っているかのような態度のフリット。

フリットは、シンバをチラッと見るが、シンバはフリットを気にも留めない。

「………マジかよ、本当に記憶ねえじゃん、トリップしてる訳じゃねえよな!？」

そう呟いた瞬間、電車がホームに入ってきて来る。

皆、電車に乗るが、フリットは立ち尽くし、シンバを見送る。

シンバは空いている席に座り、ふと、ホームを見るが、フリットと目が合っても、他人を見るような目で、直ぐに別の方向を見ている。このまま電車に乗らなければ、セク部隊に怪しまれるかもしれない。だが、足が動かない。

シンバが余りに他人過ぎて、フリットはフリーズする。

「フリット？」

その声と、電車が発車した事で、フリットは我に返り、振り向くと。

「また会ったわね」

と、爪の女が立っていて、フリットは安堵の溜息を深く吐いた。

「どうしたの？」

「いや、ナイスタイミングだよ、これで待ち合わせしてるように見えるからさ」

「え？」

「今日、やたらセク部隊多いだろ、今、電車乗らなかったからさ、怪しまれる所だった」

「怪しまれるって、何かしたの？」

「これからするの」

「また悪い悪戯でも考えてるの？」

女がそう言ってる最中に、ラインにメールをする。

『先に廃墟へ帰ってて。直ぐにこの女も連れて行くから速攻で返事が来る。』

『わかった、シンバの様子もどうだったのか、後でちゃんと教えてね』

フリットはラインからのメールを確認すると、直ぐに携帯をポケットに仕舞い、

「これから暇？」

女にそう尋ねた。

「あら、デートのお誘い？」

「そんなとこ」

「どういう風の吹き回し？」

「まず、名前聞いとこうかな」

苦笑いしながら、そう言ったフリットに、女はクスツと笑い、

「どうも初めまして、アタシ、セラン・リーザ。よろしくね」

と、初対面のような挨拶をした。フリットも笑いながら、

「フリット・ディーグレイ。これからよろしく」

そう、これから、どうしてもよろしくしたいフリットは、笑顔で対応。

「で、どこに連れて行ってくれるの？」

「いいとこ」

「エッチする？」

「そんなしたい!？」

「したくない!？」

「そう聞かれたらしたいって言うに決まってんじゃん! アンタさあ、ホント、もっと自分を大事にしろよ。オイラが、ここでアンタと寝ても、オイラ、アンタの事、好きじゃないからね!？ エッチしたからって付き纏っても、エッチしたいって言ったのはアンタだからって言われちゃうよ?」

「いいよ」

「いいの!？」

「いいよ、別に。それにさ、アタシ、あのラインって女に会う訳でもないんだし、告げ口なんてできないからバレないでしょ、だからフリットもエッチしたっていいじゃん!」

と、腕を絡ませるから、腕を振り解き、

「よくない!」

と、フリットは何故か戦闘態勢!

「なにその近寄るなポーズとオーラ! アタシ、帰る!」

「ちよっ、ちよっど待って! 飯食おう! 飯! うまい飯食わせ

「てやつから！」

「あら嬉しい。でも本当に美味しいんでしょね！？ ジャンクフードとか嫌よ？」

飯と交尾で釣れるって野生的だなあとフリットは思う。

だが、セランの見た目は野生的には見えない。

くるりんと綺麗に巻かれた長い髪は栗色で、瞳はヘーゼルの可愛らしい色を放ち、ふんわりしたワンピースに白いスラツとした長い足。

これでエッチしようと言われ、しないと断る男は、絶対に自分だけだとフリットは思う。

「……ラインにオイラの誠実さを知ってもらいたい」

溜息混じりにそう呟くフリットに、

「何か言った？」

と、セランが聞くので、

「いいや、じゃあ、歩きながら、オイラの話、聞いてもらいたいんだけど、いいかな？」

「いいわよ」

二人は、廃墟へ向けて歩き出した。

フリットはシンバについて話し出す。

この前、会った時、友達を助けに行くと言った友達を、まだ助け出せていない事。

その友達がLTに手を出し、レベル3になった事。

そして、リグドを倒す道具としてセク部隊に入団させられた事。

だが、友達はリグドを救いたいと思っていて、ラインを助けたいと思っていたと言う事。

だけど友達の記憶は何もなくなったと言う事。

そして、爆弾を体に入れられる事。

廃墟に着く頃には、全て話し終えていた。

「ねえ、こんな薄暗い場所にアタシを連れてきて、どうしようって言うの！？」

「嬉しそうに聞くなよ」

「だって……こんな廃墟に連れて来て、男と女がやる事と言ったら……」

「あのさあ、オイラの深刻な話、聞いてくれてた？」

「聞いてたわよ、でも美味しいご飯食べさせてくれるって約束だったじゃない？ それがこんな場所に連れて来るなんて……あ……あ……いいニオイする……」

「ラインが飯作ってんだよ、夕飯。アンタを連れて帰るって言ったから、アンタの分もあると思うからさ」

「え！？ どういう事！？ ラインって……アタシ会いたくないし……」

そう言った女の腕を掴み、

「そう言うなって！ 折角だから飯食おうよ、な！？」
と、フリットはむりやり廃墟の奥へとセランを引っ張り込んだ。

廃墟で飯なんか食えるかとセランは嫌がっていたが、キッチンの扉を開けると、そこが普通のキッチンで、普通のリビングで、しかも割りと綺麗な部屋作りで、セランは驚いて、中へ入った。

「いらっしやい、カニちゃん」
キッチンから、ひょこつと顔を出したラインが笑顔で、セランに言う。

「カ、カニちゃん？」

「私を子猫ちゃんって言ってたでしょ？ だからキミはカニちゃん！ 爪を武器としてるから」

と、両手をピースにし、チヨキチヨキと手を動かすラインに、セランは、不愉快そう。

「あ、あのさ、とりあえず、座って？」

フリットは、セランの不機嫌そうな雰囲気を感じ、ご機嫌をとるように、テーブルの椅子を引いて、セランを座らせる。

テーブルに並んだ料理は、どれもこれも美味しそうだが、セランはムツとした顔のまま。

「なんか私の事、嫌ってる?」

ラインが直球で尋ねるので、フリットはオロオロ。

セランはラインを睨み、

「嫌ってないと思うの?」

と、尋ね返す。

「えっと……倒しちゃったから?」

「倒したとか言わないでくれる? アタシ、戦闘タイプじゃないって言った筈よ、そうでしょ、フリット!」

「あ、ああ、そうだよ、そうだよな、セランは頭脳タイプ!」

頷きながら、フリットがそう言うので、セランも頷くと、

「セランって名前なの? 綺麗な名前だね、私、ライン。よろしくね」

と、ラインはニッコリ笑って、握手を求めて手を出すが、セランがツンと横を向くので、

「戦闘タイプじゃないから、手榴弾とか反則技ばっか使って来たんだね、それでも私が勝っちゃったけど、頭脳タイプだから、反則しても負けたんだ?」

なんてラインが言うから、余計にセランは苛立って、ラインをキツと睨む。

「あのね、一人で勝ったような言い草やめてくれない? 一対一だったら、勝負はわかんなかったわよ! あの長剣の男が最終的にアタシの手榴弾を邪魔したから!」

「でもトドメは私が決めたよ?」

「ウルサイ! もう帰る!」

そう吠えたセランに、落ち着いてと、フリットは、肩に手を置き、ラインに、

「ライン、怒らせてどうするんだっつーの! 協力してもらえないだろ!」

と、怒ってみせる。これで少しはセランが落ち着けばいいが、逆にラインが、拗ねて、

「だって仲良くしてくれないのは、この人だよ、私の事、嫌ってるんだもん」

などと言い出すから、フリットは勘弁してよと、

「頼むよ、二人共、もう少し大人になろうぜ」

と、溜息。

「フリット、協力してもらえないってどういう事？」

セラランがフリットを見て、聞いた。

「……あのさ、友達が体に爆弾を入れられるって話したろ？ その爆弾、コンピューターで管理されてるんだと思うんだけど・

……」

そこまでフリットが言うと、セラランは、

「その爆弾のスイッチを解除してほしいって事？」

察しが良くて、そう尋ねた。

「頼むよ、オイラ達に協力してほしい！」

「なんでアタシが!？」

「他に頼める人がいないんだ」

「アタシに何のメリットがあるの!？」

「それは」

「大体セク部隊相手に何ができるって言うの？ しかもその友達はLトリミットレベル3なんでしょ？ リグドも関わって来るんですよ？ この国がジユキトになるとか、ならないとか、事が大きすぎて、アタシ達に何ができて、何を助けられるって？」

「……」

「Lトリミットレベル1ってだけで、アタシ、まだ19歳なんだよ？ フリットは確か2つ下だったから17よね？ 子供もいいところ！」

「！」

「……」

「同じ危険を犯すなら、LT飲んで、遊んでた方がいい」

と、セラランは立ち上がり、バイバイとフリットに手を振る。

ラインが俯いてしまっし、セラランは行ってしまっし、フリットは焦

る。そして、

「協力してくれたら、オイラ、アンタの事、思い出すから!!!!!!」
無茶な事を言い出すフリットに、セランは足を止め、振り向いた。

「……………思い出すってどうやって?」

「わからないけど、思い出すよ」

「……………思い出したら、フリットはアタシを愛していたと気付くわね」

「かもな」

「何度もベッドの中で愛してるって言ってくれたもの」

「そうなんだ」

「いいの? アタシを愛してるって気付くのよ?」

「いいよ」

「いいの?」

「いいよ」

「だって、そしたら、その女の事は?」

私の事?と、首を傾げるライン。だが、そんなラインを他所に二人の会話は進む。

「そんなの、セランには関係ないだろ、オイラがセランを愛してたって気付いたら、それでいいんだろ?」

「その時は、その女より、アタシを選んでくれるって事になるわよ!」

「ああ、頑張っと思い出すよ」

そう言ったフリットに、セランは余計に怒り出し、

「そんなにその女が大事!?!」
そう吠えた。

そして、ツカツカとラインの傍に行くと、

「アタシ、アンタみたいな女、大ッ嫌い!」
そう言い放ち、更に、

「短い髪して、メイクもしてなくて、男の子に守ってもらわなくても平気って面して、シャツにジーンズのお洒落も知らないって格好

で、手の込んだ料理作っちゃって、女からしたら一番、厄介な女よね。天真爛漫が売りみたいな女に限って計算高いのよ！ 絶対にアタシより、男に守ってもらう回数、多いから！！」

そう怒鳴った。オロオロするフリットにも、

「引つ掛かってんじゃないわよ、女見る目ないんじゃないの!？」

と、吠えるから、何故か、フリットは、すいませんと謝る。

「女を見る目ないから、キミと付き合っただんでしょ」

余計な事を言うラインに、

「なんですつてえ!？」

と、綺麗に巻かれた髪を振り乱し怒るセラン。

「なんでアタシがこの女の為に危険な橋を渡らなきゃいけないのよ」

「私の為？」

「ほーら、気付いてもない。そういう所が計算高いつて言うのよ。

でもいいわ、協力してあげる。どうせやる事なかつたし。毎日、L T売って金を作るのも、やりたいだけのオッサンとホテルで寝泊りするのも面倒だったし。ここなら雨風ぐらいは凌げそうだしね。だから協力してもいいわ、でもその代わり、絶対にフリットはアタシの事、思い出してね!！」

フリットは無言で頷き、そして、

「交渉成立」

と、フリットとセランは手を握り合う。私は？とラインも手を握りたそうにするが、セランが嫌がり、ラインは仕方なく、手を引つ込める。

「フリットはセク部隊隊長からスカウトされてるのよね？ じゃあ、

アタシとこの女はセク部隊の誰かと入れ替わった方がいいわね」

「入れ替わる？」

難しい顔で尋ねるフリット。

「ええ、入団は難しいわ、それにレンダーって奴もいるんでしょ？

なら確実に中に入る方法は、今いるセク部隊の誰かと入れ替わる事。後、セク部隊隊長の支持で動いてる科学班がある筈よ、アタシ

はその科学班の誰かと入れ替わった方がいいわね、そしたら向こうのコンピューターを使えるわ。その為には、向こうにいる人間を把握しなきゃならない。アタシやその女と、なるべく体格や見た目が似てる人と入れ替わらないとならないでしょ？ 身長や顔の輪郭など、服やメガネなどで誤魔化せる程度で済む人間を見つけるの」「……でも、そんなのどうやって見つけるんだ？」
フリットが再び尋ねた。

「向こうのコンピューターにハッキングして、職員は健康診察データがある筈だから、それを盗むの。セキュリティが厳しいから、うまくいくかはわからないけど」

「ハッキングってなに？」

くだらない質問をするラインに、

「コンピューターへの不法アクセス！」

と、ラインには厳しい口調で答えるセラン。

「ねえ、フリット、コンピューターってある？」

「……でっかいのがある。相当昔の」

と、LTテストの子供達のデータを見たコンピューターが、まだフリットの部屋に置かれたままあるので、フリットは、そう答えるが、

「ダメダメ、相当昔のなんて、最新のじゃないと、国が保管しているデータを盗むのよ、わかってる？ 国の中枢部になる所よ！」

こっちの守備は相当昔のコンピューター？ 有り得ないでしょ」「

と、呆れた声で言われ、フリットとラインは困った顔になる。

「ちよつと本気？ 最新のコンピューター持ってないの？ それでよく友達助けようとするわね、ビックリだわ！ 明日にでも最新のコンピューター買いに行った方がいいわね、言っとくけど、アタシ、お金は出さないわよ！」

フリットとラインはコクコク頷くしかできない。

「お腹空いたから食べるわ、食事しながら話しましょ」

セランはそう言うと、椅子に座り直し、フリットもラインも頷きな

がら、椅子に座る。

話はセランの御蔭でサクサク進み、明日、コンピュータを購入したら、とりあえずLT收容所に設置されてあるカメラの映像を保存してあるコンピュータにアクセスし、アニルが本当に收容所にいるか確認する事になった。

態々、收容所に行かなくても、アニルの安否を確認できるなんて、凄いなあとフリットは感心する。

そして、食事後は、フリットはセランに、

「この部屋使つていいよ、オイラ、リビングで寝るから」と、自分の部屋に案内していた。

セランは部屋をぐるりと見回し、フーンと頷くと、テーブルの上でカッツと置かれた大きなコンピュータを見て、相当昔のコンピュータってコレかと、笑いながら、

「一緒に寝てもいいわよ、アタシは」と、フリットを見る。

「冗談だろ、ラインもいるんだぞ、ここには!」

「あら、記憶を思い出してくれるんじゃないの? そしたら、フリットはアタシのもの」

「……報酬は全て終わつてからつてのが基本だろ?」

「つまらないわね、まあ、いいわ」

と、ミニールを脱ぎ捨て、直ぐにベッドにゴロンと転がり、鞆の中から分厚い本のような、ノートのようなものを取り出すと、セランは寝転がったまま、何か書き始めた。

「何してんの?」

フリットが覗き込むと、分厚い本みたいな、ノートのようなものをパタンと閉じて、

「見ないでくれる? 日記だから」

そう言われ、日記!?!と眉間に皺を寄せるフリット。

「收容所にいた頃は荷物を取られちゃったから書けなかったけど、なるべく、毎日、書いてるのよ、もう中毒中じゃないから、記憶は

なくなったりしないってわかってても、中毒中の時の習慣かな」

「……あのさ、もしかしてセランって、スッゴイ真面目？」

「もしかしてってどういう意味よ？」

「いや、だってさ、頭いいし、記録もちゃんと付けてるしさ」

「そうかもね、真面目ちゃんだったのかも。中毒中だった頃の日記を見ると、そう思うわ。今のアタシとは大違い。凄いわよね、記憶って、本当に人を変える」

「……あのさ、その日記にオイラと出会った時の事とか書いてある訳？」

「あるわよ」

「オイラって、なんでLTに手を出したのか、知ってる？ どうやってLTを手に入れたのかとか、オイラの家族とか」

「フリットはね」

「わあ！ やっぱやめて！ 言わなくていい！」

と、突然、フリットは自分の耳を押さえて、叫ぶから、セランは体を起こし、

「なによ？」

驚いて聞いた。

「なんか知るのが怖いんだ。自分が弱かった事、後悔しそうで」

「……」

「オイラってさ、シンバやラインとは違うんだよ。シンバやラインは本当にLTの被害者って感じでさ、親が中毒中で、妊娠してたから、生まれた時に、もうLT中毒中だったって。それってシンバやラインのせいじゃない」

言いながら、リグドもそうだと思う。

リグドも、LTを作り出した大人達の被害者だ。

「そりゃシンバは今回、LTに手を出したけど、それも仕方なくて……仕方なかったら手を出していいのかって言われたら、そりゃ駄目だろうけど……でもオイラより、絶対にマシな理由だと思っんだ」

「……ＬＴに手を出した事、後悔してるんだ？」

そう聞いたセラんに、フリットはコクンと頷く。

「でもＬＴやってなかったらシンバやラインに会えなかったのかなって思うと、ＬＴに感謝してる部分もある。でもさ、今更だけど、怖い薬だなんて思ってる……」

フリットは駅のホームで、他人の目をしたシンバを思い出している。もしかしたら、自分もそうやって、誰かを傷つけて来たかもしれない。

現にこうして、セランを何も思い出せない自分がいる。

「世の中の間人はＬＴに手を出す人間は悪い奴だって言うけど、オイラは、当事者だから、どうしてもＬＴに手を出す人間を悪だとは思いたくない。どうして死刑にならなきゃならないのか、中毒中じやなければ、力だって抑える事ができるし、普通の人と生きていけると思うんだ。勿論、レベル１に限りかもしれねえけど……」

「……レベル１を許したら、レベル２も３も許さなきゃならなくなるからでしょ」

「でもシンバはレベル２だったけど、別にそう変わりなかったよ」

「レベル１のアタシ達から見たらって意味でしょ？　ＬＴをやつてない普通の人から見たら、超人どころか、化け物？」

黙り込むフリット。

「だから軍として使うか、死刑か、どっちかでしょ。尤も、今は国同士が争うより、平和を唱える時代だから、そんな大きな武力はあるだけ内乱の心配が大きくなって、どの国でもＬＴを撲滅させる為に動いているみたいだけど。この国だけじゃない？　ＬＴの取り締まりが緩いのは。尤も、固そうに見せて、緩いんだけどね」

「……だつたらオイラ達が行き着く未来は破滅だな」

「そうね、だから、今を楽しむ方が利口だつて言ってるのよ」

「……セランは夢とかないのか？」

「夢？　そんなのＬＴ中毒中の時に、とっくに捨てたわ」

「……オイラもそうだったのかな。夢があっただけど、LTを手にして、夢が要らないものになったのかな」

「夢が叶えられないからLTに手を出して、LTで夢を捨てるのよ。なんでも手に入るLTだから夢なんてバカらしくなる。実際は夢が手に入らない言い訳をLTのせいにして、溺れるのかもね。ねえ、知りたい？ フリットの夢。日記に書いてあるわよ、アタシ達、ラブラブだったんだから、フリットは何でもアタシに話してくれたの。アタシはソレを書き留めてあるわ」

「……セランさあ、凄いやな、オイラもラインも現場直行タイプだから、指揮官がいないと、どうも駄目で」

「は？ 何の話よ、突然？」

「いや、だから、今日の話だよ、食事の時にこれからの事、どんどん決めてくれてさ。助かったよ。こういうのも悪くないよな？」

「こういうのって？」

「だから、セランが総務。情報収集から通信、広報とかやつちゃってさ、オイラやラインや……シンバ、それからアニルは現場で戦う！ まるで戦隊ものヒーロー！ ほら、子供の頃、テレビで見なかったか？ 記憶にないか！ でもさ、子供の頃は、みんな好きだったろ？ そういうもんだろ？」

活き活きとした口調で話すフリットに、セランはクスクス笑い、

「フリットはレッド？」

と、戦隊ものには欠かせない色を聞いて来た。

「そう！ オイラ、リーダーだから！ 一番かっこいいレッド！

シンバはブルーだな、クールなブルー。感情表現乏しいアイツには調度いい！ イエローはアニル。イエローってカレー食ってるってイメージあるの、オイラだけ？ でもってピンクはライン！ 優しくて強くて、メンバーのアイドル！」

「リグドも救うんじゃないかっただけ？」

「ああ！ リグドは最終秘密兵器ブラック！」

「長官はだあれ？」

「うーん、しょうがねえから、それはレンかな？」

「敵は？」

「そりゃ、犯罪科学組織だろ！ 戦闘員いるじゃん、セク部隊みたいな同じ格好した奴等がウジャウジャ出てくる雑魚キャラ、アイツ等を引き連れて怪人が現れて、街を荒らすんだよ、それをオイラ達がやっつけんの！」

「楽しそうね」

「だろ？ 今のオイラの夢だ」

「え？」

「LTやっつた過去があつて、普通の人とは違つても、正義だつて言われる事がしたい」

「グリーンに、ホワイトに、オレンジに………LTリミット越えた奴等、結構いるから、どんどん増えそうね」

「そっか、逆にオイラ達が戦闘員みてえか」

「………アタシは総務なのね」

「あ、別に一緒に戦つてもいいけど、戦闘タイプじゃないつて言うから」

「そうじゃなくて、フリットの夢にアタシも存在できて嬉しいわ」
そんな事を言われると、照れてしまふフリットは、毛布を持つと、

「じゃあ、オイラ、リビングで寝るから」
と、そそくさと部屋を出た。

キッチンで、紅茶を淹れているラインが、茶葉がジャンピングしているのを、ぼんやりと見つめている。

「ライン？」

声をかけると、ハツとして、

「あ、もうすぐ紅茶入るから、フリットとセランにも持って行こう
と思つてて」

と、慌てて動き出そうとするので、シンバの事を考えていたなとわかつてしまふ。

「………あの、フリット、まだシンバの事、聞いてないんだ

けど」

「ああ、えつと、まあ、ラインも見てたと思うけど……」
「見たまんま？」

「……うん、まあ、そうだな……」

「そう、見たまんまなのね。そっか、シンバ、フリット見ても無関心だったけど、そのまんまの意味なんだね、そっか、うん、わかった」

無理に頷いて理解しようとするライン。

「とりあえずさ、死なずにレベル超えできたんだぜ、アイツ！ それだけでも喜ぼうぜ！」

「うん、そうだね」

無理に笑顔で頷くライン。そして、無理に、

「そういえば、買い置きのカッキーがあったから、折角の紅茶だし、開けちゃおうか」

と、関係のない話をするラインに、フリットは抱き締めたいと思う。無理しなくていいよって、泣いてもいいんだよって、いつも傍にいるって、抱き締めたい。

だが、それをした所で、ラインは泣かないだろうし、傍にいてほしいと願わないだろうし、無理はするだろう。

ねえ、もしオイラがシンバと同じようになったら、ラインは今と同じくらい悲しんでくれる？　なんて、そんな嫌な台詞が脳裏を巡る。「やつべえ、オイラ女々しい……」

自分の脳裏を駆け巡る台詞に、嫌気が差し、フリットは額を押さえ、最悪とまで呟く。

「何が？」

「え？　ああ、別に。クッキーはいいよ、オイラの部屋、セランが使うから、オイラ、ここで寝るから、紅茶もここでもらう」

「……ねえ、フリットはシンバがLT飲んでた事、いつ頃、気付いたの？」

「へ？」

「私、全然、気付かなくて。今思えば、シンバ、明るかったし、少し妙だなんて思ってたのに、何にも気付かなくて……幸せになれとか変な事、口走ってたのに、私、ホント、鈍くて、鈍感過ぎて……フリットはちゃんとシンバを見てたんだね、私、何やってたんだろう、どうして気付かなかったんだろう」

気付いてた訳じゃないと、言おうとするが、フリットは黙り込んでしまう。

そんなフリットを見て、ラインは、

「ごめん、私……」

と、言葉を失う。

謝る事など、何もない。だが、

「私……セランの言う通り、守られてばっか」

下唇を噛み締め、そう呟いた。

シンバがラインをリグドから守る為、LTを飲んだ。

だが、それだけじゃない、シンバはリグドも救いたかったんだ。

せめて、その信念が通るのならば、フリットも、シンバを助け出そうと思わなかったかもしれない。

だが、シンバが余りに理不尽に使われる。

それが許せない。

そして、何より、ラインが悲しんでいる事が辛い。

「……フリットは、セランの事、思い出せそう？」

「え？ あ、ああ、無理だろ」

笑うフリット。

「無理なのはセランもわかってると思う。でも、思い出すって言うてくれた事、嬉しいと思うよ。シンバも、そう言うてくれたら、きっと、思い出せなくても、嬉しいだろうな」

「……シンバは思い出すよ」

「無理でしょ」

「オイラだったら無理じゃない。思い出す。絶対に！ だからシンバも思い出すよ」

「……ありがとう、フリット」

と、ラインはテーブルに温かい紅茶の入ったマグカップを置くと、「じゃあ、私、セラんにシャワー室の場所、教えとくね。おやすみ」と、セランの紅茶と自分の紅茶を持って、行ってしまった。

「ちくしょ、何言っても口説きじゃなく慰めになっちゃう」

フリットはそう呟くと、毛布に包まって、床にゴロンと横になった。次の日、朝からいい天気で、フリットはラインと洗濯物を干していた。

目を擦りながら、セランが起きて来ると、

「ねえ、セラン、自分のものは自分で洗って、干してよ」

と、ラインが早々に怒り出す。

「アタシ、そういうの苦手。家事全般はマニキュアもとれちゃうから、やりたくないの。それよりコーヒー淹れてよ」

「苦手とかやりたくないとか、こんな小さなヒラヒラのパンツ、他人に洗わせていいの!? フリットがまじまじ見てたよ!」

「ライン! 違うって! ソレ、パンツの機能果たしてんのかなって思ったただだよ!」

「まじまじ見てたには変わりないでしょ!」

「……はい」

頷くしかないフリットに、

「いいのよ、見せる為の下着なんだから。存分に見ていいわよ、フリット」

と、セランは欠伸をしながら言った後、ラインを見て、

「流石、男と暮らしても何も無い女だけの事はあるわね、そのメンズのボクサーパンツ、温かそう」

と、ラインが干した下着を見て言う。

「動きやすいもん!!!!!!」

そう呟えるラインに、

「ハイハイ、コーヒーはブラックでお願いね」

と、キッチンに向かって歩いて行くので、ラインはムツとして、フ

リットを睨むから、何故オイラを睨む訳！？と、フリットは苦笑いする。

朝御飯を食べながら、フリットは、コンピューターの購入はラインとセランの二人で行ってきてくれと頼む。

最初はシンバと余り仲良くできなかったフリット。

だが、男という共通点で、お互いを理解する部分は多々あったし、隣にいて、年齢も近ければ、少なからず言葉を交わす事もあり、接点を持てば、友達になれない相手ではない。

それはラインもセランも同じだろうと考え、だから二人に時間を与えようという考えだ。

ラインとセランはブツブツ文句を言い合いながらも、出掛けて行った。

気の強い二人がどこまで仲良くなれるか不安もあったが、帰って来ると、二人は、甘いものが好きという共通点を見つけ、一緒にクレープを食べてきたらしく、それなりに普通に会話をするようになっていた。

早速、セランはコンピューターを繋げ、セッティングを始める。

黙って見ているフリットとライン。

暫く、セランはコンピューターの配線をいじり、それが終わると、細い10本の指全部がキーボードをリズムカルに叩き、そして、画面に、LT收容所の内部の映像を映し出した。

「すげえ！」

と、フリットが画面を覗き込み、セランは、どんなもんよと笑顔。

画面は4つに分けられ、入り口付近、病院内、入院施設、牢獄となっている。

今、右下の病院内の画面が切り替わり、結構な患者の数に驚くが、一番驚く事は、

「なんだよ、ここ、セク部隊がすげえ配置されてんじゃない」と、セク部隊の多さだ。

「LT患者を扱ってる国の施設だからね。でも、この国の軍を手に

しているのはソルク・モルザなんですよ？　つまり軍のひとつであるセク部隊がこれだけ配置され、そしてLT患者の収容所って事は国とは言っても、ソルク・モルザのテリトリーのひとつって言うてもいいわね」

「これ、いつの映像？」

そう聞いたラインに、

「昨日よ、昨日の日にちと時間が出てるでしょ」

と、セラランが画面を指差した瞬間、ラインもフリットも声を上げ、

「シンバ！」

と、右上の入り口付近を映された画面を指差した。

フリットは時間を見て、

「アイツ、電車に乗って、収容所に行ったんだ………なんで？」

と、疑問を口にするが、右下の画面の病院内の映像に、再び、シンバが映り、

「受診？」

と、フリットは、誰に問いかける訳でもないが、問うように、言う

と、「爆弾の手術を受けるんじゃないかしら？」

と、セラランが答えた。

「は？　なにそれ？　自分で爆弾を入れてくれって？」

「バカね、フリット！　そんな訳ないでしょ？　3日の監禁後、恐らく、LTの服用をしていた事の説明は受けた筈よ、だから念の為に病院に行った方がいいと言われたんじゃないかしら？　彼を一人で行かせたのは、記憶をどれだけ無くしているのか知る為でもあったんじゃない？　後、一人で電車やお金の使い方など、どこまで常識を理解できているか。LTって脳への刺激が強いから記憶が壊れちゃう訳でしょ？　万が一、知的に障害が出たら、リグドどころか、セク部隊の下っ端だってできないでしょ。彼はレベル3だっけ？　そんなにレベルを超える人間、そうはいないんだから、彼は大事な

サンプルでもあるでしょ、ここで変な刺激を啜え、使い物にならなくなるより、彼の意思を尊重し、人としての扱いをして、彼を調査する筈よ。だから彼は自由の身でありながら、自由ではない。自分の足で収容所に来て、籠の中の鳥よ」

黙り込んでしまふフリットとラインに、セランは言い過ぎたかしらと、咳払い。

「えっと、アニルって人だっけ？ その人は多分、入院施設か牢獄にいる筈よ。怪我とかしてるなら、入院施設で治療受けてるんじゃないかしら？ アタシもそうだったの、怪我が治れば牢獄へ行つて、LTを飲まされて、レベルを更に上げられる。でも、誰も上がらなのまま、次の日には死体になるって聞いたわ。どうせ死刑になる連中だから問題ないって、脱走した時に、配置されてるセク部隊の会話を耳にしたの」

「ここからどうやって脱走したの？」

ラインが嚴重な警備に、不思議そうに尋ねる。

「セク部隊は、LTやってる訳じゃないでしょ、だから、どんなに多くの部隊を配置させても、LTリミットを越えた連中相手に無理があるでしょ、だからここはね、コンピューターシステムで、赤外線センサーが張り巡らされてたりするのよ。でもそれを解除しちやえば、簡単。看護婦のふりして、病院内、堂々と歩いて、コンピューター管理室に潜り込んだって訳」

「あ、いた、コイツだよ、コイツがアニル。重症っぽいな」

フリットが、そう言つて、左上の入院施設の映像を指差した。

ベッドの上で、呼吸器を付けて眠っているアニルが映し出され、だが、その映像は直ぐに違う映像になり、アニルが映っていたのは一瞬だけだった。

「アニルって人はLT中毒中なのかしら？」

「いや、レベル1で、その後、LTは飲んでない。オイラ達と同じだ」

「なら、このまま怪我が治るまでは入院してると思うわ、特にLT

を欲しがらないだろうし。暫くは牢獄へ行く事も、LTを飲まされる事もないから、安心よ」

セラランがそう説明し、そうかと、フリットはホッとする。

「さて、アニルって人の無事も確認できたし、この国のセク部隊組織のコンピューターへアクセスして、手に入れるもの、入れちゃいましょ」

セラランは指をマッサージするように、両手で擦り、深く深呼吸。

そして、行き成り、立ち上がるので、フリットもラインも何が始まるのかと思っていたら、

「うまくいったら、ご褒美くれる？」

と、セラランはフリットを見る。

フリットは、嫌な顔で、

「セクハラ関係抜きで」

そう言った。

「何よ、セクハラって！ 失礼しちゃうわ！ あのね、アタシのバイブルなんだけど」

バイブルと言いながら、出してきたのは、一冊の少女漫画。

「この漫画の主人公の相手役の男の子が大好きなの。でね、このシートの、この台詞、大好きで、フリットに言ってもらいたいの」

そう言われ、開かれたページを見るフリットは、その漫画の台詞を目で読み、赤面したかと思うと、

「アホだろ！ 言える訳ねえだろ！」

と、その漫画を床に叩きつけた。

「何するのよ、アタシのバイブルって言ったでしょ！」

「アホか！ 何がバイブルだ、只の漫画だろ！」

「カッコイイじゃない！」

「マジでついていけねえ！ わっけわかんねえ！ お前、トリップしすぎだろ！ だって男を理想で語る女じゃないだろ、男の全て理解してそうじゃん！ なのになんで漫画！？ 空想世界じゃん！ トリップじゃん！」

「理解してるから、空想に走るのよ!」

フリットとセラランが言い合いをしてる中、ラインは、その漫画を拾って読み始める。

「いいか、あんな台詞言える奴は自分をカッコイイと思ってる自信家だけだぞ! あんなの女の理想だ! しかも見た目がカッコイイ男に与えられた有り得ねえ特権だっつーの! 勿論、容姿がカッコイイと自分で理解してる男だぞ! オイラはそんなナルシストじゃねえからな! 絶対に言うか!!!」

フリットがそう吠えると、

「いいじゃない、フリット、かつこいいんだし」

ラインが、そう言うので、フリットの動きが止まった。そしてゆっくりとラインを見て、

「今、なんて言った?」

聞き返す。

「え? 言っただけでもないんじゃない? フリット、かつこいいんだしって」

「……カッコイイ?」

「うん、カッコイイと思うよ」

「そ、それは服が?」

「そうじゃなくて、フリットなら、この男の子の台詞を言っても許されるって意味」

マジで!?!と、思いつき嬉しそうな表情のフリットに、セラランはラインからバイブルとなる漫画を奪い取ると、

「もういい! なんかもカック!」

と、椅子に座り、ムツとした顔で、コンピューター画面を見つめる。怒ったのかと、フリットはゴクリと唾を飲み込むと、セラランは画面を見据え、

「ご褒美は後で考えるわ。とりあえず、先に仕事片付けましょ。失敗した場合だけど、アクセスしてるのバレたら、逃げて追跡されちゃうかも。トラップもあるだろうし、このコンピューター自体、

壊されると思うわ、折角、買ったばかりなのに、ごめんね。それに、何のデータも盗めないまま終わる事の方が確率的に高いって思っ
てて」

そんなに難しい事なんだと、フリットとラインはゴクリと唾を飲み
込む。

「やっぱり、ご褒美、先に何か約束した方が良かったんじゃない？
頑張る度合い違うと思うよ？ でも漫画の台詞って、ご褒美にな
るの？ キスとかの方が良くない？ 恋する乙女の気持ちって、よ
くわからないね」

ラインがフリットに耳打ちで、そう言うから、フリットはキスして
もいいんですかと落ち込みながら、

「キスはセクハラだから！」
と、突っ込む。ラインは成る程！とポンスと手を叩いた。

カッコイイと言われても、余りに気がなさ過ぎて、フリットは更に
落ち込む。

そんな二人を無視して、セランはコンピューターに集中している。
キーボードを打ち始め、画面には、文字が流れ出るが、フリットと
ラインには、わからない文字で、どうなっているのか、サッパリわ
からないが、状況を聞ける雰囲気ではない。

セランは呼吸を止めるかのようになり、瞬きさえせず、鋭い目で画面を
見つめ、10本の指だけが動いている状態。

暫く、その状態が続いた後、フウツと息を吐き出し、セランは伸ば
していた背筋を背もたれに置き、少し汗ばんだ手を見て、更にフウ
ツと、もう一呼吸。

「ど、どうなったの？」

ラインが尋ねると、

「途中で無理そうって思ったんだけど……誰かがセキユリ
ティを解いたみたい、途中からアクセスが簡単に行えたから。向こ
うに誰か味方でもいる？」

そう聞かれ、ラインもフリットも顔を見合わせ、二人揃って、

「レン？」

そう呟いた。

「レンダーって言う人？ でも、その人、敵っぽくなかった？」
セランはそう言うが、他に心当たりはない。

「まあ、いいわ、兎に角、欲しい物は手に入ったから。セク部隊の健康診断データと名簿と半年分のスケジュール！」

と、コンピューターに新しく出来ているフォルダを見て、セランはそう言った。

「スケジュール？」

そんなのどうするんだとフリットが不思議そうに問う。

「入れ替わるのよ、スケジュール知っておかないと意味ないでしょ。それに、入れ替わる人物の休日を調べて、その人物の休日は徹底的にストーリーカー！ いい？ 健康診断にはプライベートの事は書かれてないのよ、趣味が何か、右利きか左利きか、食べ物の好き嫌い、仇名もあるかもしれない。そういうの、全部、調査して、その人になりきらないと！」

「そこまでするのか？」

「フリット、国相手に、中途半端で挑む気？ いい？ 勝つか負けるかじゃないわ、友達を救えるかどうかは、アタシ達が死ぬか、生き残れるかで決まるのよ！ 途中で計画台無しになったら、死ぬのよ、友達も救えないままね」

確かにセランの言う通りだと、ラインは頷き、

「じゃあ、時間もないし、早く私に似てそうな人、探して？」

と、ラインとセランの体格などを似てる人物を探し始める為、データを開いた。

数時間かけて、データを一通り見ていく。

すっかり辺りは暗くて、コンピューターの光だけだと気付いたフリットは、電気を点けた。

そして、何か食べないかと言おうとした時、

「コイツがいいわね」

と、セラランが眩き、ラインは画面を覗き込む。

名前はピケル・ノーゼン。

セク部隊Sランクに配属。

身長165センチ、体重55キロ。

肌の色は白。

黒髪で、黒い瞳。

メガネ着用。

「この画像、見る限りだと、Sランクに配属されるような人じゃないさそうなのに」

「そうね、見た目が女性的。可愛い顔してるわ、それに背も低いし、体重だつて、男の割りにはナイ方よね。待つて、ほら、ここ読んで？ 最近、配属になったみたいね。どうしてかしら？」

「……レンの仕業だつたりして」

ラインがそう言うから、フリットも、画面を覗き込んだ。

「確かに、コレならラインでもバレないかもな。レンが気を利かせて、わざわざコイツをSランクに配属させたとでも？ 有り得ない話じゃないだろうけど、でもさ、ライン、身長、155ぐらいしかねえじゃん？ 10センチの差はデカイぞ」

「厚底にすればいいのよ、後は少し猫背にして、風邪気味だとか言つてマスクして、ブラックのカラーコンタクトすれば、完璧でしょ」セラランがそう言うと、ラインはウンウンと頷く。

「よし、じゃあ、とりあえず飯にしようぜ！」

と、フリットがそう言うつて、腹ペコだとお腹を押さえ、ラインが笑つた時、セラランもコンピュータ画面をテレビモードにして、

「じゃあ、少し休憩しましょ」

そう言ったが、その画面に映ったニュースに、ラインもフリットもフリーズする。

なに？と、セラランも画面を見ると ……

ついさつき、プレジデントが暗殺されたと言うニュース。

ソルク・モルザが記者達に質問責めに合っている。

『プレジデントとは腹違いの兄弟にあたるという話ですが、では、次のプレジデントはソルクさん、アナタがなるのでしょうか?』

『まだわかりません』

『病院に運ばれた時には、もう亡くなられていたらしいですね?』

『はい』

『ソルクさん、アナタは、この国の軍や部隊をまとめる大元帥という称号を持っていますが、その立場で、プレジデントを守れなかった守備については、どうお考えですか?』

『ノーコメント』

『犯人の心当たりは?』

『いいえ』

『国民達の不安をどう解決してくれますか?』

『今はまだ何とも』

質問には、一言二言で済ませる回答をするソルク。

「……ジュキトのピンバッチ付けてる」

ラインが、ソルクの襟元を見て、呟いた。

『ソルクさん、最後に何かメッセージは?』

記者にそう言われ、ソルクは、目の前にあるマイクを持ち、

『我が国は近々、方針を変えるでしょう。全ての国が脅威に思っているリグド・カツツエルと言う人物を、我が国の武力が倒してみせるからです』

プレジデント暗殺事件とは全く関係のないコメントを述べた。

記者達がシーンとする中、ソルクは怪しげに笑い、マイクを握り締める。

『今、この国は他国から、弱者だと言われている。いや、この国を知らない者も世界には大勢いるだろう、それ程に小さな国だ。それは今までのプレジデントが生温い方針を貫いたせいだ。だが、もうすぐです、我が国は誰もが知っている名を持ち、国々を脅かすモンスターを倒す力を持ってして、蘇ります。それこそが亡くなったプレジデントへ贈る我が武力の敬意ですよ、守れなかつたんじゃない、

国がこうなるべきだと、その時が来ただけの事。プレジデントも天国で、理解してくれる事でしょ？」

それはどういう意味だと、記者達が詰め寄るが、ソルクはクルリと背を向け、セク部隊達に守られるようにして姿を消した。

ニユースはスタジオに戻り、このソルクの意見に対し、賛否両論の言い合いが始まる。

「……ソルクも動き出したっつー訳か」

フリットが腕を組んだまま、画面を見つめ、そう呟く。

「大胆だね、ジュキトのピンバッチ、見逃さないジャーナリストもいる筈だよ、暫くはソルクの周りは記者達が張り込んでるだろうね、真相を暴く人もいるかも」

ラインも画面を見たまま、そう言うのと、

「まあ、国が暗殺されたと言い切る以上、雑誌で、ソルクが黒幕か！？ってタイトルで真相を載せたとしても、あんま意味ないだろうな。ぶっちゃけ、国民の事なんて、どうでもいいだろ、奴等はこの国をジュキトにして、最強にして、全ての国を支配したいだけだろうから。そして、その邪魔となるプレジデントはいなくなった」

フリットが、そう言った。

セランは、溜息をひとつ。そして、

「すっごい厄介な事に足を突っ込んだのね、アタシ」と、呟いた。

とりあえず、3人は休憩に入り、食事をした後、直ぐにセランと入れ替わる人間を探し出し、科学班のステイル・ルーヴと言う女性と入れ替わる事に決定した。

そして、ピケル・ノーゼンとステイル・ルーヴのスケジュールを確認。

「この日って、即位パーティーって書かれてるけど、もしかして、ソルクがプレジデントになる日って事かしら？」

セランがそう言っって、確認した日は、今から約2カ月後。

「……シンバがファイナルを迎える日だ」

フリットが計算しながら、呟く。

「盛大に行われそうね」

セランも呟く。

「なら、その日に入れ替わろうか」

ラインが、そう提案し、フリットもセランも頷く。

「そうね、パーティーなら、酔ったふりして歩き回れるかも。そして組織の内部も確認できそうだし。いいかもね。じゃあ、この日の為に、ピケル・ノーゼンとステイル・ルーフを徹底的に調査。どうする？ 当日、入れ替わったら、コイツ等、殺しとく？」

「いやいやいやとフリットもラインも首を振るので、殺さないの？とセランは聞き返す。

「オイラは、普通にデンバーにセク部隊に入れてもらえと思うんだけど、パーティーに出席できるか、わかんねえだろ？ だから、コイツ等は気絶させて、オイラが、この廃墟に連れ込んでおく。コイツ等の毎日の食事とか、どうしようか。ずっと監禁しとく訳にかねえだろうし」

「スケジュール見ると、科学班は残業さえなければ、定時には終わるみたい。セク部隊と違って寮生活でもないし、アタシが、ここへ帰って来るわ、その時に食事を与えればいいでしょ」

フリットもラインも頷いた。

全てうまくいっているように思えた。

フリットはもうすぐシンバを助けられると信じ、ラインが悲しまなくて済むんだと思っていた。

シンバ、お前もLTを飲んだ時、うまくいくと信じたのかな。

オイラ達はまだ若くて、夢を見る年頃なんだよな。

叶わない夢はない。

悪夢なんて知らなくて、動き出せるのは、若さ故。

そんな事、すっかり忘れて、オイラは戦おうとしていた。

LTを飲んだ時に夢は捨てたのに、夢はまた見てしまう。

そして、その夢が叶うと信じてしまう年齢なんだ。

オイラ達は、危険を察知できる大人でもないし、恐怖を知らない子供でもない。

でも、何かに立ち向かえる大人で、過ちを犯してしまう子供なんだ。

シンバ、オイラ達、間違ってるって、気付いてても、自分を止められなかったな。

大事なモノ、守れるって信じてたよな。

既に悪夢の中を走ってるのに、オイラは、夢を叶えようと、必死だったよ。

オイラの全ての悪夢はLTに手を出した時から始まったんだな
・
・
・
・
・

頭の中がグルグル廻る。

視界がぼやけて見えるのは、ハッキリと見えすぎるせい？

遠くの声までハッキリ聞こえ、だから近くの音に耳が痛くなる。

神経が高ぶる。

全てがスローモーションに映る世界で、酔ってしまいそうになる。

「シンバ、シンバ、シンバ！」

脳が揺れる。

「その苦痛に慣れるには1ヶ月、いや、2ヶ月はかかるか。あのリグドがずっと大人しいのも、レベル5の体感に苦悶の日々なんだろう」

吐き気がする。

「シンバ、お前はリグドに遅れてレベル5になったんだ、悪いが、苦痛に慣れるまで、大人しくしていると訳にはいかない。わかってるね？ リグドは今直ぐにでも攻めてくる可能性がある。だから直ぐにでも仕事をしてもらう。キミはSランクのセク部隊リーダーなんだから」

頭痛が止まない。

「おい、聞こえているか？ 意識を集中し、音を聞き分ける。景色を見分ける。それぐらいできる筈だ、レベル5なんだから」
気が遠くなる。

「キミはシンバ・ルーペリック。このワタシ、デンバー・ルーペリックの息子。キミがリグドを倒し、いや、倒せず、例え相打ちになったとしても、ワタシの息子として、英雄の名を、この国に残そう。それがどんな名誉になるか、わかっているね？ ワタシも親として、息子が英雄になれる事を誇りに思うよ」

誰の声だろう？

「今日は即位式。今夜は新しいプレジデントのパーティー。沢山の

人が集まり、花火も上がる。そのレベル5の体感には厳しい環境かもしれないが、早く慣れる為にも出席しなさい。Sランク部隊の連中には、キミの今の状況を話しておいてあるから、問題ない」

この声は……誰なんだ……？

「Sランクはキミと変わらない程の若い連中が多い。だから直ぐに打ち解けられるだろう」

ごちゃごちゃと喋っているデンバーの声など、只の雑音になる。

今、シンバはどうしても聞きたい声が聞こえ、その声に意識を集中している。

?フリットもSランクって事??

?デンバーがAランク配属って言ったんだけど、レンがさ、セク部隊の教官として言うなら、フリットのチカラはAランクの部隊の者との差が、かなりあるだろうって。Lトリミットレベル1だとバれない為にも、Sランクならば、差があるとしても、その強さだからSなんだと周囲が納得する理由が持ってるって。で、デンバーが、それもそうだなって?

?へえ、直ぐに納得されたんだ??

?シンバは記憶がない、オイラが近付いても、何を言っても、何も問題ないってさ?

?フーン?

?それにしてもセク部隊の教官やってるとはな、レンの奴! じゃあ、オイラ、一旦、廃墟に戻るよ、気絶したピケルを運ばなきゃ? セランの方はどうなったの??

?ああ、科学班は寮じゃないから、通勤途中で入れ替わったらしく、ステイルって人は既に廃墟で監禁状態だよ?

?成る程。でもフリット、そんな大きな箱、持ち出せる? 怪しくない??

?ああ、寮に運ぶオイラの荷物を間違えてこっちへ持ってきちゃった言つよ?

?気をつけて運んでよ???

？任せとけつて。でも、コイツ、ピケル・ノーゼンだっけ？ 実物、思ってたより小せえな。デカイ箱とは言え、体折りたたんだら入っちゃうし。女の子みてえ？

？何を今更！ だから私が入れ替われたんじゃないの？

話し声は聞こえても、内容までハッキリ耳に届かなくて、誰かと誰かが会話しているんだろうとしか、わからない。

シンバが意識を集中しても、その声の主が誰かもわからないし、何故、その声を聞きたいのかも、自分自身わかっていない。だが、

？おっと！ 待って、フリット。ピケルの服、脱がしたはいいいけど、メガネも外さないと、私、メガネなしピケルになっちゃう、そしたらバレバレ!？

この声が聞きたいのだとハッキリわかる。

誰だったか………思い出せないが、知ってる声の気がしてならない。

突然、バンツと大きな音に、シンバは耳を押さえ、悶えると、

「ワタシの話を聞いているのか、シンバ！」

と、デンバーが机をバンツとまた叩き、怒鳴るが、デンバーの声など、聞こえちゃいない。

只、耳が痛すぎて、苦しいだけ。

「いいか、シンバ、英雄として君臨するんだ、そんな苦痛の表情をずっと浮かべるな。一刻も早く慣れるんだ。今日は我が陸軍、海軍、空軍の基地でも、即位式の映像が流れる。全ての軍に、リグドを倒す英雄だと、納得させるよう、堂々とした振る舞いをしろ」

シンバは、キーンと痛み続ける耳を押さえながら、

「休みたい」

そう言った自分の声でさえも、耳に痛みを感じ、血が出てるんじゃないかと思う程。

「………いいだろう、即位式は静かな場だ、お前がいても、いなくても、関係ないし、静かな場所で、体感に慣れる意味もない

だろう。パーティーの方は夜からだ。それには出席し、レベル5の体感に慣れる為、少しでも刺激を受けるといい。これはセク部隊の正式制服だ、間違ってもバトルスーツなど着て現れるなよ？」

何を言われたか、よくわからないが、制服を渡されたので、コレを着ると言う意味だなと、シンバは頷く。

デンバーが部屋から出て行くと、シンバは少しリラックスした表情を浮かべ、ソファアの上、横になる。

ここはSランクセク部隊の控え室。壁には時計と女のヌードポスター。

大きなテーブルの上には誰かの食べかけの弁当や飲み物、煙草の吸殻、雑誌などが乱雑に置かれ、ソファアや椅子、そしてズラツと並ぶロッカー、シャワー室、仮眠室などがある。

今、全てのセク部隊は、即位式が始まる為、このキャッスル内で警備にあたっている。

それが終われば、パーティーの準備で忙しい為、控え室に来る者は当分いないだろう。

さっき、俺にゴチャゴチャ何か言っていた男。

デンバー・ルーペリックと言う名らしく、俺の父親だと言うが、俺は信じちゃいない。

何故って、そんな記憶ないからだ。

寧ろ、トリップしてるって思う方が自然な現状。

よく思い出せないが、俺はLTと言う薬を飲んで、こんなにおかしくなったらしい。

その薬が、どんな効果を齎すのか、俺にはよくわからないが、苦痛を味わっている今、こうまでして、俺はLTに手を出して、何がしたかったのか、知りたいと思う。

只、今は、父の、いや、デンバーの言う通りに動くしかないだろう。俺には何一つ、思い出せる事がないからだ。

それでもデンバーが父親ではない事がわかるように、それが本能なのか、直感なのか、それこそ記憶なのか、ハッキリとした根拠も辻

棲もないが、俺は、何か感じている。

そう、さつき、いろんな音が混ざり合う中で聞こえた会話の声。あの声は誰なんだろう、あの声をもっと聞いていたいと、俺はあの声に何か感じていた。

只の思い過ぎのような気もするが、そうじゃない気もする。

こうして考えている間も、眩暈がして、気が遠くなりそうになる。何の為に、こんなに苦しい思いをしなければならないのだろうか。

もし、俺がLTに手を出した理由がわかれば、この苦痛も耐え抜けそうだと。

「まったくよお、やってらんないよな、なんかフリットって奴も入って来るって言うぜ？　なんで初っ端からSランク配属できるんだよ！」

と、ドアが開き、控え室に、ぞろぞろと数人の男達が入って来た。

Sランクセク部隊の連中だろう。

寝ているシンバに気付き、

「おい、英雄様だぜ？」

と、聞こえるように大きな声で、好感のない口調で言う男。

だが、シンバの耳に入って来るのは雑音ばかり。

それ所か、部下達となるだろう者達が来たと言うのに、シンバは、

ソファーに寝転がったまま、起きる気さえない。

その態度がまた気に入らないのだろう、連中は文句を言い始める。

「英雄って言うか化け物だろ、オレ達は化け物の下で働かなきゃならねえのかよ」

「全くだ。この国のセク部隊Sランクって言ったたら、どの配属の軍人より階級は高いって言うのに、Cランクの奴がSランク配属になったと思ったら、新人まで入って来るって言うし、リーダーはLTリミットレベル5の化け物。ムカツク事ばかりだ、仕事なんてやってられるか」

「おい、ピケル！　お前の事言っただよ、何ボサツと化け物見てんだ！」

「す、すいません」

そう言った声に、シンバはガバツと起き上がった。ビクツとする連中。

だが、歪む視界で、人の気配はビシビシと肌に痛いぐらい感じているのに、近くにいても、その声の主が誰かわからない。

だから、起き上がったとしても、何をするでもないシンバに、連中は、

「英雄様はいいよな、仕事しないで休んでられて!」
嫌味を言う。

「デンバーさんが言ってたじゃないですか、今、レベル5の体感に慣れるのに厳しい状態だつて! 誰だつて体調悪い時は休むもんです! そんな言い方やめましようよ! それに、キミ達だつて、今、サボってるじゃないですか! 仕事、ちゃんとやったらどうです?」
ピケルが叫んだ。

そのピケルの声だけはハッキリと捉えるシンバ。

「黙れ、ピケル! クランクのお前が、どういう手を使ってクランクに来れたのか知らないが、オレ達を怒らせない方がいい。殴られたくないだろう?」

シンバは、神経を集中させ、だんだんと、ここにいる者達の会話が聞こえるようになる。

「それにしてもピケル、お前、風邪ひいてるからつて、なんだ、その声? 普通は声が低くなるもんじゃないのか? 随分、女みたいな高い声になつたなあ」

「元々女みたいな奴だしな」

「ははは、違いねえ、ピケル、お前、脱げよ、本当に男か確かめてやるよ」

「ストリップショーか、こりゃいいな」

シンバは、視界もハッキリ見えるように、意識を目に集中する。ぼんやりしていた景色が、見え始める。

背の低い男、あれがピケルかと、シンバがジツと見ていると、黙っ

て突っ立っているピケルに、一人の男が近寄り、

「早く脱げよ、脱がしてやるうか？」

と、ピケルの上着のボタンに手をかけようとして、その手を、ピケルが掴んだ。

「ボクはゲイじゃない。だから男の前で裸になるような行為をしたくない。それとも、キミ達がゲイで、男の裸を好んで見るのか？」

なら、そういう店へ行けよ、ボクをそういう対象で見られても、気持ち悪いだけだ」

そう言つて、男達を見据えている。

小さい癖に大した度胸だと、シンバはクツクツと笑みを零し、だが、自分の喉から鳴る笑い声に頭痛がして、直ぐに笑うのを止めたが、シンバに笑われた事と、ピケルに生意気な事を言われた男達は舌打ちをし、部屋から出て行つた。

ピケルはホツと安堵の溜息。そして、シンバに近寄り、

「仮眠室なら防音だし、ここより休めるんじゃない？」

そう言うので、シンバは首を振り、

「早くレベル5に慣れる為に、少しでも刺激がある方がいいらしい」
多分、そんな事をデンバーが言っていたなと、そう言った。

「………思ったより、普通だね」

と、ピケルはメガネとマスクをしているので、笑顔になつたか、どうかは、わかり辛いのが、目を細めたので笑顔なんだろうと、シンバは思う。

それに、普通と言われ、そういえば、ピケルと普通に会話できているし、普通にピケルが見えていると、シンバは思う。

「聞いたよ、キミ、あのリグドを倒すんだってな？」

「リグド？ ああ、そういえば、そんな事、言われたな」

「リグドもキミと同じレベル5らしいね」

「へえ」

「キミはキミと同じ人間を倒せる？」

「は？」

「だって、レベル5なんて人間、世界中でキミとリグドだけだ。倒したら、キミは孤独にならない？ だったら、共に手を取り合う方が自然だよ」

「………まるで倒すなって言ってるみたいに聞こえる」

「そうは言っていないけど、でも、キミはリグドを倒す為にレベル5になったの？」

「………考えてるところだ」

「え？ 考えてるって？」

「何の為にLTを飲んだのか、それさえわかれば、この苦痛も楽になれる気がするって考えてたところ。リグドって奴を倒す為に飲んだとは思えないからな」

「そっか。その考えの答えが出るといいね」

答えかと、シンバは考え込み、そのせいか、頭痛が酷くなって、表情が歪んだ。すると、

「ごめん、シンバ、あ、いや、違った、英雄は少し休んだ方がいいかも。今は無理せず、体がレベル5に慣れるのが先だよね！」

と、ピケルは慌てて、そう言った。そんなピケルを見て、

「シンバでいい、英雄じゃない。誰も救ってないし、救おうともしていない。只、デンバーの言いなりに動いてるだけだから」

シンバは、そう言った。

「………救おうとしたのかもしいないよ」

「え？」

「誰かを救おうとして、レベル5になったのかも」

シンバは有り得ないだと、ハツと笑みを零し、

「不思議だな、お前と話していると落ち着く。歪んで見えた世界も、お前の事はハッキリ見えるし、お前の声は一番に耳に届く。相性がいいというか、気が合うというか、きつと、波長みたいなもんが合うんだろうな、俺達」

と、ずつと苦痛で耐えられなかった表情から、明るい表情へとなくなっていくシンバ。

「お前、Sランクの部隊の奴等とうまくいつてないのか？ イジメられてるっばいからさ」

「あ、ボクね、Cランクだったんだ、でもレンダー教官が、Sランクに移動って言って、最近、ここに配属されたんだよ。でも、レベルの違いについて行けなくて、それで、みんなから反感受けてて。レンダー教官も変だよ、どうしてボクなんかをSランクに配属させたんだろう。シンバもそう思うだろう？」

「Cランクでも凄いやないか。そんなに小柄なのに、セク部隊に入れたんだ、自信持っていんじゃないか、きつと教官はお前の潜在能力みたいなものに気付いたのかもよ？」

「ははっ、そうかな、それならいいけど。じゃあ、そろそろ、戻らないと。みんな、サボる為にここに来て、ボクもパシリ扱いで連れて来られただけだから、みんな、仕事に戻ったなら、戻らないと、また怒られちゃうから」

「そうか」

「うん、じゃあ、ゆっくり休んで」

「あ！ お前さ」

「はい？」

「名前は？」

「……ピケル・ノーゼン」

その名前に、シンバはピンツと来ないなと思っている。

勿論、そんなの記憶にないからピンツと来るも何もないだろうが。

ピケルはじゃあと手を上げ、駆け足で行ってしまった。

何か感じたから、アイツの声が気になったと思っただが、名前を聞いても何も感じない。

俺の勘違いか？

勘なんて、そんなもんか。

と、またソファーに寝転がるうとした時、再び、ドアが開いた。ツカツカとシンバに近寄る大きな影。

そして、突然、シンバの胸倉をガシツと掴み、

「シンバ、お前、俺様との約束、忘れんじゃねえぞ」

そう言われ、この声はレンダー教官だと、シンバは思い、歪んだ世界で見える、目の前にいるレンダーに視線を向ける。

だが、レンダーの表情はぼやけてて、怒っているのか、笑っているのか、わからない。

どうやら、声の方は聞き分けができるようになったのか、レンダーの声も台詞もハッキリと聞きとれた。その口調からは、怒っているように見え、だが、約束の意味がわからず、

「約束？」

聞き返した。

「お前はラインを守ると言った！ その約束、記憶がないからと破壊はさせねえぞ！ こうなったら、絶対に守れ！ じゃなければ、お前をデンバーに手渡した意味がねえ！」

「……ライントって？」

「チツ！ 記憶ねえからって、聞き返す事じゃねえだろ！ 今の前はレベル5の感覚に慣れてない為、レベル1そこそこの強さだろう、だが、リグドは待ってくれねえぞ、もういつ攻めて来てもおかしくねえ。いいか、前にも話した事があるが、記憶にないだろうから、もう一度、話してやる。レベル5になると、理論的には、記憶は全てなくなり、肉体も増大なパワーについていけず崩壊し、食する事も寝る事もなく、只、死ぬ迄、目の前にある全てを破壊し続けるんだ。お前は、今、レベル5になったとしても、まだその感覚を自分のものにしていない。だから、思考もあれば、感情もあり、まだ破壊者になってないだけだ、だが、その内、完璧にレベル5になれば、お前は変わる」

「……俺は破壊者になるのか？」

「ああ」

「理論的にはだろ？」

「理論的？ 今だって人間から程遠いつて気付いてないのか？ お

前は英雄と言う名の化け物だ、リグドと共にな」

「…………リグドって奴はなんでレベル5になる迄、LTを飲んでんだ？」

そう聞いたシンバに、レンダーはシンバの胸倉を離した。そして、「ジユキトを潰すんだろうよ。レベル5なんて脅威的な存在、どの国からも恐れられる。そして、動き出すのは、LTを使うジユキトだと、リグドはわかっている。そして、ジユキトは必ずリグドを倒す宣言を世界中に向けて放つ事もリグドはわかっている。だから記憶を失くしても、リグドは自分の敵を知る事ができる。その為にレベル5になっただらう」

そう話し、レンダーは俯く。そして、再び、シンバの胸倉を掴み、「お前は俺様にこう言ったんだ、無意識の内にラインを守ろうとする俺がいるってな。その台詞、今更だが、信じるぞ。いいか、化け物に堕ちるか、英雄のままいるのか、もうこうなったら、どちらかだ。忘れるな、どんなに意識がとんでも、俺様にとって英雄でいるその為には、絶対に逃げるなよ」

と、そう言うと、レンダーはシンバから離れ、行ってしまった。シンバはソファーに寝転がり、よくわからない事に、余計頭痛がすると、額に手をやる。

化け物が。

見た目、人間なのにな。

そうまでして、俺は何故LTに手を出したんだらう？

ラインを守る？

リグドを倒す？

どっちもよく知らないのに？

シンバは携帯を取り出し、ストラップのブタを見る。

お前と同じくらい、よくわからないよ。

お前、なんで俺のストラップなんだ？

記憶を失うと、趣味も変わるのか？

シンバはブルーの星を持っている青いブタをジッと見つめた後、よ

くわからないと、携帯をお腹の上に置いたまま、目を閉じた。雑音が常に頭の中に響き、眠る事は全くできないが、気がついたら、夜になっていて、携帯から目覚ましの音が鳴った。

シンバはゆっくり起き上がり、そろそろ着替えなと思った所、S部隊の連中がやって来て、やはり制服に着替えるのだらう、皆、ロッカーを開け、バトルスーツを脱ぎ始める。

「あの、オイラのロッカーってどこっすか？」

そう言っつて制服を持って現れた男に、皆、無視。

「あの！ 聞こえてます？」

誰も、その男に声をかけない。

「チツ、Sランクとか言う割りに心狭すぎ………かつこわりい」

男が小さい声で、そう言っつと、

「なんだと!？」

と、一人の男が怒り出し、ロッカーの扉をバンツと力一杯閉めた。シンバは、直ぐ傍で突然大きな音を出すなど、頭痛に苦しむ。

「お前、今、何て言っつた!？」

「何も？」

「かつこわりいっつて言っつたら!？」

「聞こえてんじやん」

「聞こえてるさ! 新人がそんな態度で許されると思っつのか!？」

「その新人がロッカーがわからなくて困っつてるのを無視するのは、どうなんすか？」

「その生意気な口、今直ぐ塞いでやる！」

と、Sランク部隊の連中が、男を囲んだ。

「やめろ」

シンバが立ち上がり、そう言っつと、連中は、皆、シンバを見る。

「くだらない事するな」

「はあ!？ 起きて来たと思っつたら、偉そつに何様だあ!？」

「俺はお前達のリーダーだろ、それが気に入らないなら、デンバー

に直接文句を言え」

連中は悔しそう。

男は、連中を掻き分け、出てくると、

「リーダーは話わかりそうじゃん」

と、弾んだ声で言うのと、軽快な足取りで、シンバに近寄り、

「オイラ、フリット・デーグレイ。噂は聞いてるよ、ＬＴリミットレベル５の英雄様」

と、手を出してきた。シンバはその手を見る。

「なんすか、その顔？ 握手は初めてっすか？」

「・・・・・・俺と握手したいのか？」

「だから手を出したんじゃない。面白えな、相変わらず」「相変わらず？」

「いや、オイラが相変わらず面白いなって」

と、フリットは誤魔化すように笑いながら、シンバの手を掴み、縦にブンブン振ると、

「よろしく！ 英雄」

そう言うので、

「・・・・・・ああ」

シンバは、とりあえず頷いた。そんなシンバに、

「フウン、ちよつと安心した、結構、普通だから」

フリットはそう言って、笑う。

「・・・・・・普通？」

「あ、いや、気に触った？ 英雄とか言われてる人って、どんなか
なって思ったから」

「そうじゃない、今日、普通と言われたのは二回目だ」

少し嬉しそうなシンバに、フリットは笑う。

そんなシンバとフリットに、Ｓランクの連中は苛立ち、制服を着たらサッサと行こうとするので、

「あ、オイラのロッカーどこっすか！？」

と、フリットが尋ねると同時に、ピケルが部屋に入って来て、

「ピケル、アイツの世話係やってやれ」

連中の一人がそう言うと、ピケルはチラッとフリットを見て、頷いた。

皆が出て行くと、

「オイラのロッカーどこ？」

フリットがピケルに尋ね、

「新人のロッカーはここ」

と、ピケルはロッカーをフリットに教える。そして、

「ここで着替えんの？ ピケルくん？」

ニヤニヤ笑いながら言うフリットに、

「キミも男の裸に興味あるゲイなのか？」

と、ピケルが言うので、首を傾げるフリット。

「ボクに服を脱げって、アイツ等が言うからさ」

「なにい！？ どいつに言われたんだ！？ オイラがぶん殴ってやる！」

「キミがやらなくても自分で殴るよ。それより、これからのパーティーの警備どこになってる？」

「オイラ、東通路。ライ…………ピケルくんは？」

「ボクは中庭」

そう言うと、ピケルはシンバを見て、

「シンバは？」

そう尋ねた。

「俺は…………まだ知らない。デンバーには出席しろとしか言われてないから。ていうか、お前達、仲いいんだな」

シンバにそう言われ、ピケルとフリットは見合い、そして、ピケルはシンバを見て、

「シンバも仲良しだよ」

なんて言うから、シンバは妙な感じで、頭を掻くと、

「ホントに英雄って割りに普通で、良かったな」

と、フリットが言う。

だが、シンバは、レンダーが、破壊者と言った事を思い出し、その時は普通ではなくなるのだろうかと思う。

「シンバ、気分はどう?」

ピケルが聞くので、シンバは頷き、

「頭痛も慣れた」

そう言うと、

「慣れるのは頭痛じゃないでしょ?」

と、ピケルは笑う。

「英雄、早く着替えちゃえよ、オイラと一緒に出ようぜ?」

「ピケルは?」

「コイツは仕度が遅えんだよ」

「なんで新人がそんな事わかるんだ?」

「・・・勘?」

苦笑いでそう答えるフリットに、シンバは成る程と頷き、着ている服を脱いで、デンバーが置いていった制服を手取る。

「その胸の傷・・・」

「え?」

「その胸の傷、どうしたの?」

ピケルがシンバの胸の傷を見て、尋ねる。

シンバは首を傾げ、

「さあ? 覚えてない」

そう答える。フリットが、

「手術とか受けた記憶は?」

そう尋ね、シンバは首を傾げながら、

「どうでもいい」

と、制服に着替えた。

堅苦しい制服姿になると、シンバとフリットは、ピケルを置いて、先に控え室を出る。

すると、直ぐにデンバーが来て、

「迎えに行こうと思ってたんだ、似合うじゃないか、二人共! そ

の制服！」

と、手を叩く。

「シンバ、具合も良さそうだが、これから花火がパンパン鳴るから覚悟しなさい。フリット君の警備は東通路だったね、シンバ、キミは好きな所にいい。今は刺激に慣れる事だ、そうだな、パーティーの会場はブッフエスタイルで食事ができる。今朝から何も食べないだろう？」

デンバーがそう言うが、シンバは食欲がない。

それでも、またソファーで寝ているとは言えない為、パーティー会場をうるつく事にする。

フリットは東通路に向かう。

ソルク・モルザがこの国のプレジデントになる為の即位式が、どんなものだったのか知らないが、パーティーを見る限りでは、かなり盛大に行われたのだろう、明日はパレードまであるそうで、セク部隊達は護衛に忙しくなりそうだ。

シンバは人が集まる会場で、うるうるしていたが、頭痛に吐きそうになり、とりあえず、人気のない場所へ移動する。

静かな裏庭。

天使の銅像が持つ水瓶から流れる水の泉があり、広い場所だが、人はいない。

「おい、英雄」

その声に振り向くと、Sランクの連中5人がバスケットボールを持って、近づいて来る。

その中にピケルもいる。

そして、バスケットボールを持った一人が、

「3onn3やるうぜ」

そう言うと、シンバにボールをパスして来た。

シンバがボールを受け取ると、男は、

「こっちはピケルを受け持ってやる。それで、もし、英雄が俺達に負けるような事があれば、リーダーとは言っても、二度と偉そうな

事を俺達に言うな！」
そう言った。

成る程。

ピケルを受け持つとは言え、こっちの男二人は俺の味方ではないな。

確かに今の俺は意識を集中しなければ、視界も音も、全てが危うい。

だが、コイツ等はわかっているのだろうか。

それでも俺は普通の人間以上、つまり、化け物だって事を。

「ゴールはあの木と、こっちの木でいいよな」

そう言った男に、まだやるとは言っていないしと、

「バスケのルールとか、余り知らないんだけど？」

シンバはそう言うが、男達はシンバの意見を聞く気はないようだ。

仕方がないので、バスケについて、知っている事をやればいいかと溜息。

どうせ、どいつもこいつも、大したプレイはできないだろうと、シンバはそう思っていた。

ジャンプボールで、シンバが弾いたボールが、仲間のチームの男が取り損ね、ピケルの手の中に入る。

ピケルはその場で、まさかのジャンプシュート。

木にボールが引っ掛かる。

皆、シーンとその場でフリーズ。

「・・・マグレ？」

誰かが、そう呟くが、

「やるからには、本気で」

そう言ったピケルに、シンバはピケルを見る。

そして、再び、偶然か、奇跡か、マグレか、ピケルがステイールを決める。

ボールはパスされ、ピケルに再びパス、ピケルはドリブルしながら、男にパス、男はまたピケルにパス。

ピケルはシュートするふりをしてドリブルで抜き、フェイント。更にドリブルで抜くと見せかけてシュートを決める。

「エイ！」とピケルが手を上げ、喜ぶ。

思いの他、ピケルが凄いので、男達は驚いている。

シンバは、ピケルに狙いを決める。

ピッタリとピケルに張り付くが、そうになると、4人の男はノーマーカー。

あっという間に、またシュートを決められる。

「ハッ！ 英雄様！ オレ達の勝ちが決まったも同然だな！」

そう言われ、シンバは、

「それはどうかな」

と、今、パスされるボールを奪い取った。

ドリブルで男達を抜いていく。

ピケルが立ちほだかるが、その身長でカットしてみると、シンバはダンクシュートを決める。

そこからシンバの反撃が始まり、男達はシンバの動きが全く見えなくて、ボールを手にする機会がなくなり、気がつけば、ピケルとシンバの1on1になっている。

「…………ピケルってSランクへ来るだけの实力はあるって事か？」

ピケルの動きも目で追えなくて、男達はそう呟く。

「…………しかもピケル、風邪ひいてて、体調いまいちなんだろ、それである動きか？」

「…………レンダー教官の目に狂いはなかったって事か」

「…………もう行くこうぜ、あんな動きについて行けない」

「そうだな、ピケルが活躍したなんてのも認めたくないし、ここは見なかった事にしよう」

と、男達は行ってしまった。

シンバとピケルのバスケは続き、今、シンバの携帯が鳴った事で、ボールはピケルが奪い、ゴールを決める。

これでピケルが一点リード。

シンバは携帯を取り出し、

「デンバーからだ。会場にいろって言われたからな。もう行かないと」

そう呟いた。そしてピケルを見て、

「俺の負けだな、偉そうな事言うなだっけ？」

そう聞くと、

「それはアイツ等が勝手に言った事で、ボクは只、シンバと楽しく過ごしたかっただけ」

と、ボールをドリブルしながら駆けて来る。

「バスケ、うまいんだな、御蔭でかなり感覚が掴めた。レベル5になつてから、体が固くなつたようで、動くのもダルかつただけど、体が一気に解れた感じするし、視覚や聴覚の感覚も掴めてきてる。

お前の御蔭だ、ありがとう。俺、デンバーから連絡入つたから、もう行くけど」

シンバがそう言うと、ピケルは、シンバが持っている携帯を見て、自分の携帯を取り出し、

「機種は違うけど……ストラップは一緒だ」

と、ピンクのブタのストラップを見せた。

シンバはそのストラップをジッと見る。

そして、ピケルをジッと見ると、ピケルは目を逸らしたので、シンバはピケルの頬に触れるようにして、マスクを外した。

「……お前……女か？」

マスクが外されたピケルの顔は、頬や唇や顎の辺り、どう見ても女だ。

シンバとピケルは見つめ合ったまま、硬直するように二人、立ち尽くしている、空に花火が上がった。

ピケルは空を見上げ、パーンツと大きく広がる炎の花を見ている。ゆっくりと空に落ちる火の粉。

それがまるで雪みたいで。

「…………どこかで会ってる？」

シンバからその台詞をまた聞く事になるとは。
ピケルは黙ったまま、シンバを見つめている。

「…………お前、名前は？」

「ピケル・ノーゼン」

「…………本当の名は？」

そう聞かれ、今、ピケルは俯いて、メガネを外し、コンタクトを取ると、ゆっくりと顔を上げ、シンバを見た。

そのシンバを見る瞳がアクアで、

「…………カラーコンタクト？」

と、何故、ブラックコンタクトをしていたのかと思う。

また花火が空に上がる。

だが、ピケルは、いや、ラインはシンバを見つめ続ける。シンバもラインから目が離せない。そして、

「…………何者なんだ、お前？」

シンバはそう呟くように問う。ラインは、やっぱり思い出さないと、

「私は何者が知りたい？ 平和と愛を願う戦士だよ、名前はピース・ラバー」

悪戯っぽい表情を浮かべ、笑顔で、そう答えた。

「…………ピース・ラバー？ 俺、お前に負けたのか？」

「え？」

「…………バスケのように、前にも、お前に何か負けたんじゃないのか？」

負けたから、俺は、お前に拘るように、声を聞き分けられたりできるのか？

「どうしてそう思うの？」

「そんな気がするから」

「負けたかどうかは、わからないけど……………」
そこまで言つと、優しい微笑みを浮かべ、

「どこかで会ってる？って、そんな気がするのよ、正解かも」
と、ラインがそう言つと、またシンバの携帯が鳴る。
デンバーからだ。

ラインは、メガネとマスクを握り締め、

「コンタクト入れに行かなきゃ。バイバイ」

と、手を振る。

「待てよ、なんで、そんな変装！？」

「私の得意分野だよ、ある時は罪人、ある時はDJ、ある時はセク
部隊、しかしてその実態は？」

「ふざけるな！ 黙って見過ごせると思つのか？」

「・・・・・・・・」

「何を企んでる？」

「・・・・・・・・」

「あのフリットって奴も仲間か？」

「・・・・・・・・そんな顔して怒らないで？ シンバも仲間なんだか
ら」

「え？」

「シンバも仲間。信じて？ 私は只、シンバと楽しく過ごしたいだ
けなんだよ」

「・・・・・・・・俺の失くした記憶に、お前は存在する。そうだな？」
「・・・・・・・・」

「俺はどんな記憶を失くしてるんだ？ 大事なものだったのか？」

「失くしたものは仕方ないよ。それが大事なものでも、もう戻つて
こない。だから、これから失くした所を埋めて行けばいいし、大事
なものをつくつていけばいいよ」

「大事なものを？」

「うん、楽しかったよね、バスケ。まず、ひとつ、シンバとの楽し
い思い出できたね、きつと大事なものになる気がする」

「・・・・・・・・だったら、なんでそんな悲しい顔するんだよ！？」

「違うよ、シンバとこうして話してるのが嬉しいから。二度と話せ

ないかもしれないって、二度と会えないかもしれないって、二度と触れられないかもしれないって、思った時もあったから、こうして会えて、話せて」

ラインはそつとシンバの手を持ち、

「触れられる事が嬉しくて、悲しくなっちゃう」

ギョツと強く握り締めた。

パーンツと花火が上がり、空に大きく広がる火花。

パーンパーンパーンと連続火花に、ラインは顔を上げ、空を見て、指を差し、

「綺麗」

そう言った。

どうしても思い出さなきゃと、シンバの鼓動が速くなる。

ラインはシンバを見て、

「見た？」

そう聞いたが、シンバは何も答えず、ジッとラインを見つめる。

ラインもシンバをジッと見つめる。

ラインは恥ずかしそうに目を逸らすと、ポケットに手を入れて、その手をグーにして出すと、シンバに向けて差し出し、

「いいものあげる、手、出して？」

そう言った。シンバは少し斜めに顔を傾け、なんだろう？と、手を出してみると、飴玉がシンバの手の中に転がった。

「あげる」

可愛らしい笑顔で、そう言ったラインに、思い出さなきゃと急ぐ気持ちだが、シンバの鼓動を速くする。

「ねえ、シンバ？ 私達の仲間はもう一人いて、その人は科学班の方に行ってるね、その人の任務が完了したら、私達と一緒にここを出ない？」

「は？」

「考えてみて？ こうして一緒に楽しく過ごしたいから」

「……………俺はリグドを倒すよう命じられてる、ここを出て行

く訳には」

「無理する事ない」

「無理？」

「シンバ、過去は幾ら考えてもわからないなら、これから先、シンバがどうしたいか、考えてみて？ 本当にリグドを倒したい？ それなら、私は一緒に戦うから。その後でもいいの、一緒に、ここを出よう？」

再び、デンバーからの着信。

「そろそろ電話、出ないと怒られるよ？ 私も行かなきゃ」

そう言つと、ラインは背を向け、駆けて行く。

シンバはラインを見送ると、電話には出ずに、会場へ向かう。

勿論、会場の人込みの中、シンバを見つけたデンバーが、どこへ行っていったんだと聞くんが、頭痛がする素振りをして、聞こえてないふりをした。

本当は頭痛もだいぶ和らいでいたし、花火の音にも大して反応はなかった。

レベル5の体感に慣れるには2ヶ月は必要だと聞いていたが、ラインに出会つてから、ラインと話がしたい、見ていたい、触れてみたいという欲求のせいか、体のコントロールが完全とは言えないが、それなりにできている。

尤も、今のシンバはラインではなく、ピース・ラバーと言う名だと思っているが。

彼女の事をデンバーに報告した方がいいのだろうか、それとも、彼女とここを出て行くのか、シンバは考えてもわからなくて、只、火花が上がる夜空をずっと見上げていた。

これからの事を考える？

それは俺がレベル5になつた意味に繋がるのか？

俺は大事なものがあつたのかもしれない。

その大事なものを忘れたままで、新しい大事なものを作つていくのか？

俺が手に入れたかったものは何だろう？

化け物みたいなチカラ？

英雄という地位？

英雄……か……。

花火も終わり、パーティーもお開きとなり、ソルク・モルザも奥へと引つ込むと、セク部隊も仕事を終えて、寮へと帰る。

シンバは寮へは行かず、科学班の方へ向かい、暫くの間は、心電図の付いたベッドで眠る事になっている。

「これは英雄様、どうですか、気分の方は？」

科学ルームの自動扉の前、白衣を着た者達が尋ねてくるが、シンバは無言で奥へと進む。

ここはバトルスーツを来たセク部隊の領域とは違い、白衣を身に纏った連中がウロウロしていて、壁一面に大きな画面のメインコンピュータが機械的な音声を出している。

「英雄様が来られた、誰か、ベッドルームへ付き添ってくれないか？」

そう言うと、ハイと立ち上がった女。そして、赤い縁のメガネをクイツと上げると、

「もうお休みですか？」

シンバにそう尋ねて来た。マスクをしていて、顔の表情は解り難いが、？私達の仲間は今もう一人いて、その人は科学班の方に行つててね？と、ピースが言っていたなと思ひ出す。

だが、この女がそうとは限らないので、シンバは、いつも通りに、頷くだけ。

女は、ヒールの靴をカツカツと鳴らし、ベッドルームへ向かう。自動扉を幾つか潜り、いつものベッドルーム。

シンバは上着を脱ぐと、女は、シンバの上半身の心臓部分に幾つかの線を引っ付かせ、心電図に繋げる。

心電図が正常に動くのを確認すると、

「トイレや飲み物などが欲しい場合、そのボタンでコールして下さい」

さい」

女はいつも通りの台詞を言うので、

「俺の担当だろ、名前は名乗らないのか？　いつも名乗るだろう」
そう聞くと、

「そ、そうでしたね、申し訳御座いませぬ。ステイル・ルーヴです」と、女は名乗った。シンバはクツクツと笑い、

「嘘だよ、いつも誰も名乗らない」

そう言つて、ステイルを見る。そして、

「ピースつて女と仲間なんだろ？」

そう聞いた。

「へ？　ピース？」

「もう知ってるんだ、誤魔化さなくていい」

「あ、いえ、その……本当に知らないわ」

と、嘘ではなさそうな顔で言うので、シンバは眉間に皺を寄せ、

「……ピース・ラバーやフリット・ディーグレイの仲間じゃないのか？」

再び、尋ねる。

「フリットは……仲間よ。ピースつて誰？」

「は？」

「……アナタ、トリップが酷いの？　レベル5にもなると、相当、幻覚症状が激しいのかしら」

そう言われると、今日の出来事は幻覚のようなものに思えてきた。

「でもフリットの事は知ってるのね、明日とか、会う？」

「会うんじゃないか、アイツの存在が俺のトリップじゃなければ、同じ部隊にいる筈だ」

「そう、あのね、アナタの胸に入れられた爆弾の事なんだけど」

「え？」

「解除する為のメインコンピューター、まだ触れてないの。今日はパーティーがあつて、全員が残業だったけど、明日からは夜残る人も少ない筈。だから、明日以降、任務決行になると思うから、今日

の所は何も動いてないの、もしフリットに会ったら、そう伝えて？」
「……爆弾って？」

そう聞き返すシンバに、知らないの！？と、しまったとマスクの上から口を押さえるステイルに、

「なんだよ、爆弾って！」
再び聞き返す。

「怖い顔しないで。アタシはアナタの中にある爆弾のスイッチを止める為に動いてるんだから。敵じゃないってわかるでしょ！？」

「爆弾って……俺の中に爆弾があるのか！？」

「そうよ、だってアナタ、レベル5、つまりファイナルだから」

「……ファイナルだから？」

「普通の人とは全く違うの、こうして、今、アタシと話してるのも、まだレベル5のチカラを得てないから。チカラを得て、完全に最終トリップを迎えたら、アナタは……どうなるのかしらね？」

アタシにはわからないわ。でも、爆弾を入れておけば、いつだって、アナタを殺せる。それには、まずリグドを倒してからじゃないと、リグドは爆弾付きじゃないから、誰の手にも負えないから。つまり、人の手ひとつで、生死を決める事ができる爆弾のあるアナタは英雄。人の手から離れた爆弾のないリグドは悪魔……って所かしらね」

「……じゃあ、爆弾のスイッチ止めたら駄目だろ」

「でも止めたいんだって。アタシは世界がどうなるうが、誰が死ぬうが、全然、興味ない。只、フリットと一緒にいたいだけ。限りある時間を一緒に過ごしたいだけ」

「……誰が俺の爆弾を止めたいって？」

「まだ会ってないなら、これから会えるんじゃない？ アタシが言えるのはここまで」

「……俺はどうしたらいいんだ？」

「知らないわよ、そんな事。でも応援してるから頑張っしてほしいわ」
「頑張れって、リグドを倒す事とか？」

「違うわよ、フリットに負けしないで、頑張って、彼女とうまく行ってほしいから」

「は？」

「アナタと彼女がうまく行けば、フリットも諦めるでしょ」

「何の話だ？」

「アタシの個人的な話。じゃ、ゆっくり休んで？」

ステイルが出て行くと、この部屋は本当に静かで、静かな音が耳に痛いくらいで、シンバは自分の体の中の音に耳を澄ますが、爆弾なんて本当に入っているのか、わからない。

布団に潜り込むと、目を閉じて、何も考えないようにしようとしているのに、夢を見る。

誰もいない暗闇。

膝を抱え、孤独に耐えていると、現れる影。

でも、遠ざかる。

待って！

俺を置いて行かないで！

俺を一人にしないで！

追いかけても、追いつけない。

わかっている、その影に追いつき、追い越す事など、絶対に不可能だ。

それは俺にとって、崇拜する絶対神そのもの。

？シンバ？

誰かが、俺を呼んでいる。

この声は、知ってる。

？シンバ？

振り向くと、あの女が立っている。

ピース・ラバー。

？いいものあげるよ、手を出して？

彼女がそう言うので、手を出すと、手の中に飴玉を落とし、
？あげる？

と、彼女はニツコリ笑う。

? シンバ?

また誰かが名を呼ぶ。

振り向くと、今度はレンダーが立っている。

? ラインを守れ?

そう言つて、剣を差し出して来るが、ラインが誰かわからず、首を左右に振り続ける。

なのに無理矢理、剣を持たせ、

? 守れ?

と、レンダーは繰り返す。

? シンバ?

再び、名を呼ばれ、振り向くと、影が、

? その剣でオレを殺すのか??

そう尋ねる。

違う!

殺す訳ないだろう?

只、守って欲しいって言われただけで殺せとは言われてない!

嘘じゃない!

レンダー、頼むよ、レンダーからも説明して?

俺は守るよう言われただけだ! そうだろう?

? もついい、わかつたよ、シンバ?

わかつてくれたのか!? 本当に!?

? ああ、わかるよ、お前がラインを殺せばね?

ラインを.....!?

影が喉を鳴らしながら笑い、耳元で囁く。

? 大丈夫大丈夫、お前ならできるって?

俺は手に持った大きな剣を見つめていると、ふと目の前にピースが現れる。

?.....ラインって.....お前の事なのか、ピース???

影の音が耳元から離れない。

「大丈夫大丈夫、お前ならできるって？」

何度も、耳元でそう囁かれているようで、俺は自分でも言ってみる。

大丈夫大丈夫、俺ならできるって。

ラインがニツコリ笑う。

なんだか、とても懐かしい笑顔で、だけど、その懐かしさを守りたいと思う程、俺には何も無い記憶過ぎて、剣を振り上げた。ガバツと起き上がると、

「あ、お目覚めですか？ 心音が異常数値になる程、魔されていてましたね、悪い夢でも？」

白衣を着た男が、シンバを覗き込み、そう言った。

汗だくのシンバは、呼吸を乱し、

「影が……誰か……わからない……」

そう呟き、白衣の男はハイ？と聞き返したが、シンバは首を振り、シャワーを浴びる為、その部屋を出た。シャワーを浴びながら、あの影が誰なのか、考える。

誰かわからないのに、なんで俺、言いなりなんだ？

記憶がないのに、なんで、怖いと思うんだ？

本能？

シンバは、シャワーを終えると、着替えて、直ぐに仕事に向かうが、Sランク部隊の控え室に着く前に、デンバーに捉まった。

「シンバ、今日はこの国がジユキトとなった祭りで、パレードがある。新プレジデントのソルク様が大衆に手を振りながら、パレードの先頭に行く。お前の配置はソルク様の隣だ。何が起こるか、わからないからな、いざと言う時は、その命に代えて、お守りしろ」

爆弾が入っている体で、命に代えても守れと命令するデンバーに、シンバは苛立ち、俺をなんだと思っっているんだと怒鳴りたくなるが、

「はい」

素直に頷いた。

「私の声が届いているのか？ ちゃんと聞こえているのか？」

「はい」

「凄じくないか！ こんな短時間で聞き分けができるなど、素晴らしいよ、やはり、キミは英雄に相応しい人材だったんだな！」

と、デンバーは、そう言うと、期待しているとシンバの肩を叩いた。シンバは一礼すると、控え室へ向かう。

Sランクの連中も、寮から仕事へ向かい、調度、シンバと同時刻に控え室に入る。

勿論、ライン、いや、今はピケル、そして、フリットもいる。

「新人は早く来て掃除しとくもんだろ」

Sランクの連中がフリットに絡む。

「聞いてないっすよ」

「聞かなくてもわかるだろ！」

「じゃあ、明日から」

「今直ぐだ！」

そう吠えた男に、

「掃除はお前達がしろ」

と、シンバが言い放った。勿論、連中は、

「はあ！？」

と、怒り露わ。だが、シンバはバトルスーツに着替えると、

「お前は話がある、着替えたら来い」

と、フリットに言い、控え室から出て行く。

フリットはピケルを見て、ピケルは首を傾げ、フリットもなんだろう？と、首を傾げながら、バトルスーツに着替える。

連中はフリットよりもシンバの態度に怒っているが、シンバ相手にどうしようもない。

フリットはバトルスーツに着替え、メットとライフルを片手で持ち、控え室を出た。

シンバが壁に持たれ掛けた体勢で、腕を組んで待っている。

「いいのか？ あんな態度とって？ そりゃアイツ等は気に食わねえけど……」

「人気のない所へ行くぞ」

「え？ あ、ああ」

シンバは使ってないだろう第二会議室の扉を開け、その中に入り、
「幾つか聞きたい事がある」

そう言つて、フリットを見た。

「お前達と俺は知り合いだったのか？」

「……ああ、まあ……」

「俺の体の中に爆弾があるって本当か？」

「え！？ そんな事、誰から聞いたんだ！？」

「昨夜、科学班にいる、お前達の仲間だろう女からだ」

フリットはなんで喋るかなあと、額を押さえ、溜息。そして、

「ああ、隠してもしょうがねえから言うよ、爆弾が入ってる」と、頷いた。

「お前達の目的は、爆弾を止める事なのか？」

「ああ」

「わざわざセク部隊に入団して、女が男の変装までして、そこまでして？」

「そこまでして、お前を死なせたくない」

「……その理由は？」

「友達だからだよ！」

「友達？ たったそれだけの理由で？」

「ああ、たったそれだけだ。でも、オイラの人生でデカイ事だ。確かに、お前はオイラが一番じゃねえけど、でも一番に近い。それ程、オイラも誰も知らないんだ」

「え？」

「親も知らないし、兄弟がいたのかどうかもわからない。家がどこにあったのかも、学校に行った事があるのかも、全て記憶にない」

「それってLT ！？」

「ああ、そうだ、オイラもLTやってたんだ。人生の半分以上、記憶が余りない。記憶があつてこそ、人生始まるってもんだ。その才

イラの人生の中で、お前は唯一、オイラに近い存在だった。つまり初めてできた友達って奴だ」

「初めて……」

「記憶がない部分で、友達はいたかもしれねえけど、今、オイラを作り上げているオイラ自身の記憶がある限りの人生では、お前が初めての友達」

「……」

「その友達が、記憶を失う事はないと騙されてLTを飲んじまった。お前はオイラ達から離れ、リグドと共にいる事を決断し、そうする事でラインを守ろうとした」

「ライン、それは誰なんだ？」

「は？ 誰って」

「レンダー教官からも守れと言われた。だが、リグドと言う人でさえ、俺は知らない」

「リグドもわかんねえのか……」

「勿論、デンバーから倒せと言われてる人物だとはわかってる。でも、どんな人か、どういう存在だったのか、俺はわからないんだ」

「……」

「こうして、目の前にいるお前の事も、全く知らない人だ。お前達が俺を知っていても、俺は他人に見える。それに、お前達が知っている俺は、今の俺じゃないだろう？」

「いや、でも、そう変わりない、レベル5とか英雄とか言われてるが、シンバはシンバだ。多分、基本性格は変わらないんじゃないかねえか？」

そう言ったフリットに、シンバはフツと笑みを零し、

「そんな事が言えるぐらい、お前は俺を知らない」

と、フリットを見て、

「俺の孤独と苦悩の日々は明日の為にある訳じゃない」
そう言った。

「……どういう意味だよ？」

「俺は英雄なんだよ、その邪魔をするな」

「邪魔つて！ だって、爆弾止めねえと、幾らレベル5でも英雄でも爆発したら　！」

「どうせ死ぬんだ、わかるんだよ、体が悲鳴を上げてるって。俺は、自分の体を自分でコントロールできなくなり、俺自身、自分がわからなくなるだろう。お前達がやろうとしてる事は無駄で終わる。なら、何もするな、俺もどうせ死ぬなら英雄として死にたい」

「孤独と苦悩の日々は死ぬ為にあるって言うのか？ それでいいのか？」

「ああ、全てを破壊し続けるより、世を救った英雄として死ぬるんだ、最高だろう？」

「最高か！？ 最高なのか！？」

「だったら俺に殺されたいか？」

そう言ったシンバに、フリットは黙り込む。

「……俺に……殺させたいのか？」

誰を？と聞くまでもない、ラインの事だろうと、フリットは思うが、シンバはラインを知らない。それでも、その問いに、フリットは、

「……殺したくないからか？ だからここまで来たオイラ達に退けと？」

そう問い返した。何も答ええないシンバ。

「LTなんてなければ……もつと別の生き方……あつたかもしれねえのに」

フリットはそう呟くと、

「破滅型ヒーローなんて、かつこわりいぞ！」

そう言い放ち、

「悪いけどな、オイラ達もそう簡単に引けない。オイラもお前を救う英雄になりたいから」

そう言った時だった、サイレンが鳴り響き、シンバの携帯が鳴った。何事だと、うるたえるフリット。

シンバが携帯に出ると、

『シンバ、今、どこにいる!?!』

デンバーが怒鳴った。

「第二会議室」

『何故そんな所に!?! まあ、いい、今直ぐそっちに行くから待つてなさい!』

そう言うと、デンバーは電話を切った。

シンバは、やれやれと携帯を仕舞おうとした時、

「相変わらずそのストラップ付けてるって辺り、オイラに嘔吐くの下手なんだよ、お前」

フリットが携帯のブタのストラップを見て、言った。

「嘘?」

「嘘だろ、だって、お前、本当はラインの事、めっちゃくちゃ好きな癖にさ、そうでもないって顔して、バレバレだっつーの!」

「なんだそれ? このブタとどう関係ある話だ? 大体、俺はラインって奴の事」

「今、一番、気になってる女、いねえとは言わせねえぞ!」

そう吠えたフリットに、シンバは黙り込む。

そこへデンバーが入って来て、

「何をやってるんだ! フリット君もここにいたのか!」
そう叫んだ。

「シンバ、リグドが来た」

そのデンバーの台詞に驚いたのはフリットの方。

「早くないっすか!?! 話だと、まだ攻めては来ないだろうって言うってたじゃないっすか!?! だからパーティーやパレードの華やかな場面にプレジデントが出て大丈夫って言ってたっすよね!?!」

「ああ、だが、来てしまったんだ、こっちも予想外で、シンバが本調子じゃない事に勝機を感じていない。だが、プレジデントは先にヘリで避難する事になった。プレジデントさえ無事ならジユキトは大丈夫だ」

デンバーはそう言うと、シンバの肩を強く持ち、

「シンバ、キミが、英雄になれるかって時が来たんだ、早すぎる展開だが、現実には思わぬハプニングが当然。わかってくれるな？」

何をわかれと言うのか、それはシンバの体がリグドを巻き添えにして爆発する事に聞こえ、

「シンバ一人で戦うのは無理ですよ、シンバはまだレベル5に付いて行けてない！」

フリットがそう叫ぶ。デンバーはジロリとフリットを見て、

「レベル5のリグドにシンバ以外、誰が敵う？」

そう言った。そう言われると、フリットは黙るしかない。

「シンバ、わかるね？」

デンバーは諭すように、シンバに言う。

「シンバ、キミは英雄なんだ、その為の辛い日々だっただろう？
今迄の苦しみは今日の為だったんだ、全て終われば、楽になれる

」

シンバが頷こうとした時、

「ソイツはお前の息子のシンバじゃねえぞ、デンバー」

と、レンダーがドアをノックもせず、勢い良くバンツと開け、

「英雄に仕立て上げてても、お前の息子が英雄になる訳じゃねえ。ソイツ自身が英雄になるんだ、そこんとこ、ハッキリしてくれねえと、
報われねえだろ」

そう言つて、ソードを持ち、現れた。そして、シンバに、そのソードを渡し、

「元ジュキトの武器だが、今は、お前の剣ノーザンファンングだ。お前と共に英雄として活躍させる」

と、シンバを見る。

シンバはその剣を手に取り、懐かしいような、久しいような、そんな気分になるが、記憶にはなく・・・。

「剣の扱いは俺様がよく教えてやっただろ、仕込んでやったからな。いいか、考えなくてもいい、体が覚えているもんだ」

レンダーがそう言うので、シンバはコクンと頷き、ノーザンファン

グの柄を強く握った。
これから英雄になる為、死を覚悟した戦いに挑む為。
。

シンバが走り去った後、第二会議室に、フリットとレンダーとデンバーが残った。

その3人が動けないのは、レンダーがデンバーに向けてライフルを構えているからだ。

フリットはレンダーの考えがわからず、フリーズしている。

「レン、どういっつもりだ!? ワタシを裏切るのか!?」

「裏切る? 俺様はシンバとリグドを戦わせる事に同意し、シンバの体に爆弾を仕込む事に頷いただけだ。ジュキト復活には賛成してねえ。尤も、シンバをお前に渡した時から、俺様は、お前とジュキトの王となるプレジデントを殺すつもりでいたがな」

「なにに!?」

「デンバーよう、お前、ジュキトが滅びの道を辿ったのを忘れた訳じゃねえだろう、また同じ過ちを犯してどうなるんだ?」

「ジュキトは我が国だぞ! レン、お前もジュキトの民の一員として、復活を喜ぶべきじゃないのか!」

「LTを使用するジュキトを喜べると思うか? リグドを生み出したのはジュキトだ。またその繰り返しに喜べる訳ないだろう。俺様はリグドが憎い訳じゃねえ。哀れだと思ってんだよ、ジュキトが生み出した闇として生きなければならなかったリグドが可哀想だ。あんな人間、二度と生み出してはならねえ。だからこそ、第二のリグドとなるシンバの体に爆弾を仕込むのを賛成した。シンバは遺伝子レベルでリグドと匹敵する為、リグドがレベルファイナルを迎えたなら、シンバも迎えられるだろうと、だが、奴をリグドのような破壊者にする前に、殺してやらなければと思ったからだ。ジュキトの復活の為じゃねえ、シンバの為だ」

「レン! シンバは死ぬしかないのか!? 今、あんなに普通なのに!?!」

フリットが悲しげな顔で、そう聞くと、

「ああ、殺さなければ、奴を止められない。だが、フリット、お前は爆弾を解除する為にここに来たんだろう？」

レンダーが、そう言うので、なんだと!?!と、デンバーはフリットを見る。

「オイラは、只、ラインの悲しむ顔なんて見たくなくて、シンバもオイラにとったら友達だし、どうしても目先の幸せしかわからないから」

「ガキはそういうもんだ、今と少し先しかわかってねえ。そして、いつだって、大人の都合で、犠牲になるのはガキだ。だからガキはガキなりに足掻けばいい。なあ、フリット、爆弾、解除して来い」「え?」

「まだアイツはレベル5になりきれてない。今、リグドを倒せても、アイツ自身、まだ自我があるだろう。どうせ殺すなら、お前の手で殺してやれ。爆弾より、友に殺される方が数段マシだ。それとも、ラインが悲しむから、そんな事できねえか? 男なら、好きな女の為に恨まれてみる」

「勝手な事はさせんぞ!!!!!!」

デンバーが大声で怒鳴るが、レンダーはライフルを突きつけ、

「お前が勝手に喋るんじゃないぞ」
そう言い放つ。

「フリット、急げ! 爆弾はデンバーの指示なく、スイッチを入れられる!」

と、レンダーが顎で行けと合図する。フリットは頷き、科学班に向かって走り出す。

「さあて、デンバー、最期に言い残す事はないか?」

「レン、ワタシを殺した所で、LTは終わりじゃない。世界中にLTは流出されてるんだ」

「ああ、だが、LTを撲滅する為、世界は動いている。ジユキトさえ復活しなければ、いつか、そう、いつか、LTはこの世から無く

なる」

「あれはジュキトの成果だぞ！ 無くしてなるものか！」

「デンバー、もう認める、ジュキトは終わったんだ。ジュキトは、シンバやフリット、それからライン、世界中の若者達にLTというものを流してしまった。それはリグドのせいじゃねえ。考えてみる、あの時、リグドをちゃんと殺せていたら、いや、リグドにLTのテストをしなければ、いいや、LTなど作り出さなければ、今だってジュキトは世界の一部だったかもしれないねえ。LTを使う国は滅びるしかないんだ！」

「黙れ！ ジュキトはこれからだ！！ そうでない！ そうでない、ワタシが息子を何の為にLTのテストにかけたと思っているんだ！ 世界中で英雄になる為だろう！」

「デンバー、お前の息子はもういないんだ」

「いいや！ これから英雄として名を残すんだ！」

「違う、アレはお前の息子じゃない。奴の本当の名はクロス・セイト」

「セイトだと？」

「思い出したか？ 確か、お前が配属していた軍の隊長がその名だったな」

「……セイト隊長の息子？」

「そうみたいだ、俺様は知らねえが、お前にとつたら、隊長は絶対的存在だったんじゃないのか？ その絶対的存在の息子を、偽らせられるのか？ それだけジュキトを愛してるって事は若かりし頃の恩師は忘れられねえだろ？」

「……」

「なあ、デンバーよう、俺様達は18歳だったよな、ジュキトの為に体を張って生き抜いていた頃、大人達が正しいと言えば、そうなんだと頷いていた。アイツ等もそうなんだよ。でも、アイツ等は流石だよな、俺様達が体を張った年齢より1歳若い17だ。その1歳の差は大きい。なのに、そんなガキが、自分達だけで友達を救おう

と、国相手に乗り込んで来やがった。ガキは後先考えねえからな」
「……ガキとは言え、LTリミット超えた連中だ、国相手
だろうが、世界相手だろうが、それだけのチカラを持つてるんだ」
「ああ、それだけ恐ろしいチカラだつて事だ。フリットは調子者だ
が、楽しくて気のいい奴だ、ラインは惚けてるが、男勝りで正義感
ある奴だ、そんな二人だから、恐ろしいチカラを持っていても、優
しい事の為に使えるんだ。だが、人間は皆、善人だとは限らねえ。
だからこそLTはこの世から消えるべきなんだ。シンバはよう……
……感情表現が下手だが、自己犠牲を選べる他人を愛せる奴なん
だよ……お前の恩師はそんな奴だつたんじゃねえか？ シ
ンバは生まれながらにしてLT漬けの赤ん坊だった、それはLTの
テストを自ら進んで、シンバの親は行つたんじゃねえのか？ お前
達部下が、LTを使わなくても済むようになってな」
黙り込んで、俯くデンバーに、レンダーは、銃口を下ろしてしまっ
た。その隙に、デンバーは自分の銃を抜き、レンダーに構える。
「生憎、ワタシはそんな話に、心打たれ、涙を流すような人間では
ない」

「貴様！ まだわからねえのか！」

「レン、人間は善人だとは限らない、確かにそうだ。つまりだ、L
Tを研究する為に、多くの人間を犠牲にできるワタシは、善人では
ないんだよ、今更、過去の感動秘話など、なんとも思わない人間な
んだ、ワタシは」

「貴様ツ！……！」

「立場逆転のようだね、レン。悪いが、ワタシはレンのように善人
ではないので、最期の言葉など、聞きませんよ。それに今はリグド
が現れ、緊急事態だ、こんな所で遊んでいる暇はない。さようなら、
レン」

科学班の入り口手前で、発砲音が聞こえ、フリットは足を止め、振
り向くが、今、戻ってる暇はないと、再び駆け出す。

うるさいサイレンは鳴りっぱなしで、Cランクのセク部隊全滅と放送が流れる。

シンバ、お前、今、どこにいるんだ!?

ラインと一緒になのか?

クソツ! オイラも早く向かわないと!

今、科学班の自動扉が開くと同時に、スティル・ルーヴに化けたセランと目が合う。

「裏切り者かあ!」

と、突然、フリットにそう叫び、殴りかかって来る白衣の男。そんな攻撃はスルツと避けれるフリットだが、何故か、皆、殺気立っている。

そんな中、セランが突然、

「皆さん、注意して下さい!」

そう叫び、皆、セランを見た瞬間、セランはスプレーを、皆の顔に向けて放ち、

「催眠スプレーにご注意」

そう言うと、皆、バタバタと倒れるように眠ってしまった。

フリットはスプレーを吸わないよう、口と鼻を腕の部分で隠し、

「お前、自分はマスクしてるからって、撒きすぎ」

少し咳き込みながら、そう言って、セランに近づく。

「シンバの爆弾のスイッチは?」

「まだ解除できてないわ」

「コイツ等、なんでオイラに殺気立ってた訳?」

「セク部隊隊長から、ついさっき、携帯で連絡が入ったの、裏切り者がいるってね」

「デンバーから!? レン、どうなったんだろう……」

「そんな事より、逃げた方がいいわ」

「シンバの爆弾の解除、まだなんだろ? 頼む、解除してくれ。お願い!」

「そんな暇ないわ、逃げた方がいい、このキャッスル、全ての部屋

に鉄格子が降りるようになってるの。さっきね、LT收容所も全ての窓や扉に鉄格子が落とされ、その後、鉄の扉で密閉状態にされたのよ」

「何の為に？」

「毒ガスで殺す為でしょ」

「え？」

「どうやら、リグドの登場が早すぎたようね。英雄が万全の状態じゃないから、リグドに殺されると判断したのよ。LT收容所の連中は、LTテストのモルモット達。他国に、そのLTの成果を渡さない為に全て抹消するみたい」

「他国？」

「さっき入った情報だけど、国境は全て他国の軍が閉鎖してる。この国の人間は他所の国には避難できない。恐らく、他国から、リグド抹殺の為、この国に爆弾が落とされるのよ」

「……そんな事したら、みんな死んじゃうじゃないか」

「ええ、でも他国は自分の国の安全を優先するものでしょ。爆弾が落ちて、万が一、生き残った者がLTテストのモルモットだったら……そう考えて、データだけ小さなチップに入れて、モルモットは全て殺すの」

「……アニルも殺されるのか？」

「そうみたいね」

「その毒ガス、止められるんだろう？ このコンピューターで！」

「先に言っておくわ、ここも閉鎖されるのよ、デンバーがそうしろと命令したの、画面見て、カウントダウンが始まってるでしょ、あれがゼロになったら、ここは鉄格子が降りて、鉄の扉が閉まって、そして、毒ガスが放たれる。英雄の爆弾を解除している暇がないようにでしょうね、英雄の爆弾の解除か、收容所の毒ガストップか、ここから逃げるか、どれかよ」

「……」

「逃げるって選択はなさそうね」

と、セランはメガネとマスクを外し、メインコンピュータの前に座ると、

「どっちか選んで！」

そう言った。フリットは、迷いながらも、

「シンバの爆弾の解除」

そう答えた。

アニルを選ばなかった訳じゃない。

シンバを選んだのは、ラインの為。

フリットは心の中で、アニルに何度も謝罪する。

セランはコンピューターのキーボードを打ちながら、

「行っていいわよ、ここにいたら閉鎖されちゃうから」

画面を見ながら言う。

「フリットがいても、できる事ないから」

「・・・・・・・・・・逃げるって選択しなかったのは、オイラも逃げないからだ」

「ラインを助けに行かないと、ヤバイんじゃない？」

「・・・・・・・・・・」

「行きたいんでしょ？　ラインの所へ。爆弾落とされるって言うても、まだ避難できる場所があるみたいよ、地下シェルターとか」

「・・・・・・・・・・」

「早く行きなさいよ」

「そんな所へ隠れて、生き残りたいとオイラもラインも思わねえよ。

LTテストの連中、毒ガスで殺されて、シンバとリグドが戦って、

なのにオイラ達だけが生きてるなんて滑稽だ」

「あら、滑稽でも人生は生きてこそその価値よ」

「だから！　誰も死なせたくねえんだよ！　アニルだって・・・・・・・・

・オイラもお前もラインも！　シンバも！！」

なのに、死へのカウントダウンが始まっている。

フリットは、携帯を取り出し、見ると、何件ものラインからの着信。

フリットはラインにリダイヤル。ラインは直ぐに電話に出た。

『フリット？ 今どこにいるの？ シンバも一緒？』

「ライン、オイラの言う事をよく聞いて？」

『え？』

「オイラは、今、セランと一緒にシンバの爆弾のスイッチを止めて
いる」

「アタシだけよ、止めてんのは」

横から口出しするセラン。フリットはジロツとセランを見るだけで、
ラインとの会話を続ける。

「この部屋は閉鎖されて、毒ガスが放たれるみたいだ」

『え？ ちよつと待って、どういう事？ 逃げれないの？』

「シンバの爆弾解除に時間がかかる」

『なんとかならないの！？』

「……シンバとオイラ、どっちとつてくれる？」

『どつちもに決まってるでしょ！！！！』

そう怒鳴るラインに、フリットは、

「充分、嬉しい答えだ、ありがとう」

と、本当に嬉しそうに笑う。

『何言ってるの、フリット！！』

「よく聞いてライン、オイラはレンからシンバを殺すよう託された」

『え！？』

「爆弾なんかじゃなく、友として、お前がシンバを殺してやれって
でも、オイラ、毒ガスが充満する部屋にセランを置いて、そっちへ
行けない。ライン、お前がシンバを殺せ」

『何言ってるの、よくわかんないよ、どうして！？』

「自分で自分をコントロールできないって、シンバ、言ってたよ。
レンも、殺さなきゃ、アイツを止められないって。今、幾ら普通で
も、アイツは変わってしまう。見たくないだろう？ アイツが狂っ
た所なんて。ラインが止めてあげて」

『そんな……そんな事！ 私できないよ！』

「でもラインしかないない。オイラ、そっちへ行つてあげたいけど」

「行っていいわよ」

「またも横から口を出すセラン。だが、フリットは無視。」

「ライン、シンバを大事に思うなら、ラインが止めてあげるしかない」

「だ、だって、だって、シンバはどこにいるの？ 携帯もわからないよ、シンバ、前とは違う携帯だし！ フリット、シンバの携番知ってる？」

「オイラもまだ携番は知らない」

「きゃあ！」

「ライン！？ どうした！？」

「大丈夫」

「お前、今どこにいるんだ？」

「それよりフリット、リグドはね、もうSランク部隊と戦ってるの、シンバ、やられたなんて事ないよね、でもシンバが倒れてないか、私、探してるんだけど、見つからなくて」

泣き喚きながら、そう言っつて、パニック寸前の声を出すライン。

「シンバがやられた！？」

「戦車とか出てきちゃっつて、あちこちで爆発も起こっつて、爆風も凄いの！ どうしよう、シンバが巻き込まれてたら」

「そうだよな、リグドに負ける、そう考えるのが普通だった、まずいな、だとしたら、ライン、直ぐに逃げる」

「逃げるっつてどこへ！？ フリットは！？」

「ライン、オイラさ、ラインと違って、LTに手を出したんだ。その罪をちゃんと償わなきゃっつて思う。だから、ラインと一緒にには行けないんだ」

「一緒には行けないっつて！？ どういう意味！？ ねえ！？ フリット！？」

パニックで震えた甲高い声を出すライン。

「ライン、落ち着いて、オイラの話をちゃんと聞いて？ ラインなら、他国が閉鎖してる国境も越えられるよ、他国の軍はLTなんて

使っていない。ラインはレベル1で、オイラの知ってる一番強い女の子だ。国境を越え、他国へ行つて……普通の女の子として生きて行くんだ、金は持つて来てるだろ？ いいか、この国の通貨は使えなくなるかもしれないから直ぐに換金しろ？」

電話の向こうのラインからは、もう泣き声しか聞こえない。

「ライン、オイラ……」

ラインが好きだよと言う台詞を飲み込み、

「ライン、オイラはいつだって傍にいるよ、目を閉じたら、思い出して！ な？ オイラ、ラインの隣で笑ってるだろ？ だから幸せになれよ、見てるからな？ 近くで！」

と、そして、幸せにしてやりたかったと思いつつ、どうかラインの限りある人生、幸せに生きて行けますようにと願い、祈り、フリットは電話を切った。そして、セラんに、

「シンバが死んだかも！」

そう言つて、コンピューター画面を見る。

「生きてるわ、心音がコンピューターに届いてるもの。リグドと戦うのが怖くて逃げたかしら？」

「シンバは逃げるような奴じゃねえよ！」

と、また着信が鳴り、思わず、自分の携帯を見るが、着信音が違つたと、フリットは辺りを見ると、倒れている白衣の男の手の中にある携帯が鳴っている。

着信はデンバーからだ。

フリットが出ると、

『おい、今、どこにいる！？ ワタシのコンピューターにはLTデータが送られてないが、どうなっているんだ！？ ちゃんとチップにはデータを保存してあるんだろうな！？』

慌しく、電話の向こう、そう叫んでいる。

「LTの知識のある連中は、ここで毒ガスにより、死んでもらう」

『なんだと！？ 貴様、フリットか！？』

「データもここで排除する」

『ま、待て！ やめないか！ そうだ、キミも一緒に来ないか！？
ここにいてもリグドに殺されるだけだろう、ソルク様とワタシと
で』

そこまで言つと、デンバーは無言になり、そして、激しい物音が鳴り響いた。

「おい！？ どうしたんだ！？ デンバーさん！？」

電波が悪いかと思つたが、

『…………フリットか』

その声はレンダーだった。

「レン！ 大丈夫なのか！？」

『…………デンバーと…………ソルクの事は俺様に任せろ』

呼吸が乱れているレンダーに、

「おい、声が変わだぞ！？ もしかしてやられたのか！？」

フリットが叫ぶ。

『心配ねえ、掠り傷だ。それより、お前の方は…………』

「…………シンバを殺すのはラインに託した。オイラは、LTの始末をするよ。これ以上、LTが出回らないように、データや研究員を…………始末する」

『ラインにシンバが殺せるのか！？』

「わからねえけど、もし、ラインがシンバを本当に好きなら…………
・シンバがラインを本当に好きなら、リグドを倒すのと同じぐら
い、ラインがシンバを殺すのは難しいかもな。でも、本当に好きだ
から、きつとリグドを倒すよ、本当に好きだから、きつとシンバを
殺すよ。オイラはそう思うんだ」

『そうか…………その後、ラインはどうするって…………？』

「ラインは他国へ逃げる。そう指示を出した」

『そうか。フリット、お前は生き残れそうか？』

「レンは？」

お互い、電話の向こう、無言になり、フツと笑みを零し、

『あの世で会おう』

「ああ」

と、電話を切る。

今、セラランが爆弾のスイッチを解除したと同時に、鉄格子が下りて来て、ドアを塞いだ。

セラランはフウツと溜息を吐くと、

「アタシの任務はこれで終わりね」

と、フリットを見た。

「次はL.Tのデーターを排除！ チップは誰が持つてるんだ？」

「アタシがやるわ」

そうかと、なら鉄格子はどうにかならないかと、フリットは蹴ったり殴ったり、だが、逆に殴った手が痛くて、しゃがみ込む。

それを見てセラランがクスクス笑うので、

「お前、死ぬって時に随分落ち着いてんな」

と、セラランを見て、そう言った。

「フリットと一緒にだから」

「……お前、そんなにオイラの事、好きなのか？」

「ええ、フリットがラインを好きなくらい」

「……そりゃ、相当だな」

「ムカツク」

セラランが頬を膨らませ、フンツと横を向くと、今度は鉄の扉が落ちてきて。

もう完璧に終わりだと、フリットはセラランを見た瞬間、ラインとした会話を思い出す。

「いいじゃない、フリット、かつこいいんだし？」

「今、なんて言った??」

「え? 言っただけでもないんじゃない? フリット、かつこいいんだし??」

「……カツコイイ??」

「うん、カツコイイと思うよ?」

「そ、それは服が??」

？そうじゃなくて、フリットなら、この男の子の台詞を言っても許されるって意味？

かっこよくなりたかった。

リグドのように。

せめて服だけでも真似ようとしていた。

でも、服じゃない、フリット自身をカッコいいと言ってくれたライン。

本当か？ ライン？ 信じるぞ？

「ハイ、チップも壊したし、毒ガスで充満して、研究員が死ぬのも後少し。アタシの任務は完璧に終りね、後はアタシもフリットも死ぬだけ」

明るく言うなあと、フリットは苦笑いしながら、

「報酬払わないとな」

そう言った。

「報酬？ アタシの事、思い出してくれたの？」

「いや、思い出してないけど……別の事で報酬払うよ」

「別の事？」

「ほら、お前の持ってた漫画、あの主人公の相手役の男の台詞だった？」

「言ってくれるの！？ あんなに嫌がってたのに!？」

「大サービスだかな！ 次はないぞ！」

セランは微笑んで、頷く。

フリットはコホンと咳払いし、恥ずかしそうにセランを見た。

その頃、レンダーは屋上へ辿り着き、ヘリコプターで逃げようとしているソルクにライフルを向けていた。

デンバーと苦戦した結果だろうが、レンダーの体は血塗れの傷だらけで、動いて生きているのが不思議なぐらいだ。

数人の護衛にあたっていたセク部隊。

だが、レンは無言を言わず、ライフルを連射し、セク部隊を退か

せると、走り出した。

肩と足には銃弾が入っていると云うのに、レンダーはまるで気にしないかのように走り、ソルクをライフルで殴り倒す。

「貴様さえ、大人しくしていれば！」

と、倒れたソルクの上に乗る、大きな拳をソルクの顔面に向けて何度も振り落とす。

「大人しく国家から退いてれば良かったものを！ ジュキトを復活させ、リグドを刺激し、リグドにLトリミットを更に越えさせ、リグドにファイナルを迎えさせた！ デンバーの口車に乗ったか、それともお前自身の考えか！ 今更どうでもいいが、お前は死んでも許されない！ この国の若者達に絶望や苦痛を与え、最終的には死を覚悟させたんだ、お前が只死ぬだけで許される訳ないだろう！！

ソルク・プレジデント！！」

レンダーは既に気絶しているソルクを殴り続ける。

拳が振り上がる限り、永遠に殴り続ける。

片目しかないその右目から涙が溢れ出し、泣きながら、拳を振り上げる。

今、ライフルの弾を掠っただけのセク部隊の一人が、苦痛の顔をしながら、起き上がり、ライフルを構え、レンダーを射殺。

だが、ソルクはとっくに殴り殺されている。

Sランクのセク部隊達はリグドに応戦中。

空には空軍の攻撃ヘリコプターが何機もあり、戦車はどこを狙っているのか、ドカンドカン大砲を撃ちまくり、海軍も陸に降り立ち、セク部隊同様、戦ってくれているが、肝心のリグドには、攻撃ひとつ当たっていない。

爆風ですら、リグドには、只の風のように。

大砲など、当たらなければ、意味がない。

空からの攻撃も全て避けられ、寧ろ、リグドの動きが全く捉えられず、苦戦状態。

パニック状態の戦場は、味方同士の攻撃が当たり、余計にパニックを招く始末。

そんな中、ラインはシンバの名を叫び続ける。

シンバは

シンバは初っ端からリグドと剣を交えていたが、直ぐに薙ぎ払われ、滅多打ちにあつた後、気絶していた。

気がついた時、少し離れた場所で爆発音は聞こえるが、シンバの周囲は静かだった。

死体だらけの中で、死体のように存在する自分に、仰向けになって青空を見上げた。

あれがリグド

全く歯が立たない。

幾ら俺の体ももう駄目だとしても同じレベルなのに。

というか、剣を向けるのが怖いと本能的に防御だけになるのは、なんでだ？

戦っても無駄という事が実感できたのだろう、シンバは戦闘喪失でこのまま、ここに転がっていようと思っていた。

せめて英雄として死にたい、か。

英雄というより腰抜け？

剣を向けないんだ、戦っても無駄だ。

無駄と言えば、無駄にレベル5なだけあつて、なかなか死ねないもんだな。

もう俺の体、駄目だろう？

レベル5になった崩壊が始まるうとしている。

どうやら、俺はレベル5になったはいいが、体が持たない。

リグドを目の前にし、本当のレベル5つてものに出会って、思い知らされた。

それにしても、まだ生きてるなんてな

あれだけ打撃を食らわされたにも関わらず、気絶だけで済んでいると、シンバは自分の手の平を空に掲げるように上げて、光に赤く透

けるような手を見つめる。

シンバは寝転がったまま、携帯を取り出し、ブタのストラップを空に掲げるようにして、

「お前も俺を腰抜けだって、そう思うか？」

と、ブタに尋ねてみる。

ふと、ブタが持っている星が取れかけている事に気付き、シンバはムクツと起き上がると、その星を付け直そうとするが、ペリツと外れてしまい、その星の裏にカードが貼り付けられている事に気付く。

「・・・・・・なんだ、これ？ 携帯メモリーカード？」

シンバはそのカードを携帯に入れて見る。

そして、カードに保存されているデータを見ると画像が幾つかと、メモが一件。

「・・・・・・ピース・ラバー？」

画像に映るラインを見て、そう呟く。

画像はラインの後姿や横顔、不意打ちの表情のもの、遠くの方にいるものばかりで、どれもこれも、撮ってもいいと確認を得た上で、撮ったものではない感じた。

後は、靴と衣類、シンバとケチャップで書かれたオムライス、それから青いブタのストラップ。

メモに記されている事は。

レンダー・バミツシュ。

信用できないオッサン。

酒好き。

ラインが宝物。

剣を教わった。

仕事をくれた。

ラインを守ると約束した。

フリット・ディーグレイ。

友達。

いい奴。

ラインに夢中。

それ、俺以上？

いや、俺と同じぐらい夢中。

携帯番号XXXX-XXXXXXX。

アドレスXXXXXXXXX@XXX.XX.XXX

リグド・カツツエル。

敵？

味方？

ラインを殺そうとしている？

それは絶対阻止。

リグドと共にいる事。

ラインを狙うような事があれば、フリットに連絡。

共にいるのは、ラインの為？

いや、俺の為。

もう孤独は嫌だ。

ライン・ポートリー。

画像の女の子。

ライン以外の画像は、全部ラインからもらったもの。

ラインからもらったものは沢山。

美味しい、楽しい、嬉しい、優しさ、安らぎ、愛おしい、守りたい、恋？

「……………俺の失くした記憶の部分か」

今更こんなもの……………。

大体、俺も馬鹿だ。

こんなブタにカード貼り付けて、このストラップ、取り上げられてたら……………。

ふと、フリットとの会話を思い出す。

? 相変わらずそのストラップ付けてるって辺り、オイラに嘔吐くの
下手なんだよ、お前?

? 嘘???

? 嘘だろ、だって、お前、本当はラインの事、めちやくちや好きな
癖にさ、そうでもないって顔して、バレバレだっつーの!?

? なんだそれ? このブタとどう関係ある話だ? 大体、俺はライ
ンって奴の事 ?

? 今、一番、気になってる女、いねえとは言わせねえぞ!?

今、一番、気になっている女?

シンバに脳裏に浮かんだのはピース・ラバー。

つまりラインだ。

? どこかで会ってる?? って、そんな気がするの、正解かも?

? そんな顔して怒らないで? シンバも仲間なんだか
ら?

? シンバも仲間。信じて? 私は只、シンバと楽しく過ごしたいだ
けなんだよ?

? 失くしたものは仕方ないよ。それが大事なものでも、もう戻って
こない。だから、これから失くした所を埋めて行けばいいし、大事
なものをつくっていけばいいよ?

? 違うよ、シンバとこうして話してるのが嬉しいから。二度と話せ
ないかもしれないって、二度と会えないかもしれないって、二度と
触れられないかもしれないって、思った時もあったから、こうして
会えて、話せて ?

? 触れられる事が嬉しくて、悲しくなっちゃう?

そう言ったラインが、ギョツと強く手を握り締めたなど、シンバは
自分の手を見る。

? いいものあげる、手、出して???

? あげる?

もらった飴玉はどこへやったっけ? と、ああ、正式制服のズボンポ

ケツトの中だと溜息。

あの時、思い出さなきゃと急ぐ気持ちがあった。

あれは、ラインを守らなきゃという記憶があった頃の俺の強い気持ち？と、考える。

？シンバ、過去は幾ら考えてもわからないなら、これから先、シンバがどうしたいか、考えてみて？ 本当にリグドを倒したい？ それなら、私は一緒に戦うから。その後でもいいの、一緒に、ここを出よう？？

「.....」

無言でラインの画像を見つめるシンバ。

そして、立ち上がり、

「リグドと戦ってんじゃないだろうな、あの女！」

と、爆発音のする方向を見て、走り出した。

気絶していただけあって、結構、ボロボロの体。それに啞え、レベル5のエネルギーに体が悲鳴を上げている。

クソッ！

やっぱり俺、安らかに死ぬなんて無理そうだ。

どうせ死ぬんだ、それは避けられない。

レベル5になっても、体が付いて行けてない。

リグドと戦ってハッキリと確信した。

これは体感に慣れる以前の問題だ、俺の体はもう持たない。

せめてリグドを倒し、英雄としてなんて甘い考えだった。

リグドには逆らえないと本能が勝手に働くし、リグドの強さは半端ない。

だからもう腰抜けでもいいやって、眠るように死んでいこうって思ったのに。

「リグドお！！！！」

爆発の中、リグドを見つけ、シンバは大声で呼んだ。

ゆっくりと炎の中、振り向くリグドは、ダークレッドの髪を爆風で揺らし、ダークレッドの瞳の中、シンバが映っているが、まるで何

も映っていないような瞳。

シンバは背中 of 剣、ノーザンフアングを抜き、

「共に死んでくれ」

そう囁くように言う。

黙ったままのリグドに、ノーザンフアングを振り上げ、走り寄るシンバだが、ノーザンフアングを振り落とすと、目の前からリグドが消えた。

左右を見て、背後だと気付き、シンバはノーザンフアングを振り切る。

リグドが左へ消える。

シンバの目は左を見ていて、リグドの動きを捉え始める。身体中が痛み出すが、シンバはパワー全開で挑む。

シンバの体では無理だろう、でもレベル5のパワーを全身に纏い、今、リグドの頬をノーザンフアングが掠めた！

リグドは避けたつもりだったが、避けきれず、頬から流れる血を親指で拭くと、

「…………お前がシンバ・ルーペリックか？」

そう言ってシンバを見る。

さっきまでは何を見ても、何も見えないような瞳だったが、今、リグドの瞳にハッキリとシンバという姿が映ったようだ。

トリップ世界から、覚醒したような目だ。

だが、攻撃ヘリからの連射を回避する為、二人は一旦、場所を離れた。

リグドも剣を抜き、シンバを追い、シンバは剣を構え、リグドを迎え撃つ。

パワーもスピードも互角。

だが、二人の表情は全く別。

さっきまで無表情だったリグドはシンバと戦いながら笑っている。さっきから苦痛の表情のシンバは更に苦痛で顔を歪める。

シンバの右肩に、リグドの左肩に、同時に剣が入る。

だが、リグドは痛みにも何の反応もせず、直ぐに剣を振り上げ、シンバは右肩から剣を抜かれた衝撃で、体のバランスを崩しながらも、再び降りて来る剣を剣で受け止める。

「……………その剣、オレの剣と似ている」

「ノーザンフアング。元ジュキトの武器らしい」

元ジュキト、その言葉にリグドの表情がピクリと少し動いた。

「……………剣を扱う動きもオレと似ている」

「レンダー仕込らしい」

レンダー、その言葉にもリグドは表情をピクリと動かした。

記憶はないが、何か感じるのだろう。

「……………シンバ・ルーペリック。お前も似ている」

それは誰にだろう、リグドにだろうか、それとも、デンバーの息子のシンバ・ルーペリックにだろうか、いや、リグドの記憶に微かに残るシンバ自身とシンバが重なったのか。

「リグド、アンタも似てるよ、俺が夢で見た怖い影に」
影がリグドだともうシンバは気付いている。だが、影はリグドではないんだと自分に言い聞かせ、只、似ているだけと恐怖から逃れようとしている。

爆発音と爆風、そして燃える大地の中、シンバとリグドは互角の戦いを繰り広げる。

剣と剣が何度も交わり、何度も剣が互いの体に入るが、何度もお互い立ち上がる。

「シンバ！」

今、シンバを見つけ、駆け寄ってくるライン。

シンバがラインを見る一瞬の隙で、リグドは笑いながら、シンバの胸を貫こうと剣を差し込んで来た！

シンバは避けたが、避けきれず、剣は左肩へ突き刺さる。

リグドは的を外れたが、突き刺さった事に、ニッと笑いながら、ゆっくりと剣を引き抜いた。その痛みで、シンバは声にならない悲鳴を上げ、冷や汗ダラダラの顔を背ける。

シンバは、もう右も左も肩を負傷し、剣を振り上げる事が難しくなるが、今、リグドが再び剣を振り上げ、シンバはそれでも剣を上にあげ、リグドの剣を受け止めた。

身体中が悲鳴を上げているのだ、今更、剣が肩を貫いても、身体中の痛みが消える訳でもなく、寧ろ、痛みが増してもわからないぐらい、身体中が麻痺し始めている。

ヘリの射撃が、土を舞い上がらせ、爆撃が辺りを更に炎上させ、シンバはリグドの剣を強く強く弾き返し、リグドが少し後退した瞬間、ラインへ向かって走った。

ヘリの攻撃が続き、舞い上がった土と煙で、リグドはシンバを見失う。

それに苛立ったリグドは、さっきから上空をぐるぐるとウルサイ蠅だと、ヘリへ向かって、剣を、まるで槍投げのように投げた。

一機のヘリがその剣により、上空で大爆発。

近くを飛んでいた別のヘリも爆発に巻き込まれ、爆発を起こし、更に別のヘリもと、連続で爆発が続く。

シンバはラインを抱き締め、落ちてくる炎と爆発風から、ラインを守る。

シンバの胸に顔を埋めるようにしているライン。

ラインの温もりが、今、起こっている出来事、全て、トリップじゃないと感じる。

シンバはラインをギュッと強く抱き締め、

「ライン」

そう呼んでみた。顔を上げ、シンバを見るラインに、

「やっぱりお前がラインなんだな」

そう言った。

「思い出したの？」

「いいや、でも、思い出せる想い出もある」

「思い出せる想い出？」

「一緒にバスケットしたな、ストラップが一緒だった、花火を見た、そ

れから飴をくれたな」

「……シンバ、一緒にいられるよね？ これからもっと想い出してくれるよね？」

「一緒にいなくても、もう忘れない、この想い出は」

空から落ちて来る灰が雪のようで、シンバもラインも、ふと、懐かしい気持ちになる。

だが、お互い、何の記憶もない。

どうしてLTという薬はこんなにも残酷なのだろう。

全てを引き離すだけでなく、記憶さえも奪い去る。

今、ラインの背後にフツと現れるリグドに、シンバはラインの腕を引っ張り、自分の後ろへと回り込ませ、リグドの剣を腹部へと招き入れてしまった。

リグドはクツクツクツと喉で笑うと、剣を引き抜き、シンバはガクンと膝から落ちる。

「シンバアー!!」

泣き喚くラインの声。

リグドは不愉快そうにラインを見ると、ラインへ向かって剣を振り上げようと、その手をシンバが掴んだ！

「……何のつもりだ？ 離せ」

「……いやだ……」

「……聞こえないのか？ 離せと言ってるだろ」

「いやだ……」

リグドは自分の手を掴むシンバの顔面に膝をぶつけた。

シンバは後ろへ倒れ、一気に視界が闇になる。

瞬間、シンバの脳裏に、リグドが背を向けて行ってしまふ映像が浮かんだ。

何故か、シンバは追い駆けなければと言う気持ちが込み上げて来る。今、悲鳴を上げるラインに、リグドが一步、近付こうと踏み出した、その足を、シンバが這い上がり、しがみ付いて、

「待って……リグド……俺を置いていかないで……」

「……俺を一人にしないで……」

真つ暗な視界の中、シンバは必死になって、リグドに訴える。何故、そんな台詞が出てくるのか、シンバには、わからない。

それはまるで夢の続き。

さつきまで現実だと感じていたが、これは全て幻で、トリップした世界かもしれない。

ラインが呼んでいる声が聞こえるが、目が見えなくて闇の中にいるシンバは、ラインの姿が見えない。

だが、目蓋の向こう、ラインが立っていて、？いいものあげるよ、手を出して？と、？あげる？と、飴玉をくれる。

だが、その優しい幻は、
？リグドを殺すんだ？

と、レンダーの繰り返す声が頭の中で響き、掻き消されていく。

もう今が、現実なのか、幻なのか、全くわからないが、無意識の内に、小刻みに痙攣している手で、シンバはノーザンファングを握り締める。

だが、うまく掴めず、ノーザンファングはシンバの手から離れて、地に落ちた。

リグドは、仕方ないなあと、自分の剣をシンバの手に持たせ、

「その剣でオレを殺すのか？」

リグドの足にしがみ付いているシンバに囁くように、リグドが問いかけた。

「ちが……リグド……話を聞いて……俺
がリグドを殺す訳……ない……只、ラインを守り
たいんだ……俺は……」

言いながら、シンバは、ゆっくりと、精一杯、残ったチカラを振り絞り立ち上がった。

そんな台詞、夢の中で聞いただけで、そのせいで、口走っているだけ。

無意識の内に喋っているシンバの視界は回復しつつあり、リグドも

見え始め、意識も現実の中、ハツキリし始めるが、もう限界だ。

「お前にオレは殺せない。オレもお前を殺すつもりはない。だから、その証明にオレの剣を持たせてやったんだ。シンバ・ルーペリック、お前がオレの剣で殺すのは、そこで泣きじゃくっている女だ」
立っているのがやつとのシンバを嘲笑いながら、そう言った。そして、シンバの耳元で、

「大丈夫大丈夫、お前ならできるって」
そう囁く。

大丈夫大丈夫、俺ならできるって。

シンバは自己暗示をかけるように、何度も心の中でそう呟くと、リグドの方へ向き直り、剣を振り上げた。

リグド、俺、前の俺はどうだったか知らないけど、今の俺はリグドを知らないんだ。

ラインとリグド、どっちかって聞かれたら、幻でも、現実でも迷いなく答えれるんだ。
ラインって。

それぐらい、俺はリグドを恐れてても、何も知らない。

まだ立ち向かってくる力があつたのかと、だが、そんな攻撃、簡単に避けたリグドは、今、ノーザンファンクにより、胸を貫かれた。自分の背後から胸に向かって突き刺さるノーザンファンクの刃を見ながら、ゆっくりと振り向くと、ラインがノーザンファンクを持ち、立っている。

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・このっ！ ふざけるなあ！！！」
リグドはラインに体ごと向くと、拳を振り上げ、ラインが目を閉じるが、その振り上げられた拳はシンバが全身の体重をかけるようにぶら下がるように、掴み、

「・・・・・・・・リグド・・・・・・・・アンタ・・・・・・・・探してたんじゃないのか・・・・・・・・？ 自分と同じ人間のシンバ・ルーペリックを・・・・・・・・それ俺だろう・・・・・・・・？」

そう言うと、リグドの剣で、リグドの胸を貫くシンバ。

再び胸を貫かれ、ごふつと吐息と共に血を吐いて、倒れるリグド。
シンバもリグドに体重を預けていた為、一緒に倒れ込む。

「．．．．．なんで．．．．．シンバ．．．．．なんでオレを．．．．．そうか．．．．．わかった．．．．．これはトリップだ」

「リグド．．．．．」

「．．．．．シンバ．．．．．変なんだよ．．．．．トリップしてるのに．．．．．全然．．．．．気分が良くない．．．．．」

「．．．．．終わったからだ」

「そうか．．．．．終わったのか．．．．．ジュキトが終わったのか？」

「ああ．．．．．終わったよ．．．．．」

「そうか．．．．．なあ、見るよ、シンバ．．．．．」

虚ろな目で空を見つめるリグドは何を見ているのだろう。

そのまま、リグドは動かなくなり、呼吸を止めた。

シンバは震えながら、体を起き上がらせ、仰向けとなり、リグドと同じ空を見つめる。

「．．．．．リグド．．．．．最期．．．．．どんな景色を見た．．．．．？」

その質問に、リグドが答えられる訳もなく、今、ラインが、シンバに駆け寄り、シンバの手を握り締め、泣き喚く。

「．．．．．ライン．．．．．お前．．．．．そのノーザンフアングで．．．．．リグドを刺したみたいに．．．．．俺を殺してくれ．．．．．」

首を振るライン。

「そのつもりで来たんだろう．．．．．？ このまま放っておいても死ぬだろうけど．．．．．レベル5のパワーを持つてるんだから．．．．．この死に掛けの体で．．．．．生き残るかもしれないだろ．．．．．俺はお前に．．．．．殺されたい．．．．．」

「殺せない……殺したくない……！ シンバ……
……シンバがいなくなったら、私……独りぼっちだよ」
涙が流れ続けるラインの頬を、シンバは手を伸ばし、ソツと触れ、
「傍にいるよ……俺はラインの事……大切に思っ
てるからさ……どこにいても、どんな時も、見守ってる……
……だから幸せになれよ」

「なあ……笑って……？ 笑った顔……
見せて……」

涙を流しながら首を振るライン。

だが、シンバの伸ばした手がスタンツと地に落ちた。

まだ少し呼吸があるが、ラインは泣きながら、笑顔をつくり、そして首を振りながらも、ノーザンファングを高く掲げる。

薄っすらと開いた目で、ラインの笑顔に、シンバは忘れないと誓う。そして、ラインが剣を振り上げるのを見て、シンバはそれでいいんだと、安心するように、目を閉じた。

ラインが生き残れた事、たったそれだけでも、シンバは充分だった。思い出せる記憶を思い出しながら、そして、ラインの笑顔を思い浮かべながら、シンバは、満足そうな笑みを浮かべ、願う。

どうか、これがトリップした世界じゃありませんように。

ジュキトと言う国は国境で他国から閉鎖されたまま、5年の月日が流れた。

生存者は結構いたが、皆、未だジュキトから出れないまま、他国の救助も得れず、只、食べ物や飲み水を支給されて、生きているようだ。

LTを使用してなかった人まで、閉鎖された国の中、取り残されている事が、私は、とても心が痛くて、苦しくなる。

私は、LTリミットレベル1でありながら、一人、国境を越えた人間。

「ラインちゃん？ タイムカード押したまま、突っ立てるけど、気分でも悪い？」

仕事を終え、タイムカードを押した後、少し眩暈がして、その場で立ち尽くしていた。

「スイマセン……大丈夫です」

「ならいいけど。先に更衣室に行くわね」

「ハイ」

世界中で、閉鎖されたジュキトの事は、情報として常にニュースになっただけで流れている。

当時、ソルク・プレジデントの死が確認された事よりも、リグドの死体発見のニュースの方が、世界を賑わせた。

レンはどうしてるのだろうか。

フリットはどうなったのだろうか。

セランはフリットと一緒にいたのだろうか。

シンバは………。

私は、ジュキトから出て、暫くは放心状態が続き、駅や公園で野宿していたけど、今は一人でアパートに住んでいて、ケーキショップでパティシエになる為の修行中。

まだ見習いだから、卵を割ったり、果物の皮向きをしたり、鍋を洗ったり、在庫の整理だったり、雑用ばかりの仕事だけど、何でも屋よりは充実している。

でも、LTを使用していない人と接するのが、とても難しい。

何でも屋だった時は、客として、普通の人と接する事があったが、他に普通の人と言うと、レンぐらいだった。

レンは軍人だったせいもあり、それにLTを使用した人間の扱いは慣れていた。

だが、ここにはそんな人はいない。

皆、LTなど、聞いた事はあっても、見た事はない、普通の人達。その普通の人と、私は、少し感覚がズレる事がある。

時折、私は本当に人間なんだろうかと、わからなくなって、自傷行為に走り、痛さで、自分の存在を確認したりする。

刃物で腕などを傷つけると、赤い血が出てくる事にホツとする。痛いと思える事に安堵して、夜は眠りにつく。

でもそれだけでは安心できてない。

人間には本当に赤い血が流れてるのか、本当に痛いと思うのか、試さなければと恐ろしい考えが浮かんでしまい、震えだしてしまう。レベル1の私でさえ、違和感を感じているのに、シンバはもっと感じただろう。

勿論、リグドも。

あの二人は、深い孤独を抱え、お互いを求め合っていたのだろう。

それはきつと、私では、到底、埋めることのできない深い深い闇だつたに違いない。

今、その孤独感が、私にはわかる。

私の心の中には闇が生まれ、その深い闇は、人と接していても、光が照らし出される事も、埋る事もなく、只、寂しくて、苦しくて、悲しくて、更に深い闇へとなっていくだけ。

先のない闇の渦の中、気が狂いそうになって、何かに縋りたくなる。それでもLTには絶対に手を出したくない。

どんなに孤独になっても、もう、あんな怖い思いは嫌だ。

街角や駅前で、LTを売る人、買う人を見かける事もある。

完全にLTキメてる人が、公園で酔っ払っっているかのように、騒いでいる事もある。

そしてLT関連のニュースが流れる度、私は、早くLTが世界から無くなればいいと願う。

最早、LTはジュキトだけの問題ではなく、世界中の闇の部分で、LTは蠢いていて、こうしている今も、誰かがハイテンションで気分上昇しながら、いつか苦しむ。

そして、いつか、また現れるかもしれない。

リグドのような人が。

あの頃、私は17歳だった。

もし私がLTとは無関係の人間だったら……。

シンバとフリットも、LTとは関係のない人だったら……。

それでも私達は出会っていたら……。

そんな夢を見てしまう。

でも、私は、LTリミットレベル1という人間でありながら、幸せだろう。

例え、どんな苦しみを背負っていても、私は幸せだ。

幸せにならなければならぬ。

そうでなければ……。

？ 幸せになれよ？

その台詞が脳裏を掠めた瞬間、私はフラッシュバックに襲われ、気が遠くなりそうになる。

もうLTは飲んでないし、体にも残ってない。

だが、あれ以来、私はPTSD、つまり、心的外傷後ストレス障害になってしまったようだ。

しかもLTリミットレベル1というチカラが、障害を促進させ、今更、幻覚も、幻聴も、幻触も、私に与え、トリップが酷い……。

流石にハイテンションにはならず、精神的には落ち着いている。でも動悸が激しく、嘔吐もあり、眩暈も続く日々。病院には行けない。

血液検査や尿検査など、簡単な検査で、過去、LTを飲んでいた事がバレてしまうからだ。

それでも、私は、この体調不良に、とても感謝している。

キミに会えるから。

今、酷い眩暈に倒れそうになるが、いる筈のないキミが私を支えた。このトリップは、キミに会える最後の私の生きる理由。

キミに会える時は私がトリップする時だけだから。

心配しないで、私なら大丈夫。

ほら、私、幸せに笑ってるよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125k/>

LAST TRIP

2010年10月29日22時48分発行